

---

川越市／鶴ヶ島市

---

# 戸宮前/在家/宮廻

---

首都圏中央連絡自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告

－ II －

2004

国土交通省 関東地方整備局  
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

## 発刊に寄せて

古来、埼玉県は東京都とともに武蔵の国として東国の要衝の位置にあり、東海道、後には東山道に属していました。中世には上道や中道と呼ばれる鎌倉街道が通り、武蔵武士が鎌倉へあるいは京へと駆け抜けたのです。近世には大名の参勤交代や大都市江戸を支える人々や物資の流通を図るため、中山道や日光御成街道を始めとする多くの街道が整備されました。

現代においては人間や物資、情報などの速やかな移動は必要不可欠であり、それを支える道路網の整備は急務となっています。国土交通省では、首都圏に流入する交通を分散し、流れを円滑にして交通渋滞を緩和するとともに、首都圏のさまざまな機能の再編成や産業活力の向上などを図ることを目的として、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の建設事業の促進を図っています。

圏央道は、横浜・厚木・八王子・川越・つくば・成田・木更津などの主要都市を環状に結ぶ総延長約300kmの高規格幹線道路です。埼玉県内においては東西方向の大動脈として東北、関越自動車道を結び、さらに東名、中央、常磐の各高速道路とも連絡しますので、埼玉県が提唱する「地域いきいき彩の国構想」の具体的な施策である「県内1時間道路網構想」に必ず貢献できると確信しています。

圏央道の建設にあたっては、川越市下広谷および鶴ヶ島市五味ヶ谷地内において縄文時代の炉穴や中世の館跡が発見されました。路線決定にあたってどうしても避けられない遺跡については、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整を受け（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団に委託して発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなりました。調査の結果、縄文時代早期の炉穴が検出され古くから人々が住んでいたことが確認されました。また、堀とともに土塁が残存している鎌倉から室町時代にかけてと考えられる館跡が良好な状態で検出されるなど、貴重な成果を得ることができました。

このたびこれらの成果をまとめた報告書が刊行されることとなりました。この報告書が、郷土学習をはじめ、生涯学習、学術研究の基礎資料として、地域文化の向上のためにご利用いただければ幸いです。

平成16年3月

国土交通省関東地方整備局長 渡 辺 和 足

## 序

埼玉県は年々人口の増加が続き、昨年700万人を超えました。県では豊かな彩の国づくりを実現するため諸々の施策を実施しておりますが、その中のひとつに便利で快適な総合交通体系を整備することを目標としております。特に高速道路網やインターチェンジへのアクセス道路の整備は、社会的要請として欠かせないものであります。こうした中で、国土交通省が主体となって建設を進める首都圏中央連絡自動車道は、県内を東西に結ぶ大動脈としてその完成が待望されているところであります。

今回報告される川越・鶴ヶ島工区内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取扱いにつきましては、関係機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。調査につきましては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、国土交通省関東地方整備局の委託を受け当事業団が実施いたしました。

遺跡の周辺は中世の館跡が密集する地域として、以前から注目されていた所であります。今回の調査の結果、館跡の一部について具体的な様相がわかってきました。館跡の他には旧石器時代、縄文時代の遺構・遺物が発見されました。特に旧石器時代の遺跡は周辺にはなく、たいへん貴重な発見となりました。

本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及や教育機関の参考資料として広く活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました国土交通省関東地方整備局並びに地元関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成16年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 桐川卓雄

## 例 言

本書は、川越市に所在する戸宮前館跡・在家遺跡および川越市と鶴ヶ島市にかけて所在する宮廻館跡の発掘調査報告書である。

1. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

戸宮前館跡 (TMYME)

第1次 川越市大字下広谷字戸宮前 425 番地 8 他  
平成 12 年 6 月 14 日付け教文 2-25 号

在家遺跡 (ZIK)

第1次 川越市大字下広谷 444 番地 2 他  
平成 11 年 5 月 12 日付け教文第 2-14 号

第2次 川越市大字下広谷字在家 442 番地 1 他  
平成 12 年 9 月 14 日付け教文 2-57 号

第3次 川越市大字下広谷字天神前 620 番地 12 他  
平成 13 年 4 月 27 日付け教文 2-16 号

宮廻館跡 (MYMWR)

第1次 川越市大字下広谷字天神前 664-3 他  
平成 11 年 5 月 12 日付け教文第 2-13 号

第2次 鶴ヶ島市大字五味ヶ谷字三田世羅 479-2 他  
平成 12 年 5 月 30 日付け教文第 2-15 号

第3次 鶴ヶ島市大字五味ヶ谷字三田世羅 475-2 他  
平成 13 年 5 月 1 日付け教文第 2-18 号

3. 発掘調査は、首都圏中央連絡自動車道建設に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、建設者関東地方整備局(平成 12 年度からは国土交通省関東地方整備局)の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 本事業は、第 1 章の組織により実施した。

5. 各遺跡の発掘調査の担当者及び契約期間は以下のとおりである。

戸宮前館跡

木戸春夫 黒坂禎二

平成 12 年 4 月 3 日～平成 12 年 9 月 30 日  
在家遺跡

金子直行 赤熊浩一 関 義則 上野真由美

平成 11 年 4 月 1 日～平成 11 年 11 月 30 日

平成 12 年 8 月 28 日～平成 12 年 9 月 30 日

平成 13 年 4 月 9 日～平成 13 年 5 月 31 日

宮廻館跡

橋本 勉 中村倉司 巽間孝志 金子直行

赤熊浩一 関 義則 栗島義明 上野真由美

平成 11 年 4 月 1 日～平成 12 年 3 月 31 日

平成 12 年 4 月 3 日～平成 12 年 6 月 30 日

平成 13 年 4 月 9 日～平成 13 年 5 月 31 日

6. 遺跡の基準点測量と空中測量はアスコエン지니어リング株式会社に、自然化学分析はバリノサーヴェイ株式会社に委託した。

7. 発掘調査時の遺構写真撮影は各担当者が行った。遺物写真は大塚道則が撮影した。

8. 整理・報告書作成作業は木戸が担当し、旧石器時代は亀田直美、縄文時代は上野真由美が行った。事業期間は平成 15 年 10 月 1 日～平成 16 年 3 月 24 日である。

本文の執筆は木戸が行い、I-1 を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、旧石器時代は亀田直美、青木美千子、縄文時代は上野真由美、金属製品を瀬瀬芳之、VII-1 を亀田、VII-2 を上野、VII-3・4 を浅見ふみかが行った。

8. 本書の編集は、木戸が担当した。

9. 本書にかかる資料は平成 16 年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。

10. 本書の作成にあたり下記の方々からご教示、ご協力を賜った。(敬省略)

田中 信 天ヶ嶋岳 高田大輔

## 凡 例

1. 本書の遺跡全測図におけるX・Yの座標値は、国土標準平面直角座標第IX系に基づく座標値を示している。また、各遺構図における方位指示は全て座標北を示している。
2. グリッドは10m×10m方眼で設定し、グリッドの呼称は、北西隅の杭番号である。
3. 遺構図及び実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

遺構図	掘立柱建物跡……1/60
	竪穴状遺構……1/60
	井戸跡……1/60
	地下式墳……1/60
	土壌……1/60
	炉穴……1/60
遺物図	縄文土器……1/4
	縄文土器拓影……1/3
	石器……4/5
	陶磁器……1/4
	中近世土器……1/4
	銭貨……1/1
	中近世土器拓影……1/3
	木製品……1/2・1/4・1/5
	金属製品……1/2

上記に合わないものに関しては、縮尺率等をその都度示している。

4. 遺構図等に示す遺構表記の略号は以下のとおりである。

S B · · ·	掘立柱建物跡
S K · · ·	土壌
S D · · ·	溝跡
S E · · ·	井戸跡
S F · · ·	焼土遺構
S X · · ·	竪穴状遺構
F P · · ·	炉穴

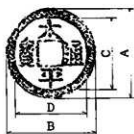
5. 挿入中のスクリーントーンは以下のことを示す。

遺構断面図	斜線部分…地山
	網掛部分…焼土

遺物図については、断面黒塗りは須恵器を表し、網掛けは釉を表す。

6. 遺構断面図における水平数値は、海拔高度を示しており、単位はmである。
7. 銭貨計測表の計測部位は下図のとおりである。
8. 本書に掲載した地形図等は以下のものを使用している。

国土地理院	1/25,000 地形図「川越北部」
川越市	1/2,500 都市計画図
鶴ヶ島市	1/2,500 基本図



# 目次

発刊によせて

序	
例言	
凡例	
目次	
I 発掘調査の概要	1
1 調査に至る経過	1
2 発掘調査・報告書作成の経過	2
3 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3
II 遺跡群の立地と環境	4
1 地理的環境	4
2 周辺の遺跡	5
III 戸宮前館跡	8
1 調査の概要	8
2 検出された遺構と遺物	10
A 縄文時代	10
B 中世以降	11
a 区画と溝跡	11
b 掘立柱建物跡	42
c 平場	57
d 竪穴状遺構	59
e 井戸跡	61
f 地下式墳	73
g 土壌	74
h グリッド・その他出土遺物	91
IV 在家遺跡	95
1 調査の概要	95
2 検出された遺構と遺物	96
(1) A区	96
A 縄文時代	97
a 土壌	97
b 炉穴	97
c グリッド出土遺物	97
B 中世以降	98
a 区画と溝跡	98
b 掘立柱建物跡	103
c 井戸跡	116
d 土壌	124
e グリッド出土遺物	126
(2) B区	127
A 旧石器時代	127
B 縄文時代	148
a 炉穴	148
b 土壌	152
c グリッド出土遺物	155
C 中世以降	156
a 溝跡	156
b 土壌	156
c 出土遺物	156
V 宮廻館跡	159
1 調査の概要	159
2 検出された遺構と遺物	161
(1) A区	161
A 旧石器時代	161
B 縄文時代	164
a 炉穴	164
b 集石	164
c 土壌	164
d グリッド出土遺物	168
C 中世以降	172
a 土塁と堀跡	172
b 井戸跡	172
c 溝跡	174
d 土壌	179
e 出土遺物	183
(2) B区	184
A 中世以降	184

a	溝跡	184	g	グリッド・表採・その他の遺物	226
b	土壌とピット	185	(4) E区		229
c	出土遺物	185	A	旧石器時代	229
(3) C区		186	B	縄文時代	231
A	旧石器時代	186	C	中世以降	231
B	縄文時代	187	a	掘立柱建物跡	231
C	中世以降	188	b	井戸跡	241
a	区画と土塁・溝(堀)跡	188	c	竪穴状遺構	249
b	掘立柱建物跡	199	d	溝跡	252
c	井戸跡	207	e	土壌	269
d	地下式竈	207	f	グリッド出土遺物	276
e	土壌	212	VI	附編	277
f	焼土遺構	224	VII	結語	284

## 挿 図 目 次

第1図	埼玉県の地形	4	第22図	第19-22・27・28・30・31号溝跡出土遺物	32
第2図	周辺の遺跡	6	第23図	第32号溝跡出土遺物(1)	33
第3図	遺跡の位置と周辺の地形	7	第24図	第32号溝跡出土遺物(2)	34
<b>戸宮前館跡</b>					
第4図	戸宮前館跡周辺地形図	8	第25図	第33号溝跡出土遺物(1)	35
第5図	戸宮前館跡全測図	9	第26図	第33号溝跡出土遺物(2)	36
第6図	グリッド出土遺物(縄文時代)	10	第27図	第34・35号溝跡出土遺物(1)	37
第7図	第1区画(1)	12・13	第28図	第35号溝跡出土遺物(2)	38
第8図	第1区画(2)	14	第29図	第40・45号溝跡出土遺物	39
第9図	第3号溝跡出土遺物	15	第30図	第1号掘立柱建物跡	42
第10図	第2区画	16・17	第31図	第2号掘立柱建物跡	43
第11図	第3区画(1)	18・19	第32図	第3号掘立柱建物跡	44
第12図	第3区画(2)	20	第33図	第4号掘立柱建物跡(1)	45
第13図	第12号溝跡出土遺物	23	第34図	第4号掘立柱建物跡(2)	46
第14図	第15号溝跡出土遺物(1)	24	第35図	第4号掘立柱建物跡出土遺物	47
第15図	第15号溝跡出土遺物(2)	25	第36図	第5号掘立柱建物跡(1)	48
第16図	第15号溝跡出土遺物(3)	26	第37図	第5号掘立柱建物跡(2)	49
第17図	第15号溝跡出土遺物(4)	27	第38図	第5号掘立柱建物跡出土遺物	49
第18図	第15号溝跡出土遺物(5)	28	第39図	第6号掘立柱建物跡	50
第19図	第16号溝跡出土遺物	29	第40図	第7号掘立柱建物跡	51
第20図	第17号溝跡出土遺物(1)	30	第41図	第8号掘立柱建物跡	52
第21図	第17号溝跡出土遺物(2)	31	第42図	第9号掘立柱建物跡	53
			第43図	第11号掘立柱建物跡出土遺物	53

第44図	第10号掘立柱建物跡	54	第80図	溝跡(1)	100
第45図	第11号掘立柱建物跡	55	第81図	溝跡(2)	101
第46図	第12号掘立柱建物跡	56	第82図	溝跡出土遺物	102
第47図	平場	57	第83図	第1号掘立柱建物跡	103
第48図	平場出土遺物(1)	58	第84図	第2号掘立柱建物跡(1)	104
第49図	平場出土遺物(2)	59	第85図	第2号掘立柱建物跡(2)	105
第50図	第1号竪穴状遺構	60	第86図	第3号掘立柱建物跡	106
第51図	第1号竪穴状遺構出土遺物	61	第87図	第4号掘立柱建物跡	107
第52図	井戸跡(1)	62	第88図	第5号掘立柱建物跡	108
第53図	井戸跡(2)	63	第89図	第6号掘立柱建物跡	109
第54図	第3・4・5号井戸跡出土遺物(1)	65	第90図	第5・6号掘立柱建物跡出土遺物	109
第55図	第5号井戸跡出土遺物(2)	66	第91図	第7号掘立柱建物跡	110
第56図	第6・7・8号井戸跡出土遺物	67	第92図	第8号掘立柱建物跡	111
第57図	第9号井戸跡出土遺物	69	第93図	第9号掘立柱建物跡	112
第58図	第10号井戸跡出土遺物(1)	70	第94図	第10号掘立柱建物跡	113
第59図	第10号井戸跡出土遺物(2)	71	第95図	第11号掘立柱建物跡	114
第60図	第11・12号井戸跡出土遺物	72	第96図	第12号掘立柱建物跡	115
第61図	第1号地下式竈・出土遺物	73	第97図	井戸跡	117
第62図	土壌(1)	75	第98図	第1号井戸跡出土遺物(1)	118
第63図	土壌(2)	76	第99図	第1号井戸跡出土遺物(2)	119
第64図	土壌(3)	77	第100図	第1号井戸跡出土遺物(3)	120
第65図	土壌(4)	78	第101図	第2・3・4号井戸跡出土遺物	121
第66図	土壌(5)	79	第102図	第6号井戸跡出土遺物	123
第67図	土壌(6)	80	第103図	第5号土壌出土遺物	124
第68図	土壌(7)	81	第104図	土壌	125
第69図	土壌(8)	82	第105図	グリッド出土遺物	126
第70図	土壌(9)	83	第106図	全測図	127
第71図	土壌(10)	84	第107図	基本土層	128
第72図	第1・6・22・27・54・64・65・100・113号 土壌出土遺物	88	第108図	旧石器時代器種別分布図	130
第73図	第150・157号土壌出土遺物	89	第109図	旧石器時代母岩別分布図	131
第74図	グリッド出土遺物(1)	92	第110図	旧石器時代遺物・遺構分布図	132
第75図	表採・グリッド出土遺物(2)	93	第111図	旧石器時代遺物実測図(1)	134
<b>在家遺跡</b>			第112図	旧石器時代遺物実測図(2)	135
第76図	在家遺跡周辺地形図	95	第113図	旧石器時代礫分布図(1)	136
第77図	A区全測図	96	第114図	旧石器時代礫分布図(2)	137
第78図	グリッド出土遺物(縄文時代)	97	第115図	炉穴(1)	149
第79図	第7・8号土壌、第26号炉穴	97	第116図	炉穴(2)	150
			第117図	炉穴出土遺物	151



第118図	土壌	152	第155図	溝跡出土遺物(1)	197
第119図	土壌出土遺物	153	第156図	溝跡出土遺物(2)	198
第120図	グリッド出土遺物(縄文時代)	154	第157図	第1号掘立柱建物跡(1)	200
第121図	溝跡(1)	157	第158図	第1号掘立柱建物跡(2)	201
第122図	溝跡(2)	158	第159図	第2号掘立柱建物跡	202
第123図	B区出土遺物	158	第160図	第3号掘立柱建物跡	203
<b>宮廻館跡</b>			第161図	第4号掘立柱建物跡	204
第124図	宮廻館跡周辺の地形	160	第162図	第5号掘立柱建物跡	205
第125図	A区全測図	162	第163図	第2号掘立柱建物跡出土遺物	206
第126図	旧石器時代遺物実測図	163	第164図	井戸跡	206
第127図	炉穴	165	第165図	地下式墳(1)	208
第128図	集石・土壌	166	第166図	地下式墳(2)	209
第129図	遺物出土分布図	167	第167図	地下式墳(3)	210
第130図	集石・土壌出土遺物	168	第168図	地下式墳出土遺物	211
第131図	グリッド出土土器(縄文時代)	169	第169図	土壌(1)	213
第132図	グリッド出土土器(縄文時代)	170	第170図	土壌(2)	214
第133図	井戸跡	172	第171図	土壌(3)	215
第134図	堀跡と土塁	173	第172図	土壌(4)	216
第135図	溝跡(1)	175	第173図	土壌(5)	217
第136図	溝跡(2)	176	第174図	土壌(6)	218
第137図	溝跡(3)	177	第175図	土壌(7)	219
第138図	溝跡(4)	178	第176図	土壌(8)	220
第139図	土壌(1)	180	第177図	土壌(9)	221
第140図	土壌(2)	181	第178図	土壌出土遺物(1)	224
第141図	A区出土遺物	183	第179図	土壌出土遺物(2)	225
第142図	B区全測図	184	第180図	焼土遺構	226
第143図	土壌・ビット	185	第181図	グリッド・表探・その他出土遺物(1)	227
第144図	B区出土遺物	185	第182図	グリッド・表探・その他出土遺物(2)	228
第145図	C区全測図	186	第183図	E区全測図	229
第146図	旧石器時代遺物実測図	186	第184図	旧石器時代遺物実測図	229
第147図	グリッド出土遺物(縄文時代)	187	第185図	グリッド出土遺物(縄文時代)	230
第148図	土塁測量図	189	第186図	第1号掘立柱建物跡	232
第149図	区画と溝跡(1)	190	第187図	第2・3号掘立柱建物跡	233
第150図	区画と溝(堀)跡(2)	191	第188図	第4号掘立柱建物跡	234
第151図	溝跡断面図	192	第189図	第5号掘立柱建物跡	235
第152図	土塁出土遺物(1)	194	第190図	第6号掘立柱建物跡	236
第153図	土塁出土遺物(2)	195	第191図	第7号掘立柱建物跡	237
第154図	土塁出土遺物(3)	196	第192図	第8・9号掘立柱建物跡	238

第193図	第10・11号掘立柱建物跡	239	第213図	第7号溝跡出土遺物(5)	264
第194図	第12・13号掘立柱建物跡	240	第214図	第7号溝跡出土遺物(6)	265
第195図	井戸跡(1)	242	第215図	第7号溝跡出土遺物(7)	266
第196図	井戸跡(2)	243	第216図	第8号溝跡出土遺物(1)	267
第197図	井戸跡出土遺物(1)	246	第217図	第8号溝跡出土遺物(2)	268
第198図	井戸跡出土遺物(2)	247	第218図	第9・15号溝跡出土遺物	269
第199図	井戸跡出土遺物(3)	248	第219図	土壌(1)	271
第200図	竪穴状遺構(1)	250	第220図	土壌(2)	272
第201図	竪穴状遺構(2)	251	第221図	土壌(3)	273
第202図	竪穴状遺構出土遺物	252	第222図	土壌出土遺物	275
第203図	溝跡(1)	253	第223図	グリッド出土遺物	276
第204図	溝跡(2)	254	第224図	在家遺跡における土層柱状図	283
第205図	溝跡(3)	255	第225図	在家遺跡における火山ガラス比 ダイアグラム	283
第206図	溝跡(4)	256	第226図	県内出土の有穴球状製品	285
第207図	溝跡(5)	257	第227図	鬼おろしの類型	290
第208図	第6号溝跡出土遺物	259	第228図	押印文拓影	292
第209図	第7号溝跡出土遺物(1)	260	第229図	戸宮前館跡変遷推定図	294
第210図	第7号溝跡出土遺物(2)	261	第230図	宮廻館跡変遷推定図	296
第211図	第7号溝跡出土遺物(3)	262	第231図	壘口縁形態	298
第212図	第7号溝跡出土遺物(4)	263			

## 表 目 次

第1表	溝跡計測表	22	第15表	ピット計測表	185
第2表	土壌計測表	89	第16表	溝跡計測表	193
第3表	出土銭貨計測表	94	第17表	地下式墳計測表	211
第4表	溝跡計測表	99	第18表	土壌計測表	222
第5表	出土銭貨計測表	126	第19表	出土銭貨計測表	226
第6表	旧石器時代出土石器組成表	132	第20表	井戸跡計測表	243
第7表	旧石器時代出土石器観察表	135	第21表	溝跡計測表	259
第8表	礫群別礫属性表	138	第22表	土壌計測表	270
第9表	旧石器時代遺物計測表	139	第23表	出土銭貨計測表	276
第10表	出土銭貨計測表	158	第24表	在家遺跡における 火山ガラス分析結果	282
第11表	旧石器時代出土石器観察表	161	第25表	第4地点におけるテフラ分析結果	282
第12表	溝跡計測表	174	第26表	在家遺跡における屈折率測定結果	282
第13表	土壌計測表	179	第27表	県内出土有穴球状製品一覧表	286
第14表	土壌計測表	185			

# 図版目次

戸宮前館跡	第18・19号溝跡
調査路線全景 (南から)	第27・31号溝跡
図版 1 戸宮前館跡航空写真 全景 (南から)	第20・21・22号溝跡
図版 2 南西建物群	図版 7 第30・32号溝跡
調査区北東部全景	第32号溝跡
調査区全景 (北から)	第33号溝跡
図版 3 第1号掘立柱建物跡	第43号溝跡
第2号掘立柱建物跡	第1号土壌
第3号掘立柱建物跡	第2号土壌
第4号掘立柱建物跡	第3号土壌
第5号掘立柱建物跡	第4号土壌
第6号掘立柱建物跡	図版 8 第5号土壌
第7号掘立柱建物跡	第6号土壌
第7・8号掘立柱建物跡	第7・8号土壌
図版 4 第9号掘立柱建物跡	第9・10号土壌
第10号掘立柱建物跡	第11号土壌
第1号竪穴状遺構	第35・36・37号土壌
P-3グリッド造成部	第39・40号土壌
第1号井戸跡	第43～49号土壌
第3号井戸跡	図版 9 第50・51・52号土壌
第7号井戸跡	第53・54号土壌
第8号井戸跡	第60～64号土壌
図版 5 第9号井戸跡	第69・70号土壌
第11号井戸跡	第72～75号土壌
第12・13号井戸跡	第79～86号土壌
第1・2・3号溝跡	第87・88号土壌
第4～8号溝跡	第94・95・97・98・99号土壌
第9号溝跡区画内	図版 10 グリッド出土遺物 (第6図)
第3・12・14・44号溝跡	第15号溝跡出土遺物 (第17図46)
第9・10・11号溝跡	第15号溝跡出土遺物 (第17図48)
図版 6 第12・14号溝跡	第22号溝跡出土遺物 (第22図9)
第15・16・41号溝跡	第30号溝跡出土遺物 (第22図14)
第15・16・40・41号溝跡	図版 11 第10号井戸跡出土遺物 (第59図12)
第12・13・42号溝跡	第12号井戸跡出土遺物 (第60図11)
第17・36・37号溝跡	地下式墳出土遺物 (第61図1)
	第6号土壌出土遺物 (第72図8)

- |             |                              |      |                 |
|-------------|------------------------------|------|-----------------|
|             | グリッド出土遺物 (第74図4)             |      | 第8号掘立柱建物跡       |
|             | グリッド出土遺物 (第74図5)             |      | 第9号掘立柱建物跡       |
|             | グリッド出土遺物 (第74図10)            |      | 第10号掘立柱建物跡      |
|             | グリッド出土遺物 (第74図11)            |      | 第11号掘立柱建物跡      |
| 図版12        | 第3号溝跡 (第9図)                  | 図版17 | 第12号掘立柱建物跡      |
|             | 第12号溝跡 (第13図)                |      | 第1号井戸跡完掘        |
|             | 第15号溝跡 (第14・15図)             |      | 第2号井戸跡完掘        |
|             | 第15号溝跡 (第15~17図)             |      | 第3号井戸跡完掘        |
|             | 第15・16号溝跡 (第17~19図)          |      | 第5号井戸跡          |
|             | 第17号溝跡 (20・21図)              |      | 第6号井戸跡          |
|             | 第19・22・27・28・30・31号溝跡 (第22図) |      | 第4号溝跡           |
|             | 第32号溝跡 (第23図)                |      | 第4・7号溝跡         |
| 図版13        | 第33号溝跡 (第25図)                | 図版18 | 第8号溝跡           |
|             | 第33号溝跡 (第25・26図)             |      | 第10・11・12号溝跡    |
|             | 第34・35号溝跡 (第27図)             |      | 第13号溝跡          |
|             | 第35号溝跡 (第28図)                |      | 第14~17号溝跡       |
|             | 第40・45号溝跡 (第29図)             |      | 第18号溝跡          |
|             | 第4・5・11号掘立柱建物跡 (第35・38・43図)  |      | 第19・20号溝跡       |
|             | 平場出土遺物 (第48・49図)             |      | 第5号土壌           |
|             | 第3~5号井戸跡 (第54図)              |      | 第5号土壌           |
| 図版14        | 第6~9号井戸跡 (第56・57図)           | 図版19 | グリッド石器出土状況      |
|             | 第10号井戸跡 (第58図)               |      | G-27グリッド旧石器出土状況 |
|             | 第10号井戸跡 (第59図)               |      | 第8号礫群 (下層)      |
|             | 第11・12号井戸跡 (第60図)            |      | 第5号礫群           |
|             | 土壌出土遺物 (第72・73図)             |      | G-27グリッド旧石器出土状況 |
|             | グリッド出土遺物 (第74図)              |      | 第1号炉穴完掘         |
|             | グリッド出土遺物 (第75図)              |      | 第2・3・4号炉穴       |
|             | 金属製品                         |      | 第5号炉穴           |
| <b>在家遺跡</b> |                              | 図版20 | 第6・9号炉穴         |
| 図版15        | 在家遺跡A区航空写真                   |      | 第7号炉穴           |
|             | 第1号掘立柱建物跡                    |      | 第8号炉穴           |
|             | 第2号掘立柱建物跡                    |      | 第10号炉穴          |
|             | 第3号掘立柱建物跡                    |      | 第11・12号炉穴       |
|             | 第4号掘立柱建物跡                    |      | 第13号炉穴          |
| 図版16        | 第5号掘立柱建物跡                    |      | 第14号炉穴          |
|             | 第5号掘立柱建物跡P8遺物出土状況            |      | 第15号炉穴          |
|             | 第6号掘立柱建物跡                    | 図版21 | 第17号炉穴          |
|             | 第7号掘立柱建物跡                    |      | 第19号炉穴          |

- 第20～23号炉穴  
第24号炉穴  
第27・28号炉穴  
第1号溝跡  
第1・2・3号溝跡  
全景（西～東）
- 図版22 出土旧石器（第111・112図）
- 図版23 炉穴出土遺物（第117図）  
リッド出土遺物（第120図）
- 図版24 第3号土壇出土土器（第119図3）  
第3号土壇出土土器（第119図4）  
第5号掘立柱建物跡（第90図1）  
第1号井戸跡（第98図1）  
第1号井戸跡（第98図2）  
第1号井戸跡（第98図3）  
第1号井戸跡（第98図4）  
第1号井戸跡（第98図5）
- 図版25 第1号井戸跡（第98図6）  
第1号井戸跡（第98図8）  
グリッド出土遺物（第105図2）  
金属製品（第100・105図）  
第5号土壇（第103図1）  
第5号土壇（第103図2）  
溝跡・グリッド（第82・105図）
- 図版26 第1号井戸跡（第99図12）  
第1号井戸跡（第99図12）  
第1～4号井戸跡（第100・101図）  
第6号井戸跡（第102図）  
B区出土遺物（第123図）  
陶磁器  
第6号井戸跡（第102図8）  
第15号炉穴
- 宮廻館跡**
- 図版27 宮廻館跡A区全景  
第2号集石完掘  
第2号集石  
第3号集石
- 第3号集石完掘
- 図版28 第1～4号炉穴  
堀跡  
東側土壇群  
南端側遺構群  
第1号井戸跡  
第25・34・35号土壇  
第1・2・3号溝跡  
第1号溝跡・第1号土壇
- 図版29 宮廻館跡C区航空写真（調査前）  
宮廻館跡C区航空写真（調査後）
- 図版30 第2号溝跡調査前状況（西から）  
土塁（北西隅）  
土塁（北から）
- 図版31 第2号溝跡（東から）  
第2号溝跡  
第3号溝跡  
第5号溝跡（土塁下）  
第6号溝跡（土塁下）  
第1～5号掘立柱建物跡（東から）  
第1～5号掘立柱建物跡（南から）  
第53号土壇
- 図版32 宮廻館跡E区航空写真（平成11年度）  
宮廻館跡E区航空写真（平成12年度）
- 図版33 全景平成11年度  
全景平成12年度  
全景平成13年度
- 図版34 第1号掘立柱建物跡（平成11年度）  
第2号掘立柱建物跡  
第3号掘立柱建物跡  
第4号掘立柱建物跡  
第5号掘立柱建物跡  
第6号掘立柱建物跡（南から）  
第7号掘立柱建物跡（南から）  
第8号掘立柱建物跡（南から）
- 図版35 第9号掘立柱建物跡（北から）  
第11号掘立柱建物跡（南から）  
第12号掘立柱建物跡（南から）

- 第13号掘立柱建物跡 (南から)  
 第9号井戸跡  
 第10号井戸跡  
 第11号井戸跡  
 第12号井戸跡
- 図版36 第12号井戸跡遺物出土状況  
 第14号井戸跡  
 第15号井戸跡  
 第16号井戸跡 (南から)  
 第18号井戸跡 (南から)  
 第20号井戸跡 (南から)  
 第1号竪穴状遺構  
 第2号竪穴状遺構
- 図版37 第3号竪穴状遺構  
 第2号溝跡  
 第3号溝跡 (南側)  
 第8号溝跡  
 第8・15・16号溝跡  
 第13号溝跡  
 第7・18・19号溝跡 (北東から)  
 第20～23号溝跡 (南東から)
- 図版38 第1号土壌  
 第2号土壌  
 第3号土壌  
 第4号土壌  
 第31号土壌  
 第33・48号土壌  
 第35号土壌  
 第37号土壌
- 図版39 出土旧石器 (第126・146・184図)
- 図版40 A区集石・土壌出土土器 (第130図)  
 A区グリッド出土土器 (第131図)
- 図版41 A区グリッド出土土器 (第132図)  
 C区グリッド出土遺物 (第147図)
- 図版42 E区グリッド出土遺物 (第185図)  
 E区第7号溝跡 (第214図143～145)
- E区第7号溝跡 (第214図146)  
 地下式竪出土遺物 (第168図1)  
 第53号土壌出土遺物 (第179図8)  
 第53号土壌出土遺物 (第179図9)  
 第53号土壌出土遺物 (第179図10)  
 第53号土壌出土遺物 (第179図11)  
 第53号土壌出土遺物 (第179図12)  
 第7号溝跡出土遺物 (第213図125)  
 第7号溝跡出土遺物 (第213図126)  
 第7号溝跡出土遺物 (第213図127)  
 A区グリッド出土遺物 (第223図10)
- 図版44 A区グリッド出土遺物 (第141図)  
 C区土壘出土遺物 (第152図)  
 C区溝跡出土遺物 (第155・156図)  
 C区溝跡出土遺物 (第155図)  
 C区地下式竪出土遺物 (第168図)  
 C区第16・52・68号土壌 (第178図)  
 C区表採その他 (第181図)  
 C区銭貨
- 図版45 E区井戸跡出土遺物 (第197・198図)  
 E区井戸跡出土遺物 (第199図)  
 E区竪穴状遺構・土壌 (第202・222図)  
 E区第6～9・15号溝跡  
 (第208・214・217・218図)  
 E区第7号溝跡 (第211・212図)  
 E区第7号溝跡 (第212図)  
 E区第7号溝跡 (第214図)  
 E区金属製品 (第141・182・215図)
- 図版46 E区銭貨  
 C区第54号土壌 (第179図20)  
 C区有穴球状土製品 (第178図5)  
 X線写真 (第178図5)  
 E区第8号溝跡 (第217図37)  
 E区第3号竪穴状遺構 (第202図1)

新旧対照表

在家遺跡A区

	新	旧
SB2	1	21
	2	1
	3	2
	4	3
	5	4
	6	5
	7	6
	8	7
	9	8
	10	9
	11	23
	12	22
	13	20
	14	10
	15	11
	16	12
	17	13
	18	14
	19	15
	20	16
	21	17
	22	18
	23	19
	24	24
	25	25
SB3	1	1
	2	2
	3	3
	4	4
	5	6
	6	7
	7	8
	8	9
	9	5

掘立柱建物跡Pit

	新	旧
SB5	1	7
	2	8
	3	1
	4	2
	5	3
	6	4
	7	5
	8	6
SB7	1	1
	2	2
	3	3
	4	4
	5	
	6	5
	7	6
	8	7
	9	8
SB8	1	7
	2	8
	3	9
	4	1
	5	2
	6	3
	7	4
	8	5
	9	6
SB10	1	6
	2	7
	3	8
	4	9
	5	10
	6	1
	7	2
	8	3
	9	4
	10	5

在家遺跡B区 平成13年度

	新	旧
SD	22	4
	23	5
	24	6

宮廻館跡A区

	新	旧
SD	13	14

宮廻館跡C区

"SK1, 4, 8, 9, 10, 55, 124は欠番"

宮廻館跡E区13年度

	新	旧
SK	53	1
	54	2
	55	3
	56	4
	57	5

# I 発掘調査の概要

## 1. 調査に至る経過

埼玉県では、『彩の国5か年計画2』における「便利で快適な総合交通体系を整備する」目標を達成するため、「県土の骨格となる高速道路網やインターチェンジへのアクセス道路の整備推進」を重要施策としている。こうした中で、国土交通省が主体となって建設を進める首都圏中央連絡自動車道についても、県内を東西に結ぶ大動脈としてその完成が望まれているものである。

埼玉県教育委員会では、首都圏中央連絡自動車道建設に係る文化財の保護について、昭和62年度の入間・狭山・日高地区を皮切りに、17年にわたって建設省（当時）、国土交通省及び日本道路公団等関係機関と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

さて、本書で報告される地区については、平成11年1月6日付け大國調第二1号、平成11年11月4日付け大國調第二47号などにより建設省関東地方建設局大宮国道工事事務所（当時）所長から「埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」照会があった。

これを受けて、県教育委員会では複数次にわたって確認調査を実施し、その結果をもとに平成11年7月29日付け教文第446号、平成12年2月25日付け教文第1118号、同4月24日付け教文第103号、同11月15日付け教文第819号などで、宮廻館跡、戸宮前館跡、在家遺跡の所在及び取扱いについて回答した。

上記に係る埋蔵文化財の取扱いについては、「現状保存が望ましい」という観点で、建設省関東地方建設局大宮国道工事事務所（当時）と県教育委員会との間で協議が行われたが、工事の計画変更が困難ということで、記録保存のための発掘調査を実施することになった。また、発掘調査は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が受託することになった。

発掘調査の実施については、建設省関東地方建設

局大宮国道工事事務所（当時）、県教育委員会及び財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の三者により調査方法、期間、経費などの問題を中心に協議が行われた。

各遺跡の調査期間は次のとおりとした。

〔宮廻館跡〕（川越市№.19-003・鶴ヶ島市№.31-147）

平成11年4月1日～平成12年3月31日

平成12年4月10日～平成12年6月30日

平成13年4月9日～平成13年5月31日

〔戸宮前館跡〕（川越市№.19-001）

平成12年4月10日～平成12年9月30日

〔在家遺跡〕（川越市№.19-228）

平成11年4月1日～平成11年11月30日

平成12年8月28日～平成12年9月29日

平成13年5月1日～平成13年5月25日

文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が建設省関東地方建設局長から提出され、それに対する保護上必要な通告は平成11年3月31日付け教文第3-867号、平成12年3月31日付け教文第3-1011号で通知を行った。また、第57条第1項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査の届出に対する指示通知は以下のとおりである。

〔宮廻館跡〕

平成11年5月12日付け 教文第2-13号

平成12年5月30日付け 教文第2-15号

平成13年5月1日付け 教文第2-18号

〔戸宮前館跡〕

平成12年6月14日付け 教文第2-25号

〔在家遺跡〕

平成11年5月12日付け 教文第2-14号

平成12年9月14日付け 教文第2-57号

平成13年4月27日付け 教文第2-16号

（埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課）



## 2. 発掘調査・報告書作成の経過

### 発掘調査

首都圏中央連絡自動車道建設用地内に所在する遺跡は、戸宮前館跡、在家遺跡、宮廻館跡の3遺跡である。調査は3か年にわたって行われた。遺跡ごとの各調査回数については内容は下記のとおりである。

各遺跡の調査は、重機による表土除去→遺構確認→遺構精査→遺構図作成という調査の手順に従って行われた。この間、建設省（国土交通省）と調査の

進捗状況や工事予定などについて綿密な連絡を取り合った。なお、用地などの関係で在家遺跡と宮廻館跡の一部は未調査である。

平成11年度には、埼玉県立埋蔵文化財センター主催による遺跡見学会が、建設省の協力を得て、宮廻館跡・在家遺跡を対象に行われ、多くの見学者が訪れ熱心に見学した。

遺跡名	調査期間	主な検出遺構	主な遺物
戸宮前館跡	平成12年4月3日～ 平成12年9月30日	S B12棟・S E13基・S D50条・ S K167基・堅穴状遺構1基等	古瀬戸瓶子、常滑甕・鉢、平碗・ 天目碗・折縁皿・内耳鍋・瓦等
在家遺跡 A・B区	平成11年4月1日～ 平成11年11月30日	集石5ヶ所・F P28基・S B12 棟・S E6基・S D20条・S K14 基等	旧石器・縄文土器等
A区	平成12年8月28日～ 平成12年9月30日	S B1棟・S D2条・S K2基	内耳鍋等
B区	平成13年4月9日～ 平成13年5月31日	S D5条・S K2基等	陶磁器・砥石等
宮廻館跡 A・b・C・E区	平成11年4月1日～ 平成12年3月31日	F P6基・S B8棟・S D41条・ S K214基・S E11基等	旧石器・縄文土器・石器・常滑甕 ・鉢・かわらけ・銭貨等
E区	平成12年4月3日～ 平成12年6月30日	S B12棟・S E12基・S K18基・ S D25条等	常滑甕・内耳鍋・石鍋・板碑・ 銭貨等
E区	平成13年4月9日～ 平成13年5月31日	S D5条・S K6基等	縄文土器・陶磁器

### 整理・報告書作成

整理事業は、平成15年10月1日から平成16年3月24日まで実施した。

作業は遺物の水洗、注記を経て、接合、復原を行い、報告を要するものについては拓本を採り、実測図を作成した。実測図をトレースし、破片遺物は拓本を合わせて版組みした。遺物図中に写真を掲載するものについては、デジタルカメラで撮影し、パソ

コンで実測図と合成した。遺構図は原図の整理・確認と二次原図の作成を行い、仮版組みを作成しパソコンに取り込んで、イラストレーターでトレースを進めた。その後、遺物写真撮影を行い、遺構写真と合わせて版組みした。原稿執筆等を行い、2月割付を作成し、入札した。入稿後3回の校正を行い、3月本書の印刷を終了した。

### 3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

#### (1) 発掘調査

理事 長

(平成11年度)

荒井 桂

(平成12・13年度)

中野 健一

副理事 長

飯塚 誠一郎

常務理事兼管理部長

(平成11・12年度)

広木 卓

(平成13年度)

大館 健

管 理 部

副部長兼経理課長(平成11年度)

関野 栄一

管理 部 副部長(平成12年度)

関野 栄一

管 理 幹(平成13年度)

持田 紀男

庶務 課 長(平成11年度)

金子 隆

査(平成11年度)

田中 裕二

主 席(庶務担当)(平成12年度)

阿部 正浩

主 席(施設担当)(平成12年度)

野中 廣幸

主 席(経理担当)(平成12年度)

江田 和美

主 任(平成11・13年度)

江田 和美

主 任

長滝 美智子

主 任

福田 昭美

主 任

腰塚 雄二

主 任

菊池 久

調 査 部

調 査 部 長

(平成11年度)

増田 逸朗

(平成12・13年度)

高橋 一夫

調 査 部 副 部 長

(平成11年度)

水村 孝行

(平成12年度)

石岡 憲雄

(平成13年度)

坂野 和信

専門調査員(調査第一担当)

(平成11年度)

鈴木 敏昭

(平成12年度)

坂野 和信

(平成13年度)

村田 健二

統括調査員(平成11年度)

中村 倉司

統括調査員(平成11年度)

昼間 孝志

統括調査員(平成11年度)

金子 直行

統括調査員(平成11年度)

栗島 義明

統括調査員(平成12年度)

橋本 勉

統括調査員(平成12年度)

木戸 春夫

統括調査員(平成13年度)

赤熊 浩一

統括調査員(平成13年度)

関 義則

主任調査員(平成11・12年度)

上野 真由美

主任調査員(平成12年度)

黒坂 慎二

#### (2) 整理・報告書作成

(平成15年度)

理 事 長

桐川 卓雄

副 理 事 長

飯塚 誠一郎

常務理事兼管理部長

中村 英樹

管 理 部

管 理 部 副 部 長

村田 健二

主 席

田中 由夫

主 任

江田 和美

主 任

長滝 美智子

主 任

福田 昭美

主 任

腰塚 雄二

主 任

菊池 久

調 査 部

調 査 部 長

宮崎 朝雄

調 査 部 副 部 長

坂野 和信

主 席 調 査 員 (資料整理担当)

磯崎 一夫

統 括 調 査 員

木戸 春夫

## II 遺跡群の立地と環境

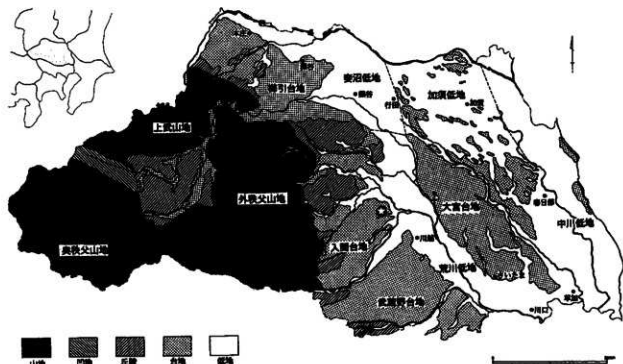
### 1. 地理的環境

戸宮前館跡・在家遺跡・宮廻館跡の3遺跡は川越市北部の大字下広谷地内に所在し、宮廻館跡を含む遺跡の一部は鶴ヶ島市にかかる。付近は行政的には川越市、鶴ヶ島市、坂戸市が入り組んでいる。最寄りの駅は東武東上線鶴ヶ島駅で、遺跡は駅から北北東に約2kmほどに位置する。周囲は農村地帯であったが東武東上線が通り、その西側1kmほどの所には関越自動車道鶴ヶ島インターチェンジもあって交通の便がよいため、早くから付近の鶴ヶ島市域は工業団地や住宅団地が造成された。また、最近では圏央道と結ぶ鶴ヶ島ジャンクションも造られ、南北だけでなく東西方向への移動もますます便利になりつつある。近い将来、圏央道が東に伸びれば周辺の開発はさらに進むことが予想される。現在の所、鶴ヶ島市以外の遺跡周辺は、まだ畑や水田が広がり雑木林が所々に残っているのどかな風景を展開する。

遺跡群の所在する川越市・鶴ヶ島市は、埼玉県の

中央部からやや南に位置する。地形分類上は入間台地の支台である坂戸台地に立地する。入間台地は外秩父山地に源を発する越辺川、高麗川、入間川によってつくられた扇状地性の台地で、起伏が少なく平坦であることを特徴とする。これらの川は外秩父山地から荒川に向かって北東に流れるため台地も南西から北東方向に発達している。標高は日高市高麗川駅付近で約80m、台地先端部の坂戸市小沼から川越市下小坂にかけては19m前後を測る。台地は河川によって細分され、越辺川と高麗川の間を毛呂台地、高麗川と小群川の間を坂戸台地、小群川の南入間側までを飯能台地と呼んでいる。さらに各台地の先端部は小河川によって樹枝状に浸食され、その微地形を利用して各種の遺跡が形成されている。

遺跡群は、坂戸台地の先端から約2kmほど奥に立地し標高は25m前後である。



第1図 埼玉県の地形

## 2. 周辺の遺跡

本遺跡群からは主に旧石器時代の礫群、縄文時代の戸穴、中世の遺構、遺物が検出された。以下に該当する時代について周辺の遺跡を概観する。

旧石器時代の遺跡は周辺では発見されていない。今回、在家遺跡で該期の遺物を伴う礫群が発見されたことで、今後、台地縁辺部でも同様の遺跡が発見される可能性が高くなったといえよう。

縄文時代の遺跡もあまり多くはない。早期の遺跡は周辺にはなく台地の内奥部に限られる。前期になって周辺に遺跡が見られるようになる。坂戸市の木曾免遺跡は関山式期の住居跡が検出されている。同市附島遺跡も関山式期の遺跡で、いずれも台地の先端部に立地する。中期には登戸遺跡、金山遺跡、勝呂遺跡、景台遺跡などで集落が営まれるようになる。中期の遺跡は台地の先端部や、やや奥に入った小支谷に面して立地しているようである。後期は前林遺跡、西窪遺跡、渡戸遺跡の堀之内式期の遺跡である。後期の遺跡も中期と同じような場所に立地すると思われる。

中世城館跡は遺跡周辺に多く存在する。下広谷には宮廻館跡、戸宮前館跡、大堀山館跡、広谷宮前館跡(註1)があり、大谷川を挟んで対岸の坂戸市中小坂には大穴城跡がある。台地の北方には堀構屋敷跡、塚越館跡、明泉館跡、勝豊前守館跡などがあり、他にも城址関連の遺構が数箇所存在するとされる(関口和也 1990)。下広谷の館跡については地元ではその存在は認識されてはいたようであるが伝承などは残されていない。『新編武蔵風土記稿』には「古跡三ヶ所」として、「土人城の跡と唱て何人の居跡なることを傳へず」とあることから当時既にその由来はわからなくなっていたのであろう。また、その位置については「一は村の東北にあり、(中略)一は村の中程にあり、(中略)一は村の東にあり、(中略)土人是を構山と云」と記している。その方向から「東」にあたるのが広谷宮前館跡、「東北」にあたるのが大堀山館跡、「中程」にあたるのが戸宮前館跡と考えていいのではないだろうか。そして、広谷宮前館跡については当時「構山」と呼ばれていたのである。

註1 「広谷宮前館跡」については、確定した名称はついていない。柳沢氏は「中世北武蔵の城」でこの名称を用いている。川越市の報告書などでは「宮前館跡」「宮前遺跡」などと使われている。

### 参考文献

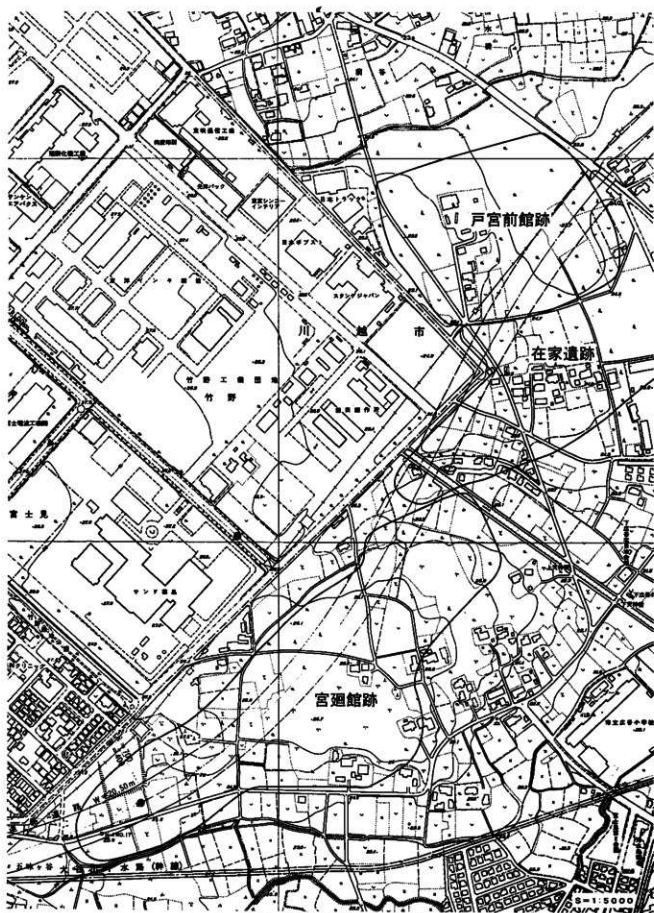
- 加藤恭明 1997 『景台遺跡』 坂戸市遺跡発掘調査団  
 埼玉県教育委員会 1988 『埼玉の中世城館跡』  
 関口和也 1990 「埼玉県川越市大字下広谷の城址群」『中世城郭研究』第4号  
 堀口萬吉他 1986 「埼玉県の地形と地質」『新編埼玉県史 別編3』 埼玉県  
 堀口萬吉他 1987 「荒川流域の地形」『荒川 自然』 埼玉県  
 村本達郎 1975 『埼玉県地理図集』

### 周辺の遺跡

1 戸宮前館跡	2 在家遺跡	3 宮廻館跡	4 若葉台遺跡	5 勝呂廃寺
6 勝呂遺跡	7 附島遺跡	8 渡戸遺跡	9 明泉遺跡	10 青木堀之内遺跡
11 宮町遺跡	12 住吉中学校遺跡	13 精進場遺跡	14 番匠遺跡	15 木曾免遺跡
16 丸山遺跡	17 大堀山館跡	18 宮前館跡	19 景台遺跡	20 西窪遺跡
21 大穴山遺跡	22 金山遺跡	23 前林遺跡	24 お寺山遺跡	25 鶴ヶ丘遺跡
26 登戸遺跡	27 夜幣賀伎遺跡	28 東洋大学敷地内遺跡	29 中野台遺跡	30 有泉遺跡
31 会下遺跡	32 花見堂遺跡	33 龍光遺跡	34 日枝神社遺跡	35 新田屋敷遺跡
36 山王久保遺跡	37 河越館跡	38 天王遺跡		



第2図 周辺の遺跡



第3図 遺跡の位置と周辺の地形

### Ⅲ 戸宮前館跡

#### 1. 調査の概要

戸宮前館跡は川越市大字下広谷地内に所在する。調査は平成12年度に行った。調査時のグリッドは隣接する在家遺跡と共通のものを使用した。なお、調査区北側の畑は既に埋め立て盛土され、遺構の検出される面より深く攪乱されていたため調査の範囲から除外した。遺跡の立地は坂戸台地の先端から約2kmほど奥で一見平坦な地形であるが、館跡の北側には浅い谷が西から東に延びている。東及び南は平坦な地形であるが、南側200mには小さいがや深い谷がある。この谷は南東に延びて大谷川に連なる。西側は開発が進んでおり、今では旧地形を知ることにはできない。遺跡の標高は現地形で25m前後である。

検出された遺構は、掘立柱建物跡12棟、竪穴状遺構1基、井戸跡13基、溝(堀)跡50条、土壇167基、整地跡1ヵ所、地下式溝1基である。溝跡は重複が見られるが、方形に廻り大きく3区画を形成していた。それぞれの区画の中には土壇や掘立柱建物などの遺構が集中することから、明らかに溝で区画する(溝で囲まれた中を一つの区画と認識する)意図があったと考えられる。土壇は区画の中に集中して掘り込まれていた。長方形でほとんど遺物を出土しないが墓墳的な性格のものと考えられ、最初から存在したものではないであろう。

館跡の中心は調査区の北西約100mにあたる。中心部は昭和51年に山林伐採に伴って一部が破壊された(注1)。現在ではその大半が残っていない。それ以前の昭和47年8月に学習院大学輔仁会史学部によって200m余が学術調査されているが、この時の調査は中心部ではなかったようであり詳細については不明である(注2)。開発に伴う調査は、平成4年に東京電力の鉄塔立替工事のため、川越市教育委員会がやはり200m余を調査している。この時の調査範囲は、今回の調査区に隣接しており、その

時に検出された溝の続きが今回調査でも検出された。

本館跡について書かれた主なものには、『埼玉の館城跡』、『埼玉の古城址』、『埼玉の中世城館跡』、『日本城郭大系 五』などがあるが、中でも関口氏の『埼玉県川越市下広谷の城址群』(注3)には詳しく紹介されている。最近では梅沢氏が『広谷北城跡』(注4)として主に関口氏の文献をもとに取り扱っている。

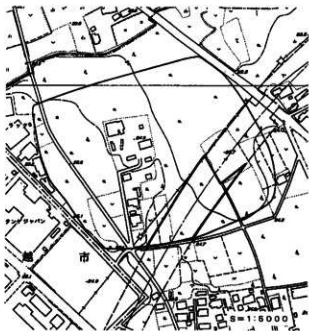
注1 読売新聞 昭和51年6月15日埼玉版に記事が掲載されている。

注2 埼玉県教育委員会『埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧Ⅲ』

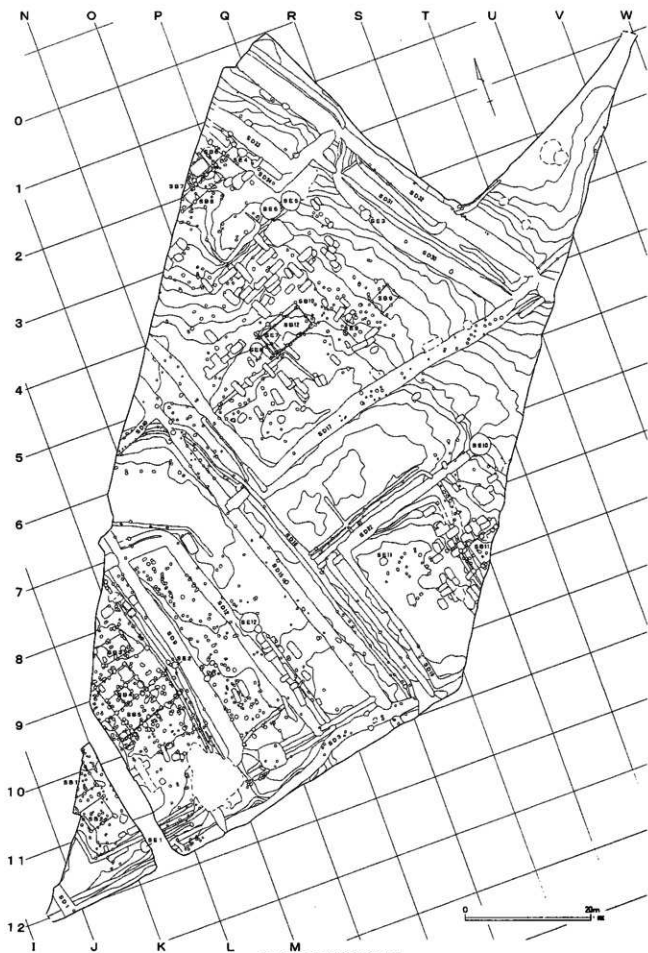
注3 関口和也 1990『埼玉県川越市下広谷の城址群』

『中世城郭研究』第4号

注4 梅沢太夫夫 2003『中世北武蔵の城』 岩田書院



第4図 戸宮前館跡周辺地形図



第5圖 戸宮前館跡全測図



## 2. 検出された遺構と遺物

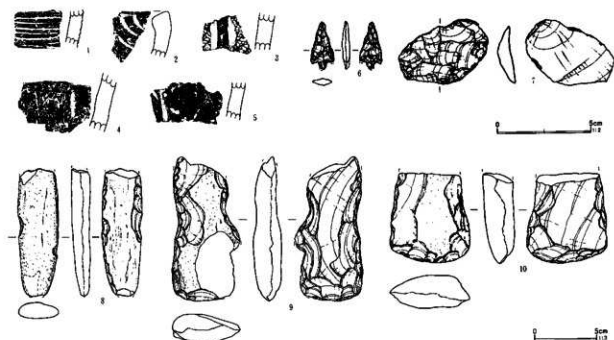
### A 縄文時代 (第6図)

調査区内から、縄文時代の遺構は検出されなかった。グリッド全体からの出土量も少なく、土器片数点と石器数点が検出されたのみであった。

1～5はグリッドから出土した土器である。1は前期の諸磯式土器で、胴部の破片である。半截竹管によって横方向に沈線を施文している。2～5は中期後葉の土器である。2は口縁部の破片で、口縁に重弧文を施文する曾利系の土器である。3～5は加曾利E系の土器で、いずれも胴部の破片である。3は胴部に2本1組の沈線を垂下させており、2本の沈線の間は磨消している。沈線は浅く幅広に施文されている。地文は単節RLの縄文を、縦方向に施文している。4も沈線間を磨り消しているもので、沈線は浅く幅広に施文されている。地文は条線を縦方向に施文している。5は底部に近い破片で、磨消沈線文が施されている。

6～10はグリッドから出土した石器である。6は有茎の石鏃で、逆刺部分には浅い袈りが入っている。

長さ2.5cm幅1.3cm、厚さ0.4cmで、重量は0.8gである。石質は黒曜石で、基部の先端と左側の逆刺部の先端が欠損している。7は素材となる剥片をそのまま搔器として使用したもので、裏面には主要剥離面が大きく残っている。縁辺には細かい刃こぼれ状の剥離が観察される。長さ3.5cm、幅3.8cm、厚さ1.0cm、重量は11.0gである。石質は黒曜石である。8は磨製石斧の未製品で、基部と刃部の先端が欠損している。残存している長さ10.2cm、幅3.3cm、厚さ1.5cm、重量77.8gである。石質は緑泥片岩である。9は打製石斧で、基部と右側縁の一部が欠損している。刃部に最大幅を持つもので、両側縁には浅い袈りが入っている。残存する長さ11.5cm、幅5.5cm、厚さ2.3cm、重量151.9gである。石質はホルンフェルスである。10は基部側を半分欠損している。刃部に最大幅がある打製石斧で、残存する長さ7.2cm、幅6.4cm、厚さ2.6センチである。石質は砂岩で全体的に風化している。



第6図 グリッド出土遺物 (縄文時代)

## B 中世以降

### a 区画と溝跡

溝跡は50番まで番号を付したが、区画溝については方向の変る所で別番号を付したのもあり、実数はこれより少ない。

溝跡は大別して2種類に分けられる。ひとつは上幅が2mを超え、深さが1m前後で断面形が葉研ないしは箱葉研形を呈する。溝跡は真直ぐに通る、曲がりは殆どの場合、直角に近く角は明瞭である。これらの溝跡は館跡を構成する区画を造っていると考えられる。遺物は常滑甕、播鉢、在地産鉢、内耳鍋、かわらけなどを出土した。遺物の年代は概ね13世紀から15世紀までと考えられる。

もう一つは規模が小さく断面形は丸みを持つ。浅く、曲がりを持つ場合も曲線的である。これらの溝跡も何らかの区画を意図したものであると思われるが、浅いためであろうか区画に完結性が認められない。遺物も少なく、確実に遺構に伴うと考えられるものは出土しなかった。遺構の重複関係から、規模の大きな溝跡より新しいことは確実であるが具体的な年代は捉えられない。

ここでは館跡という遺跡の性質から、溝跡によって囲まれる区画を単位として中心に説明を加え、個々の溝跡については後掲の表に変える。(通常城館跡においては「郭」と言うべきであろうが、全体の構成がはっきりせず、またどのような機能を持つものかわからないためここでは「区画」という用語を用いる)。

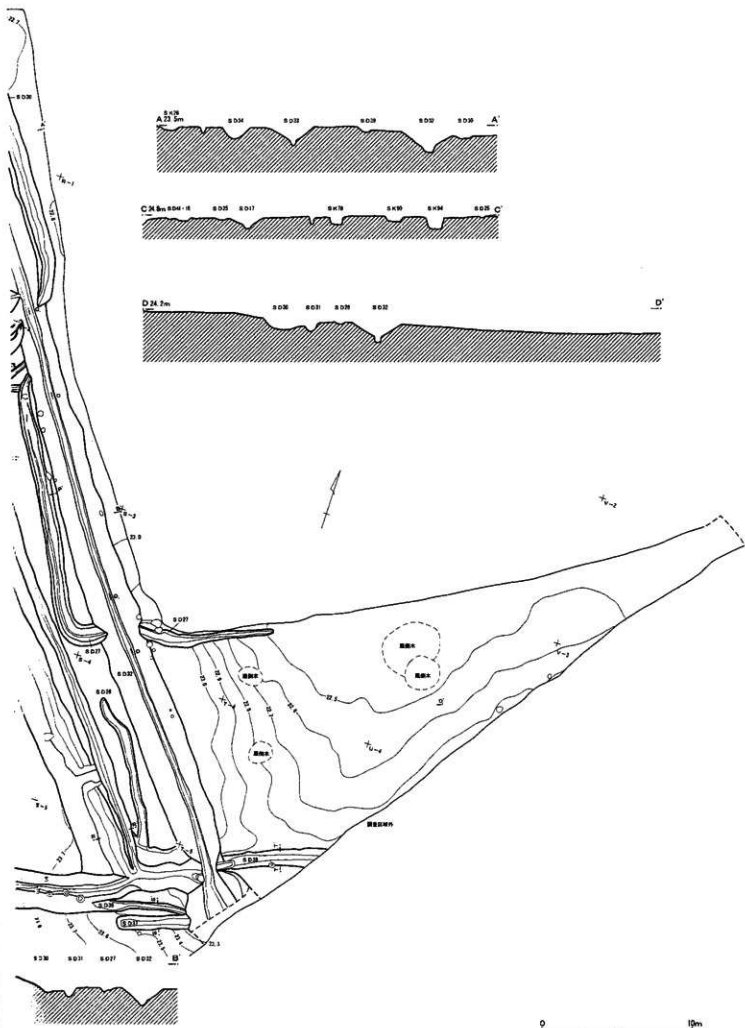
区画は大きく4区画が検出された。調査区の北側の大半を占めるものを第1区画とする。調査区の南西側にあり他の区画より小さいものを第2区画とする。第2区画の西側にあるものを第3区画とする。第4区画としたものは第1区画の西側にあたるが、検出されたのは溝跡で囲まれる東隅だけで大部分は調査区外である。

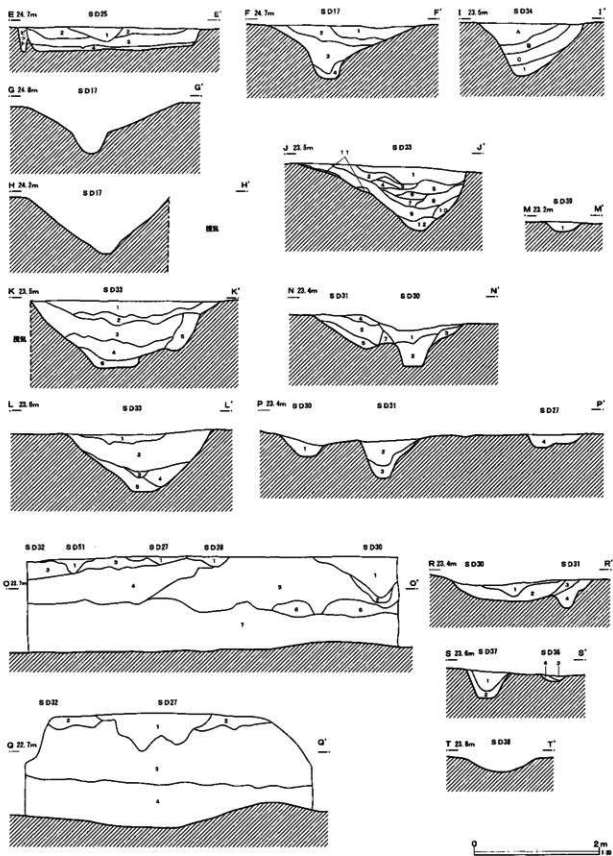
第1区画は、第17・31・32・33・34号溝跡によって構成され、区画の北東側は調査区外にかかる。北

東側は第31～34号溝によって限られ、南東及び南西側は第17号溝跡が廻る。第31号溝跡と第34号溝跡は一連のもので、折れを形作っていると考えられる。第33号溝跡は第34号溝跡と重複しており、土層断面で古いことが確認された。第33号溝跡は直角に曲がり第32号溝跡に接続し、第34号溝跡と同じように折れを作っている。第32号溝跡は第33号溝跡との接続点より更に北西方向に伸びて第33号溝跡との間に幅5mほどの帯郭状の空間を造っているが、接続点より北西側は後から延長したと考えられることも可能である。第33・34号溝跡に新旧関係が認められたことから、当初は第31・34号溝跡の範囲であったものが第32号溝跡の範囲まで拡張されたものであることが判る。第31号溝跡と第33号溝跡に新旧関係があるかどうか確認をとらなかったため拡張された時点で第31号溝跡が機能していたかどうかかわからないが、第32・33号溝跡が二重堀の形態を探っていたなら第31号溝跡も機能して第33号溝跡と同じく二重堀であった可能性はあると思われる。第17号溝跡には掘り直しの痕跡は確認できなかったが、拡張前・後の両時期に機能していたと考えられる。これらの溝はいずれもしっかりした葉研状の断面形を呈し堀として機能していたものであろう。なお、第17号溝跡の埋土には水の影響は見られなかったが、第32号溝跡には底面に砂が堆積していた部分もあり、水堀であったと思われる。調査中も湧水ポンプで排水しながらの作業となったが、排水中は常に水が流れる状態で、排水を止めると翌朝には溝々と水が溜まっている有様であった。区画内には掘立柱建物跡6棟、竅穴状遺構1基、削り出して整地したと思われる平地1箇所、井戸跡7基の他、規模の小さな溝跡や土壌が多数検出された。小さな溝跡や土壌は区画の形成された時期には伴わないと考えられる。他の遺構に関しては第6号掘立柱建物跡としたものを除いて、出土遺物を見る限り



第7图 第1区画(1)





第8图 第1区画(2)

## 第1区画溝跡土層註記

## 第17号溝跡 (第 図 F-F')

- 1 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒微量
- 3 暗褐色土 ローム粒少量
- 4 褐色土 ロームブロック含む、ローム粒多量

## 第27・28・29・30・32号溝跡 (第 図 O-O')

- 1 暗灰褐色土 シルト質 (SD27・28・29・30)
- 2 暗灰褐色土 ローム粒少量 (SD32)
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量埋戻土 (SD32)
- 4 褐色土 ローム大ブロック多量埋戻土 (SD32)
- 5 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量埋戻土 (SD32)
- 6 黄褐色土 ローム粒少量自然堆積? (SD32)
- 7 黄褐色土 シルト質自然堆積? (SD32)

## 第30-31号溝跡 (第 図 N-N')

- 1 暗褐色土 ローム粒微量 (SD30)
- 2 暗褐色土 ローム粒少量 (SD30)
- 3 褐色土 ローム粒中量 (SD30)
- 4 暗褐色土 ローム粒少量 (SD31)
- 5 黄褐色土 ローム粒微量 (SD31)
- 6 暗褐色土 ローム粒中量 (SD31)
- 7 暗褐色土 ローム粒多量 (SD31)

## 第34号溝跡 (第 図 I-I')

- A 黄褐色土 ハーフロームブロックのみ (樹木根)
- B 褐色土 ハーフロームブロック含む、ローム粒多量 (樹木根)
- C 暗褐色土 ハーフロームブロック・ローム粒含む。(樹木根)
- 1 褐色土 ハーフロームブロック・ローム粒含む、やわらか

## 第25号溝跡 (第 図 E-E')

- 1 褐色土 ローム粒多量、炭化物微量 (SD25)
- 2 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量 (SK76)
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 (SK76)
- 4 黄褐色土 ローム粒多量 (SK76)

## 第27・32号溝跡 (第 図 Q-Q')

- 1 暗灰褐色土 シルト質 (SD27)
- 2 暗褐色土 ローム粒少量 (SD32)
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量埋戻土 (SD32)
- 4 褐色土 砂、自然堆積 (SD32)

## 第33号溝跡 (第 図 K-K'・L-L')

- 1 黄褐色土 粘土粒微量
- 2 暗褐色土 粘土粒微量、マンガン少量
- 3 暗褐色土 粘土粒・マンガン少量
- 4 褐色土 ロームブロック・ローム粒多量
- 5 黄褐色土 ロームブロック多量
- 6 暗褐色土 砂少量

## 第36・37号溝跡 (第 図 S-S')

- 1 黄褐色土 ローム粒含む。(SD37)
- 2 暗褐色土 ロームブロック含む、ローム粒多量 (SD37)
- 3 暗褐色土 ローム粒少量 (SD36)
- 4 褐色土 ローム粒多量 (SD36)

## 第30・31号溝跡 (第 図 R-R')

- 1 暗褐色土 ローム粒微量 (SD30)
- 2 暗褐色土 ローム粒微量 (SD31)
- 3 暗褐色土 ローム粒含む。(SD31)
- 4 暗褐色土 ロームブロック含む。(SD31)

## 第27・30-31号溝跡 (第 図 P-P')

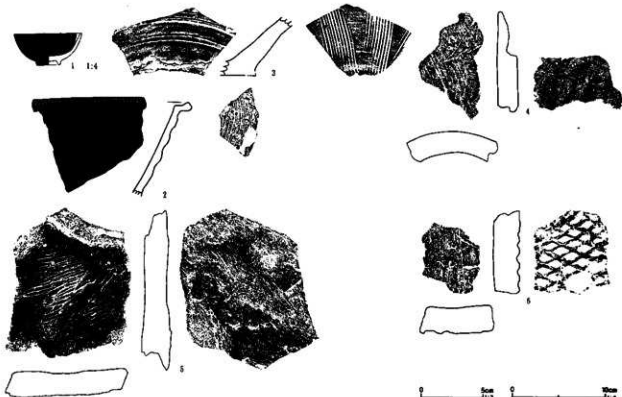
- 1 暗褐色土 ローム粒微量 (SD30)
- 2 暗褐色土 ローム粒微量 (SD31)
- 3 暗褐色土 ローム粒含む。(SD31)
- 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒微量 (SD27)

## 第33号溝跡 (第 図 J-J')

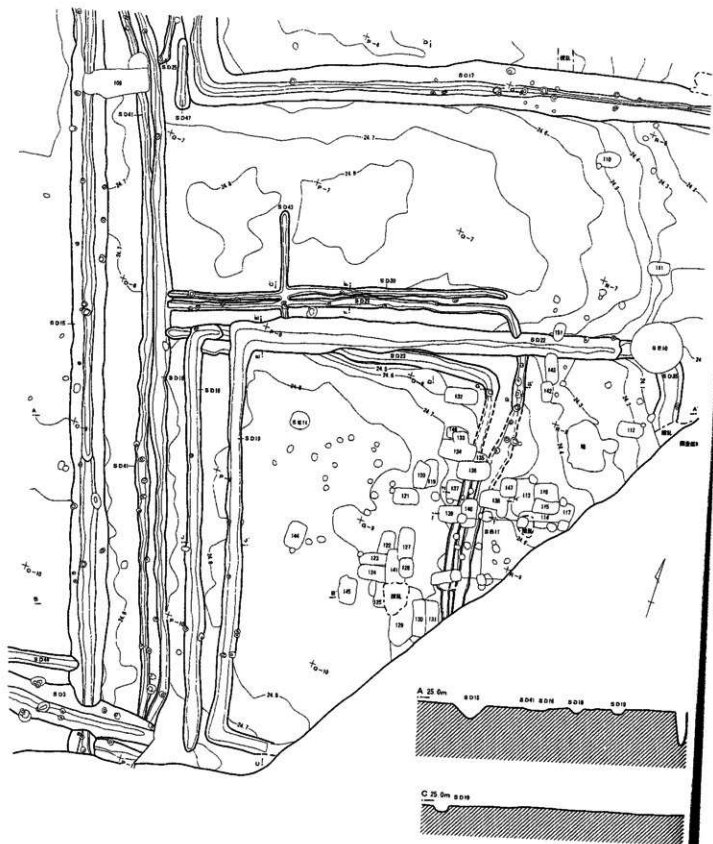
- 1 黄褐色土 ローム粒微量
- 2 暗褐色土 ローム粒中量
- 3 黄褐色土 ローム粒少量
- 4 暗褐色土 ローム粒少量、マンガン微量
- 5 暗褐色土 ローム粒微量
- 6 褐色土 ロームブロック微量
- 7 暗褐色土 ローム粒多量、マンガン含む。
- 8 黄褐色土 ローム粒微量
- 9 暗褐色土 ローム粒多量、マンガン含む。
- 10 黄褐色土 ローム粒微量
- 11 褐色土 ロームブロック・ローム粒含む。
- 12 暗褐色土 砂少量

## 第39号溝跡 (第 図 M-M')

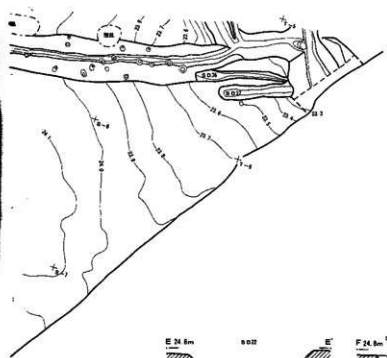
- 1 黄褐色土 ロームブロック少量、ローム粒含む。



第9図 第3号溝跡出土遺物



第10图 第2区画



第20・21号溝跡 (F-D')

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒含む
- 2 暗褐色土 ロームブロック含む、ローム粒多量 (S D20)
- 3 褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 (S D21)

第21・22号溝跡 (G-G')

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量

第21・23号溝跡・第132・138号土壇 (H-H')

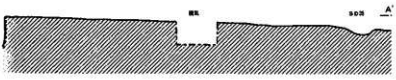
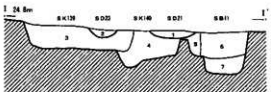
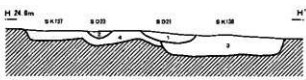
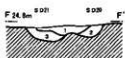
- 1 暗褐色土 ローム粒多量 (S D21)
- 2 暗褐色土 ローム粒多量 (S D23)
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量、炭化物少量 (S K138)
- 4 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量 (S K137)

第21・23号溝跡・第139・140号土壇 (I-I')

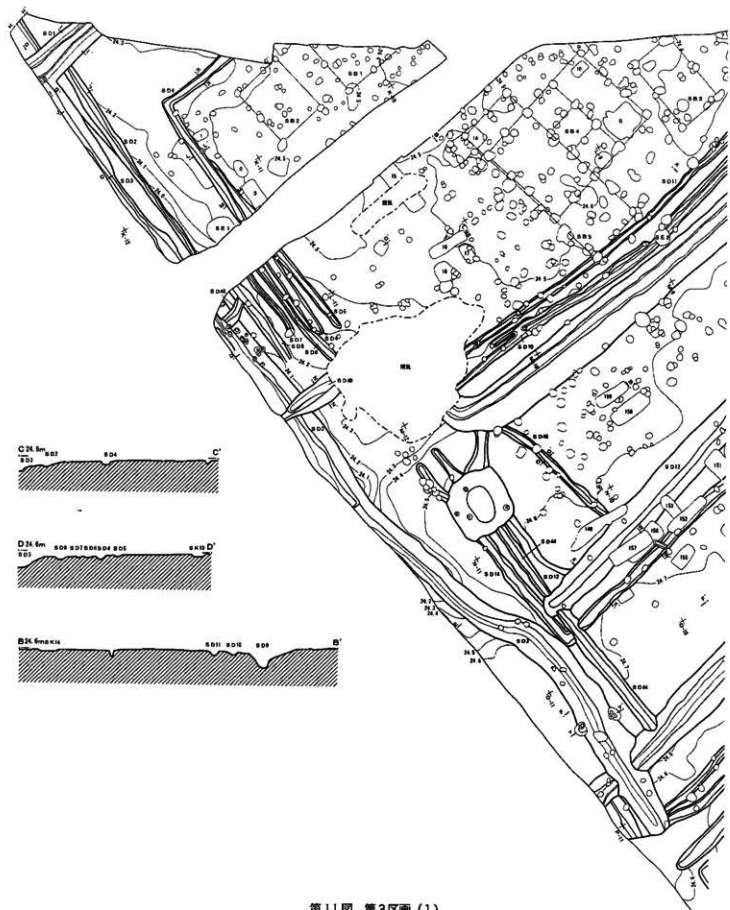
- 1 暗褐色土 ローム粒多量 (S F21)
- 2 暗褐色土 ローム粒多量 (S D23)
- 3 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量、炭化物少量 (S K139)
- 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 (S K140)
- 5 褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量
- 6 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量
- 7 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量、粘柱

第18・19号溝跡 (J-J')

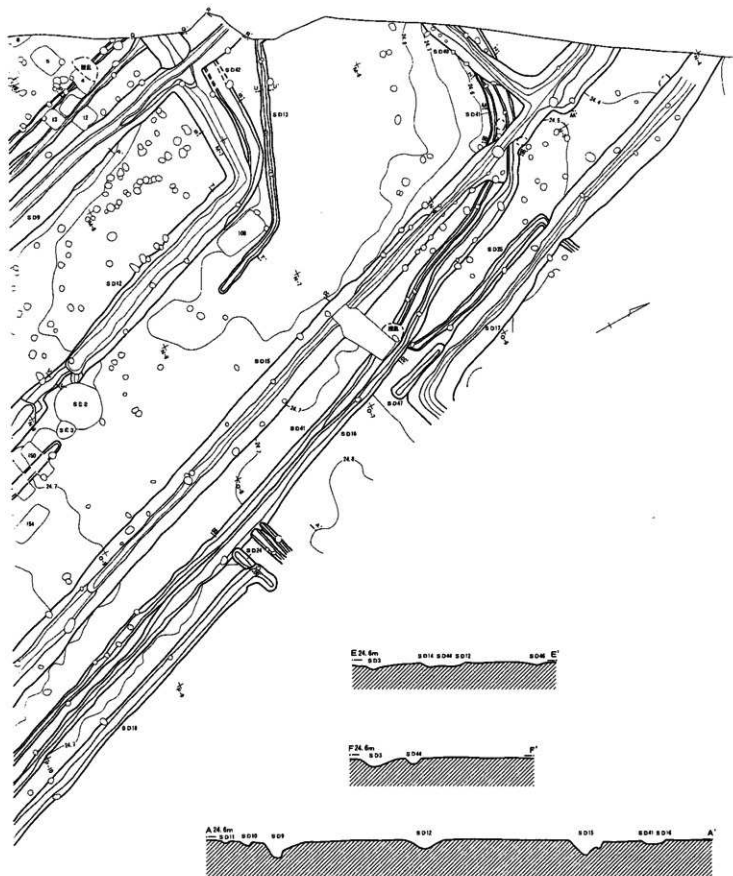
- 1 暗褐色土 ローム粒少量
- 2 褐色土 ローム粒多量
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒含む

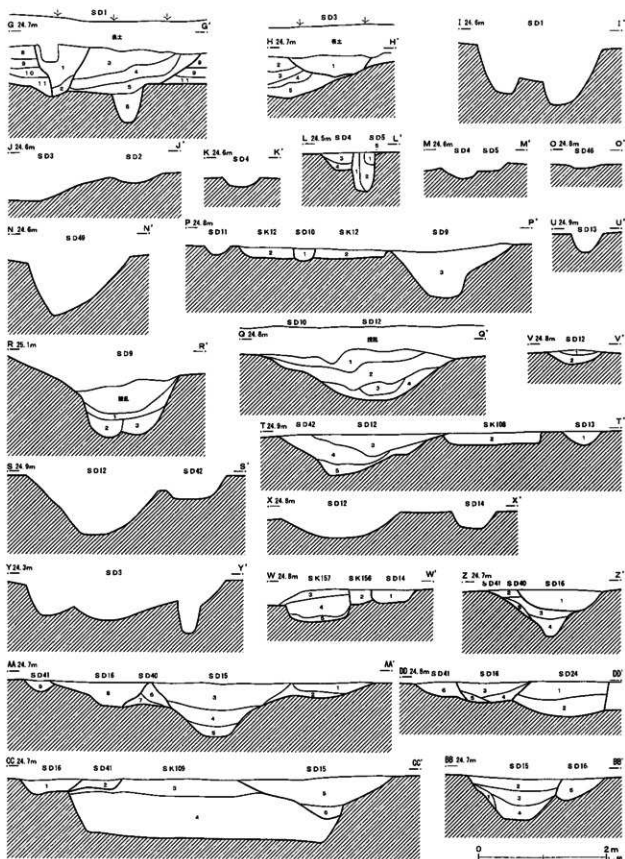






第11图 第3区画(1)





第12图 第3区画(2)

## 第3区画跡跡土層記

## 第1・3号溝跡 (第 図G-C)

- 1 暗褐色土 ローム粒微量、炭化物微量 (SD1a)
- 2 暗褐色土 ロームブロック含む、ローム粒少量 (SD1a)
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒含む、炭化物微量 (SD1b)
- 4 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒含む、(SD1b)
- 5 暗褐色土 ロームブロック微量、ローム粒含む、(SD1c)
- 6 暗褐色土 ロームブロック含む、ローム粒少量 (SD1c)
- 7 暗褐色土 ローム粒少量、炭化物微量
- 8 黒褐色土 ロームブロック微量、ローム粒含む、
- 9 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒含む、
- 10 褐色土 ロームブロック・ローム粒少量

## 第9号溝跡 (第 図R-R')

- 1 暗褐色土 ローム粒少量、やや密
- 2 茶褐色土 ローム粒少量、やや密
- 3 茶褐色土 ロームブロック少量、ローム粒 (径1~2mm)、粗い土

## 第10・12号溝跡 (第 図Q-Q')

- 1 暗褐色土 ローム粒少量、密
- 2 褐色土 ロームブロック微量、ローム粒少量、密
- 3 褐色土 ロームブロック微量、ローム粒少量、やや密
- 4 茶褐色土 ローム粒少量、やや粗い、

## 第12号溝跡 (第 図V-V')

- 1 暗褐色土 ローム粒少量
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少量

## 第14号溝跡 (第 図W-W')

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒、炭化物微量 (SD14)
- 2 暗褐色土 ローム粒少量 (SK156)
- 3 暗褐色土 ロームブロック微量、ローム粒少量 (SK157)
- 4 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒少量、黒色土ブロック状に混入 (SK157)
- 5 黒褐色土 ロームブロック微量、ローム粒少量 (SK157)

## 第15・16・41号溝跡 (第 図CC-CC')

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒少量 (SD16)
- 2 暗褐色土 ローム粒少量 (SD41)
- 3 褐色土 ロームブロック少量、ローム粒少量 (SK109)
- 4 褐色土 ロームブロック少量、ローム粒密に少量、埋戻土 (SK109)
- 5 黒褐色土 ローム粒少量 (SD15)
- 6 暗褐色土 ローム粒少量 (SD15)

## 第16・24・41号溝跡 (第 図DD-DD')

- 1 褐色土 ロームブロック少量、ローム粒少量 (SD24)
- 2 暗褐色土 ロームブロック微量、ローム粒少量 (SD24)
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少量 (SD41)
- 4 暗褐色土 ローム粒少量 (SD41)
- 5 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒少量、砂粒を含む、(SD41)
- 6 暗褐色土 ローム粒少量 (SD16)

## 第2・3号溝跡 (第 図H-H')

- 1 暗褐色土 ロームブロック微量、ローム粒少量、炭化物含む、
- 2 暗褐色土 ローム粒少量、炭化物微量
- 3 暗褐色土 ロームブロック微量、ローム粒含む、
- 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒含む、
- 5 褐色土 ロームブロック・ローム粒少量

## 第4・5号溝跡 (第 図L-L')

- 1 暗褐色土 柱穴P! !
- 2 黒褐色土 柱穴P! !
- 3 黒褐色土 ロームブロック含む、ローム粒微量
- 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少量
- 5 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒含む、

## 第9・10・11号溝跡 (第 図P-P')

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒少量、炭化物少量 (SD10)
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少量、炭化物含む、(SK12)
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少量、炭化物含む、しまりなし、(SD9)

## 第12・13・42号溝跡 (第 図T-T')

- 1 黒褐色土 ローム粒少量、ソフトロームブロック状に混入 (SD13)
- 2 黒褐色土 ロームブロック少量、ローム粒少量 (SK108)
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少量 (SD12)
- 4 黒褐色土 ロームブロック微量、ローム粒少量 (SD42)
- 5 暗褐色土 ローム粒少量、炭化物微量 (SD42)

## 第15・16・40・41号溝跡 (第 図AA-AA')

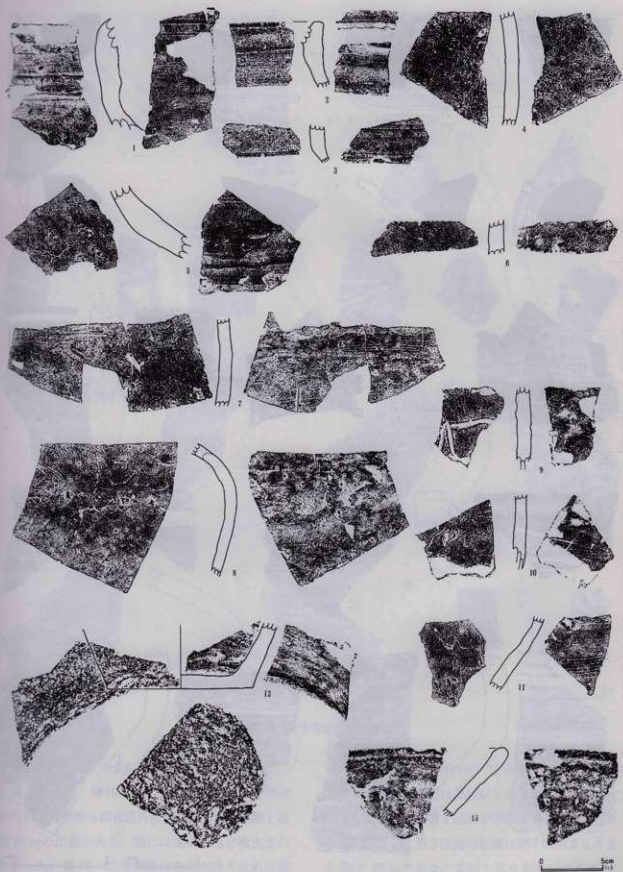
- 1 褐色土 ロームブロック微量、ローム粒少量
- 2 褐色土 ロームブロック・ローム粒少量
- 3 黒褐色土 ローム粒少量 (SD15)
- 4 暗褐色土 ロームブロック微量、ローム粒少量 (SD15)
- 5 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少量 (SD15)
- 6 暗褐色土 ローム粒少量 (SD40)
- 7 褐色土 ロームブロック密に少量、ローム粒少量 (SD40)
- 8 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒少量 (SD16)
- 9 暗褐色土 ローム粒少量 (SD41)

## 第16・40・41号溝跡 (第 図Z-Z')

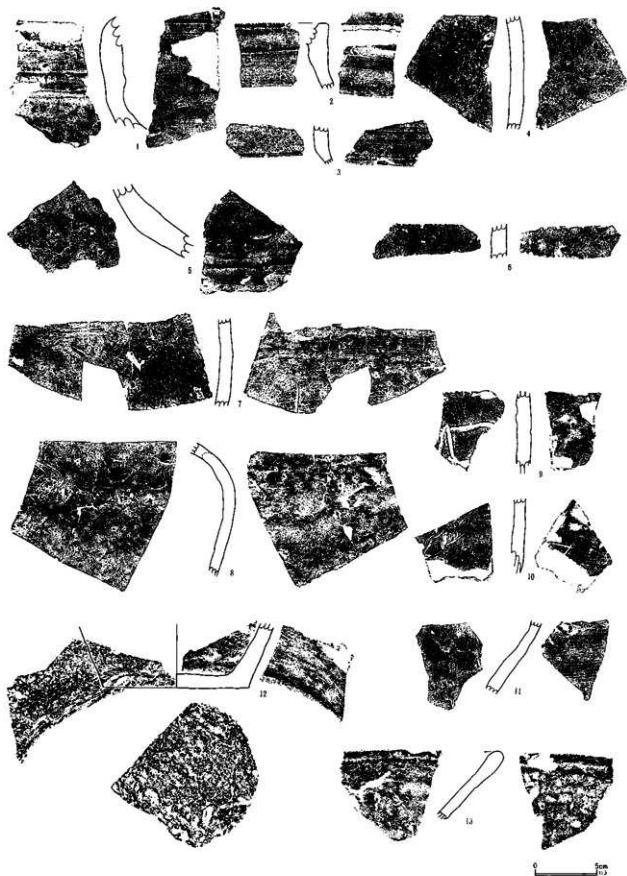
- 1 暗褐色土 ロームブロック微量、ローム粒少量 (SD16)
- 2 暗褐色土 ローム粒少量 (SD41)
- 3 褐色土 ロームブロック少量、ローム粒少量 (SD40)
- 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少量 (SD40)
- 5 黒褐色土 ローム粒少量 (SD40)

第1表 満跡計測表

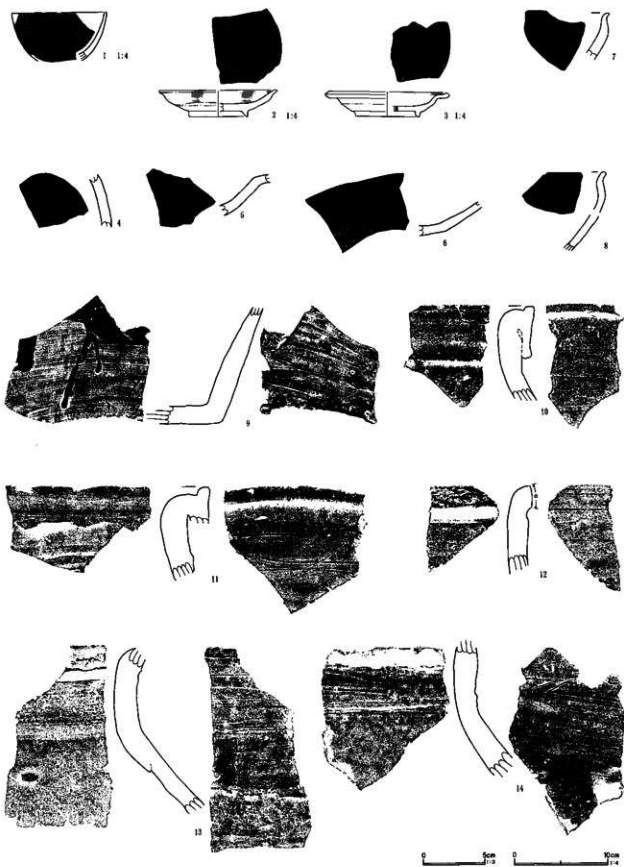
番号	グリッド	長さ	最大幅	最小幅	最大深	最小深	方位1	方位2	方位3	備考
1	I-11~I-12	5.00	2.30	1.90	0.91	0.86	N-12°-W			
2	I-11~K-11	14.60	0.90	0.30	0.19	0.06	N-85°-E			
3	I-11~P-10	68.00	2.80	1.40	0.64	0.13	N-87°-E			
4	J-10~L-11	21.00	0.70	0.50	0.27	0.05	N-12°-W	N-84°-E		
5	J-11~L-11	12.50	0.56	0.40	0.13	0.03	N-80°-E			
6	K-11~L-11	7.60	0.66	0.36	0.08	0.02	N-79°-E			
7	K-11~L-11	4.40	0.42	0.30	0.05	0.04	N-77°-E			
8	K-11~L-11	6.00	1.00	0.60	0.17	0.08	N-83°-E			
9	L-6~M-10	42.00	2.90	1.80	1.06	0.84	N-12°-W			
10	L-7~L-10	35.20	1.20	0.30	0.29	0.05	N-16°-W			
11	L-7~L-10	33.00	0.60	0.20	0.36	0.04	N-15°-W			
12	L-6-7~N-10	56.00	2.20	0.70	0.83	0.10	N-89°-E	N-18°-W		
13	L-6~M-7	17.50	0.60	0.40	0.37	0.10	N-66°-W	N-21°-W		
14	M-11~N-8	33.50	0.80	0.50	0.29	0.08	N-78°-E	N-18°-E		
15	M-4~O-11	68.00	2.90	1.33	1.00	0.44	N-18°-W	N-71°-E		
16	M-5~P-10	66.00	1.30	0.50	0.48	0.11	N-83°-W	N-19°-W		
17	N-4~T-5	80.00	3.00	2.00	1.00	0.66	N-75°-E	N-17°-W		
18	O-8~P-10	28.00	1.30	0.80	0.50	0.21	N-19°-W			
19	O-8~P-10	31.00	1.30	0.90	0.66	0.26	N-16°-W			
20	O-7-8~Q-7	22.00	0.60	0.30	0.27	0.07	N-71°-E			
21	O-8~Q-9	42.00	1.80	0.50	0.26	0.12	N-71°-E	N-22°-W		
22	O-8~R-7	15.50	2.40	1.40	0.72	0.50	N-73°-E			
23	P-7~Q-9	26.00	1.40	0.50	0.30	0.07	N-84°-E	N-8°-W		
24	O-8	4.00	1.00	0.70	0.49	0.43	N-72°-E			
25	N-6~P-5	34.00	1.00	0.40	0.25	0.04	N-20°-W	N-72°-E	N-30°-W	
26	S-4~S-5	10.00	0.70	0.50	0.18	0.03	N-26°-W			
27	R-2~S-3	30.00	1.40	0.34	0.58	0.13	N-26°-W	N-72°-E		
28	R-2	2.00	0.42	0.34	0.10	0.07	N-31°-E			
29	Q-2~R-1	3.00	0.46	0.34	0.44	0.25	N-26°-E			
30	Q-0~S-5	60.00	3.00	0.90	1.04	0.13	N-33°-W	N-22°-E		
31	Q-2~S-5	38.00	1.60	0.34	0.83	0.27	N-35°-W			
32	P-Q-0~T-5	62.00	3.40	2.80	1.37	0.98	N-34°-W			
33	P-0~Q-1	24.00	3.00	2.20	1.41	0.88	N-65°-E	N-33°-W		
34	P-1~Q-2	17.00	2.40	1.50	0.82	0.63	N-65°-E	N-34°-W		
35	R-7	7.00	1.60	1.10	0.42	0.25	N-12°-W			
36	S-5~T-5	6.00	0.74	0.40	0.27	0.09	N-80°-E			
37	S-5~T-5	5.00	0.96	0.70	0.58	0.27	N-71°-E			
38	T-4~T-5	7.00	1.20	0.90	0.48	0.13	N-71°-E			
39	P-0~Q-1	13.00	1.40	0.60	0.32	0.15	N-38°-W			
40	M-5	8.00	0.70	0.50	0.35	0.25	N-73°-E			
41	M-5~P-10	61.00	0.96	0.30	0.19	0.05	N-83°-W	N-19°-W		
42	L-6~M-6	5.00	1.00	0.86	0.36	0.16	N-88°-W			
43	O-7~P-7	7.00	0.56	0.40	0.22	0.11	N-18°-W			
44	M-10~O-10	23.00	1.00	0.50	0.41	0.25	N-81°-E			
45	O-10-11~P-10-11	2.20	1.80	1.10	0.37	0.18	N-87°-E			
46	M-10~N-10	9.00	0.64	0.40	0.10	0.03	N-70°-E			
47	N-7~O-6	4.60	0.90	0.60	0.58	0.30	N-18°-W			
48	K-11	2.00	0.86	0.60	0.14	0.08	N-26°-W			
49	K-11~L-11	4.00	1.60	1.00	0.74	0.70	N-85°-W			
50	Q-2~R-2	3.00	0.60	0.34	0.18	0.14	N-80°-E			



第13図 第12号溝跡出土遺物

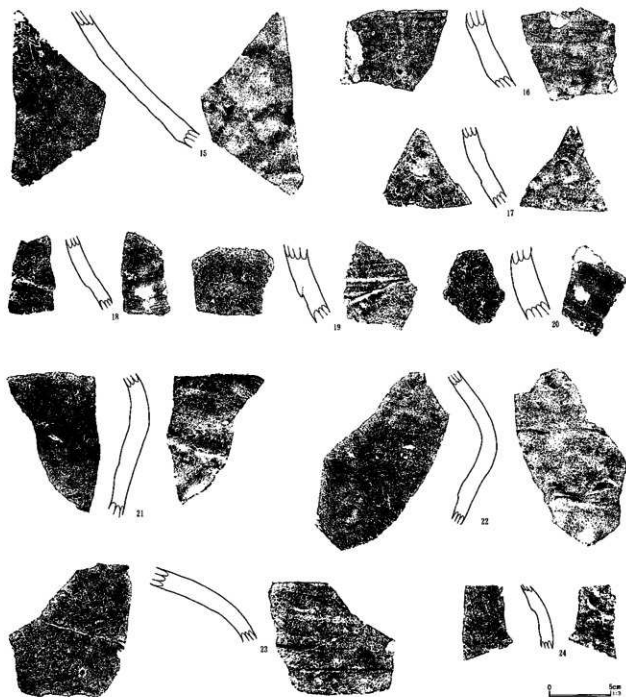


第13图 第12号溝跡出土遺物



第14图 第15号清跡出土遺物(1)



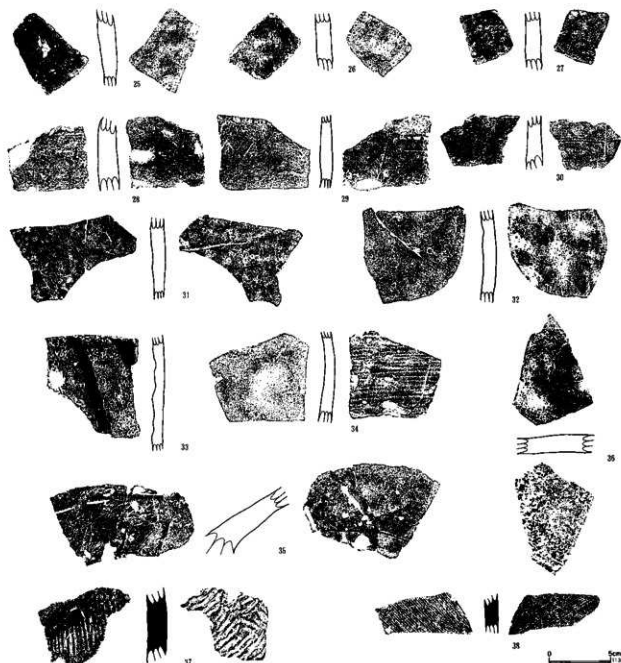


第15図 第15号溝跡出土遺物(2)

区画に伴うものと考えてよさそうである。

第2区画は、第19・22・35号溝跡によって形成される。南東側は調査区外にかかる。第1区画とは約14mの距離があり、間には遺構は殆ど検出されなかった。第19・22号溝跡は方向が違うために別番号としたもので一連のものである。第35号溝跡

も同じであるが北東角の第22号溝跡と分けた部分で浅くなる。断面形は葉研状と言うには底面が広く深さも足りない。第1区画の溝跡ほどしっかりしたものではない。第2区画の規模は第1区画より小さく28×29mである。方形と言ってよいであろう。拡張された形跡はなく区画内には掘立柱建物跡1棟、

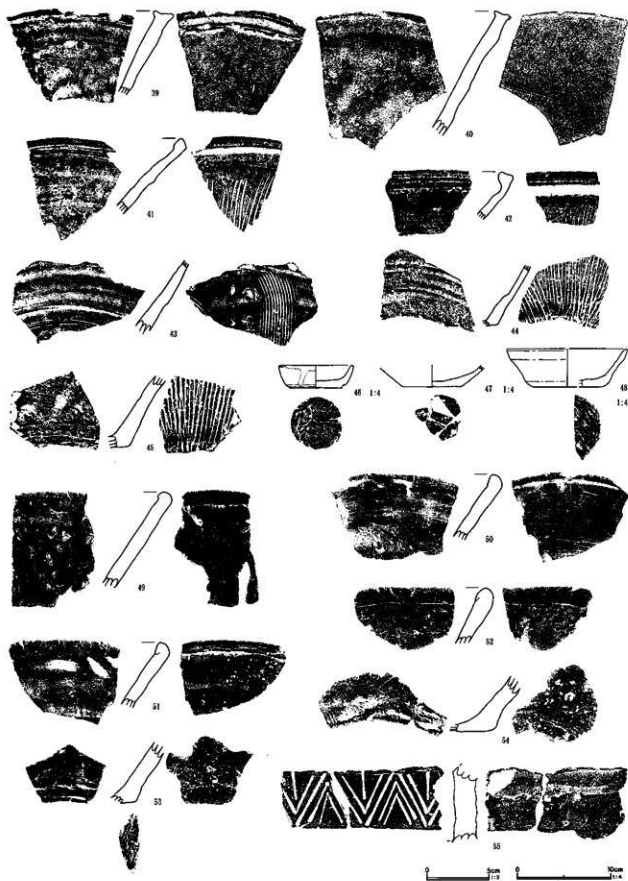


第16図 第15号溝跡出土遺物(3)

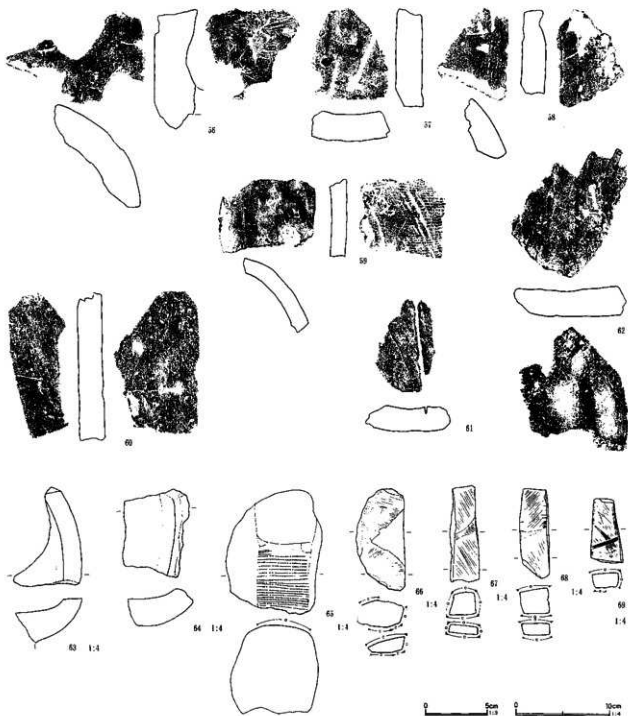
井戸跡1基、地下式墳1基、小規模な溝の他土壌多数が検出された。小さな溝跡は第1区画で検出されたものと同様であり、土壌とともに新しい時期のものである。掘立柱建物跡と井戸跡については区画が形成された時期のものと考えておきたい。

第3区画は第2区画の西にあり、第2区画とは約18m離れている。第3・12号溝跡で画される空間で、規模は南北に約47mと思われるが、東西方向は不

明である。西側は調査区外にかかり、西側を画する溝は不明である。東側の第12号溝跡から約50m西に第1号溝跡があるが、これは土層断面から第3号溝跡より新しいことが判っているため、西側を区画するものではない可能性が高い。第12号溝跡は南東側で止められており第3号溝跡との間に1mほどの間隔があく。第3号溝跡は南半分が現道の下に入っている。東側は第2区画の手前で止められている。



第17图 第15号测跡出土遺物(4)



第18図 第15号溝跡出土遺物(5)

区画内には掘立柱建物跡5棟、井戸跡2基の他、他の区画と同じような溝跡が検出されたが、他の区画との違いは土壌が極端に少ないことである。このことは、他の区画に土壌が作られた時期にはまだ建物などの構築物が残っていたことを意味すると考えられる。掘立柱建物跡には重複が見られることから第

9号溝跡と第12号溝跡との重複関係に対応するものと考えたい。特に第4号掘立柱建物跡はその柱穴配置から「堂」のような特殊な建物と考えられ、この区画に土壌がほとんどないという現象の有力な説明材料となる。第9号溝跡は調査区の南側で大きな攪乱によって壊されているが、この部分で折れを持



第19図 第16号溝跡出土遺物

ち第49号溝跡に続くと思われる。第12号溝跡との新旧関係が不明であるが、断面形は箱笥形を呈し幅、深さとも第1区画の溝跡と同程度であることや、折れの長さも10mほどで同規模であることから古いと考えたい。

第4区画は第1区画の西側にある。第1区画との間に幅約3mの帯状の空間がある。第40号溝跡で区画されるが、検出されたのは南東の角だけであり内容など詳しいことは不明である。第40号溝跡は第1区画の第17号溝跡と形態、規模ともに同様であり、遺物も同時期と考えられることから、同時期に存在した可能性が極めて高い。

前記2種類の区画溝とは別に、近世と考えられる溝跡がある。調査区の北側にある第30号溝跡と調査区中央部にある第15号溝跡である。

第15号溝跡は調査区中央を南北方向に延び、南側で第3号溝跡を切って現道下に続く。北側は第40号溝跡と合流するように見えるが、土層断面から、関係する全ての遺構より新しいことが判明している。覆土は明らかな暗褐色土でしまりが無い。根切り溝のような性格のものと考えられる。遺物は第40号溝跡と重複する部分からやや遡って出土したが、その殆どは第40号溝跡の遺物と考えられる。また、N-6グリッドの第109号土壌と重複する部分から天目碗の破片が出土したがこれも土壌に属する遺物と思われる。

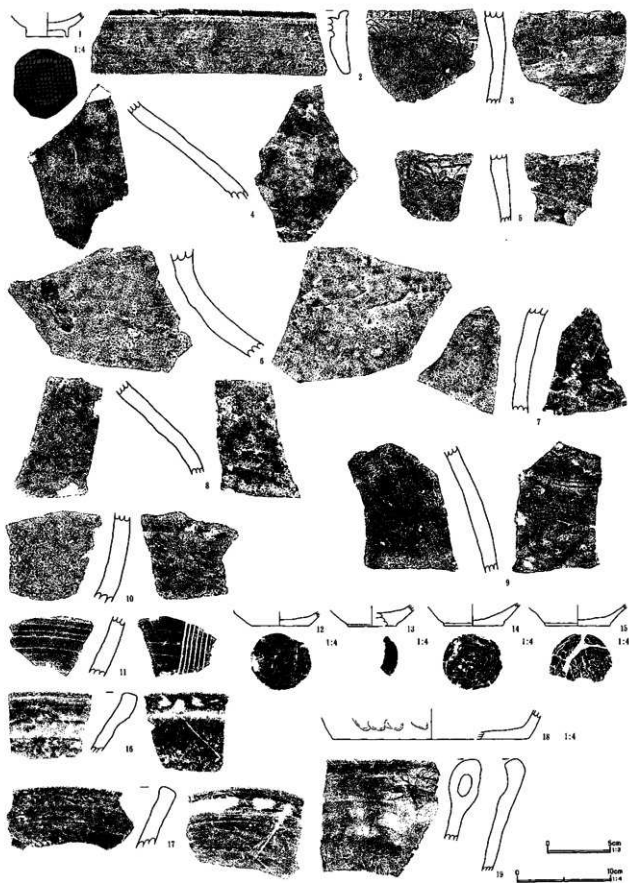
第30号溝跡は、土層断面より第31・32号溝跡より新しいことが判明している。遺物は極めて少ないが、焙烙や江戸近郊で焼かれたと思われる播磨などが出土している。ただし、この溝が掘削されたことで本遺跡に与えた影響は大きいと考えられる。第30号溝跡はR-2グリッド付近で緩やかにS字状に屈曲している。溝跡の東側は低く、西側は1m以

上高くなっている。調査当初はこの屈曲部に折れがあるものと予想していたが、調査が進むにしたがってそうではない事が判ってきた。結論から言えば、近世にこの溝を掘削した際にその東側と一緒に掘り下げてしまった（或いはその時点で既に低かった）のである。その様に考える理由は、館跡の区画溝である。第31・32号溝跡は重複関係にあり第32号溝跡は第31号溝跡の外側に拡張された掘と考えられる。とすれば堀の内側が低いのは防壁の上で極めて具合が悪いのである。その時点で仮に第31号溝も機能していたとすれば二重の堀になり、その間は土塁状に高いと考えたほうが防壁という機能を考える上では自然である。第32号溝跡が掘られた位置は、地形的に東に低くなる小さな谷の谷頭にあたる部分と考えられ、その境に堀を造るのは地形をうまく利用した構築方法といえる。その様に考えるなら、第30号溝跡は後世に僅かではあるが地形を改変したために、館跡の大事な機能である防壁という部分を見誤らせる惧れを招いたのである。

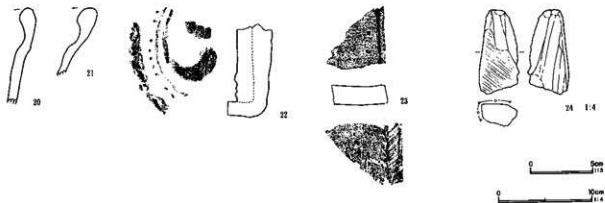
次に溝跡出土の遺物について記述する。

### 第3号溝跡出土遺物（第9図）

1は染付磁器で笹文様の小坏である。上層からの出土で混入である。2は折縁深皿である。内外面とも口縁部下で灰釉が掛かる。胎土は明灰色である。15世紀中頃から後半と思われる。3は瀬戸産播磨である。内外面に鉄釉が施され、胎土は黄白色である。4は丸瓦である。凸面は横方向のナデ、凹面は細かい布目痕が残る。色調は灰色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。6は平瓦である。凹面は縦方向の筧調整、凸面は斜格子の叩きか施される。色調は淡褐色で、胎土には砂粒を含む。2点とも焼成はあまり良くない。5は板碑の破片と思われるが両面とも砥石に転用されており、二次的に被熱している。



第20图 第17号清跡出土遺物(1)



第21図 第17号溝跡出土遺物(2)

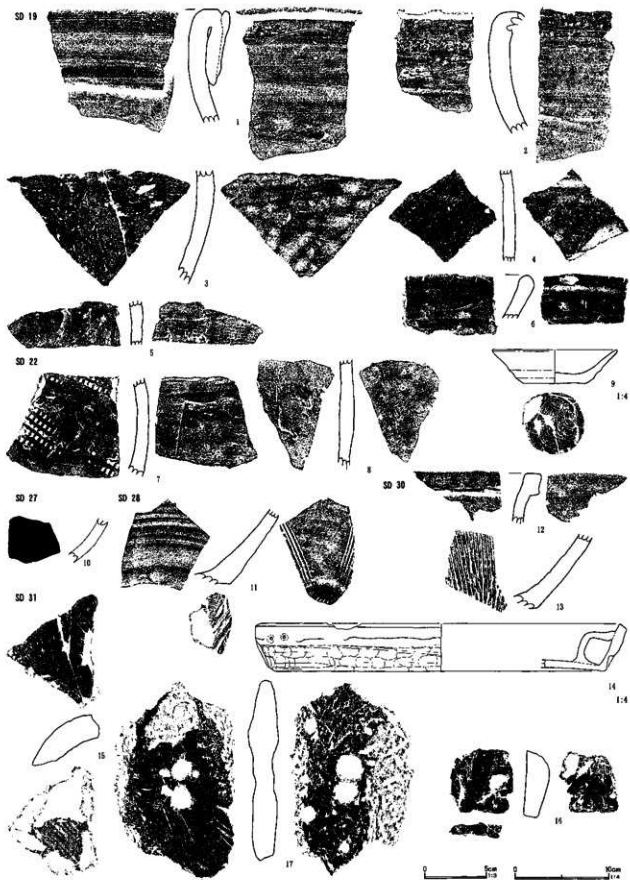
## 第12号溝跡出土遺物(第13図)

1から12までは常滑産甕である。1～3は口縁部で1・2は口縁部縁帯が欠失している。8は肩部で第10号溝跡から出土した破片と接合した。9は外面に篋書きが見られる。胎土は砂粒、礫を多く含む、僅かに発泡しているものもある。12は壺の底部と思われる。外面はかなり荒れているが縦方向に大きく篋ケズリした後、横方向に篋で調整している。内面は横方向のナデである。胎土は砂粒が多く、石英が目立つ。色調は橙褐色であるが焼成は非常に良い。壺は口縁部の資料から15世紀代と考えられる。13は在地産鉢の口縁部である。器表は荒れているが外面には指頭痕が残る残り横ナデしていると思われる。内面は荒れて判らないが横ナデであろう。断面には白い筋が見られることから、白色粘土を含む原料粘土を練ったものであることがわかる。胎土は砂粒と礫を含む。色調、焼成ともに12に良く似ていることから同一個体の可能性がある。

## 第15号溝跡出土遺物(第14～18図)

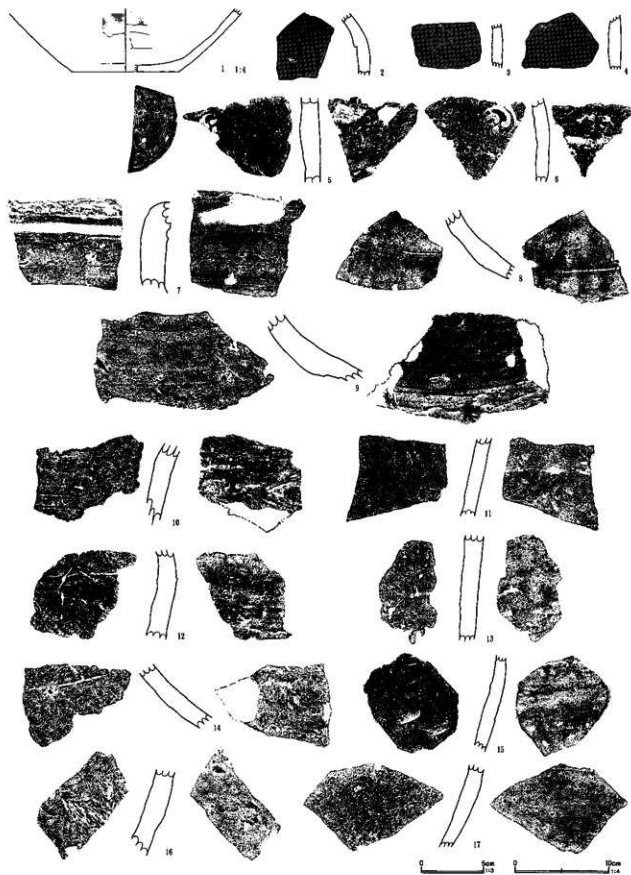
第15号溝跡は、前述のとおり館跡には伴わない新しい時期の溝と考えられるが、第40号溝跡と重複しており、その部分から多くの遺物が出土した。その多くは溝跡とは時期が合わないため、一部を除いて第40号溝跡の遺物と考えられる。第14図1は肥前系磁器の染付け碗である。山水文に鶴或いは鶯が描かれる。2は瀬戸産の皿である。外面は体部中ほどまで長石釉が掛けられ、内面は輪刷である。胎

土は黄白色でやや空隙がある。推定口径12.5cm、器高2.8cm、底径6.2cm。17世紀前半。3は折縁皿である。口縁部は灰釉が掛けられ、内面底部は鉄釉で蘭竹文が描かれる。推定口径13.2cm、器高2.6cm、推定底径6.9cm。胎土は黄白色で2より粗い。17世紀前半。4は瓶子の胴部破片であろうか。内外面とも灰釉が掛けられ細かい慣入が入る。破片では2本単位の沈線が2条廻る14世紀代のものであると思われる。5・6は唐津系皿。7・8は天目碗である。7は厚めの体部から口縁部は薄くなり口唇部は短く外反する。釉は薄く滑らかで光沢がある。8の口縁部は厚さを殆ど減ずることなく外反する。釉は茶褐色で光沢はない。胎土は7のほうがやや白く8より硬質である。9は底部の破片で全体の器形は知り得ないが、甕か壺であろう。壺ならば15世紀後半から16世紀前半頃の祖母壺壺のような可能性もある。外面は鉄釉が掛かる。胎土は砂と礫を僅かに含む。10～36までは壺である。10～14は口縁部で10の縁帯幅は4cmを測るが他は5cm程度あったと思われる。15世紀前半と思われる。15～20は降灰が見られ18・20・25～27は自然釉が付く。21・22は肩部。23・24・31・34は器厚が薄く小豆色の発色をせず灰色味を帯びる。23は小形の壺、24は壺の可能性がある。35は底部である。35は焼成が悪く橙褐色を呈する。36は底面の破片と思われ外面は一面に砂が付着する。内面は平滑なことから鉢の底部かもしれない。37・38は須恵器である。混入であろうが今回の調査では該

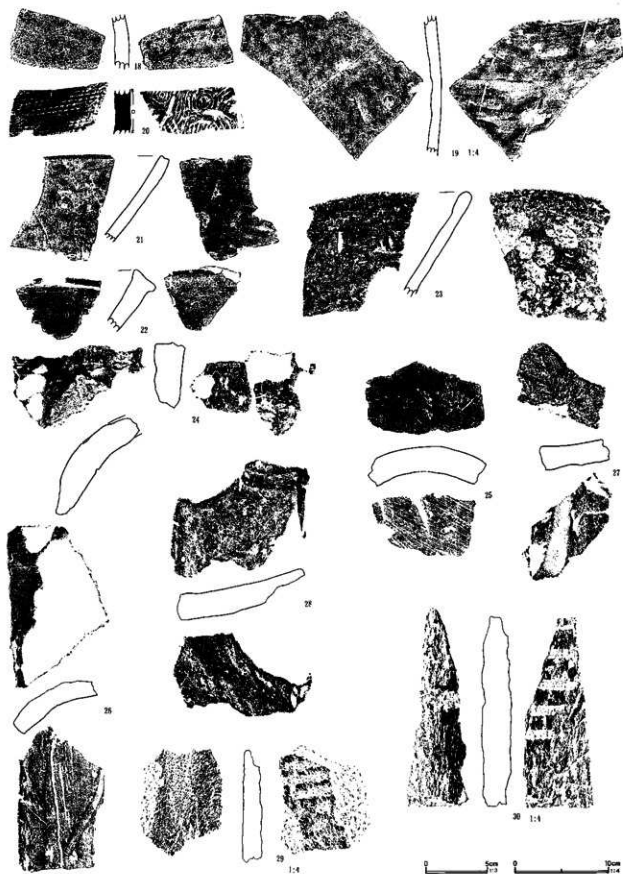


第22图 第19·22·27·28·30·31号清跡出土遺物

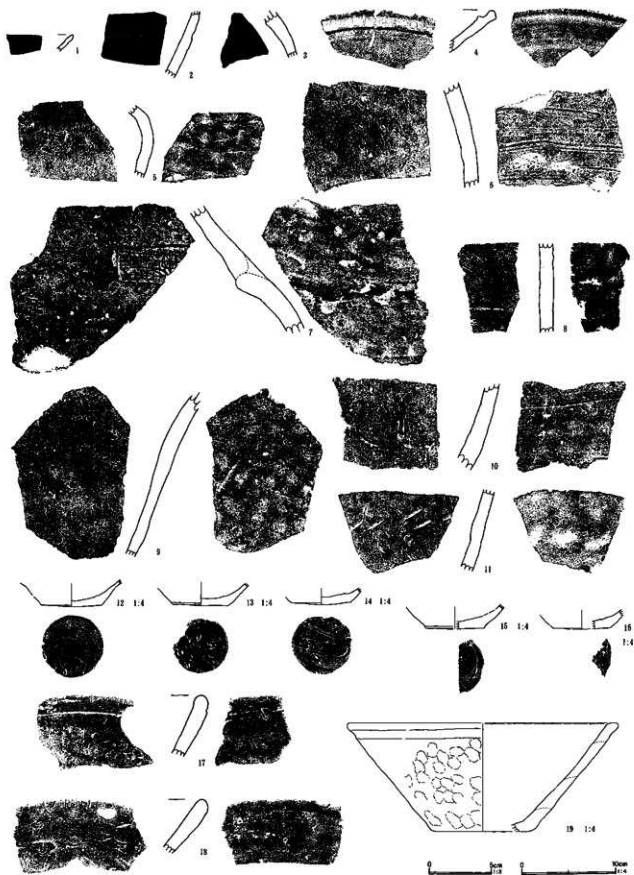




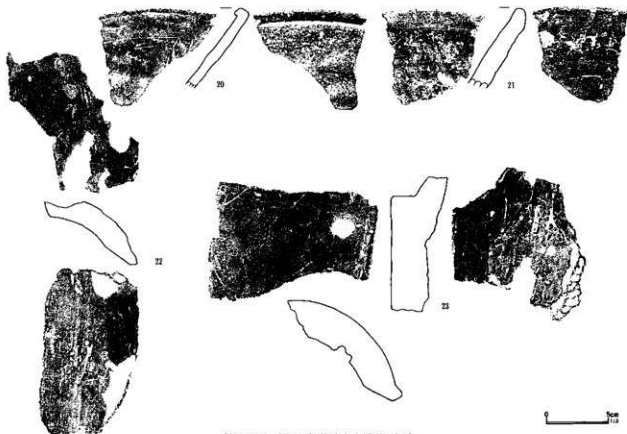
第23图 第32号溝跡出土遺物(1)



第24图 第32号洞跡出土遺物(2)



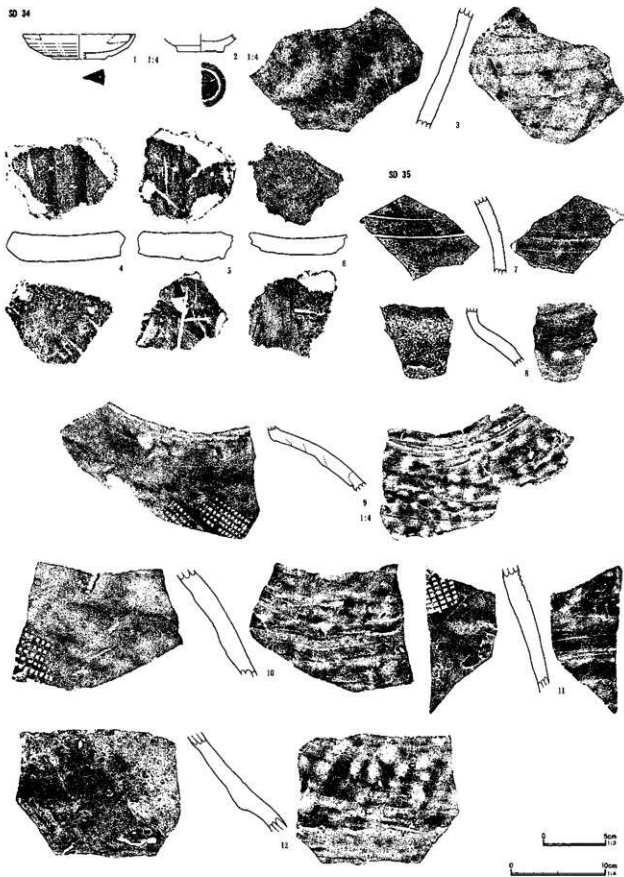
第25图 第33号清跡出土遺物(1)



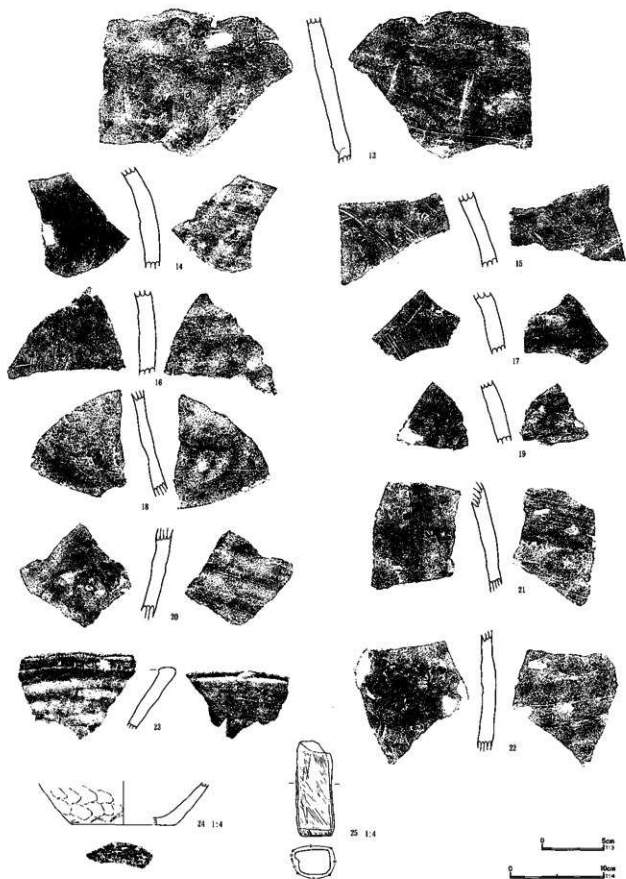
第26図 第33号溝跡出土遺物(2)

当する時期の遺構は検出されなかった。38・39は片口鉢である。口縁部は内外面に短く突出し、上面がやや窪む。体部外面は浅く指頭痕が残り、口縁部は横ナデされる。内面は平滑である。胎土は砂粒を含み、色調は小豆色で、焼成は良好である。15世紀前半と考える。41～45は摺鉢である。41は口縁部内面を横に強くなでて小さく内湾する。42は口縁部内側を肥厚させている。折り返しか粘土を足しているのかは断面を見て判断しかねる。内面のナデ幅は41より狭い。口縁部外面直下から内面には自然釉が薄く掛かり白っぽい。卸目はあまり深くないが胎土が良いため明瞭に刻まれる。5本1単位である。ともに胎土は砂粒を含み、焼成は極めて良好で、器厚は薄い。色調は41は橙褐色、42は明褐色を呈する。44は底部から体部にかけての破片であるが、42と同一個体と思われる。43は瀬戸産で、内外面に鉄釉が掛けられる。卸目は浅く15本1単位である。45は外面は指頭痕の上を軽く横ナデし、体部下端はケズリ状に調整する。胎土は砂粒、細礫

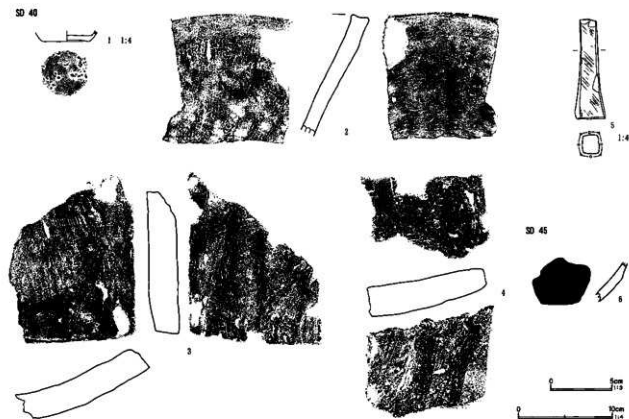
を多く含み色調は橙褐色を呈する。焼成は良好である。43以外は信楽の製品で17世紀後半から18世紀にかかると思われる。12・28・29・39・40・42は砥石に転用しており、主に割れ口を使用している。46～48は轆轤成形のかわらけである。46は口縁部に煤が付着しており灯明皿として使われたものである。口縁部約1/3の残存である。推定口径7.9cm、器高2.4cm、底径5.5cmである。47は内面底部中央が窪む。推定底径6.2cm。48は口縁部1/10の残存である。体部は斜めに立ちあがり口縁部下で肥厚する。推定口径12.8cm、器高4cm、推定底径7.2cmである。3点とも胎土に砂粒と赤色粒を多く含み、淡褐色を呈する。焼成は軟質である。49～55は瓦質の鉢である。49～52は口縁部。体部外面はいずれも指頭痕が浅く残るが、49は縦方向にナデ調整し50は斜め方向に、51では横方向である。52は器面が荒れて判らない。口縁部はいずれも内側に小さく返るが51・52は粘土痕が残り丁寧な調整とは言えない。50は丁寧な調整で纏められており、折り返していないか



第27图 第34·35号清跡出土遺物(1)



第28图 第35号清跡出土遺物(2)



第29図 第40・45号溝跡出土遺物

もしれない。胎土はいずれも砂粒を含み、49・50は礫が入る。49には白色針状物質が見られる。焼成は49は良好で硬質だが、番号の順に悪くなる。53・54は底部。55は火鉢の類と思われるが器種不明としておく。外面は型押しで山形の文様を施す。断面下端は平で底部が剥がれた状態を示す。断面上端は外側に角度を変える部分が僅かに残る。胎土は赤色粒を含み淡褐色である。内面は黒色を呈する。56～62は瓦。56は軒丸瓦で瓦当が剥落している。凸面は縦方向の篋調整、凹面は横方向のナデが施され、側面が中は幅広く篋調整される。側面は篋調整される。胎土は砂粒と角閃石を含み、色調は器表が黒灰色、内面は灰褐色を呈する。焼成は良くない。58は丸瓦で凹面に吊紐痕が残る。59は薄手の丸瓦で凸面は縦方向の篋調整、凹面は糸切痕に布目が残る。胎土には砂粒と礫を少量含み、灰色を呈する。焼成はきわめて良好である。60～62は平瓦である。凹面、凸面ともに縦方向に強めの篋調整がなされる。61は凹面に分割痕状の切目が入る。胎土はいずれ

も砂粒と礫を多く含み、淡褐色～淡灰色を呈する。焼成は良くない。63・64は石白破片である。石材は63は角閃石安山岩と思われ、64は閃緑岩である。65から69は砥石である。65は砂岩で被熱している。一面だけが使用されていることから置き砥石であろう。他は凝灰岩である。4はN-8グリッド、47・48はN-6グリッドから出土した。7・16・31・58は第109号土壌との重複部分から出土しており土壌に伴う可能性が高い。40は第16・41号溝跡の交差部から出土した。他は全てM-4・5グリッドの第40号溝跡との交差部から出土しており、重複関係から近世の遺物以外は第40号溝跡に伴う遺物と考えられる。

## 第16号溝跡出土遺物 (第19図)

1は平碗の体部下方向の破片である。内面には目跡が見られる。胎土は黄白色で空隙が多い。3は須恵器環底部である。周辺篋ケズリされ8世紀中頃のものと思われる。混入である。

#### 第17号溝跡出土遺物 (第20・21図)

1は肥前系染付碗である。18世紀のもので混入である。2～10は常滑産の甕である。2は口縁部の縁帯である。幅は5cmあるが頸部には密着していない。砂粒、礫を含み黒色の発泡が見られる。14世紀後半から15世紀前半。3・5には押印文が見られる。3の右側の押印文と5は同一である。6は自然軸が薄く掛かる。8は橙褐色で砂粒の含みがやや少ない。9は暗灰色を呈し外面上部は煤が付着する。11は摺鉢である。器表は暗赤色、胎土は橙褐色を呈し、白色の砂粒が目立つ。焼成は良好である。12～15は轆轤成形のかわらけである。14は底部内面が大きく窪む。胎土は赤色粒を含み13以外は白色針状物質が入る。12は底径6.1cm、13は推定底径5.2cm、14は底径6.3cm、15は底径6.8cmである。16～18は瓦質鉢である。胎土は砂粒、礫を多く含み、16には角閃石が多く含まれる。焼成は良くない。18は約1/5の残存で推定底径21.8cmである。19～21は内耳鍋である。19は胎土に砂粒、礫が多く角閃石が多量含まれ、片岩が僅かに見られる。21は砂粒、礫ともに少量含まれる。ともに焼成は良く硬質である。20は砂粒、礫を含み焼成は軟質である。22は軒丸瓦である。左巻きの巴文で界線を挟んで小さな珠文が廻る。胎土は砂粒、礫の他に赤色粒を含む。焼成はあまり良くない。23は平瓦である。凹面は横方向のナデ、凸面は縦方向のナデである。側面は糸(弓)切痕が残し、軽く筧調整される。胎土は砂粒に礫が少量混じる。色調は明灰色を呈する。焼成は還元炎焼成で良好である。24は砥石である。2面が平滑の砥がれているが、他面は縦方向の鑿痕が残る。石材は凝灰岩である。

#### 第19号溝跡出土遺物 (第22図)

1～5は常滑甕である。1と2は口縁部で同一個体である。口縁部の幅は最大6cmと広い。15世紀後半と思われる。3～5は胴部片。胎土はいずれも白色砂粒と礫を多量に含み、焼成は良好である。6は在地産鉢口縁部である。口唇部は丸く、僅かに内側に肥厚する。外面は指頭痕の上を櫛ナデ、内面は丁寧に横ナデする。一部に鼠の嚙跡が見られる。胎

土は砂粒及び赤色粒を僅かに含み、淡褐色を呈する。焼成は良い。

#### 第22号溝跡出土遺物 (第22図)

7は瀬美産の甕で、第35号溝跡出土遺物と同一個体である。胎土は白色砂粒を少量含み、色調は灰色を呈する。8は常滑産甕である。胎土に白色砂粒を多く含み、外面は小豆色を呈する。9は轆轤成形のかわらけである。体部は直線的に開き、底部は厚い。胎土は砂粒を含み、淡褐色を呈する。焼成は良くない。推定口径13.2cm、器高3.6cm、底径6.6cmである。

#### 第27号溝跡出土遺物 (第22図)

10は天目碗である。光沢のある黒味の強い釉で、胎土は白灰色を呈し、やや粗いが硬質である。

#### 第28号溝跡出土遺物 (第22図)

11は摺鉢。胎土は黒っぽい砂粒を多く含み、白色少礫を僅かに含む。硬質で器表は小豆色、胎土は橙褐色を呈する。焼成は非常に良い。

#### 第30号溝跡出土遺物 (第22図)

12は壺口縁部。胎土は砂粒を含み粗く、灰色を呈する16世紀代と思われる。13は摺鉢。白色砂粒を少量含み煉瓦色を呈する。14は焙烙。内耳は底面から立上り口縁部下に付く。約2/3の残存であるが体部に5個、底部に2個の補修孔があく。胎土は砂粒を少量含む。口径39.4cm、器高5cm、底径35cmである。

#### 第31号溝跡出土遺物 (第22図)

15・16は丸瓦である。凸面は横方向の筧調整、凹面は布目である。16は端部が薄く調整される。胎土は砂粒と礫を多く含み灰色を呈する。焼成は16は良好であるが15は良くない。17は片岩の礎石を砥石に転用したものである。

#### 第32号溝跡出土遺物 (第23・24図)

1は瀬戸深皿である。底部約1/4の残存である。体部下半まで灰軸が掛られ下端は軸が溜まる。胎土は僅かに砂粒を含み黄白色を呈し、焼成は良好である。15世紀中頃から後半と思われる。2～4は壺の胴部破片である。3片とも同一個体で、淡緑色の灰軸が掛り胎土は白灰色を呈する。14世紀。5～19は常滑甕である。5・6には巴文の押印が



施される。7は口縁部の縁帯が欠失している。15世紀代であろう。他は肩から胴部の破片である。17以外は暗褐色から小豆色を呈する。5・7は火の回りが悪かったためか発色が悪く橙褐色を呈する。20は須恵器で外面がやや擦れていることから転用砥石と思われる。21・22は鉢。21は白色砂粒を含み内面は黒灰色で外面はやや赤味を帯びる。焼成は良好である。22は砂粒と礫を含み、器表は小豆色、胎土は赤褐色を呈し、焼成は良好である。22は、15世紀後半と考えられ、21はそれより古いであろう。23は在地産鉢。砂粒、礫、片岩を含み、焼成は良い。24～26は丸瓦。24は玉縁が欠けており、器表も荒れている。砂粒、赤色粒を含み酸化炎焼成である。25は凸面縦方向ナデ、26は横方向である。凹面はいずれも布目で、26は側面側か幅広く篋調整される。白色砂粒、礫を含み、還元炎焼成である。29・30は板碑片。29は拓本下端に浅く彫ってあるが欠損していてわからない。

#### 第33号溝跡出土遺物 (第25・26図)

1は緑釉皿。灰釉が掛けられ胎土は明灰色を呈する。2は深皿と思われる。内外面灰釉が掛けられ胎土は1と同様である。いずれも15世紀後半。3は灰釉瓶。第32号溝出土のものと同一体と思われる。4は瀬戸瀧鉢。鉄釉で口縁部内面には絞線が作られ、口唇部は角張っている。15世紀後半。胎土は黄白色である。5～11は常滑甕。5は小型の甕か壺であろう。7は肩部で押印が見られる。6・11と同一個体と見られ暗灰褐色を呈する。12～16は轆轤成形のかわかけ。いずれも胎土に赤色粒と白色針状物質を含み、内面底部と体部の境にできる強い轆轤目が特徴である。12は底径6.4cm、13は6cm、14は6.3cm、15は推定6.2cm、16は同6cm。17～21は在地産鉢。17・18は口縁部が丸く19はやや平らである。20は内側に鋭く折り返しており、21は直立気味である。17・19は外面口縁下に1条の窪みが入る。20は白っぽい他は瓦質である。胎土はいずれも多量の砂粒と礫を含み、20は少なく17～19は片岩を含む。19は推定口径29.0cm、器高11.3cm、推

定底径10.2cm。22・23は丸瓦。凸面は横方向のナデ、凹面は布目で、23は吊紐痕がある。

#### 第34号溝跡出土遺物 (第27図)

1は灰釉の緑釉皿。胎土は明灰色で硬質。出土した同軸の中ではやや先行する時期と思われる。2は灰釉平碗。胎土は黄白色でやや硬質。15世紀後半。3は常滑甕胴部。4～6は平瓦。凹面はナデられ布目はない。凸面はナデである。4・5は擦られてはいないが鋭い刃物による低ぎ痕がある。6の痕跡はナデが強く入った篋痕。胎土は砂粒、礫を多量含み、4・5は酸化炎焼成、6は還元炎焼成である。

#### 第35号溝跡出土遺物 (第27・28図)

7・8は壺。7は沈線が2条入り茶色に発色する。胎土は灰色で、砂粒と黒色微細粒を含み一部発泡する。14が同一個体と思われる。また、在家遺跡A区第1号井戸跡出土遺物(第100図16)と接合した。15～16世紀の備前製品とおもわれる。8は自然釉が掛かり発泡する。胎土は砂粒を含み灰色を呈し、7と似ている。9～13・15～22は瀬美産甕。接合しないが同一個体である。9～11は格子目の押印があり、10は自然釉が掛かる。胎土は白色砂粒と少量の礫を含み、暗灰色を呈する。23・24は在地産鉢。23は口縁部が平で内側に僅かに突出する。いずれも胎土に砂粒と礫を多量含み片岩が入る。24は推定底径11cm。25は凝灰岩製の砥石である。

#### 第40号溝跡出土遺物 (第29図)

1は壺と思われる底部である。外面は一部に灰釉が垂れている。胎土は明灰色で硬質である。底径4.9cm。2は常滑産鉢。口縁部は角張って作られ内側寄りかやや窪む。胎土は砂粒を含み暗赤色から赤褐色をし硬質。14世紀代の製品と考えられる。3・4は平瓦。共に両面とも縦方向の篋調整が成され、3の凹面は端部に向かって薄く面取される。胎土は砂粒、礫を多く含み、雲母、片岩が入る。焼成は酸化炎である。

#### 第45号溝跡出土遺物 (第29図)

6は天目碗である。黒色で光沢のある釉が掛けられ、胎土は灰色で硬質である。

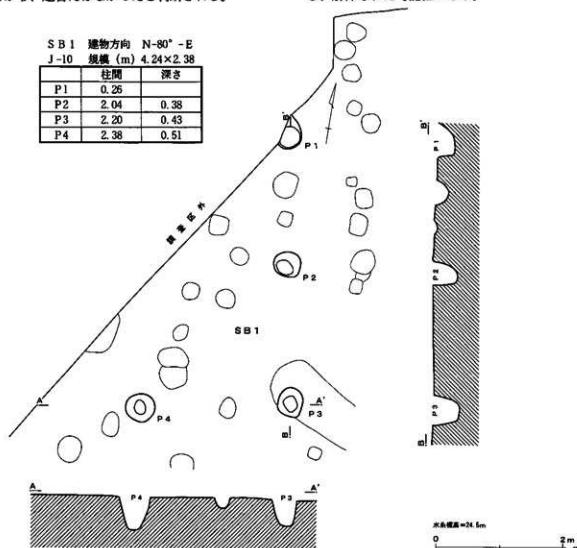
## b 掘立柱建物跡

### 第1号掘立柱建物跡 (第30図)

調査区の南西側、J-9・10グリッドで検出された。第160号土壌と重複する位置にあるが、柱穴との重複はなく新旧関係はわからない。約2m南に第2号掘立柱建物跡が方向をほぼ同じくして存在する。北側が調査区外にかかるため全貌は不明である。南北2間、東西1間分が検出されたが、少なくとも東西方向は西側の調査区外に更に延びると思われる。南北の柱間に比べ、東西方向の柱間が広いことから東西棟と考えられ、桁行2間以上、梁行2間の建物と考えておきたい。柱穴は円形で大きさや深さに大きな差はない。柱穴には重複した様子が見られないことから、建替えはなかったと判断される。

SB1 建物方向 N-80°-E  
J-10 規模 (m) 4.24×2.38

	柱間	深さ
P1	0.26	
P2	2.04	0.38
P3	2.20	0.43
P4	2.38	0.51



第30図 第1号掘立柱建物跡

遺物は、P1から常滑産変胴部の小片が出土したのみで図示できるものはない。

### 第2号掘立柱建物跡 (第31図)

調査区の南西側、J・K-10グリッドで検出された。重複する遺構はない。北側に第1号掘立柱建物跡がほぼ軸を同じくしてある。東西棟で桁行2間、梁行2間と考えておくが桁行北側と梁行東側は中の柱穴が検出されなかった。P1・P6間は狭いが梁行の線上にあるため、建物跡に伴うものと考えた。柱穴はP2のように円形を呈するものもあるが、方形を意識したものが多いように思われる。柱穴には抜き取り痕と思われる掘り込みが全てにあることから、解体された可能性がある。

遺物は、P5から内耳土器と思われる小片が1点出土しただけで図示できるものはない。

### 第3号掘立柱建物跡 (第32図)

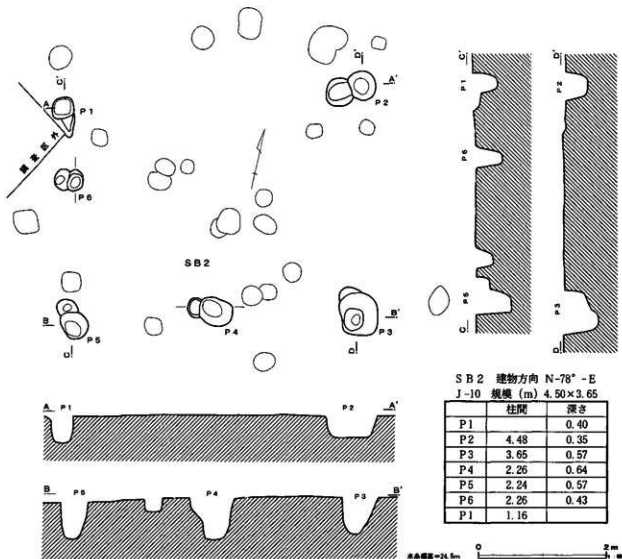
調査区の西側、K・L-8グリッドで検出された。重複する遺構はない。1mほど南側に第4号掘立柱建物跡があるが、軸方向が僅かに振れている。桁行2間、梁行1間の東西棟である。北西側が調査区際に僅かにかかるが、南側の桁方向で西側に柱穴が検出されないことから、桁行は2間と判断した。柱穴は円形で複数重複しているものがあることから最低1回は建替えがあったと思われる。

遺物は出土しなかった。

### 第4号掘立柱建物跡 (第33・34図)

調査区の西側、K・L-8・9グリッドで検出された。第5号掘立柱建物跡、第6・10・11号土塼と重複する。第10・11号土塼は本遺構より新しいものと思われる。北側に第3号掘立柱建物跡が1m余の間隔で隣接する。南北棟で桁行4間、梁行3間である。内部にも柱穴が検出されたが南側の1間分はなかった。柱間は南側の2間が狭く、北側が広く取ってあるが、柱穴配置からは南側に一定の空間を確保する事を意識していると考えられる。柱穴は隅丸方形を意識しているものが多いようである。一部の柱穴に抜き取り状の掘り込みが見られる。

遺物は、P2からかわらけ片1点、P3から、か



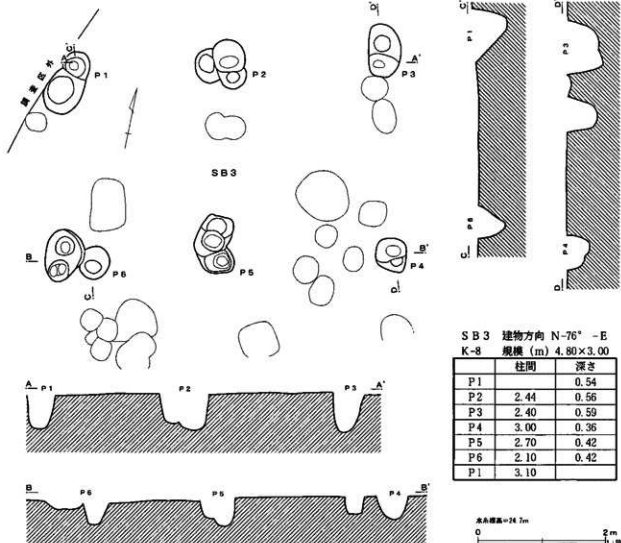
第31図 第2号掘立柱建物跡

わらけ細片3点、P4からかわらけ片4点、P5からかわらけ細片1点、銭貨1点、P12からかわらけ片2点、P14からかわらけ片1点、P16からかわらけ片3点と銭貨1点が出土した。第35図1～5は全て轆轤成形のかわらけ。3と4は小形の皿型で、他は碗形になると思われる。口縁部が遺存しているのは3だけで煤が付着していることから灯明皿に使われたものであろう。いずれも胎土に赤色粒を含み、比較的軟質である。2と5には白色針状物質が僅かに含まれる。色調は橙褐色から淡褐色を呈する。1はP2出土で推定底径5.6cm、2はP4出土で推定底径6cm、3はP12出土で推定口径7cm、器高1.7cm、推定底径3.8cm、4はP14出土で推定

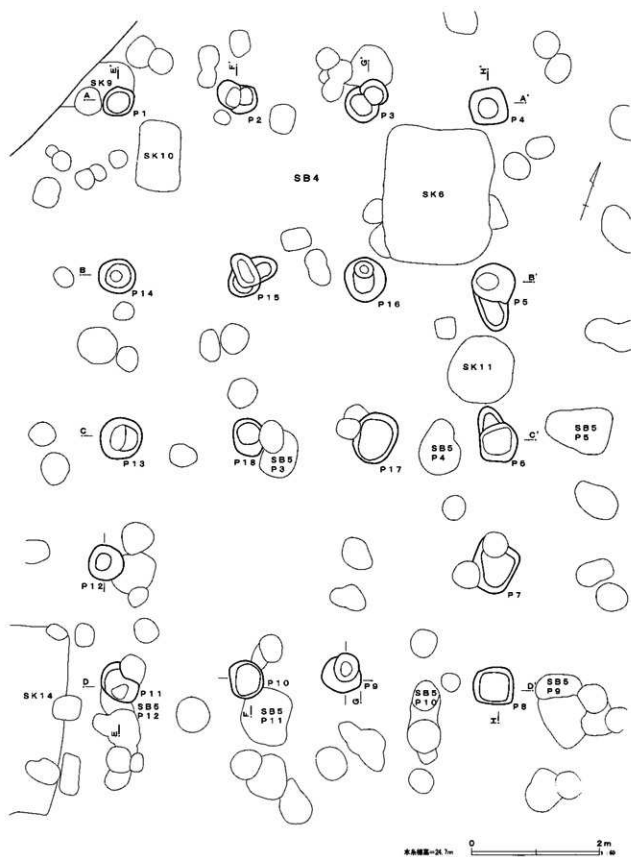
底径4.8cm、5はP16出土で推定底径5cmである。6はP5出土の大観通寶である。北宋銭で1107年初鑄。7はP16出土の洪武通寶。明銭。初鑄は1368年である。第6号土壇は建物の北東の1間分にほぼ取まる規模であり、遺物は常滑産の甕などが出土している。建物に伴うものかどうかは俄に判断できないが、建物の性格をどのように捉えるかによって変わってくるものと思われる。

#### 第5号獨立柱建物跡 (第36・37図)

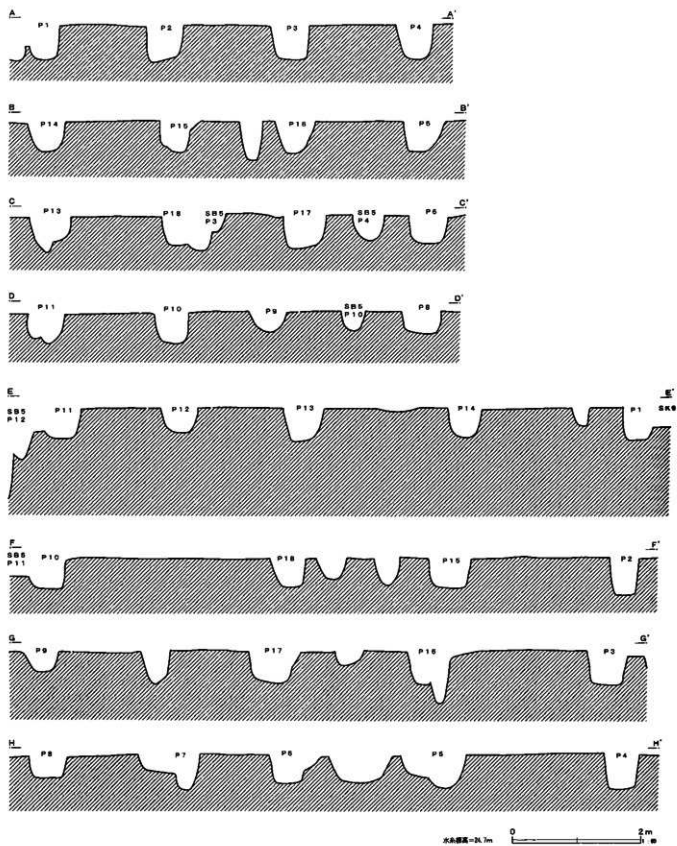
調査区の西側、K・L-8・9グリッドで検出された。第4号獨立柱建物跡、第14号土壇、第11号溝跡と重複し、第14号土壇より古いと思われるが、他の遺構との新旧関係はわからなかった。東西棟で



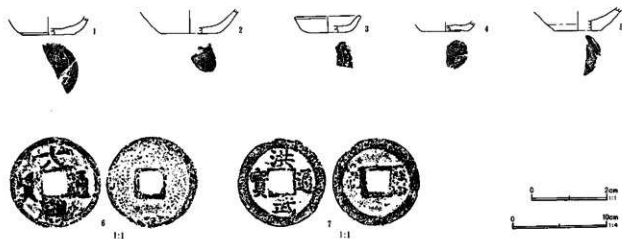
第32図 第3号獨立柱建物跡



第33图 第4号独立柱建物跡(1)



第34图 第4号独立柱建筑物(2)



第35図 第4号独立柱建物跡出土遺物

桁行5間、梁行2間である。西側は1.5m程で現道になるため更に建物が西に延びる可能性はあるが、P14を妻側の柱穴と考えて、この規模としておく。柱穴は規模にややばらつきがあり抜き取りも見られる。

遺物は、P5から陶器とかわらけの細片各1点、P6から常滑産壔片1点、P9から砥石1点が出土した。第38図1は常滑産壔の口縁部破片である。口縁帯が剥離している。折返し部分が密着していることから、16世紀代まで降ると思われる。胎土は粗く白色礫を多量含む。2は砥石。両端が欠失しているが4面とも使用している。石材は凝灰岩である。

#### 第6号独立柱建物跡 (第39図)

調査区北西側、O・P-1グリッドで検出された。第7・8号独立柱建物跡、第27号土壌、第34号溝跡と重複する。他の独立柱建物跡との新旧関係は不明であるが、後2者より古いと思われる。柱穴の並びで想定したが梁行の北側が検出できなかったことから柱穴列の可能性もある。東西方向に4間、南北方向に1間分を検出した。柱穴は隅丸方形で大きさ、深さとも揃っている。P2は第27号土壌の壁面で確認したものである。

遺物は出土しなかった。

#### 第7号独立柱建物跡 (第40図)

調査区の北側、O-1・2・P-1グリッドで検出された。位置的に第6・8号独立柱建物跡、第27・

28・168号土壌と重複するが新旧関係は不明。北西側は調査区外にかかるため、桁行の南側と梁行の東側を検出したが、桁行の北側は攪乱によって柱穴を検出できなかった。P1・P2間がやや広く開いているが、東西棟と思われ桁行3間以上、梁行2間以上と考えておく。検出された規模は、桁行は7.7m、梁行は2間と考えれば、P4-P5が2mであることから4m位であろうか。柱穴は円形基調のようであり、北側の柱穴に抜き取りが見られる。

遺物は出土しなかった。

#### 第8号独立柱建物跡 (第41図)

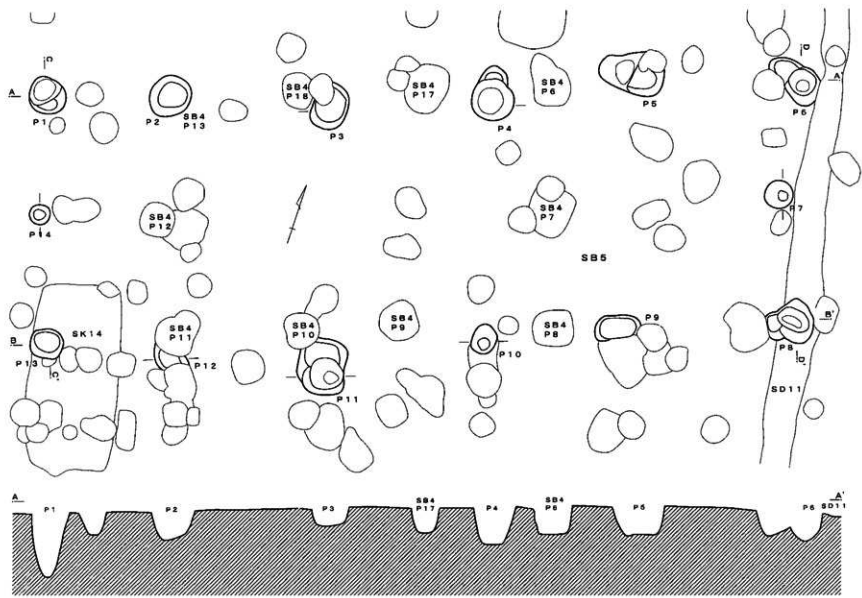
調査区の北側、O・P-1・2グリッドで検出された。第6・7号独立柱建物跡、第26・27・28・168号土壌と重複する。土壌より古いと考えられるが他との新旧関係は不明である。北西側が調査区外にかかる。東西棟と考えれば桁行3間、梁行2間分を検出したことになるが、調査区外に更に延びる可能性は低いように思われる。柱穴は円形基調と思われ、比較的小さい。

遺物は出土しなかった。

#### 第9号独立柱建物跡 (第42図)

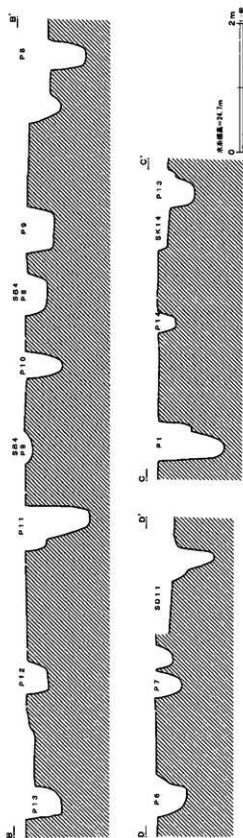
調査区の北側、Q・R-4グリッドで検出された。重複する遺構はない。溝で囲まれた北側の区画の南東寄りにあり西側の土壌が幾つかあるものの東と南側には目立った遺構はない。東西棟で桁行2間、梁行2間である。柱穴は方形で30cm前後と小さめで

第36图 第5号直立柱建筑物(1)

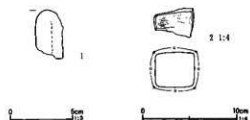


0 2m  
 本图比例=1:4.7m





第37図 第5号掘立柱建物跡(2)



第38図 第5号掘立柱建物跡出土遺物

S B 5 建物方向 N-71°-E  
K-9 規模 (m) 11.90×4.05

	柱間	深さ
P1		0.84
P2	2.00	0.55
P3	2.50	0.30
P4	2.55	0.59
P5	2.55	0.54
P6	2.65	0.48
P7	1.75	0.43
P8	2.00	0.87
P9	2.75	0.42
P10	2.20	0.56
P11	2.55	1.01
P12	2.45	0.35
P13	1.95	0.55
P14	2.05	0.27
P1	2.00	

ある。深さはほぼ揃っているが、P2は調査の際に底を掘り抜いた可能性がある。

遺物は出土しなかった。

#### 第10号掘立柱建物跡 (第44図)

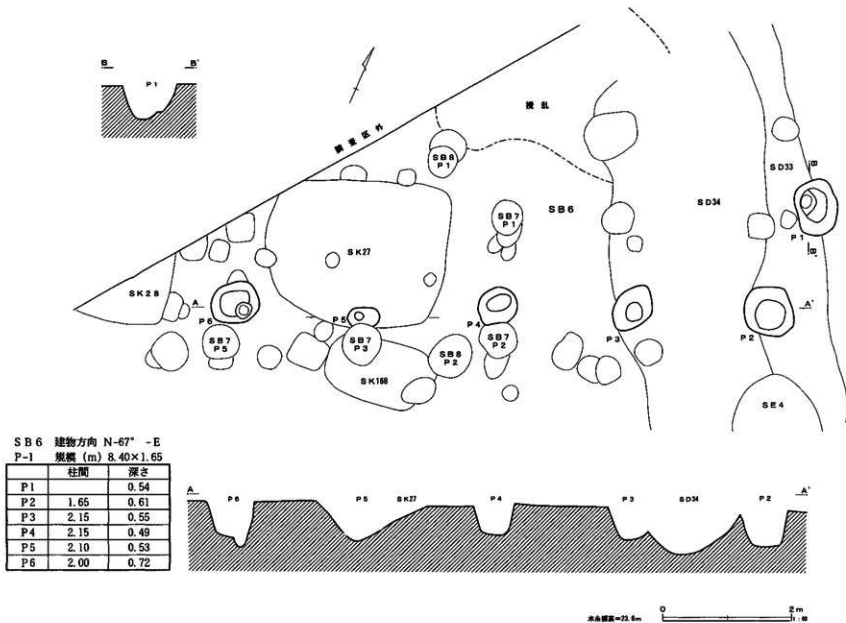
調査区の北側、O・P-4グリッドで検出された。第12号掘立柱建物跡、第7号井戸跡、第87・91号土壌と重複する。土壌より古く、P5・P6は第7号井戸跡の壁面で確認されたことから井戸よりも古い。東西棟で桁行3間、梁行2間である。北側に庇か縁が付くものと考えられる。柱穴は隅丸方形で大きさは40cm前後である。抜き取り痕は見られなかったが第12号掘立柱建物跡と位置や方向が一致する事から建替えの可能性は考えられる。

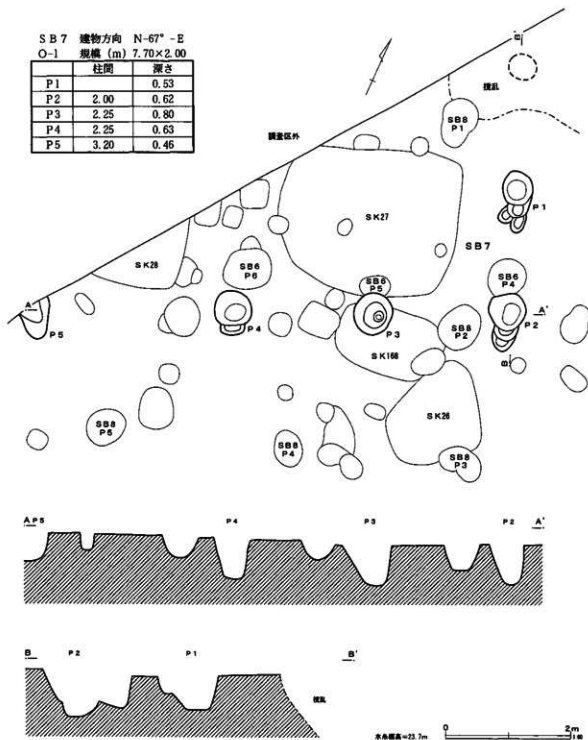
遺物は出土しなかった。

#### 第11号掘立柱建物跡 (第45図)

調査区の東側、Q-8・9・R-8グリッドで検出された。第21・23号溝跡、第114・117・139・140号土壌と重複し、一番古い。東側は調査区外にかかるため全体の規模は不明である。東西棟で桁行の北側3間、南側1間分の検出に留まった。梁行は

第39図 第6号窟立住跡跡画





第40図 第7号掘立柱建物跡

2間である。柱穴は方形で、桁側のもは大きさが70cm前後あり、検出された建物の中では大型である。建物の中、南寄りに焼土を検出した。建物に関連する可能性もある。

遺物は、P 9から鉢の口縁部片が1点出土した。第43図1は外面は口縁部を横方向になるのほかは

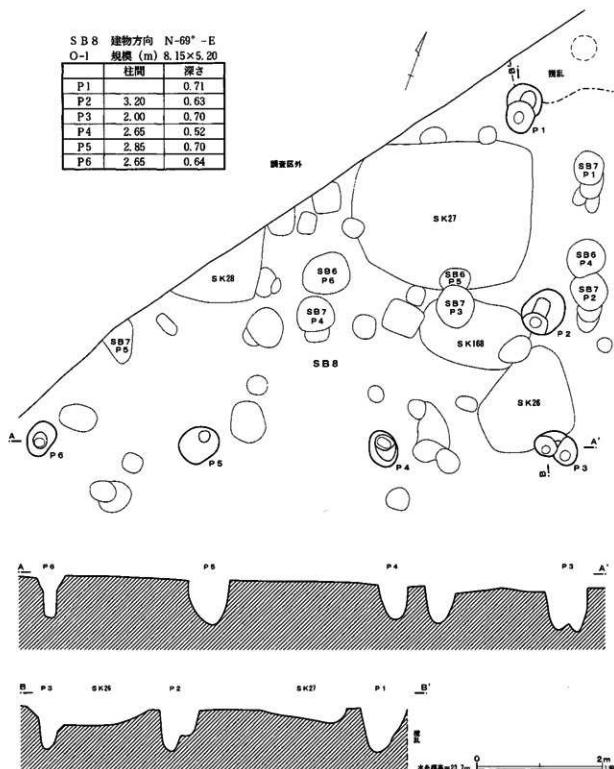
指頭痕を軽くなる程度である。口唇部は狭く平坦に作られる。胎土は砂粒を多量に含み、色調は暗褐色。割れ口は赤褐色で妬器質である。

#### 第12号掘立柱建物跡 (第46図)

調査区の北側、O・P-4グリッドで検出された。第10号掘立柱建物跡、第7号井戸跡と重複する。

SB8 建物方向 N-69°-E  
 O-1 規模 (m) 8.15×5.20

	柱間	深さ
P1		0.71
P2	3.20	0.63
P3	2.00	0.70
P4	2.65	0.52
P5	2.85	0.70
P6	2.65	0.64

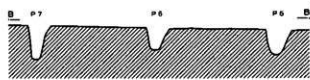
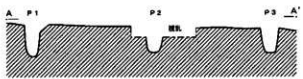
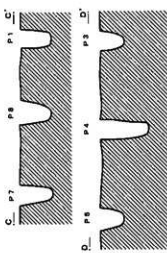
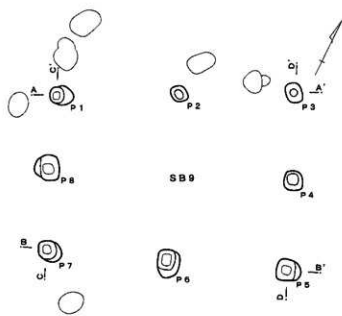


第41図 第8号掘立柱建物跡

第10号掘立柱建物跡との新旧関係は不明であるが、柱穴の多くが重複する事からどちらかが建替えられたものと考えておきたい。東西棟で桁行3間、梁行

2間である。柱穴の大きさは40cm前後で、第10号掘立柱建物跡のものと同規模である。

遺物は出土しなかった。

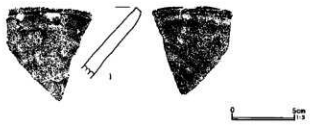


SB9 建物方向 N-65° - E  
Q-4 規模 (m) 3.80×2.80

	柱間	深さ
P1		0.49
P2	1.95	0.23
P3	1.85	0.37
P4	1.35	0.76
P5	1.45	0.38
P6	1.90	0.30
P7	1.90	0.60
P8	1.25	0.53
P1	1.15	

▲▲柱高=24.2m 0 2m

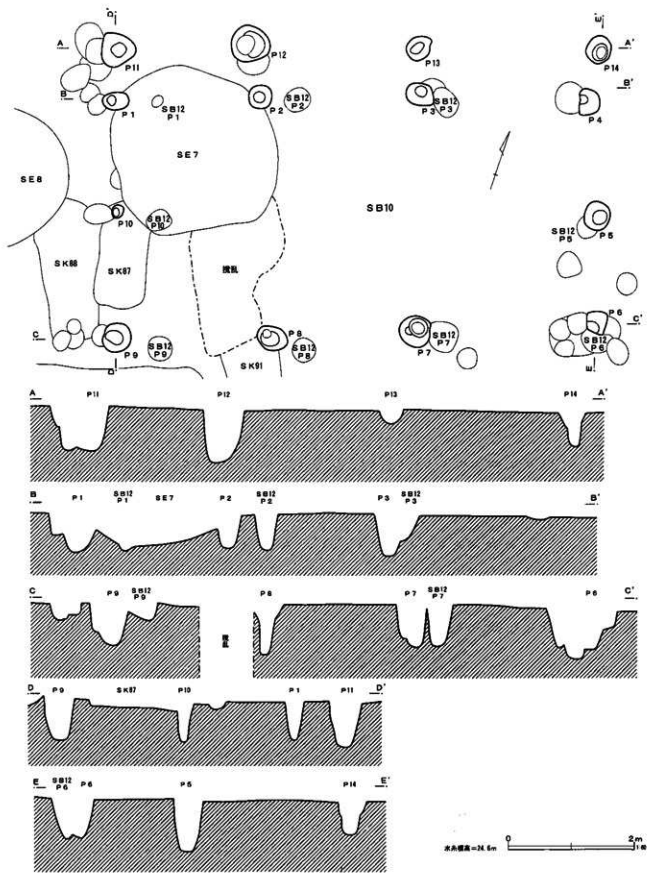
第42図 第9号掘立柱建物跡



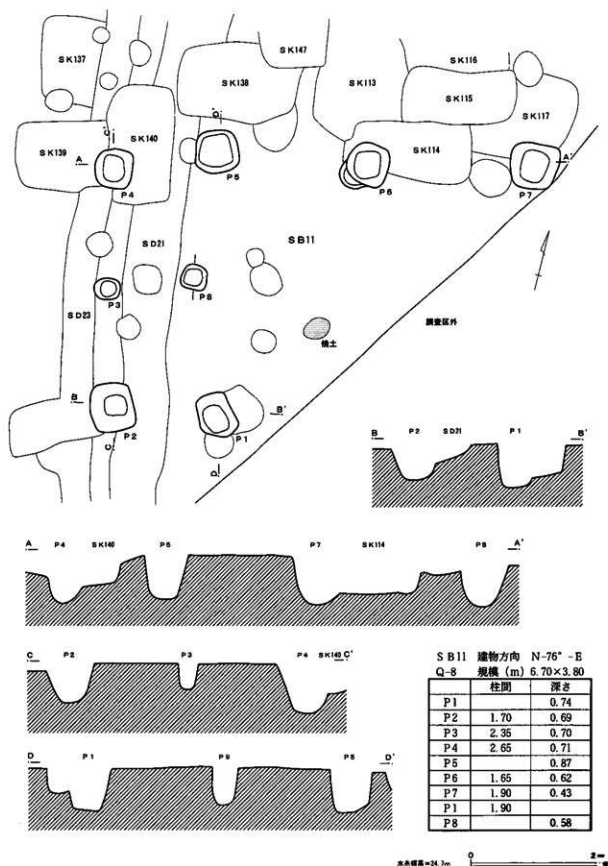
第43図 第11号掘立柱建物跡出土遺物

SB10 建物方向 N-71° - E  
P-4 規模 (m) 7.70×3.40

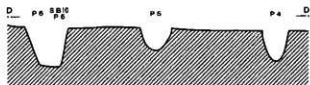
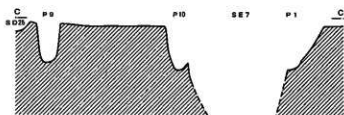
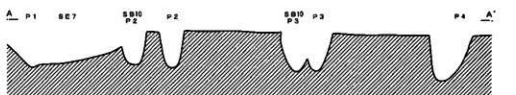
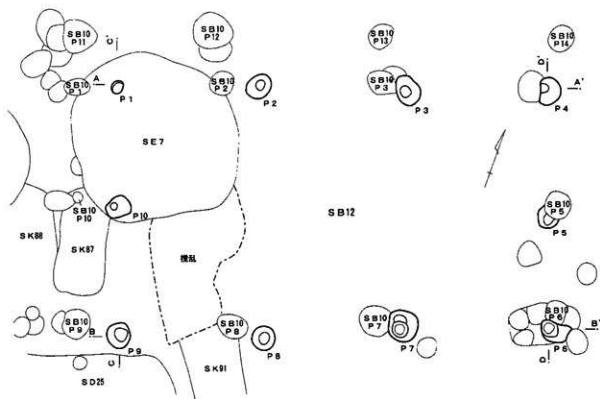
	柱間	深さ
P1		0.67
P2	2.35	0.49
P3	2.60	0.67
P4	2.80	
P5	1.85	0.81
P6	1.75	0.61
P7	2.80	0.67
P8	2.45	0.76
P9	2.45	0.68
P10	2.00	0.49
P1	1.76	
P11	0.76	0.71
P12	2.15	0.82
P13	2.62	0.20
P14	2.88	0.50
P4	0.81	



第44图 第10号矗立柱建物跡

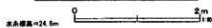


第45図 第11号掘立柱建物跡



SB12 建物方向 N-70°-E  
P-4 規模 (m) 6.90×3.80

	柱間	深さ
P1	0.62	
P2	2.40	0.78
P3	2.20	0.84
P4	2.30	0.60
P5	2.05	0.68
P6	1.90	0.62
P7	2.30	0.54
P8	2.30	0.60
P9	2.25	0.60
P10	2.00	0.33
P11	1.80	



第46図 第12号掘立柱建物跡

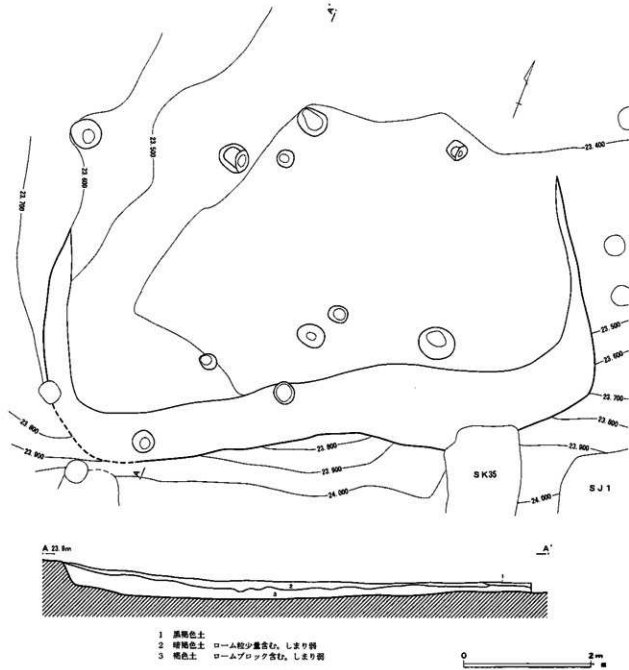


## c 平場

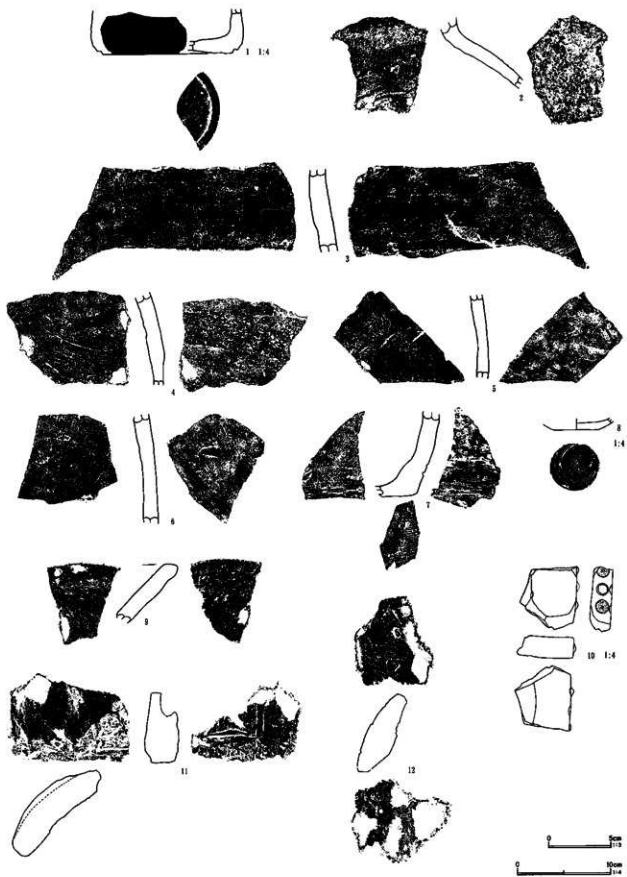
調査区の北側O・P-2・3グリッドで検出された。第35号土壌と重複するが新旧関係は不明である。検出当初は周辺に暗褐色土が広がりプランが判り難かったため、ベルトを設定して掘り下げたところ、切り土して平面を造り出したと思われる遺構が検出された。周辺の微地形は北に向かって緩やかに下がる傾斜面であるためその部分に平場を造ったものと考えられる。規模は東西8.8mで、南北は4mであ

る。面積は約35㎡である。平地面からはピットが数基検出されたが建物などの施設に関連するものとは考えられなかった。

遺物は覆土中から常滑産瓦、在地産鉢、瓦などが散漫な出方をした。第48図1は瀬戸系の陶器で瓶かと思われる底部破片。高台部は低く削り出され高台内は糸切痕が残る。外面は胴部下を除いて灰釉が施される。胎土は砂粒を僅かに含み、色調は黄白色



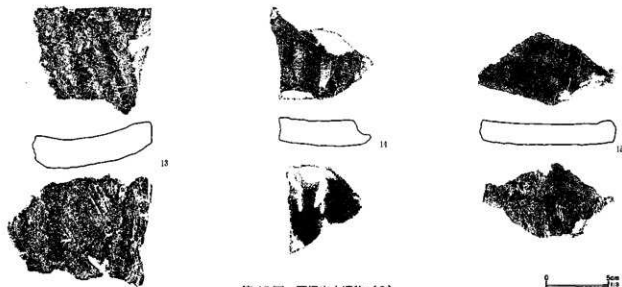
第47図 平場



第48图 平場出土遺物(1)

である。14世紀前半と思われる。2～6は常滑産壺である。7は妬器質の鉢底部。器表は暗赤色で器壁は煉瓦色を呈する。砂粒を多く含み、焼成は良好。8は陶器皿。無軸である。黄白色を呈し、瀬戸産と思われる。内面が極めて平滑で硯などに転用されたと思われる。底径4.9cm。9は在地産鉢口縁部。10

は蓋と思われる。端面に円錐形の粘土が貼りつけられる。在地産と思われる。11・12は丸瓦。凸面は縦方向の篋ケズリ。凹面は11は縦方向の篋調整、12は布目が残る。第49図は平瓦。13以外は酸化炭焼成される。13～15は平瓦で、いずれも凸はナデ調整される。



第49図 平場出土遺物(2)

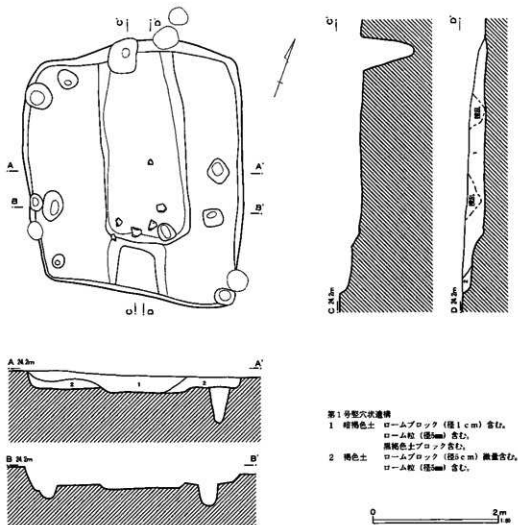
#### d 竪穴状遺構

##### 第1号竪穴状遺構(第50図)

調査区の北側、P-2・3グリッドで検出された。重複する遺構はない。北側に第5・6号井戸跡があり、井戸跡の西側には平場がそれぞれ1mの至近距離にある。西から南側にかけては土壌が密集して掘りこまれている。これらの遺構は本遺構と近接しすぎており、同時に存在した可能性は低いと考えられる。地下式墳とするには深さが足りず「地下式」には成り得ないため竪穴状遺構とした。遺構の形態は隅丸長方形であるが、東辺が西辺より長くやや歪んでいる。遺構の北側は削られて低くなっているため北壁の残りは良くない。覆土はローム粒・ロームブロックを含む褐色土が主体で埋め戻された可能性がある。壁はほぼ垂直に掘り込まれていたと考えられ、床面は南壁に接する中央部が70×90cmの範囲で掘り残され階段状を呈していた。入り口と考えられる。入り口部の段裾から北壁まで幅1.35m、長さ

3mにわたって土壌状の掘り込みが検出された。深さは10cmほどで底面は平坦である。貼床された様子もなく覆土も遺構に埋積したものと変わらないことから、始めから掘り下げられた状態であったと考えられる。また、周囲にある長方形の土壌が重複したものでないことは確かである。床面は平坦でピットが数基検出された。柱穴になるものもあると思われる。角にあるものや北壁中央にあるものが可能性が考えられるが断定はできない。

遺物は、入り口部と思われる段に近い床面から丸瓦片3点、平瓦片2点の他縄文土器片1点、在地産鉢片1点、壺と思われる細片1点、銅製品1点が出土した。丸瓦3点は接合した。縄文土器は混入である。第51図1は丸瓦である。凸面は横方向になでられる。2本の棒状の痕跡は瓦を乾燥させる際に立掛けたものである。一部に布目痕が見られるが、この布目は横方向のナデ痕に被っており、何らかの理



第1号壑穴状遺構

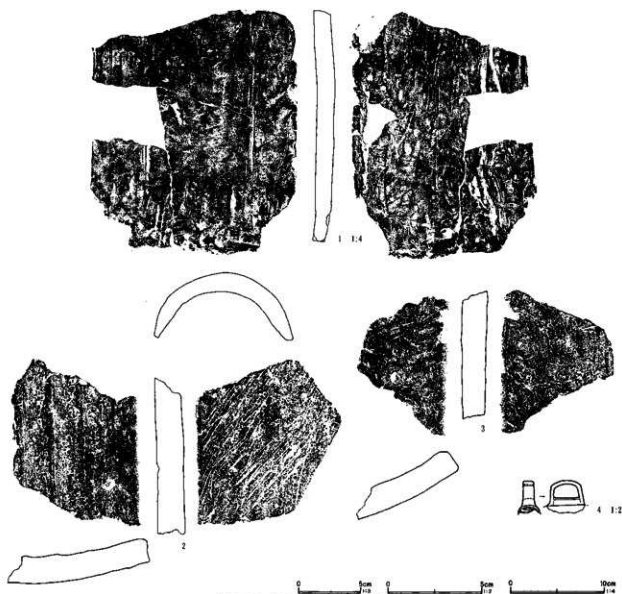
- 1 暗褐色土 ロームブロック（厚1cm）含む、ローム粒（径5mm）含む、黒褐色土ブロック含む。
- 2 褐色土 ロームブロック（厚5cm）混在含む、ローム粒（径5mm）含む。

0 2m

第50図 第1号壑穴状遺構

由で後からついたものと考えられる。凹面は布目痕が残り一部縦方向になでられる。両側は2~3cm幅で篋ケズリされる。端面側は4cm幅で篋ケズリされ、厚みが半分程に調整される。側面は凹面側が篋ケズリされる分だけ薄く、簡単な篋調整である。端面は乾燥の際、下にして立てられたと思われる角は丸みを帯びて全体に凸面側に歪んでいる。胎土は砂粒と礫を多く含み、色調は灰色を呈する。焼成は還元炎焼成で良好である。2・3は平瓦。2は凹面に

模骨状の痕跡が顕著に残る。凸面は砥石代わりに転用されている。側面は軽く篋調整される。3は表面が荒れているが凸面は縦方向になでられる。側面は篋調整される。胎土は砂粒と礫を含み丸瓦に比べ軽い。色調は淡褐色を呈し、酸化炎焼成される。4は太刀の足金物である。鋼製で、残存する高さは1.7cm、幅2.0cmである。帯袂を通す孔は高さ0.7cm、幅1.3cmの薄鋸形を呈する。鞘に巻く部分はほとんど失われ、破片が内側に折れ曲がっている。



第51図 第1号竪穴状遺構出土遺物

## e 井戸跡

## 第1号井戸跡 (第52図)

調査区の南西側、K-11グリッドで検出された。重複する遺構はないが東側は現道下にかかる。平面形は円形で、直径が1.82mである。断面は漏斗状になり最小径は1.00mである。深さは1.7mまで掘り下げたが底面は検出していない。

遺物は、出土しなかった。

## 第2号井戸跡 (第52図)

調査区の西側、L-8グリッドで検出された。第12号溝跡と重複するが新旧関係はわからなかった。平面形は円形で、直径が1.06mである。深さは0.6m

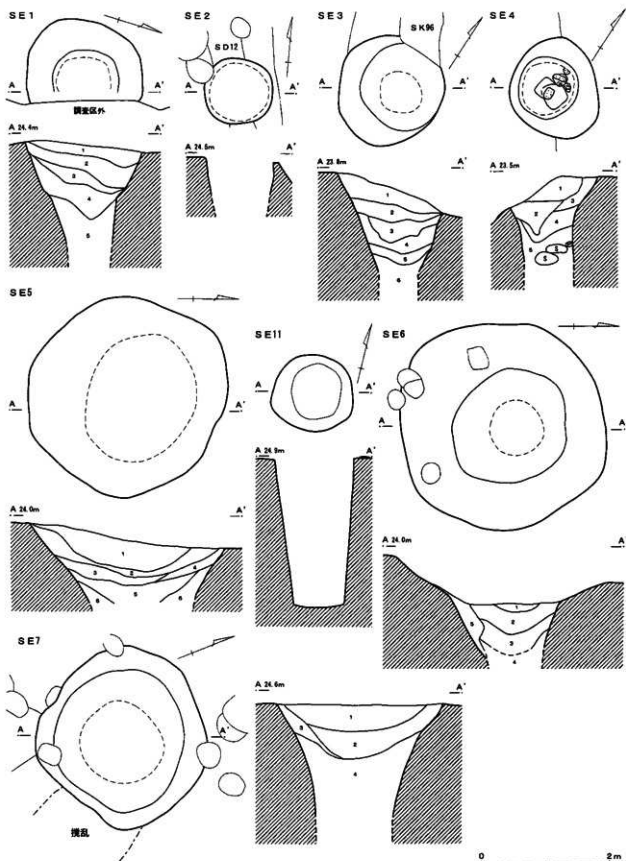
掘り下げたが底面は検出していない。

遺物は、出土しなかった。

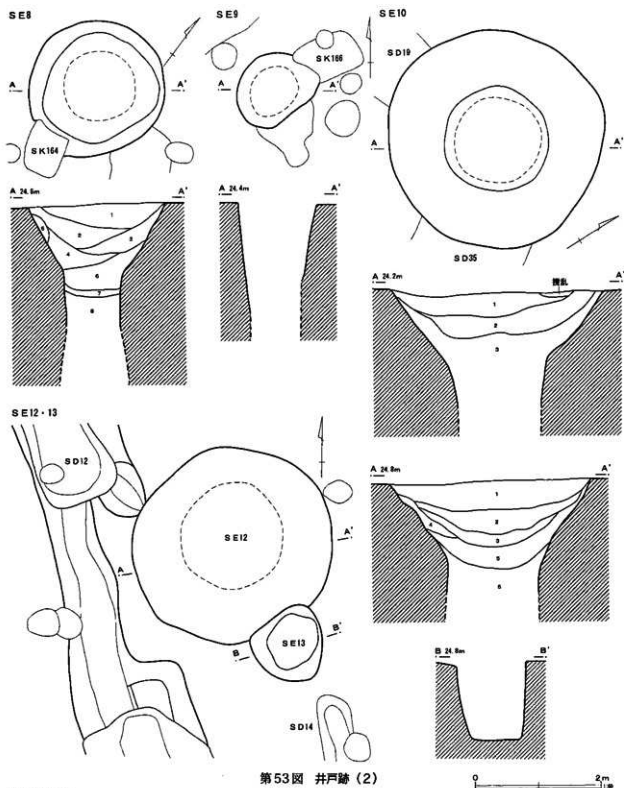
## 第3号井戸跡 (第52図)

調査区の北側、Q-3・R-3グリッドで検出された。斜面部分にあり第96号土壇と重複するが新旧関係は不明である。平面形は円形で、直径が1.68mである。深さは1.5mまで掘り下げたが湧水のため断念した。断面は漏斗状を呈しておりまだ深そうである。

遺物は、平瓦が2点出土した。第54図1・2は凹面凸面とも縦方向にへら状工具で調整している。



第52图 井戸跡(1)



第53図 井戸跡 (2)

井戸跡計測値

番号	グリッド	検出面径	底径	最小径	深さ
1	K-11	1.82	-	1.00	(1.70)
2	L-8	1.06	-	-	(0.40)
3	Q-R-3	1.68	-	-	(1.50)
4	P-1	1.38	-	-	(1.36)
5	P-Q-2	3.08	-	-	(1.16)
6	P-2	3.24	-	-	(1.52)
7	O-P-4	2.68	-	-	(1.88)

番号	グリッド	検出面径	底径	最小径	深さ
8	O-4	2.14	-	0.96	(1.81)
9	Q-4	1.26	-	-	(1.28)
10	R-7	3.36	-	1.52	(1.82)
11	P-8	1.26	0.80	-	2.36
12	M-N-8	3.16	-	1.42	(1.82)
13	N-8	1.10	0.80	-	1.22

## 井戸跡土層註記

### 第1号井戸跡

- 1 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒、炭化物微量含む。
- 2 褐色土 ロームブロック多量、ローム粒、炭化物微量、黒褐色上ブロック含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック微量、ローム粒多量、炭化物微量、黄褐色粘質土含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒、炭化物微量、黄褐色粘質土、黒褐色上ブロック含む。
- 5 黄褐色土 凝結土、土層4層に比してやわらかい。

### 第4号井戸跡

- 1 暗褐色土 ローム粒微量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒微量含む。
- 3 褐色土 ローム粒含む、4層より若い。
- 4 褐色土 ロームブロック多量、ローム粒大量に含む、3・5層より若い。
- 5 褐色土 ロームブロック、ローム粒、暗褐色ブロック含む。

### 第6号井戸跡

- 1 暗褐色土 黒褐色土ブロック含む。
- 2 褐色土 ロームブロック、ローム粒多量含む。
- 3 黄褐色土 ロームブロック、ローム粒大量に含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロック微量、ローム粒含む。

### 第7号井戸跡

- 1 暗褐色土 ローム粒多量、炭化物少量
- 2 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量、炭化物少量、粘土粒子少量
- 3 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロック(2~5cm大)多量
- 4 褐色土 ロームブロック・ソフトローム密に多量で黒色土が帯状に薄く、間に入る

### 第10号井戸跡

- 1 褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック少量含む。
- 3 黄褐色土 ローム粒、ロームブロック大量に含む。

凹面は模骨状の痕跡が残る。側面もへら調整される。端面は横方向を基本としながらも、不定方向のナデ状の痕跡が見られる。胎土は砂粒を多量含み、色調は2は淡灰色、3は橙灰色を呈する。焼成は普通である。

### 第4号井戸跡 (第52図)

調査区の北側、P-1グリッドで検出された。第34号溝跡と重複するが新旧関係は不明。平面形はやや歪んでいるが円形である。直径が1.38m、深さは1.36mまで掘り下げたが湧水のため断念した。断面は漏斗状を呈しており、最小径は0.78mである。

遺物は、1mほどのところから礫が投げ込まれたような状態で出土した。第54図3は石臼である。

### 第3号井戸跡

- 1 暗褐色土 ローム粒微量含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック微量、ローム粒少量含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック微量、ローム粒、黒褐色土ブロック含む。
- 4 褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量ふくむ、やわらかい。
- 5 黒褐色土 ローム粒少量含む。
- 6 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒多量含む、やわらかい。

### 第5号井戸跡

- 1 暗褐色土 ロームブロック微量、ローム粒含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック一部含む、ローム粒、褐色土ブロック含む。
- 3 黒褐色土 ロームブロック微量、ローム粒含む。
- 4 黄褐色土 ロームブロック少量、ローム粒大量に含む。
- 5 黒褐色土 ロームブロック多量、ローム粒多量含む。
- 6 褐色土 ロームブロック、ローム粒多量含む。

### 第8号井戸跡

- 1 暗褐色土 (ローム粒) 多量、ロームブロック微量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒多量含む、遺物埋入
- 3 褐色土 ソフトローム多量に埋入
- 4 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロック多量に含む。
- 5 褐色土 ロームブロック
- 6 褐色土 ロームブロック・ソフトローム密に多量含む。(埋め土)
- 7 黒色土 (埋め土)
- 8 褐色土 ロームブロック・ソフトローム密に多量含む。(埋め土)

### 第12号井戸跡

- 1 暗褐色土 ローム粒微量、礫少量含む。
- 2 黄褐色土 ロームブロック少量、ローム粒少量、炭化物少量含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒少量、炭化物少量含む。
- 4 褐色土 ローム粒少量含む。
- 5 黄褐色土 ロームブロック少量、ローム粒少量、炭化物微量含む。
- 6 褐色土 ロームブロック少量、ローム粒少量含む。

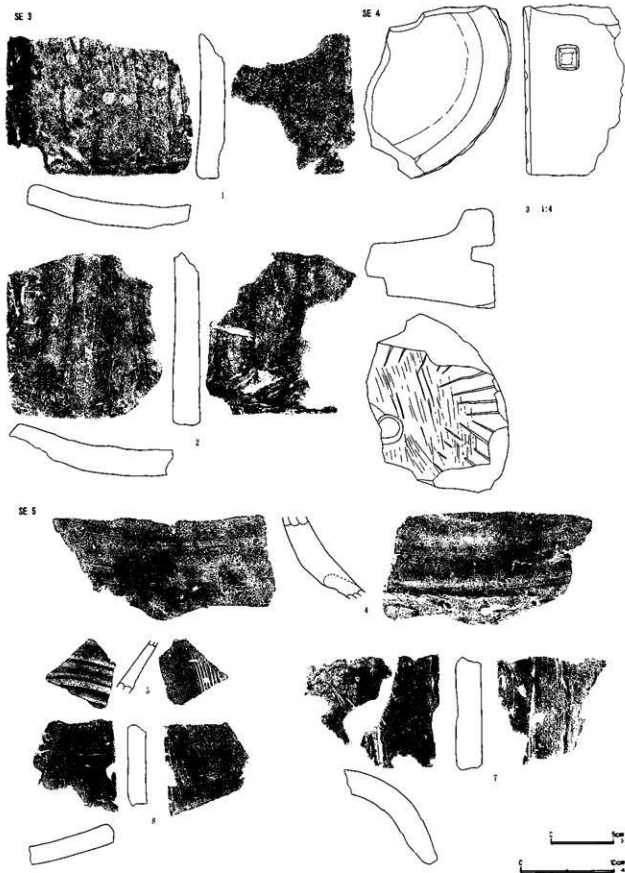
上臼であるが使いこまれており、目がほとんど無くなっている。花崗岩製。この他に陶器碗1点、常滑壺胴部2点、在地産鉢1点、かわらけ低部1点、整痕のある片岩などが出土したが、いずれも小片で図示できるものはない。

### 第5号井戸跡 (第52図)

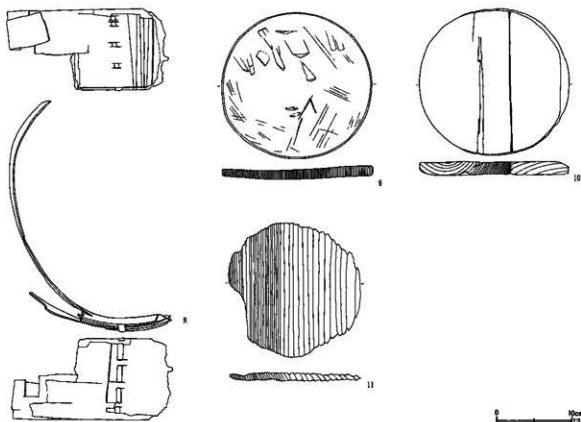
調査区の北側、P-2・Q-2グリッドで検出された。重複する遺構はないが、第6号井戸跡がすぐ西側にある。平面形は円形である。直径が3.08m、深さは1.2m掘り下げた所で湧水のため断念した。

遺物は、瀬戸産摺鉢片1点、常滑壺片2点、内耳鍋体部片2点、丸瓦1点、平瓦1点のほかに木製品が出土した。第54図5は黄白色の胎土でやや砂っ





第54図 第3・4・5号井戸跡出土遺物(1)



第55図 第5号井戸跡出土遺物(2)

ばい。釉は鉄釉。4は常滑甕。外面は研磨痕が顕著で二次的に利用されている。7は丸瓦。凸面は縦方向のナデ、凹面は布目痕が残る。胎土は砂粒・礫が多く軟質。色調は灰色であるが二次的に被熱したものか一部が橙褐色を呈する。6は平瓦。凹面は横方向のナデ、凸面は縦方向のナデが見られる。側面は2面に面取されるが糸(弓)切痕が残る。胎土は砂粒を含み灰色を呈する。焼成は良好。第55図8は曲物の側である。破損が激しく縁目部分だけが遺存している。4枚の板を綴じている。高さ10.8cm。9～10は曲物の底板と思われる。痛みが激しく加工痕は9で僅かに残るだけである。直径19.3cm、厚さ1.3cm。10は2枚の板を継いでいる。直径19.4cm、厚さ1.7cm。11は軟質部分が腐食しており本来の大きさではないと思われる。現存直径17.8cm、厚さ1cm。材質は不明である。

#### 第6号井戸跡(第52図)

調査区の北側、P-2グリッドで検出された。重複する遺構はない。第5号井戸跡の西に並ぶように

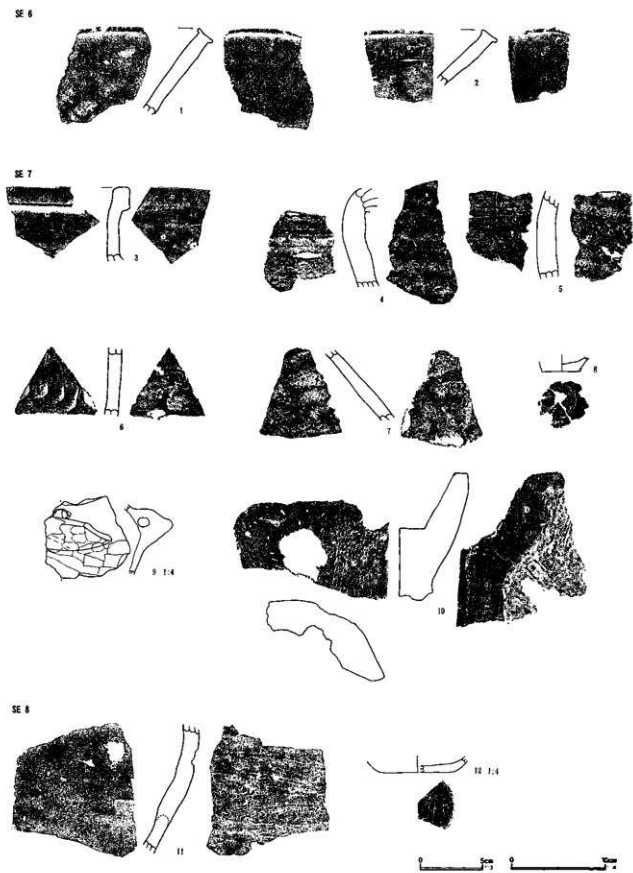
存在する。平面形は円形である。直径が3.24mある。深さは1.5mまで掘り下げたが湧水のため断念した。ちょうど斜面にかかっており、断面は漏斗状の下の部分を思わせることから実際にはさらに上から掘りこまれていたと考えられる。

遺物は、常滑の壺か甕と思われる破片1点、鉢片2点、鉢と思われる破片を含めて在地産の土器片3点が出土した。第56図1・2は常滑産溜鉢の口縁部である。口唇部は内外面とも小さく突出する。使いこまれており内面はかなり平滑である。白色砂粒を多く含み、1は暗赤色、2は橙褐色を呈する。焼成は良好である。15世紀後半と思われる。

#### 第7号井戸跡(第52図)

調査区の北側、O-4・P-4グリッドで検出された。第10号掘立柱建物跡、第87号土壇と重複するが新旧関係はつかめなかった。平面形は円形で直径が2.68mである。深さは1.9mで湧水のため断念した。

遺物は、常滑甕片4点、土釜片1点、かわらけ1



第56图 第6·7·8号井戸跡出土遺物

点、器種不明小片3点が出土した。第56図3～7は常滑産変である。4・5は口縁部。外側の折り返し部分が欠失している。4・5・7は胎土に白色砂粒、礫を多量含み暗褐色を呈する。3は砂粒がやや少なく、礫は見られない。外面は小豆色を呈する。焼成はいずれも良好。8はかわかけ底部。ロクロ成形され底径4cm。胎土は砂粒を含み均質であるが、白色針状物質が見られる。9は土釜の火除け部分である。胎土は砂粒、礫の他に角閃石を少量含む。焼成は普通。10は丸瓦。割れた後に被熱しており一部に断面まで煤が付着している。凸面は縄叩きの後横方向になでている。凹面は布目とともに吊紐痕が残る。側面はヘラ調整される。胎土は砂粒、礫を多量含み、灰色を呈する。

#### 第8号井戸跡 (第53図)

調査区の北側、O-4グリッドで検出された。第88・164号土壌と重複する。

平面形は円形で直径は2.14mである。深さは1.8mまで掘り下げた所で湧水のため断念した。断面は上から漏斗状に1mほど掘り下げそこから筒状になる。最小径は0.96mである。

遺物は、鉄軸の施された陶器小片1点、常滑壺片1点、かわかけ底部片1点、器種不明細片3点が出土した。第56図11は常滑壺胴部。内外面とも横ナデされ、内面は指頭痕が残る。胎土は礫を多量含む。色調は褐色で焼成は良好である。2はかわかけ底部。ロクロ成形され、外面底部には板状の痕跡が残る。胎土は赤色粒を多量含み、砂粒の他角閃石が僅かに見られる。色調は橙褐色で、焼成は良い。

#### 第9号井戸跡 (第53図)

調査区の北側、Q-4グリッドで検出された。第166号土壌と重複する。平面形はやや楕円形である。長径が1.26mで、深さは1.28mまで掘り下げた所で湧水が見られた。

遺物は、かわかけ細片3点、蓋片1点、砥石1点が出土した。第57図1は瓦質の蓋である。遺存状態は良くない。上面は周縁に沿ってなでられている。

線状の痕跡は、後の転用によるものであろう。下面は殆ど剥離しているが、端部から6cm内側に段を有し、段の内側に黒色を呈する面が僅かに残る。端面には直径1.4cmの円が廻っているが円の内側は完全に剥離の痕跡がある。他の出土品のから、これは低い円錐形の突起が貼りつけられたものである。胎土は砂粒・角閃石を多量含み、焼成は普通。推定直径31.4cm、厚さは端面で2cmである。2は砥石。両端が欠損している。4面とも良く使用されている。石質は凝灰岩。

#### 第10号井戸跡 (第53図)

調査区の東側、R-7グリッドで検出された。第19・35号溝跡と重複する。本遺構が新しい。平面形は円形で直径は3.36mである。深さは1.82m掘り下げた所で湧水したため断念した。最小径は1.52mである。

遺物は、深皿1点、壺破片1点、壺片、瓦質鉢片1点、かわかけ破片が出土した。壺片は第35号溝跡出土遺物と接合しており、本遺構出土の壺は第35号溝跡に伴うものであった可能性が高い。第58図1は瀬戸産深皿。約1/8の残存である。内面は使用により極めて平滑である。口唇部は角張っており口縁部内面は突出する。外面は体部下半が篋ケズリされる。底部は糸切り後周辺部を回転篋ケズりする。内外面とも口縁部下まで灰釉がかかる。胎土は僅かに砂粒を含み、色調は黄白色を呈する。焼成は極めて良好である。推定口径31.7cm、推定底径13.2cm、器高9cm 15世紀後半。4・5は常滑産壺胴部。「大日」の文字の入った叩きが見られる。胎土は砂粒・礫多量、黒色粒を少量含み、一部発泡している。色調は小豆色。2・3・6～10までは同一個体と思われる遼美産の壺である。3は頸部である。口縁部を欠失しているが短く外反するものであろう。外面は自然釉がかかる12世紀代の製品である。第27図9と接合する。6～10は胴部破片。外面は格子叩きが施され、内面は丁寧にナデ調整される。10は内面に降灰していることから胴部下の破片と考え



第57図 第9号井戸跡出土遺物

られ、下の方まで叩きがあることが判る。いずれも胎土は白色砂粒を含み、色調は暗灰色を呈する。焼成は良好である。11・12は轆轤成形のかわらけ。11の底面には「×」の記号がある。胎土は砂粒、赤色粒を少量含み均質で、12には白色針状物質が見られる。色調は淡褐色。焼成は普通である。13は在産鍋の体部下半である。内面に鼠の輪跡が見られる。外面は厚く煤が付着する。14は片岩。片面に深い整痕が明瞭に刻まれる。

#### 第11号井戸跡 (第52図)

調査区の東側、P-8グリッドで検出された。重複する遺構はない。

平面形は円形で、直径が1.26m、底径は0.8mである。深さは2.36mである。

遺物は、平瓦が1点出土した。第60図1は遺存状態が悪く両面とも調整が良くわからない。凹面は僅かに横骨状の痕跡が見られる。胎土は砂粒、礫を多く含み、角閃石とともに雲母が少量含まれる。色調は灰色を呈し、焼成は良くない。

#### 第12号井戸跡 (第53図)

調査区の西側、M-8・N-8グリッドで検出された。第13号井戸跡と重複するが新旧関係は不明。平面形は円形である。直径は3.16m、深さは1.82mまで掘り下げたがそれ以上は危険なため断念した。最小径は1.42mである。

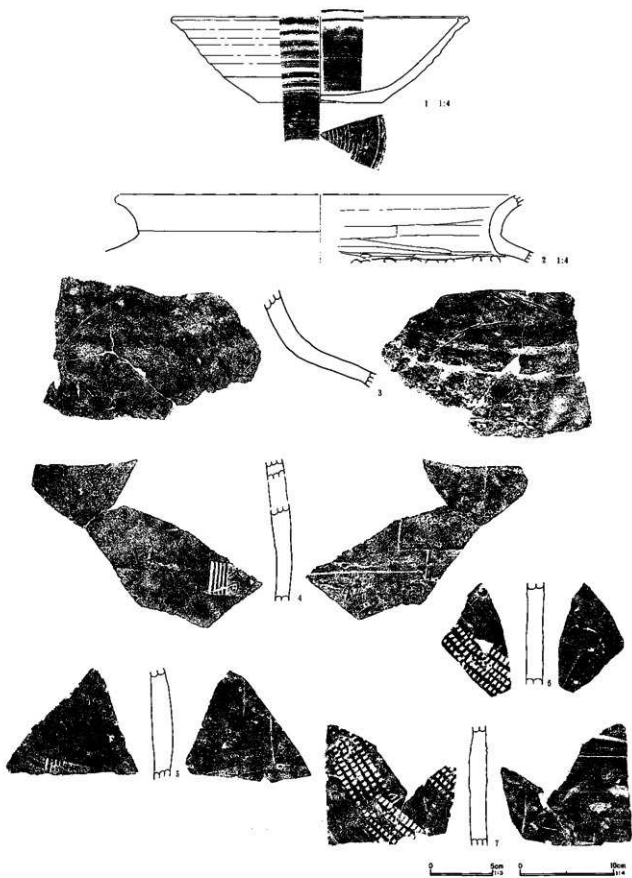
遺物は、常滑産壺片2個体分10点、内耳土器片2個体分4点、かわらけ破片2個体分が出土した。第60図2～4は常滑産壺口縁部。2はN字状口縁で、

3・4は幅広の口縁帯のものである。5は頸部、他は胴部破片である。胎土は2が砂粒、黒色粒を含みやや発泡している。他は砂粒、礫を含む。色調は橙褐色から小豆色を呈する。焼成は良好。2は、13世紀後半から14世紀前半、3・4は、14世紀後半から15世紀前半。6は肩部か胴部上半あたりの破片と思われる。外面は自然釉が厚くかかり流れている。他の破片より薄く、砂粒の含みが少ない。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。10・11は轆轤成形のかわらけ。11は底部が厚く作られる。胎土は均質であるが、赤色粒と白色針状物質を僅かに含む。色調は淡褐色であるが11は割れた後に被熱して煤が付着している。12・13は内耳土器。12は浅形のものであるが、内耳の下端は体部についている。口唇部は中央がやや窪み角をしっかりと作っている。13は鍋形である。口唇部は丸く作り、体部外面は指頭痕が残る。器厚は薄い。胎土は12が砂粒、角閃石の他に赤色粒を多量含む。13は礫を多く含み赤色粒は僅かである。焼成はどちらも良いが、特に13は硬質な焼き上がりである。

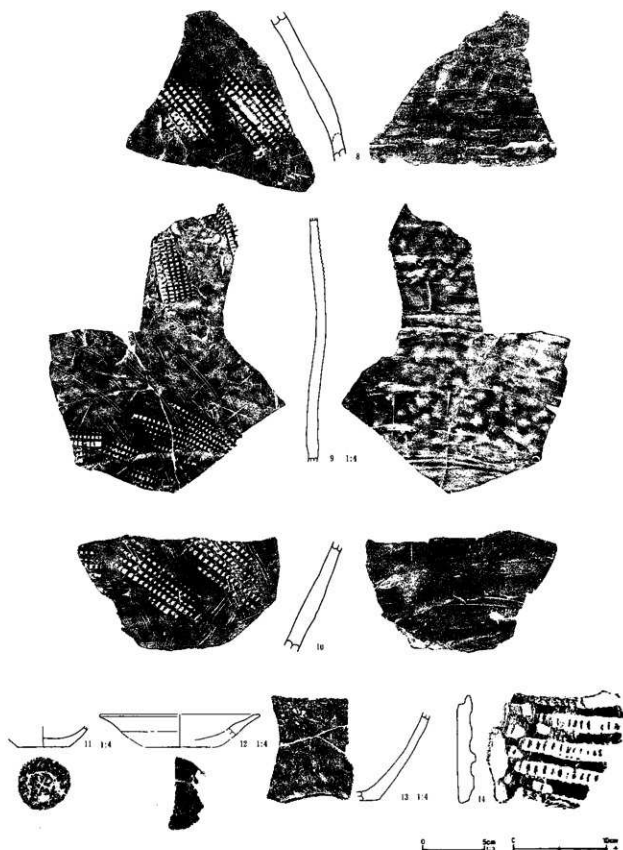
#### 第13号井戸跡 (第53図)

調査区の北側、N-8グリッドで検出された。第12号井戸跡と重複するが、新旧関係は不明。規模が小さく浅いことから土壌であるかもしれない。平面形は不整形である。直径が1.1m、底径は0.8mである。深さは1.22mである。

遺物は、出土しなかった。

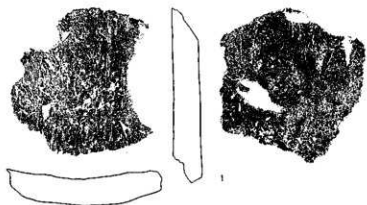


第58图 第10号井跡出土遺物(1)

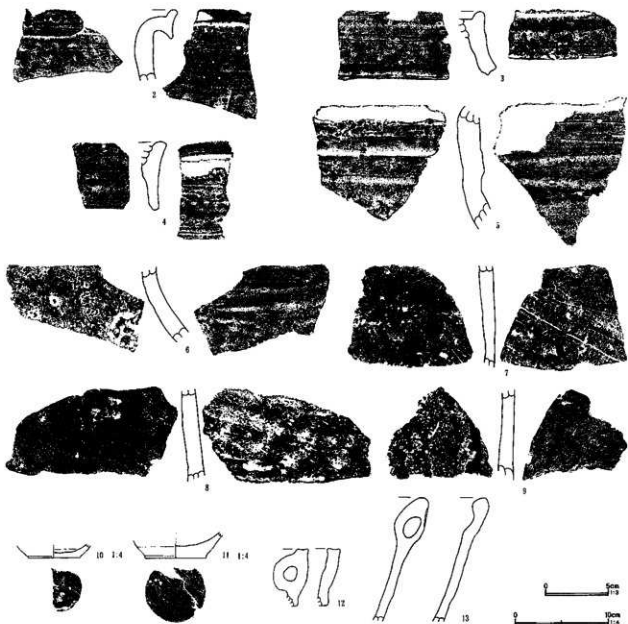


第59图 第10号井跡出土遺物(2)

SE 11



SE 12



第60图 第11·12号井戸跡出土遺物

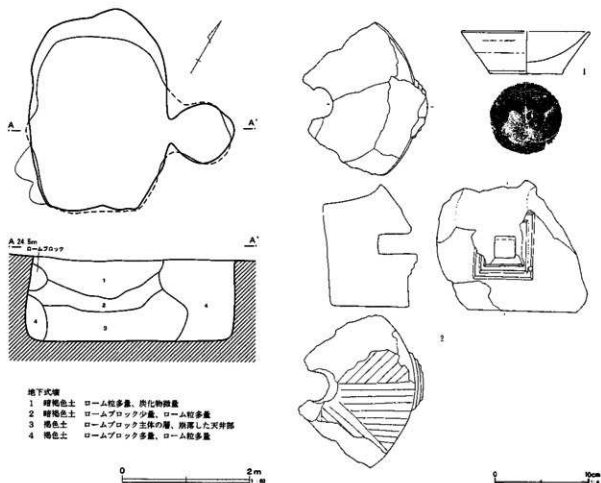


## f 地下式墳

## 第1号地下式墳 (第61図)

調査区の東側、R-7・8グリッドで検出された。重複する遺構はない。平面形は隅丸方形である。規模は長軸が3m、短軸は2.2mである。深さは1.3mである。主軸方向はN-31°-Wを指す。天井部は崩落していた。壁は一部崩れているが、ほぼ垂直で僅かにオーバーハングする。床面は平坦である。東辺中央に直径1mの縦坑状の入り口が円形に掘りこまれている。遺物は、常滑産鑿の小片1点、かわ

らけ1点、茶臼1点が出土した。第61図1は轆轤成形のかわらけ。口縁部は約1/8残存する。内外面に煤が付着するが、別に黒斑が見られ二次被熱した可能性がある。底部は厚く作られ重い。体部は直線的に開く。胎土は赤色粒と白色針状物質が含まれる。焼成は良い。推定口径13.6cm、器高4.5cm、底径7.7cm。2は茶臼の上臼である。割れて二次被熱している。かなり使い込まれて減っているが、目は細かく8分割10本と思われる。石材は砂岩である。



第61図 第1号地下式墳・出土遺物

## g 土壌

土壌は総数167基検出された。その殆どは長方形である。分布状況は溝跡で区画されたそれぞれの内部に重複して集中する傾向がある。区画を意識してそれぞれの単位として捉えられよう。一区画内の土壌は更に幾つかの纏まりとして細分できる。集中するのは第17・32号溝跡で囲まれた北側の区画と第22号溝跡で区切られた東側の区画である。北側の区画では中央部のP-3グリッドを中心に纏まるものと、区画の南側の一角に纏まるもの、その北東にやや小さく纏まるものなど幾つかに分けられる。東側の区画では中央部に重複してあるが大きく北側と南側に分けられる可能性がある。各区画内の纏まりは重複のあり方などによって更に細かく分類する事も可能である。第12号溝跡で区画された南側には土壌は殆どない。この分布の違いは何を意味するのだろうか。推定として、南側の区画内には大型の掘立柱建物跡があり、この建物の存在が土壌の分布に関係していると考えられないだろうか。

土壌から出土する遺物は極めて少ない。かわらけ、甕などの破片が殆どで図示できるものになると一段と限られる。第1号土壌から6枚の銭貨が出土し、第113号土壌からはかわらけと銭貨が検出されていることから墓塚と考えられる。他の土壌についても同じような性格と考えておきたい。

これらの土壌の詳細な時期を決定するのは困難であるが、①近世の磁器を含まないこと、②銭貨の最新銭は永楽通寶であることから中世段階に構築されたものであることは間違いないと思われる。また、遺構の重複の面ではこれらの土壌は一部の溝跡より古いことが土層断面から確認されており、遺跡の最終段階のものではないこともわかる。

なお、紙数の都合から個別の遺構の説明は省略し、遺物について簡単に説明する。遺構については後掲の計測表を参照されたい。

### 第1号土壌出土遺物 (第72図)

第1号土壌からは在地産の鉢と思われる小片1点と銭貨が6点出土した。第72図1は祥符元寶、2

は天聖元寶。篆書である。3は至和通寶、4・5は熙寧元寶、6は洪武通寶である。6は明銭、それ以外は北宋銭である。

### 第6号土壌出土遺物 (第72図)

第6号土壌からはかわらけ7点と常滑産の甕片2点のほか器種不明細片が2点出土した。かわらけで図示できたのは2点である。第72図7は口径14cm、器高3cm、底径9cmで復原される。赤色粒子を多量含み軟質である。8は底径7.3cm。均質の胎土で橙褐色を呈する。9は常滑産甕の口縁部破片である。欠損している折り返し部分は幅広のもので、15世紀後半のものであろう。10は同じく常滑産甕の胴部破片である。外面は降灰が見られる。11は銅製の柄である。本体に接する部分で欠け落ちたものと思われ、残存長は6.7cm、断面は端部で幅2.7cm、高さ1.6cmの逆漏斗形である。中空で、内部に木製の柄を挿入し、端部に近い箇所鉄製の目釘を打ち込んで固定したものと考えられる。目釘は平の方から打ち込まれ、貫通させて端を折り曲げて留めている。平の面には目釘は飛び出すことなく、平滑に仕上げている。火のしの柄と推定される。

### 第22号土壌出土遺物 (第72図)

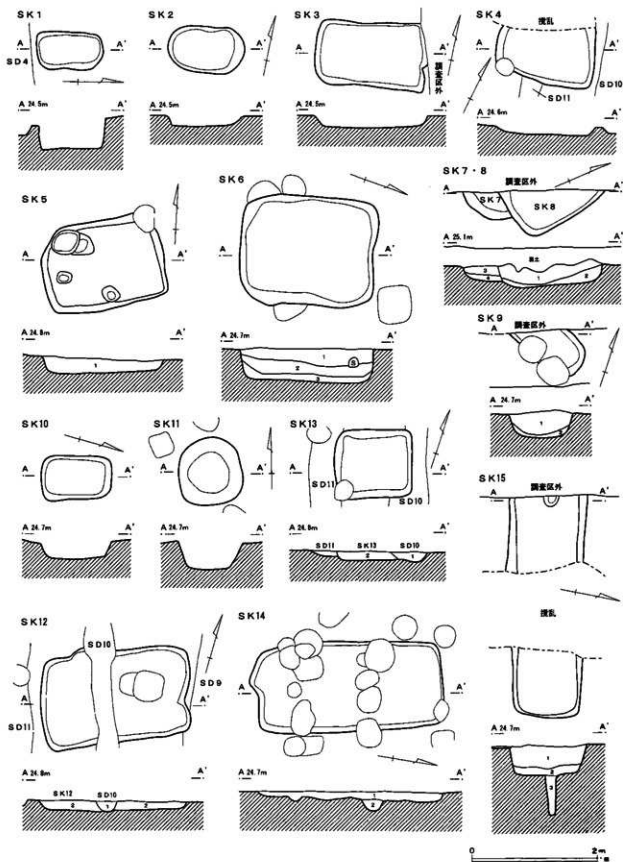
第22号土壌からは、かわらけが1点出土した。(第72図12) 底部約1/2の破片である。ロクロ成形され、胎土は細かく均一で、色調は淡褐色を呈する。復原底径6.3cm。

### 第27号土壌出土遺物 (第72図)

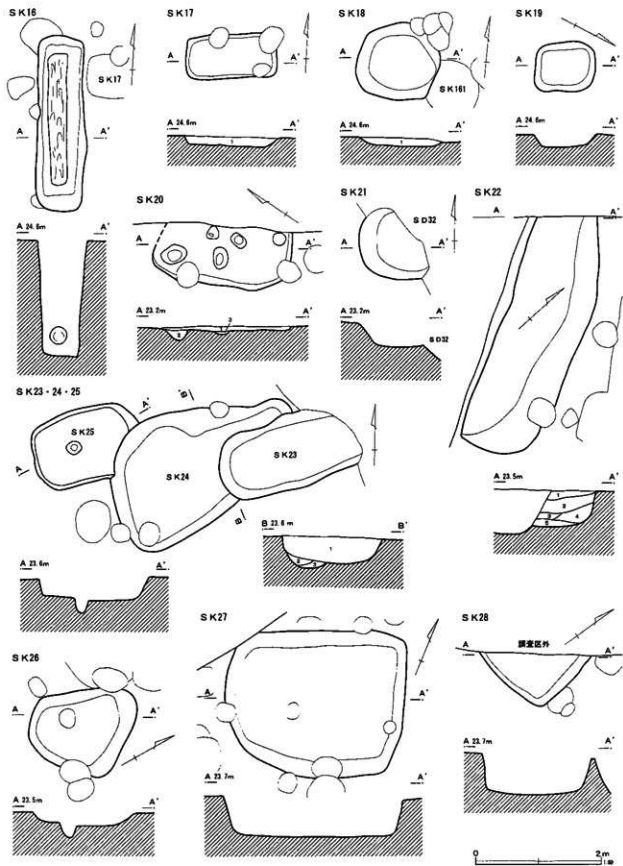
第27号土壌からは火鉢と思われる口縁部破片1点と、かわらけ細片が3点出土した。第72図13は火鉢と思われる。外面はナデが施され、内面はかろくなでられるが指頭痕が残る。外面は淡褐色で煤が付着する。内面は黒色。胎土は砂粒を含み、やや硬質の焼き上がりである。

### 第54号土壌出土遺物 (第72図)

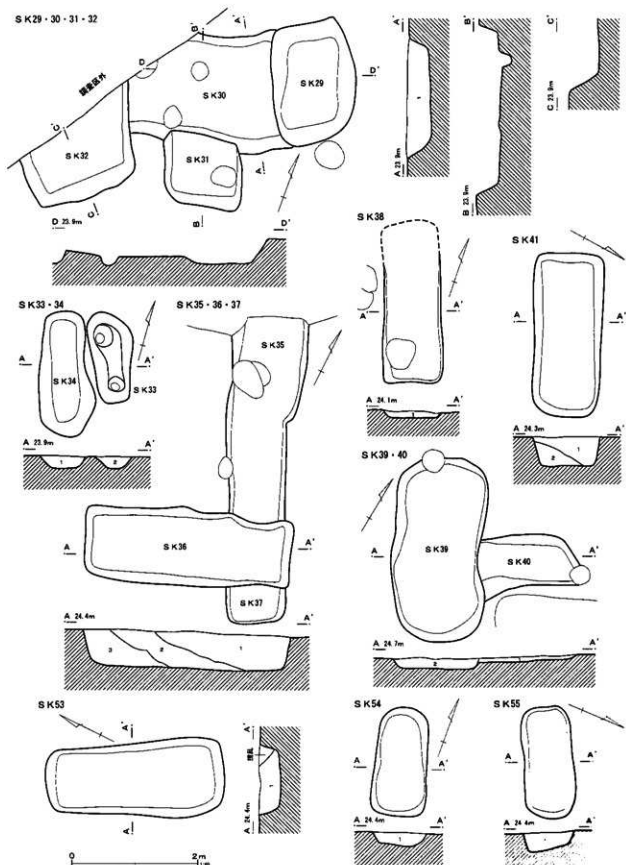
第54号土壌からは常滑産の甕破片が1点出土した。第72図14は肩部の破片である。屈曲部より上は降灰している。胎土は白色粒・小礫を含み、色調は外面小豆色、胎土はやや灰色を呈する。焼成は極めて



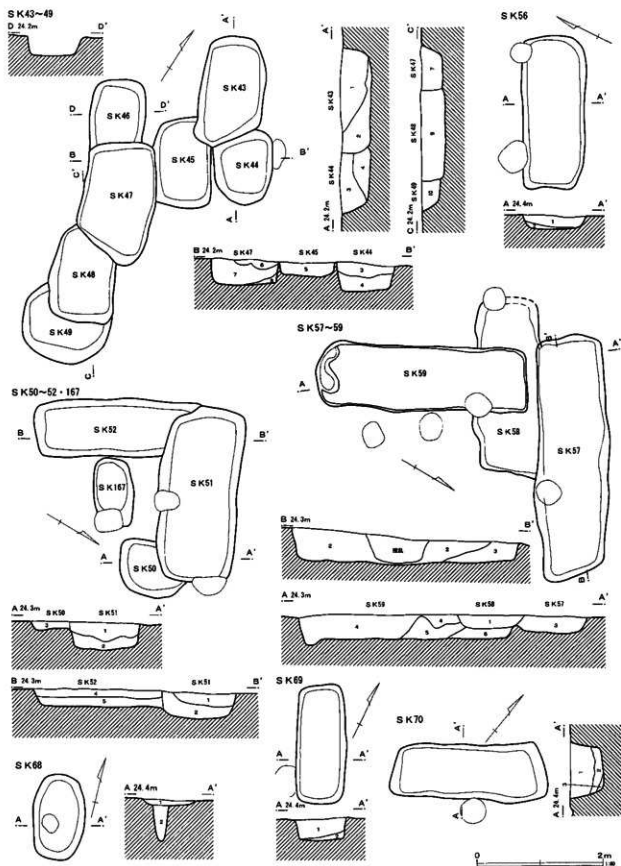
第62図 土壇(1)



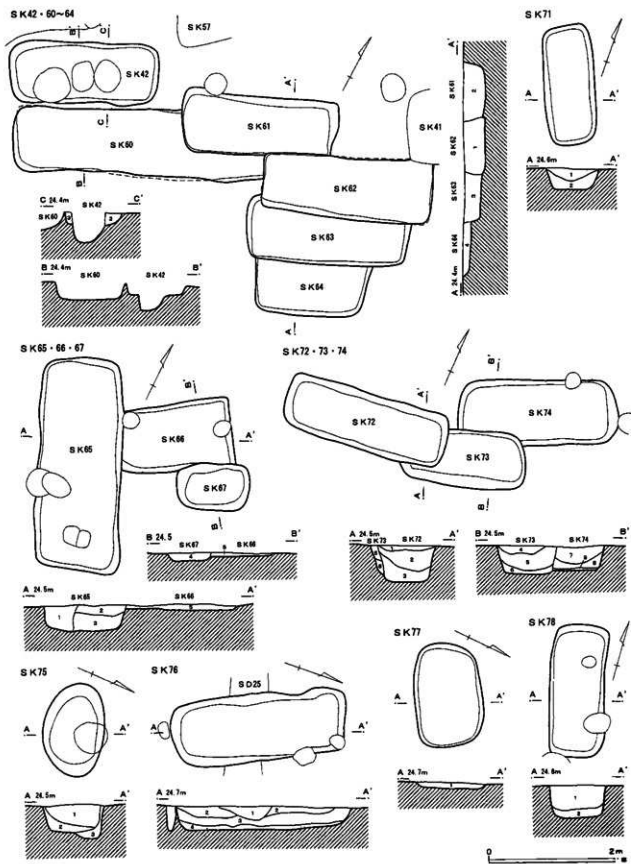
第63圖 土墳(2)



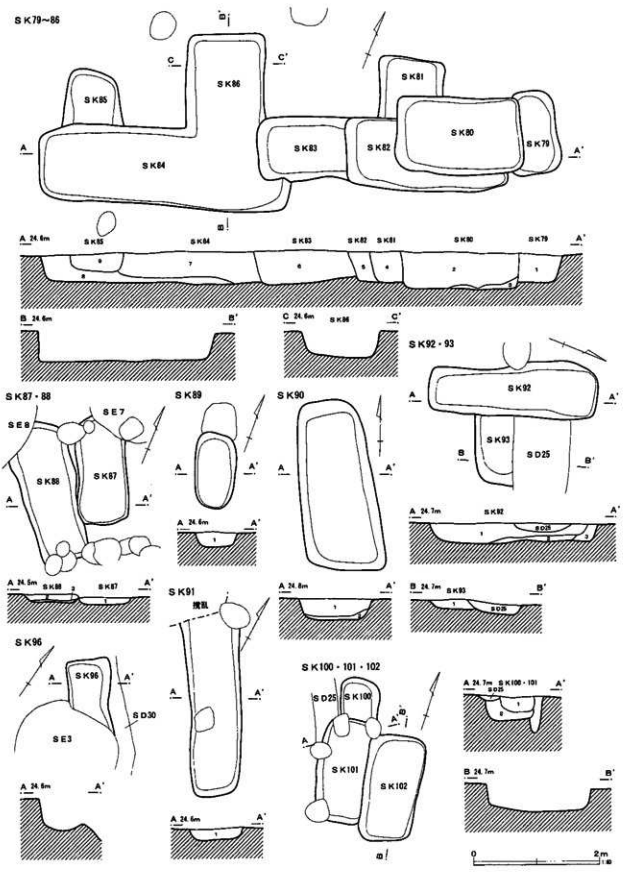
第64圖 土坑(3)



第65図 土壇(4)

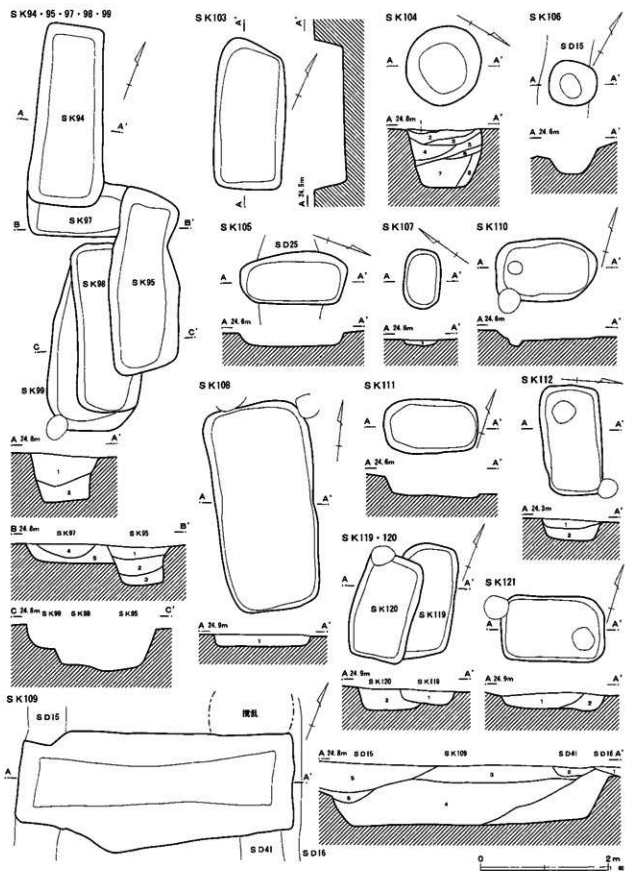


第66図 土坑 (5)



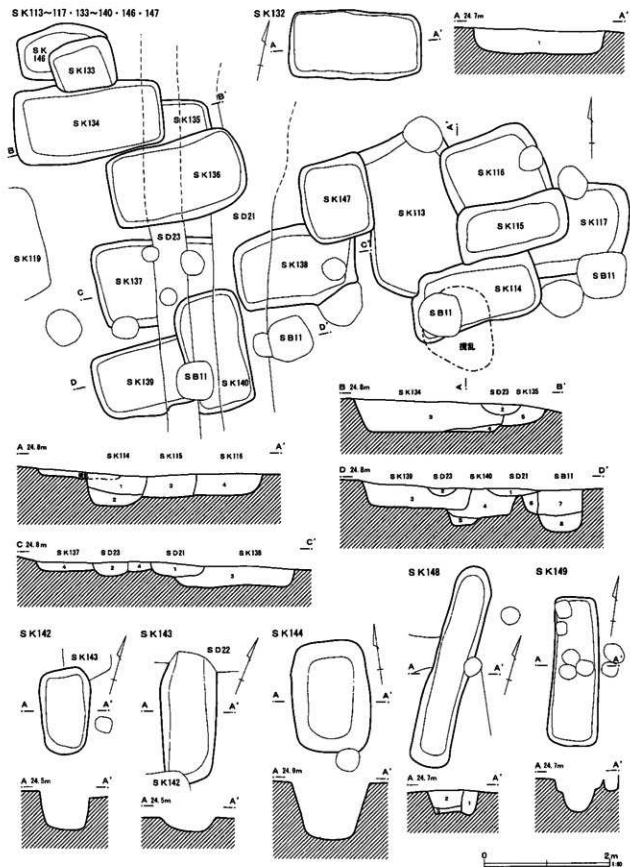
第67圖 土壤(6)





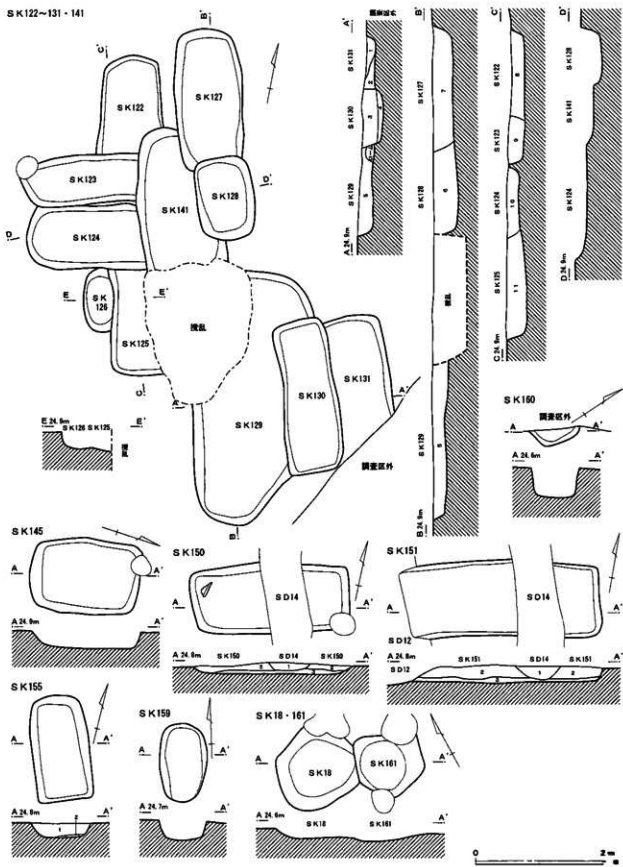
第68図 土坑 (7)

SK113~117・133~140・146・147

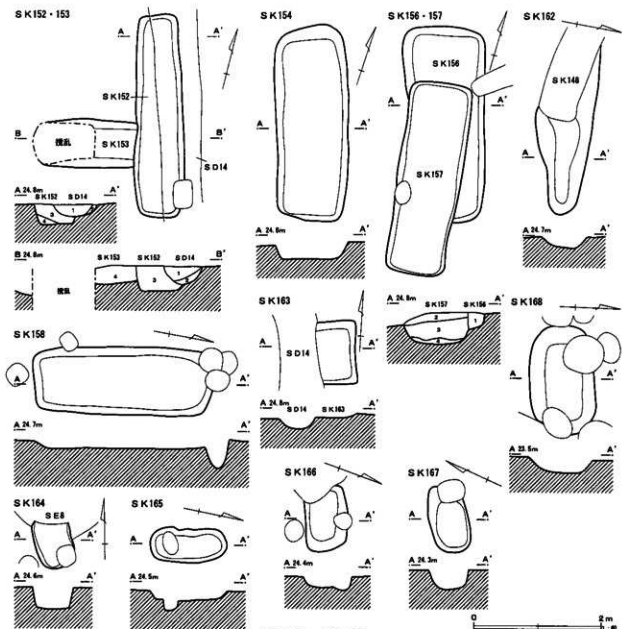


第69図 土坑(8)

SK122~131・141



第70図 土壇(9)



第71図 土壙 (10)

良好である。

**第64号土壙出土遺物 (第72図)**

第64号土壙からは在地産の鉢片が1点出土した。第72図15は口縁部破片。内外面とも丁寧にヨコナデされ、口縁部は内側に僅かに屈曲する。胎土は砂粒を含む。瓦質で焼成は比較的良好である。

**第65号土壙出土遺物 (第72図)**

第65号土壙からは常滑産壺片1点、瀬戸産摺鉢片1点、在地産鉢の小片2点が出土した。第72図18は瀬戸産の摺鉢である。内面はかなり剥離している。拓本の濃いところが残っている部分である。

底部は糸切痕が残る。胎土はやや砂っぽく黄白色を呈する。軸は錆軸である。推定底径8.8cm。19は常滑産の壺破片である。外面は縦方向にナデられ、内面は横方向に木口状の工具でナデている。胎土は白色砂粒、礫を多く含む。

**第100号土壙出土遺物 (第72図)**

第100号土壙からは在地産の鉢・須恵器・砥石・器種不明の破片がそれぞれ1点出土した。第72図17は砥石で両端とも欠損している。4面ともよく使われている。石材は凝灰岩。16は須恵器坏底部。白色針状物質を含み、焼成は還元炎焼成で良好であ

る。底部は周辺ヘラケズリされる。混入である。

#### 第113号土壌出土遺物(第72図)

第113号土壌からはかわらけ1点と銭貨1点が出土した。第72図20はかわらけである。底部約1/2の残存である。内外面とも剥離が進んでいるがロク

ロ成形される。胎土は細かく混入物は少ない。淡褐色を呈する。焼成は良い。復原底径7.1cm。21は永楽通寶である。一部が欠けており痛みが激しい。

#### 第150号土壌出土遺物(第73図)

第150号土壌からは、常滑産壺口縁部が1点出土

#### 土壌層註記

##### 第5号土壌

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量、炭化物少量

##### 第7-8号土壌

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒・炭化物含む。(SK8)
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量、炭化物少量 (SK8)
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒・炭化物少量 (SK7)
- 4 暗褐色土 ロームブロック含む、ローム粒多量 (SK7)

##### 第12号土壌

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量、炭化物少量 (SD10)
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量、炭化物含む。(SK12)

##### 第13号土壌

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量、炭化物少量 (SD10)
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量、炭化物少量。  
最下に黒褐色土含む。(SK13)

##### 第15号土壌

- 1 茶褐色土 ロームブロック・ローム粒含む、炭化物微量 (SK15)
- 2 茶褐色土 ロームブロック微量、ローム粒少量 (SK15)
- 3 茶褐色土 ロームブロック・ローム粒含む。(P1)

##### 第18号土壌

- 1 暗褐色土 ロームブロック含む、ローム粒多量、炭化物微量

##### 第22号土壌

- 1 暗褐色土 ローム粒微量
- 2 茶褐色土 ロームブロック少量、ローム粒含む。
- 3 茶褐色土 ロームブロック多量、ローム粒大量
- 4 暗褐色土 ローム粒含む。
- 5 茶褐色土 ロームブロック少量、ローム粒含む。

##### 第36号土壌

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒含む、最下に黒褐色剥離層あり。
- 2 褐色土 ロームブロック・ローム粒多量
- 3 褐色土 ロームブロック・ローム粒大量

##### 第42-49号土壌

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒含む、黒褐色土ブロック含む。(SK43)
- 2 褐色土 ロームブロック・ローム粒大量、黒褐色土ブロック含む。(SK43)
- 3 黒褐色土 ロームブロック微量、ローム粒含む。(SK44)
- 4 暗褐色土 ロームブロック含む、ローム粒多量 (SK44)
- 5 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒微量 (SK45)
- 6 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒含む。(SK47)
- 7 暗褐色土 ロームブロック多量、ローム粒含む。(SK47)
- 8 褐色土 ロームブロック・ローム粒大量 (SK47)
- 9 暗褐色土 ロームブロック微量、ローム粒含む。(SK48)
- 10 暗褐色土 (SK49)

##### 第6号土壌

- 1 暗褐色土 ロームブロック含む、ローム粒・炭化物微量
- 2 褐色土 ロームブロック・ローム粒大量
- 3 褐色土 ロームブロック・ローム粒多量

##### 第9号土壌

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒・炭化物含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック微量、ローム粒含む、炭化物微量

##### 第14号土壌

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒含む、炭化物微量 (SK14)
- 2 黒褐色土 ロームブロック微量、ローム粒少量 (P1)

##### 第17号土壌

- 1 暗褐色土 ロームブロック含む、ローム粒多量、炭化物微量

##### 第20号土壌

- 1 暗褐色土 ロームブロック若干含む、ローム粒含む。(SK20)
- 2 黒褐色土 ローム粒微量 (P1)
- 3 黒褐色土 ローム粒微量 (P1)

##### 第23-24号土壌

- 1 褐色土 ローム粒含む、やわらか (SK24)
- 2 暗褐色土 ロームブロック含む、ローム粒多量 (SK23)
- 3 褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 (SK23)

##### 第30号土壌

- 1 黄褐色土 ロームブロック大量、埋戻土

##### 第33-34号土壌

- 1 暗褐色土 ローム粒含む、黒褐色土ブロック含む。(SK34)
- 2 褐色土 ローム粒含む。(SK33)

##### 第38号土壌

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒含む、最下に黒褐色剥離層あり。

##### 第39-40号土壌

- 1 暗褐色土 ロームブロック多量、ローム粒含む。(SK40)
- 2 褐色土 ロームブロック微量、ローム粒含む。(SK39)

##### 第50-51-52号土壌

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒含む。(SK51)
- 2 褐色土 ロームブロック多量、ローム粒含む。(SK51)
- 3 黒褐色土 ローム粒微量 (SK50)
- 4 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒少量 (SK52)
- 5 暗褐色土 ロームブロック微量、ローム粒含む。(SK52)

##### 第53号土壌

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒含む。

**第54号土壌**

- 1 黒褐色土 ロームブロック含む、ローム粒少量、硬土、他に比べて腐植強い、

**第56号土壌**

- 1 暗褐色土 ローム粒少量
- 2 褐色土 ローム粒多量
- 3 暗褐色土 ロームブロック微量、ローム粒少量、底下に黒褐色土あり、

**第57・58・59号土壌**

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒含む、(SK58)
- 2 褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 (SK57)
- 3 褐色土 ロームブロック・ローム粒含む、(SK57)
- 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少量 (SK59)
- 5 褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 (SK59)
- 6 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒含む、(SK59)

**第68号土壌**

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒含む、(SK68)
- 2 黒褐色土 ロームブロック含む、ローム粒微量 (F9)

**第65・66・67号土壌**

- 1 暗褐色土 ロームブロック含む、ローム粒微量 (SK65)
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒含む、黒褐色土ブロック含む、(SK65)
- 3 褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 (SK65)
- 4 暗褐色土 ロームブロック微量、ローム粒少量 (SK67)
- 5 褐色土 ロームブロック・ローム粒含む、底下に黒褐色腐植あり、(SK66)

**第69号土壌**

- 1 褐色土層 ロームブロック・ローム粒含む、
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少量、底下に黒褐色土あり、

**第76号土壌**

- 1 褐色土 ローム粒少量、炭化物質微量 (SD25)
- 2 黒褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量 (SK76)
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 (SK76)
- 4 黒色土 ローム粒多量 (SK76)

**第78号土壌**

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒少量
- 2 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒多量

**第87・88号土壌**

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量 (SK87)
- 2 暗褐色土 ロームブロック微量、ローム粒多量 (SK88)
- 3 黒褐色土 ローム粒少量 (SK88)

**第89号土壌**

- 1 褐色土 ロームブロック微量、ローム粒少量

**第91号土壌**

- 1 暗褐色土 ローム粒多量、ソフトロームブロック少量

**第92号土壌**

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量
- 2 暗褐色土 ローム粒少量
- 3 褐色土 ロームブロック多量、ソフトローム主体

**第95・97号土壌**

- 1 褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量 (SK95)
- 2 黒褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量 (SK95)
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 (SK95)
- 4 褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 (SK97)
- 5 暗褐色土 ロームブロック微量、ローム粒多量 (SK97)

**第55号土壌**

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒含む、

**第70号土壌**

- 1 褐色土 ロームブロック・ローム粒大量、黒褐色土ブロック含む、
- 2 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒多量

**第61・62・63・64号土壌**

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒含む、(SK82)
- 2 褐色土 ロームブロック・ローム粒含む、(SK61)
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒含む、(SK83)
- 4 暗褐色土 ロームブロック微量、ローム粒含む、(SK64)

**第72・73・74号土壌**

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒含む、(SK72)
- 2 暗褐色土 ロームブロック微量、ローム粒少量 (SK72)
- 3 褐色土 ロームブロック含む、ローム粒多量 (SK72)
- 4 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒少量 (SK73)
- 5 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒含む、(SK73)
- 6 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 (SK73)
- 7 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒含む、(SK74)
- 8 褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 (SK74)
- 9 黒褐色土 ロームブロック少量、ローム粒微量 (SK74)

**第71号土壌**

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少量
- 2 褐色土 ロームブロック・ローム粒多量

**第75号土壌**

- 1 褐色土 ロームブロック・ローム粒含む、(SK75)
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少量 (SK75)
- 3 黒褐色土 ローム粒含む、(F9)

**第77号土壌**

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒少量

**第79・86号土壌**

- 1 褐色土 ロームブロック中に多量、ローム粒多量 (SK79)
- 2 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量 (SK80)
- 3 褐色土 ロームブロック含む、(SK80)
- 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 (SK81)
- 5 褐色土 ロームブロック・ローム粒多量、ソフトローム主体 (SK82)
- 6 暗褐色土 ロームブロック・粒少量、10cm大のロームブロック少量 (SK83)
- 7 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量 (SK84)
- 8 褐色土 ロームブロック中に多量に混入、ローム粒多量 (SK84)
- 9 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量 (SK85)

**第90号土壌**

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒少量
- 2 黒褐色土 ロームブロック微量、ローム粒少量

**第93号土壌**

- 1 暗褐色土 ロームブロック微量、ローム粒少量

**第94号土壌**

- 1 褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量
- 2 暗褐色土 ロームブロック中に多量、ローム粒多量

**第100・101号土壌**

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒少量 (SK100)
- 2 褐色土 ロームブロック微量、ローム粒少量 (SK101)

## 第107号土層

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量

## 第109号土層

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量 (SD16)  
 2 暗褐色土 ローム粒多量 (SD41)  
 3 褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量 (SK109)  
 4 褐色土 ロームブロック多量、ローム粒中に多量、埋込土 (SK109)  
 5 黒褐色土 ローム粒少量 (SD15)  
 6 暗褐色土 ローム粒多量 (SD15)

## 第114・115・116号土層 (A-A')

- 1 黒褐色土 ロームブロック少量、ローム粒少量 (SK114)  
 2 黒褐色土 ロームブロック中に多量、ローム粒多量 (SK114)  
 3 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量 (SK115)  
 4 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量 (SK116)

## 第121号土層

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量  
 2 褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量

## 第132号土層

- 1 褐色土 ロームブロック・ローム粒多量、炭化物・焼土粒微量

## 第134・135号土層 (第 ⅡB-B')

- 1 暗褐色土 ローム粒多量 (SD21)  
 2 暗褐色土 ローム粒多量 (SD23)  
 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 (SK134)  
 4 暗褐色土 ローム粒多量 (SK134)  
 5 褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量、炭化物微量 (SK135)

## 第144号土層

- 1 黒褐色土 ロームブロックなし。  
 2 暗褐色土 黒色ブロック多い。  
 3 褐色土 ローム小ブロック少量

## 第148号土層

- 1 黒褐色土 ロームブロック少量、ローム粒少量 (P10)  
 2 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量 (SK148)  
 3 黒褐色土 ローム粒多量 (SK148)

## 第150号土層

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少量、炭化物微量 (SD14)  
 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 (SK150)  
 3 黒褐色土 ローム粒多量 (SK150)

## 第152号土層

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少量、炭化物微量 (SD14)  
 2 褐色土 ロームブロック少量、ソフトローム多量 (SD14)  
 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 (SK152)  
 4 黒褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量 (SK152)

## 第156・157号土層

- 1 暗褐色土 ローム粒少量 (SK156)  
 2 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量 (SK157)  
 3 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量、黒色土入 (SK157)  
 4 黒褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量 (SK157)

## 第155号土層

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量  
 2 黒褐色土 ローム粒少量

## 第104号土層

- 1 褐色土 ロームブロック・ローム粒多量  
 2 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量  
 3 褐色土 ロームブロック・ローム粒多量  
 4 黒褐色土 ローム粒少量  
 5 褐色土 ソフトローム主体  
 6 黒褐色土 ローム粒多量  
 7 褐色土 ロームブロック中に多量、ローム粒多量、黒色土混じる。  
 8 暗褐色土 ローム粒少量

## 第112号土層

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量  
 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量

## 第119・120号土層

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量 (SK119)  
 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 (SK120)

## 第122～131号土層

- 1 暗褐色土 ローム粒多量、焼土粒微量 (SK131)  
 2 褐色土 ソフトローム主体 (SK131)  
 3 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量、炭化物少量 (SK130)  
 4 黒褐色土 ローム粒少量 (SK130)  
 5 暗褐色土 ローム粒多量、ソフトロームブロック中に多量 (SK129)  
 6 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量、焼土粒微量 (SK129)  
 7 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量、炭化物微量 (SK127)  
 8 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒多量、炭化物微量 (SK122)  
 9 暗褐色土 ローム粒多量、炭化物・焼土粒微量 (SK123)  
 10 暗褐色土ロームブロック少量、ローム粒多量、炭化物微量 (SK124)  
 11 黒褐色土ローム粒多量、炭化物・焼土粒少量 (SK125)

## 第137・138号土層 (第 ⅡC-C')

- 1 暗褐色土 ローム粒多量 (SD21)  
 2 暗褐色土 ローム粒多量 (SD23)  
 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量、炭化物微量 (SK138)  
 4 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量、(SK137)

## 第139・140号土層 (第 ⅡD-D')

- 1 暗褐色土 ローム粒多量 (SD21)  
 2 暗褐色土 ローム粒多量 (SD23)  
 3 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量、炭化物少量 (SK139)  
 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 (SK140)  
 5 暗褐色土 ローム粒多量 (SB11PH4)  
 6 褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量 (P10)  
 7 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 (SB11PH5)  
 8 暗褐色土 ロームブロック・炭化物少量、ローム粒多量、粘性・しまりあり。(SB11PH5)

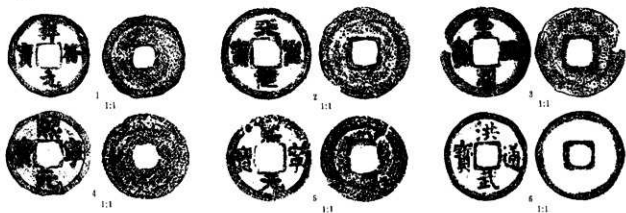
## 第151号土層

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少量、炭化物微量 (SD14)  
 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 (SK151)  
 3 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 (SK151)

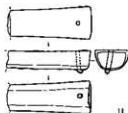
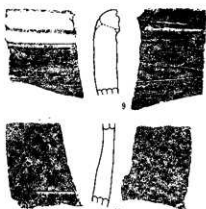
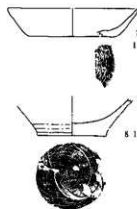
## 第152・153号土層

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少量、炭化物微量 (SD14)  
 2 褐色土 ロームブロック少量、ソフトローム多量 (SD14)  
 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量 (SK152)  
 4 暗褐色土 ローム粒少量、黒色土混入 (SK153)

SK 1



SK 6



SK 22

SK 54



SK 100



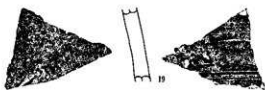
SK 65



SK 64



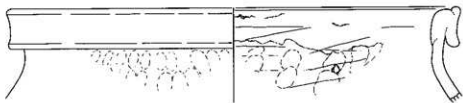
SK 113



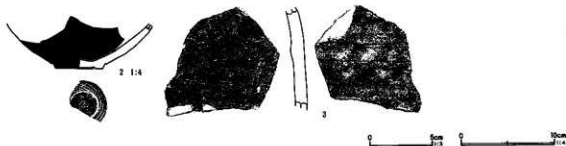
第72图 第1·6·22·27·54·64·65·100·113号土坑出土遗物



SK 150



SK 157



第73図 第150・157号土壇出土遺物

しただけである。約1/5の残存で、口縁部は、頸部に着く。外面頸部はヨコナデされるが、指頭痕が薄く残る。推定の口径は48.8cm。15世紀後半と思われる。

#### 第157号土壇出土遺物 (第73図)

第157号土壇からは平碗片と常滑壺片が1点、他にかわらけの細片、羽口と思われる細片が1点ずつ

出土した。第73図2は平碗の底部から体部下半の破片である。底部は切り離しの後、高台を削り出すが、墨付とも糸切痕が残る。内面には目跡が残る。体部下半まで灰釉が施される。胎土は黄白色で焼成は良い。15世紀後半。3は内外面とも横方向にナデられ内面には指頭痕が残る。白色粒・礫を含み、焼成は良好である。

第2表 土壇計測表

番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位	番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位
1	J-11	103	54	40.9	N-2° - E	22	P-1	(394)	(108)	54.8	N-28° - W
2	J-11・K-11	110	52	20.9	N-90° - E	23	P-1-2	(224)	104	57.3	N-72° - E
3	K-11	(182)	98	24.2	N-90° - E	24	P-1-2	320	170	53.0	N-56° - E
4	L-7	158	(82)	9.7	N-75° - E	25	P-1-2	178	112	37.8	N-67° - E
5	K-7・L-7	194	140	27.1	N-72° - E	26	O-1・P-1	150	114	24.9	N-52° - E
6	K-8・L-8	214	170	56.0	N-15° - W	27	O-1	286	220	71.0	N-72° - E
7	K-7	(48)	(46)	14.4	N-15° - E	28	O-1	(108)	(62)	62.2	N-72° - E
8	K-7	(114)	(70)	20.1	N-0° - E	29	O-2	185	129	47.5	N-25° - E
9	K-8	(90)	72	33.2	N-73° - E	30	N-2・O-2	(234)	196	39.6	N-75° - E
10	K-8	112	68	28.1	N-20° - W	31	N-2・O-2	122	(110)	35.8	N-78° - E
11	L-8-9	106	110	45.3	N-0° - E	32	N-2-3	174	(130)	45.4	N-52° - E
12	L-7	240	142	18.0	N-65° - E	33	Q-2	145	60	18.7	N-25° - W
13	L-7	124	106	53.0	N-0° - E	34	Q-2	200	70	19.5	N-20° - W
14	K-9	303	137	13.2	N-14° - W	35	P-2-3	(330)	96	45.6	N-29° - W
15	K-10	(350)	103	43.7	N-68° - E	36	P-3	329	118	60.6	N-67° - E
16	L-10	276	70	184.4	N-4° - W	37	P-3	94	(62)	47.2	N-60° - E
17	L-10	146	70	16.3	N-82° - E	38	O-3	(258)	90	14.9	N-21° - W
18	L-10	134	126	14.1	N-65° - E	39	O-3	290	142	17.0	N-30° - W
19	K-10	96	76	20.2	N-28° - W	40	O-3	(160)	80	9.2	N-55° - E
20	Q-0-1	(218)	(96)	11.7	N-17° - W	41	P-3	262	108	46.5	N-63° - E
21	Q-1	(90)	128	39.0	N-55° - E	42	O-3	238	94	25.7	N-65° - E

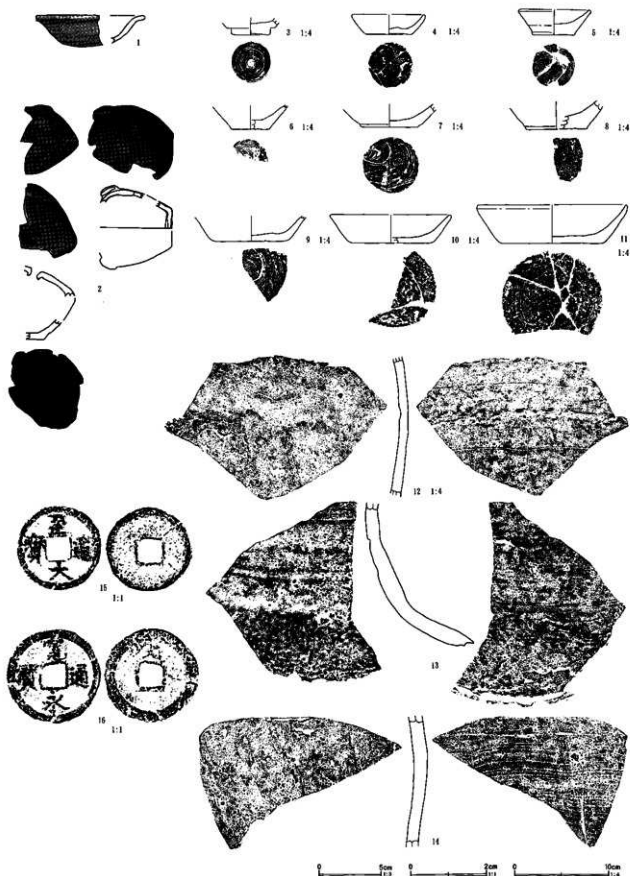
番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位	番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位
43	Q-3	166	96	46.9	N-25° -W	92	O-4-5	268	72	34.9	N-19° -W
44	Q-3	116	92	43.3	N-25° -W	93	O-5	(110)	(60)	16.5	N-68° -E
45	Q-3	144	89	24.9	N-31° -W	94	O-5	284	98	71.6	N-14° -W
46	Q-3	(100)	88	29.9	N-30° -W	95	P-5	290	86	71.0	N-23° -W
47	Q-3	198	110	42.5	N-26° -W	96	Q-3 R-3	(90)	60	50.0	N-33° -W
48	Q-3	154	100	41.5	N-30° -W	97	O-5 P-5	(147)	84	32.2	N-70° -E
49	Q-3	140	116	27.2	N-69° -E	98	O-5 P-5	269	103	63.8	N-28° -W
50	P-3・Q-3	(64)	90	12.5	N-25° -W	99	O-5 P-5	(156)	136	39.5	N-19° -W
51	P-3	258	126	47.4	N-71° -E	100	P-5	(65)	61	23.2	N-15° -W
52	P-3	(218)	90	29.2	N-30° -W	101	P-5	166	(77)	37.0	N-11° -W
53	P-3	280	102	36.1	N-28° -W	102	P-5	167	84	43.3	N-10° -W
54	P-3	174	78	21.6	N-14° -W	103	N-4 O-4	236	110	52.1	N-20° -W
55	P-3-4	178	76	19.2	N-63° -E	104	O-5	126	117	95.6	N-22° -W
56	P-3-4	242	96	20.5	N-63° -E	105	O-5	170	72	22.8	N-21° -W
57	O-3	388	106	54.5	N-20° -W	106	M-5	78	69	45.0	N-80° -E
58	O-3	(280)	(94)	27.5	N-23° -W	107	O-5 P-5	94	58	12.2	N-58° -E
59	O-3	338	96	39.3	N-72° -E	108	M-7	330	155	20.9	N-17° -W
60	O-3 P-3	(402)	104	32.0	N-67° -E	109	N-6	436	163	92.1	N-68° -E
61	O-3 P-3	250	88	36.5	N-67° -E	110	Q-6	161	100	10.9	N-69° -E
62	P-3	270	96	33.4	N-71° -E	111	R-6	151	79	28.1	N-67° -E
63	P-3	260	96	30.4	N-68° -E	112	R-7	174	93	34.1	N-82° -E
64	P-3	180	(84)	12.4	N-66° -E	113	Q-8 R-8	262	138	40.0	N-10° -W
65	O-3-4 P-4	348	129	41.8	N-28° -W	114	Q-8 R-8	206	94	48.0	N-75° -E
66	O-3-4 P-3-4	(1176)	101	3.5	N-54° -E	115	R-8	180	80	39.2	N-76° -E
67	P-3-4	174	72	14.6	N-60° -E	116	R-8	162	(103)	34.4	N-68° -E
68	P-4	132	76	12.9	N-5° -W	117	R-8	(102)	(102)	24.7	N-76° -E
69	Q-4	185	76	35.1	N-25° -W	118					
70	P-4 Q-4	248	84	55.5	N-47° -E	119	Q-8	168	97	35.7	N-9° -W
71	P-5	188	80	35.8	N-25° -W	120	Q-8	182	92	16.5	N-13° -W
72	Q-5	266	86	67.1	N-83° -E	121	Q-8	164	103	23.0	N-72° -E
73	Q-5	200	90	48.5	N-72° -E	122	Q-9	(154)	97	26.0	N-11° -W
74	Q-4-5	254	102	40.7	N-64° -E	123	Q-9	(186)	75	27.0	N-73° -E
75	Q-5	146	91	47.6	N-73° -E	124	Q-9	(184)	100	18.8	N-82° -E
76	O-5	280	106	35.6	N-26° -W	125	Q-9	(167)	(50)	31.8	N-15° -W
77	N-5 O-5	162	106	9.7	N-62° -E	126	Q-9	102	(49)	27.0	N-12° -E
78	O-5	208	88	52.2	N-11° -W	127	Q-8 Q-9	(206)	107	34.9	N-15° -W
79	O-4	134	(56)	45.5	N-29° -W	128	Q-9	120	92	33.5	N-24° -W
80	O-4	201	117	59.8	N-61° -E	129	Q-9	402	(146)	24.4	N-8° -W
81	O-4	(100)	100	45.1	N-20° -W	130	Q-9	240	84	32.8	N-21° -W
82	O-4	253	109	53.2	N-69° -E	131	Q-9	(194)	(88)	18.9	N-21° -W
83	O-4	(142)	95	49.0	N-67° -E	132	Q-7-8	207	106	37.0	N-80° -E
84	N-4	400	121	51.9	N-73° -E	133	Q-8	98	(80)	27.3	N-17° -W
85	N-4	(84)	83	23.6	N-18° -W	134	Q-8	240	110	53.4	N-82° -E
86	N-4 O-4	-	124	43.2	-	135	Q-8	(74)	(60)	18.0	N-97° -E
87	O-4	172	74	10.0	N-17° -W	136	Q-8	220	122	43.1	N-72° -E
88	O-4	220	78	13.6	N-25° -W	137	Q-8	(194)	140	19.2	N-90° -E
89	O-4	120	62	23.3	N-24° -W	138	Q-8	194	120	37.1	N-80° -E
90	O-5	268	105	33.3	N-11° -W	139	Q-8	(150)	114	40.4	N-70° -E
91	P-4-5	(286)	81	20.3	N-31° -W	140	Q-8	190	103	35.0	N-15° -W

番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位	番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位
141	Q-9	(220)	(92)	22.7	N-16° -W	155	N-9	168	91	22.0	N-22° -W
142	Q-7	136	78	61.7	N-18° -W	156	N-9-10	310	127	23.4	N-20° -W
143	Q-7	(204)	85	22.0	N-25° -W	157	N-9-10	307	102	47.2	N-6° -W
144	Q-9	176	123	90.3	N-7° -E	158	M-9	284	104	13.7	N-6° -W
145	Q-9	176	120	31.3	N-9° -W	159	Q-7	124	74	40.1	N-2° -W
146	Q-8	(50)	80	21.1	N-85° -E	160	J-10	(40)	(22)	45.2	N-0° -E
147	Q-8	128	110	37.4	N-11° -W	161	L-10	113	106	14.8	N-78° -E
148	N-9-10	328	60	34.5	N-0° -E	162	N-10	(144)	80	20.1	N-25° -W
149	M-9	234	70	20.5	N-8° -W	163	N-10	100	(60)	7.2	N-7° -W
150	N-9	252	106	15.9	N-77° -E	164	O-4	(74)	60	34.2	N-17° -W
151	N-9	311	120	27.5	N-80° -E	165	Q-5	118	54	14.0	N-21° -W
152	N-9	319	74	38.4	N-17° -W	166	Q-4	(90)	68	16.0	N-66° -E
153	N-9	(56)	72	29.6	N-75° -E	167	P-3	(80)	64	31.8	N-58° -E
154	N-9	308	112	27.7	N-19° -W	168	O-1	170	102	22.8	N-85° -E

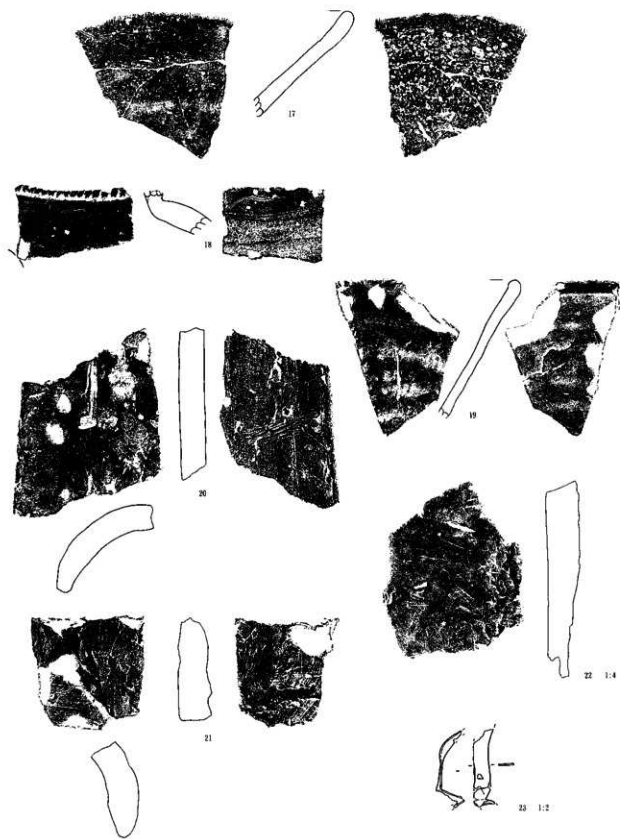
## h グリッド・その他出土遺物 (第74・75図)

1は御深井軸の皿である。軸には細かい慣入が入り、表面に溶けた鉄分が点々と浮き出している。胎土は黄白色でやや粗い。N-5グリッド出土。2は青磁で水滴と思われる。全体は判らないが上面に一孔が開き、底部は直径3cmほどの円形になると思われる。型作りで上下を別に作り合わせている。上側面には細長く、木葉状の刻みの入った意匠が貼付される。軸は厚く、緑色が強い。軸下端は鉄分により茶色に線取り状を呈する。胎土は灰色で硬質である。L-9グリッド出土。3は天目碗の底部である。底部は僅かに内反りである。胎土は灰色味を帯びた黄白色で焼成は硬質である。底径4.1cm。N-3グリッド出土。4~11は轆轤成形のかわらけである。4~6は小型で、5・6は底部が厚く体部は直線的に開く。7は体部が内湾し内外面黒色処理される。10・11は体部が直線的に開いて口縁部が僅かに内湾する。胎土は赤色粒を含み、4・6には白色針状物質が入る。色調は淡褐色を呈し、5以外は軟質である。4は口径7.6cm、器高2.1cm、底径4.8cm。L-7グリッドP5出土。5は口径8cm、器高2.7cm、底径4.5cm。O-3グリッドP1出土。6は推定底径4cm。N-3グリッド出土。7は底径6cm。L-8グリッドP1出土。8は推定底径7.1cm。Q-7グリッド出土。9は推定底径8cm。L-7グリ

ッドP7出土。10は口径12.8cm、器高3cm、底径8.4cm。L-7グリッドP5出土。11は口径15.8cm、器高4cm、底径10.5cm。L-7グリッドP4出土。12~14は常滑甕で3片とも同一個体と思われる。13は頸部で内外面横ナデされ、外面には自然軸が掛かる。12・14は胴部片である。内面は指頭痕の上に篋状工具による横ナデ、外面は縦方向の篋調整がされる。胎土は白色砂粒を多く含み、一部は発泡している。また、鉄分による黒斑が多く見られる。12はL-7グリッド出土。13・14はL-8グリッド出土。15・16は銭貨である。15は「至大通寶」で、傷みが激しい。元の武宗時代に鑄造され、初鑄は1310年である。L-10グリッドP1出土。16は「寛永通寶」。背文である。傷みが激しく歪んでいる。O-7グリッド出土。17・19は瓦質の鉢である。17は口縁部が丸く作られ、僅かに片口の基部が残る(拓本外面右側)。胎土は砂粒、礫を多く含み片岩が見られる。焼成は良い。Q-8グリッドP4出土。19は口縁部は丸く内側に折り返される。胎土は砂粒と角閃石を含み、器厚は薄く焼成は良い。Q-1グリッド出土。18は瓦質の風炉と思われる。口縁部の立ち上がりには型による縦方向の刻み目が入る。体部外面は横方向に丁寧にみがかれ、内面は横方向のナデである。胎土は砂粒と赤色粒が特に多



第74図 グリッド出土遺物(1)



第75図 表採・グリッド出土遺物(2)

第3表 出土銭貨計測表

番号	銭名	銭径(A)	銭径(B)	内径(C)	内径(D)	銭厚	重量	出土遺構	備考
第35回	大観通寶	24.90	24.86	21.47	21.24	1.62	2.66	SB4 P5	北宋 1107
第35回	洪武通寶	23.73	23.65	18.02	17.66	1.72~1.75	3.85	# P16	明 1368
第72回	祥符元寶	22.44	22.36	18.22	17.48	0.99~1.09	2.24	SK1	北宋 1009
第72回	天聖元寶	24.87	24.64	20.49	20.22	1.10~1.16	3.33	#	北宋 1023
第72回	至和通寶	24.36	24.72	18.60	18.66	1.17~1.21	-	#	欠損 北宋 1054
第72回	熙寧元寶	23.43	23.43	19.06	19.25	1.20~1.21	3.25	#	北宋 1068
第72回	熙寧元寶	-	-	-	-	0.99~1.01	(1.75)	#	折損 北宋 1068
第72回	洪武通寶	23.14	23.67	19.63	19.39	1.45~1.62	3.28	#	明 1368
第72回	永泰通寶	24.89	-	20.62	-	1.28~1.30	-	SK113	明 1408
第74回	至大通寶	-	-	-	-	1.62~1.70	(2.66)	L-10 P1	折損 元 1310
第74回	寛永通寶	-	-	-	-	1.27~1.30	2.89	0-7	蓋み

く、僅かに空隙がある。焼成は良く硬質である。P-7グリッド出土。20・21は丸瓦である。20は凸面縦方向のナデ、凹面は布目で側面側は3cmの幅で篋ケズリされる。側面は面取はされないが丸みを帯びる。胎土は砂粒と礫を含み、淡褐色を呈するが焼成は良く硬質である。Q-1グリッド出土。21は軒丸瓦の丸瓦部と考えられる。凸面は縦方向のナデ、凹面は布目で側面側が篋削りされるのは20と同様であるが、凸面端部は薄く粘土が剥離して横方向のナデが見られる。凹面は同じく端部に粘土を補充し

た痕跡がある。胎土は砂粒の他に礫を多く含み、色調は外面黒灰色、胎土は灰色を呈する。焼成は良い。O-6グリッド出土。

22は板碑の破片と思われるが砥石に転用されている。大きさから置き砥石として使用したものであろう。表探である。23は銅製で帯状金具の破片である。残存長4.0cm、幅0.8cm、厚さは0.1cm弱と薄い。全体的に劣化しており、折れ曲がっている。用途は不明である。Q-5グリッドP1出土。

## IV 在家遺跡

### 1. 調査の概要

在家遺跡は川越市大字下広谷地内に所在し、台地上に立地する。南側には小さな谷が入り、標高差は調査区内で約2mある。調査は戸宮前館跡に接する北側をA区、南側の谷に面する部分をB区とした。平成11年度に大部分を調査したが、A区の一部を平成12年度、B区の一部を平成13年度に調査した。また、B区の北半分は未調査である。調査時のグリッドは隣接する戸宮前館跡と共通のものを使用した。

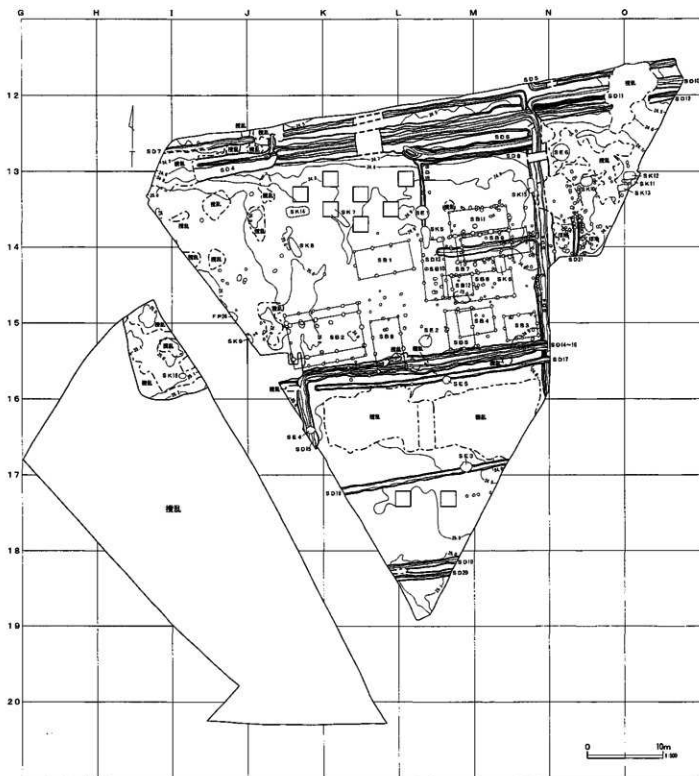
A区で検出された遺構は、縄文時代の落とし穴状遺構2基、早期の炉穴1基、中世以降の掘立柱建物跡12棟、井戸跡6基、溝跡17条、土壌10基である。溝跡は方形の区画を成し、4区画検出した。A区で検出された中世以降の遺構は、戸宮前館跡のものと内容的に変わりはなく一連の遺構と解釈される。遺物は、縄文時代：期の土器片少量と常滑を主とする陶器、土器、銭貨などが出土した。中でも第1号井戸跡からは常滑壺・緑釉小皿などが纏まって出土し、第5号土壌からは釜が2個体出土した。

B区は谷に下がっていく部分で、谷は台地の南と東にあり、東の谷は南のより低い谷に向かって下がる小さなものである。比較的傾斜があり北側は谷頭に近いと思われる。南は緩い傾面である。旧石器時代の礫群8基、縄文時代早期の炉穴27基、土壌7基、中世以降の溝跡6条が検出された。礫群は東側の谷に集中しており、谷の中を選んで占地している。早期の炉穴は南東部の斜面に集中していた。礫群が谷筋に分布していたのに対し占地に違いがある。中世以降は溝跡があるが地境的な溝であろう。遺物は旧石器時代の石器、縄文時代は早期から中期の土器が検出され、中世以降の遺物は少ない。なお、遺構番号は両区で通し番号としたため、それぞれの区で番号が飛んでいる場合がある。



第76図 在家遺跡周辺地形図

1. 検出された遺構と遺物  
(1) A区



第77図 A区全測図



## A 縄文時代

### a 土壌

縄文時代の土壌は2基検出された。いずれも落し穴状遺構であった。

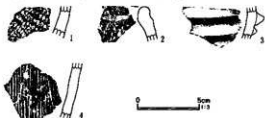
#### 第7号土壌 (第79図)

K-13グリッドに位置する。平面形は、船底状の長楕円形である。底面から幅狭でほぼ垂直に立ち上がり、上部で開く漏斗状に掘削されているものである。長軸が3.0m、短軸が0.9m、深さが0.9mである。長軸方向はN-50.5°-Wである。遺物は出土しなかった。

### b 炉穴

#### 第26号炉穴 (第79図)

遺物が出土しなかったため明確ではないが、検出された状況から炉穴とした。残存している長さ1.3m、幅0.7m、深さ0.3mである。



第78図 グリッド出土遺物(縄文時代)

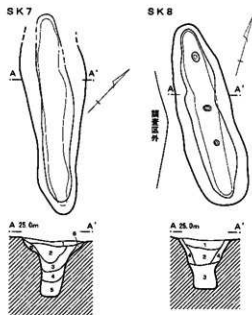
#### 第8号土壌 (第79図)

J-13、J-14グリッドにまたがって位置する。平面形は、船底状の長楕円形である。第7号土壌と同様に、漏斗状に掘削されている。また底面からは、ビット状の小穴が、長軸方向に3個並んで検出された。長軸が2.9m、短軸が0.9m、深さが0.8mである。長軸方向はN-29°-Wである。遺物は出土しなかった。

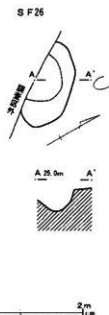
### c グリッド出土遺物 (第78図)

1は前期中葉の関山式土器で、胎土に繊維を含んでいる土器の破片である。地文は単節RLの縄文を横方向に施文している。

2~4は中期後葉の加曾利E系土器である。2は深鉢の口縁の破片である。口縁部には沈線を巡らし、地文は単節LRの縄文を横方向に施文している。3は頸部の破片で、胴部とを区画する2本の隆帯を貼付けている。4は胴部の破片で、櫛歯状の条線が地文として施文されている。



第79図 第7・8号土壌、第26号炉穴



#### 第7号土壌

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量・炭化物微量
- 2 黒褐色土 ローム粒子・ブロック、白色粒子多量  
炭化物微量
- 3 暗黄褐色土 ローム粒子・ブロック多量より多い  
炭化物微量
- 4 暗褐色土 ローム粒子・ブロック含む
- 5 褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
- 6 黄褐色土 ソフトローム崩れたもの  
2~8、非常に固くしまっている

#### 第8号土壌

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量・炭化物微量
- 2 暗褐色土 ローム粒子多く、ロームブロック(〜1.5cm)少量  
白色粒子多量、固くしまる
- 3 褐色土 ローム粒子・ブロック多量、炭化物微量  
固くしまる、腐めいる
- 4 暗黄褐色土 ソフトローム崩れたもの

## B 中世以降

### a 区画と溝跡

前述のように、A区は車がようやく通れるような道路を挟んで戸宮前館跡と隣接するため、遺構の内容は戸宮前館跡と同様である。道路を挟んで南側は大半が攪乱で破壊されていたために、調査は道路に挟まれた三角形の部分となったが、ここもいたる所に攪乱が入っていた。

検出された溝跡は17条で戸宮前館跡と同じく2種類に分けられるが、深く断面形が葉研状を呈するのは第4号溝跡だけである。他の溝跡は区画を成しているのが浅く、断面もU字型のものが多い。調査面積が限られたため区画の単位は捉え難いが4区画を想定した。なお、各溝跡の説明は省略し表に代える。

第1区画は第4号溝跡の内側である。第4号溝跡は東西方向に約50m検出されており、M-12グリッドで直角に曲がり南に37m延びて調査区外に出る。断面は箱葉研状を呈し、土層の状態から埋め戻されたことが窺える。遺物は少量であるが青磁や常滑壺などが出土している。区画内には井戸跡や掘立柱建物跡が検出された。掘立柱建物跡は全部で12棟検出され半数以上が重複している。どの掘立柱建物が伴うものかを抽出するのは困難であるが、これらの建物のうち第2号掘立柱建物跡は、南北に庇を持ち規模も最大であることから中心的な建物と考えられる。戸宮前館跡第4区画と同じように墓塚と考えられる長方形土壇は3基しか検出されていないことから建物跡は比較的長く存続していたと考えられる。また、掘立柱建物跡は区画の北側に集中していることから第14～17号の浅い溝跡が区画内を分ける機能を持っていたとも考えられる。

第2区画は第8・9・13号溝跡で囲まれる部分を想定した。東側は良く分からない。溝の内側で南北に11mで、東西は仮に第4号溝とすると14mである。第9号溝跡と第13号溝跡は接続せず南西の角が開いている。第9号溝跡は第1号井戸跡と重複しておりこれより新しい。第5号土壇で止まっているが新旧関係はないのではないと思われる。第5

号土壇は土壇として取り扱っているが、細長い不整形をしており他の土壇とは形態が違い区別して考えなければならぬ。そして第13号溝跡と幅、深さとも同規模であることから、ここでは第2区画を構成する溝の一部と考えておきたい。第5号土壇からは粘土と共に土釜が2個体分出土したが粘土や遺構に被熱した痕は見られなかった。東側は第4号溝跡があるが第8・13号溝跡との新旧関係は掴めていない。第4号溝跡の東側は攪乱が激しく遺構がかなり飛ばされているため第8・13号溝跡が東まで延びていた可能性も否定できない。攪乱の下からはピットが2箇所に集中して検出されており、第21号溝跡がピット群に付いていると見ることもできる。第2区画に伴うかどうかは判らないが、これらのピットが「門」のようなものを連想させるとするのが調査時の所見である。区画内の施設としては、伴うとすれば、位置的に第11号掘立柱建物跡が該当するだけである。

第3区画は第15号溝跡で囲まれる空間を想定した。第15号溝跡は東西方向に33m検出されており、J-15グリッドでほぼ直角に曲がり南に10m延びて調査区外に出る。東は第4号溝跡と出会う所で調査区外になるため詳細は不明である。南は調査区の端に第19号溝跡と第20号溝跡がある。いずれも大15号溝跡よりやや浅いが形状は似ている。どちらとも判断しかねるがこれらの溝跡が南側を区切るものと考えておきたい。南北の距離は26～27mになる。内部は北半分が攪乱で遺構の状態が悪い。井戸跡2基と溝跡2条の検出に留まった。

第4区画は第1区画の東側を想定しておくが、調査区内の面積が狭く大半が攪乱されているため具体的な様相は分からない。第10号溝跡によって区画される。区画内には井戸跡1基、土壇4基、ピット群が検出されたが、ピット群は第2区画に関連する可能性もあり、井戸跡も微妙な位置にある。

## 第4号溝跡出土遺物 (第82図)

1は青磁皿。高台下端は欠けている。軸は高台内まで厚く掛けられ、青緑色を呈し粗い慣入が入る。龍泉窯系。2は青磁酒会壺と思われる。軸は青緑色で極めて厚い。龍泉窯系。3は瀬戸片口鉢。軸は粗い慣入が入りやや青味を帯びて少量の鉄分が点状に浮き出している。外面は口縁部下まで掛けられる。胎土は黄白色で少量の砂粒を含みやや空隙がある。17世紀以降の製品である。4は甕鉢成形のかわらけ。破片化してから被熱しており断面まで真っ黒である。底径5cm。5は常滑壺。口縁部破外側に小さく折り返す。胎土は砂粒を多く含む発泡している。6～9は常滑壺。胎土は砂粒を多く含むが礫は少ない。区画に伴うものと考えてよさそうである。

## 第5号溝跡出土遺物 (第82図)

10は在地産の蓋と思われる。底面は離れ砂のような痕跡である。胎土は多量の赤色粒と砂を普通程度含み、色調は淡褐色を呈する。焼成は良く硬めである。推定口径28cm。器高1.8cm。

## 第7号溝跡出土遺物 (第82図)

11は瀬戸美濃系丸皿。高台は鋭い三角形である。重ね焼きで、内面の灰褐色は高台の跡が剥けている。胎土は灰色を呈し焼成は良好である。底径5.8cm。

## 第4表 溝跡計測表

番号	グリッド	長さ	最大幅	最小幅	最大深	最小深	方位	方位	備考
4	I-12~M-15	82.00	3.60	2.60	0.81	0.61	N-82°-E		
5	M-11~O-11	19.00	0.80	0.46	0.51	0.20	N-81°-E		
6	L-12~M-12	16.00	1.90	1.00	0.26	0.13	N-82°-E		
7	H-12~M-12	50.00	0.90	0.48	0.22	0.03	N-81°-E		
8	L-12~M-12	15.60	0.48	0.24	0.12	0.04	N-82°-E		
9	L-12~L-13	8.00	0.60	0.34	0.15	0.04	N-35°-W		
10	M-12~O-11	21.00	1.40	0.90	0.63	0.35	N-82°-E		
11	M-12~N-12	9.40	0.70	0.22	0.15	0.02	N-82°-E		
12	M-12~O-11-12	18.60	1.40	0.10	0.42	0.21	N-82°-E		
13	L-14~M-13	13.00	1.10	0.60	0.21	0.07	N-83°-E		
14	K-15~M-15	30.00	(0.80)	(0.48)	0.35	0.16	N-83°-E		
15	J-16~M-15	42.00	(1.20)	(0.48)	0.41	0.24	N-12°-W	N-86°-E	
16	K-15~M-15	24.00	(0.70)	(0.28)	0.28	0.10	N-81°-E	N-89°-E	
17	J-15~M-15	31.20	0.86	0.48	0.40	0.14	N-87°-E	N-81°-E	
18	K-17~M-16	22.00	0.98	0.56	0.53	0.11	N-80°-E		
19	K-18~L-18	9.00	0.86	0.54	0.23	0.12	N-85°-E		
20	K-18~L-18	7.00	1.00	0.76	0.32	0.19	N-86°-E		
21	N-13~N-14	5.00	1.00	0.34	0.26	0.04	N-10°-E		

17世紀。

## 第8号溝跡出土遺物 (第82図)

12は天目碗。鉄軸でくすんだ茶色に発色し、所々発泡している。胎土は暗灰色で白色砂粒を少量含み、僅かに空隙が見られる。推定口径11cm。13は在地産と思われる瓦質壺。口縁部は短く立上り口唇部は角張っている。器表が荒れて調整は分らない。胎土は砂粒、礫を少量含む。色調は器表が明灰色、内部は暗灰色を呈する。焼成は良い。

## 第10号溝跡出土遺物 (第82図)

14は瀬戸産搦鉢。鉄軸が掛かり胎土は黄褐色から灰褐色を呈する。ごく僅かに砂粒を含み空隙も見られるが緻密な胎土である。推定底径11.6cm。

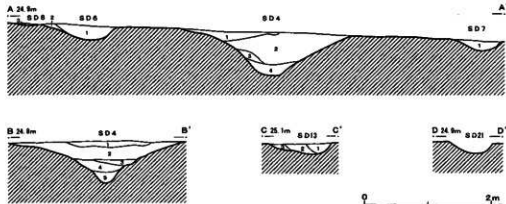
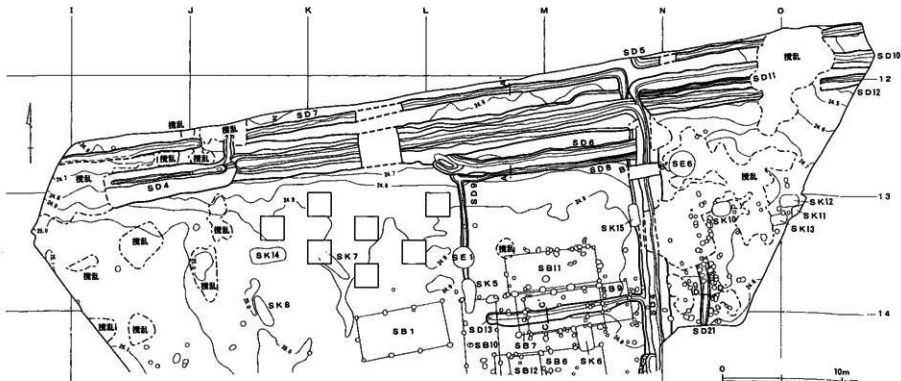
## 第13号溝跡出土遺物 (第82図)

15は常滑壺。胴部下方の破片と思われる内面だけが擦れていることから搦鉢に転用されたと考えられる。16は搦鉢。口縁部内面は突出する。外面は轆轤目が強い。色調は暗赤褐色で砂粒を含む。

## 第15号溝跡出土遺物 (第82図)

17は常滑壺。内面だけが擦れている。18は瀬戸搦鉢。口縁部は外側に折れ口唇部は三角形に短く立ち上がる。大窯の最終段階と思われる。19は在地産瓦質鉢。砂粒を含み焼成良好。

第80図 溝跡 (1)



第4号溝跡 (A-A')

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量
- 2 暗褐色土 多量のロームブロックが混じった状態で混入、埋戻土
- 3 褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量
- 4 暗褐色土 ローム粒子を多量

第4号溝跡 (B-B')

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量、炭化物少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量、粗いローム粒が多量、ロームブロック少量、埋戻土
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量、埋戻土
- 4 暗褐色土 ローム粒子少量、ロームブロック多量、埋戻土
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量、炭化物・焼七粒少量
- 3 褐色土 ローム粒子密に多量、ロームブロック多量
- 4 暗褐色土 ツブローム多量

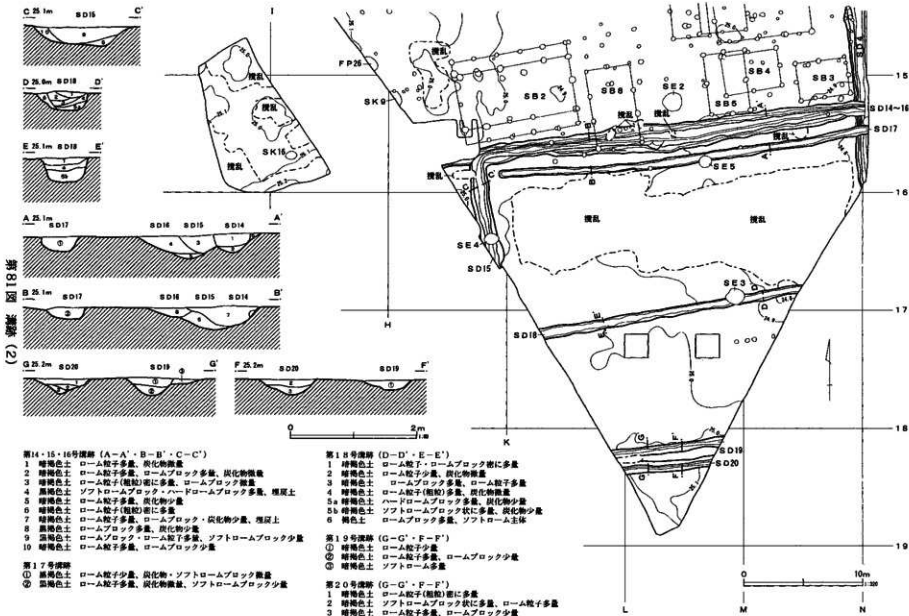
第7号溝跡 (A-A')

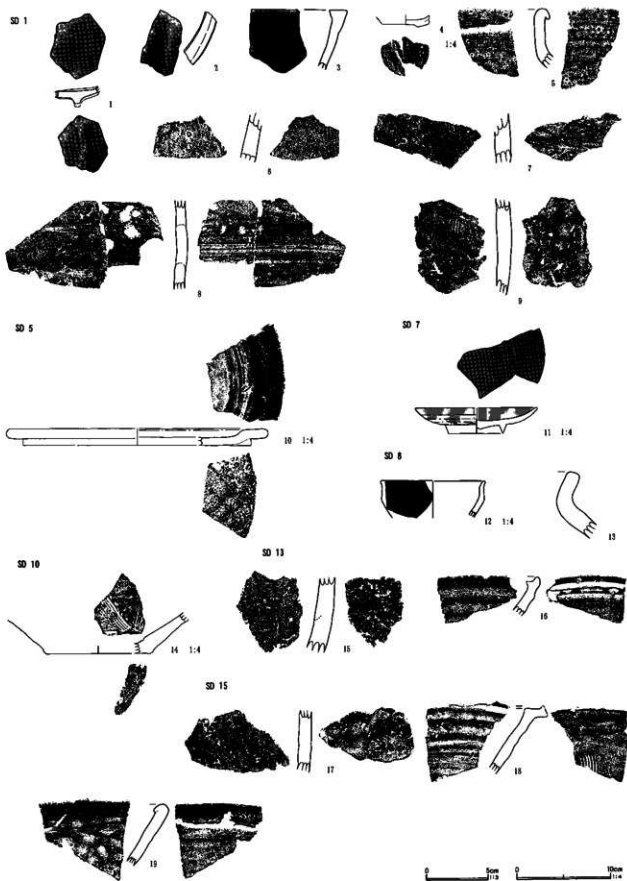
- 1 暗褐色土 ローム粒子(粗粒)多量

第13号溝跡 (C-C')

- 1 黒褐色土 ローム粒子
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量、炭化物微量
- 3 暗褐色土 ツブローム主体







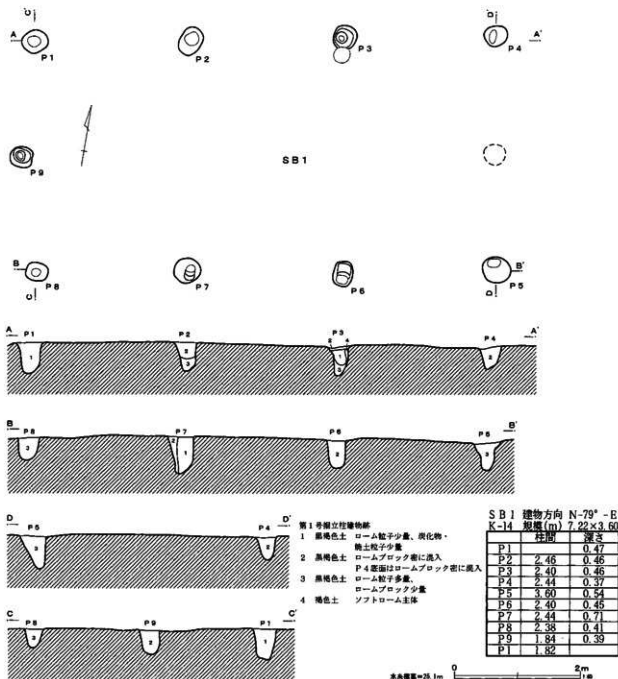
第 82 図 溝跡出土遺物

b 掘立柱建物跡

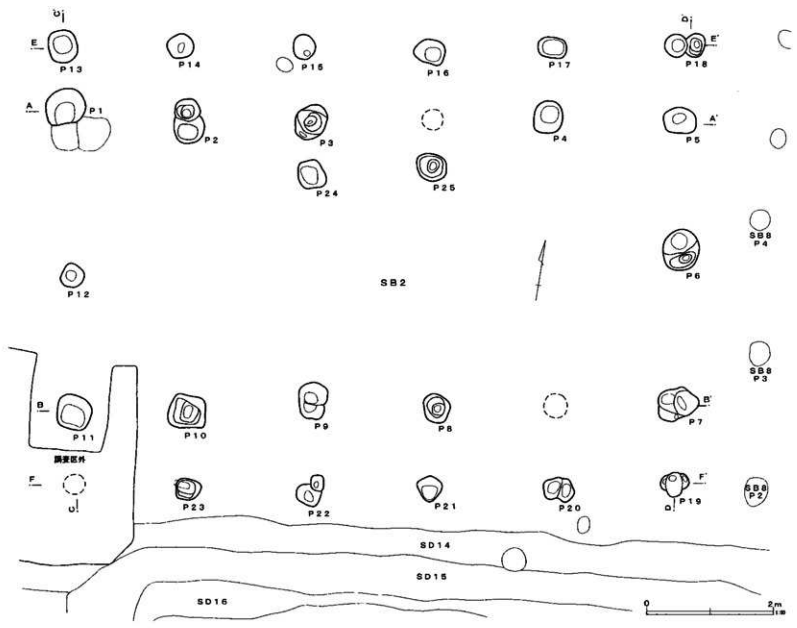
第1号掘立柱建物跡 (第83図)

K・L-13・14グリッドで検出された。重複する遺構はない。東西棟で桁行3間、梁行2間である。規模は桁行は北側が7.22南側は7.3mである。梁行は西側が3.66mで東側は3.6mであるか間の柱穴

は検出されなかった。柱穴の深さは40～50cmであることから当初からなかった可能性が高い。遺物は、各柱穴から土器細片が僅かづつ出土し、P2から常滑甕小片が出土したが図示できるものはない。

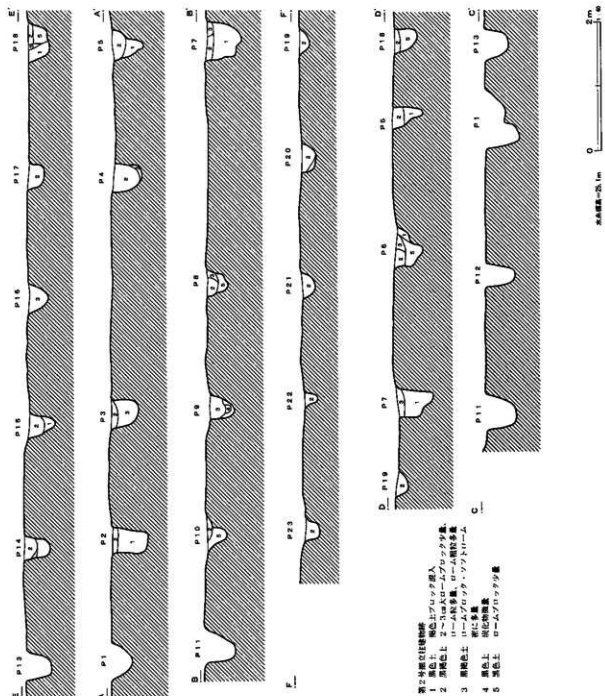


第83図 第1号掘立柱建物跡



第04图 第2号墓立柱基物跡(1)





第85図 第2号掘立柱建物跡(2)

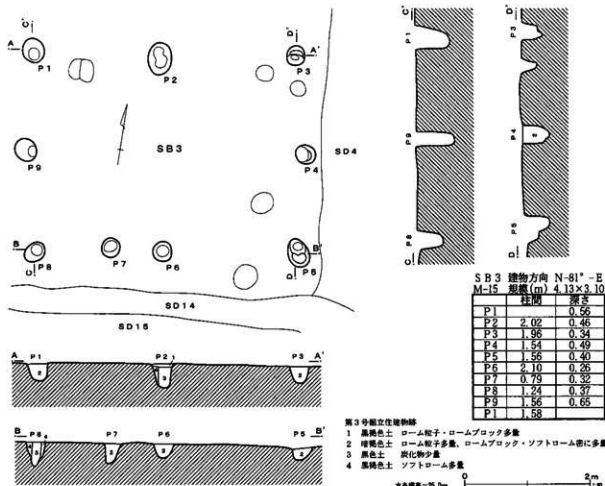
S B 2 建物方向 N-80°-E  
 K-15 規模(m) 9.48×4.78

	柱間	深さ
P1		0.33
P2	1.92	0.63
P3	1.94	0.56
P4	3.72	0.63
P5	2.16	0.50
P6	2.00	0.45
P7	2.44	0.63
P8	3.76	0.47

	柱間	深さ
P9	1.98	0.52
P10	1.96	0.46
P11	1.78	0.47
P12	2.18	0.46
P1	2.60	
P13	1.08	0.37
P14	1.82	0.52
P15	1.96	0.62

	柱間	深さ
P16	1.98	0.51
P17	1.92	0.32
P18	2.12	0.42
P5	1.24	
P7		
P19	1.23	0.40
P20	1.80	0.51
P21	2.02	0.26

	柱間	深さ
P22	1.88	0.22
P23	1.96	0.38
P24		0.55
P25	1.90	0.62



第86図 第3号掘立柱建物跡

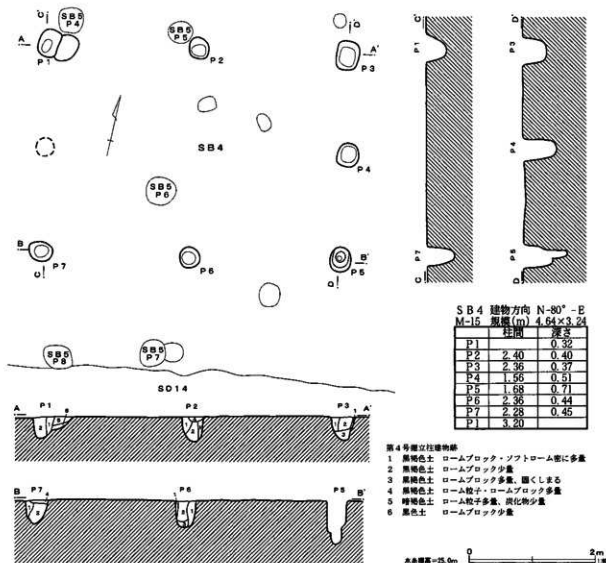
第2号掘立柱建物跡 (第84・85図)

J・K-14・15グリッドで検出された。重複する遺構はない。第1号掘立柱建物跡の南3mにあり、建物方向がほぼ同じで、第1号掘立柱建物跡の西側の妻と本建物跡の東側の妻がほぼ同じ線上にある。桁行5間、梁行2間の東西方向の建物で北側と南側に庇を持つ。規模は桁行は北側が9.34m、南側は9.48mである。梁行は西側が4.78m、東側が4.44mである。庇の出は1.2mほどである。北側の桁行中央の1mほど内側に柱穴が2個検出された。並びが揃うことから建物跡に伴うものと考えられ、この部分に何らかの施設があったと思われる。柱穴は隅丸方形で柱痕の確認できたものはない。抜き取り痕の明確なものもなく建替えもなかったと思われる。遺物は、P14からかわらけ細片と緑釉皿の底部片が出土した。胎土は緻密で明灰色を呈し硬質で

ある。P16からは平碗の口縁部破片が出土した。胎土は黄白色を呈し、やや硬質である (図版26)。他にP5・10からかわらけの細片が、P22からは常滑の破破片が出土したが図示できるものはなかった。

第3号掘立柱建物跡 (第86図)

M-14・15グリッドで検出された。第4号溝跡と第15号溝跡の交差する角にあり、1.5mほど西側に第4号掘立柱建物があるが、重複する遺構はない。東西方向の建物で桁行2間、梁行2間である。規模は桁行北側は3.98m、南側は4.13mで梁行は西側が3.14m、東側は3.1mである。桁行南側のP6とP8の間に柱穴が1個検出された。柱筋に乗っており覆土も同様であることから本建物跡に伴うと考えた。P6に寄っており距離は約80cmである。出入り口と考えておきたい。柱穴は円形ないしは楕円形で直径30cm程度である。深さは30~40cm代が多



第87図 第4号掘立柱建物跡

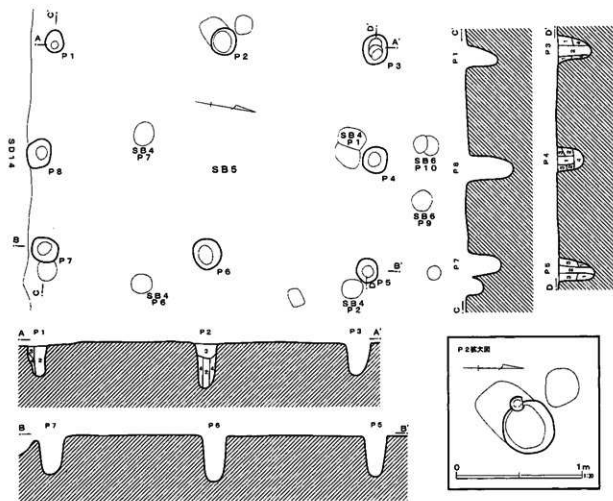
くP2とP8には柱痕が観察された。柱痕と柱穴壁との隙間はあまり広くないことから柱材が入る程度の穴を掘って建てている。また、柱穴の状態から建替はなかったと思われる。遺物は出土しなかった。第4号掘立柱建物跡(第87図)

L・M-14・15グリッドで検出された。第3号掘立柱建物跡に隣接する。第3号掘立柱建物跡とは軸を同じくし1間分北側にずらして建てられている。また、第5号掘立柱建物跡と重複しているが柱穴が、直接重複しているものはないため新旧関係は不明である。東西方向の建物で桁行2間、梁行2間である。規模は、桁行北側は4.76m、南側は4.64mである。梁行は西側が3.2mであるが間の柱穴は検出されな

かった。東側は3.24mである。柱穴は隅丸方形が基調で、深さは40cm台が最も多い。土層は第3層が固く締まっていることからその上にある第2層が柱痕である。土層から取り回しや建替はなかったと考えられる。遺物は、P4から20cm大の被熱した礫が出土したが柱穴に伴うものではない。P5からは在地産鉢の小破片が出土した。図示できるものはない。

第5号掘立柱建物跡(第88図)

L・M-14・15グリッドで検出された。第4号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。南北棟で桁行2間、梁行2間である。規模は、桁行は西側が5.04m、東側は5.08m、梁行は北側が



第5号掘立柱建物跡

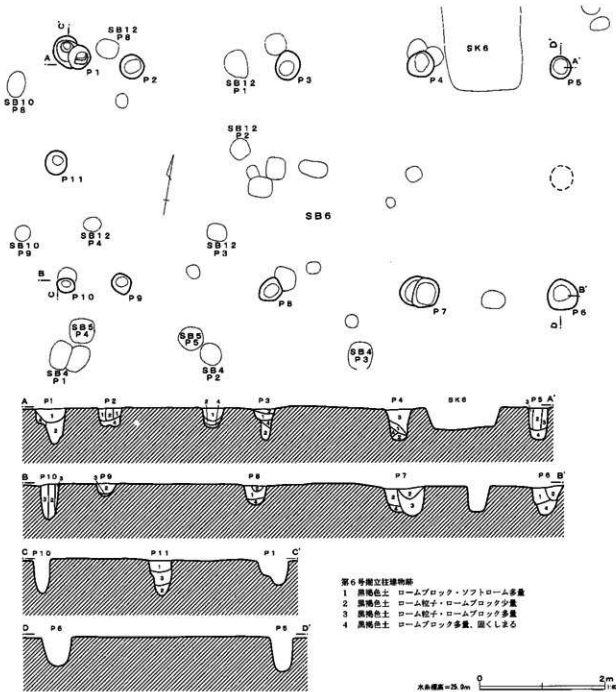
- 1 黒褐色土 ロームブロック・ソフトローム多量
- 2 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量
- 3 黒褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量
- 4 黒褐色土 ロームブロック多量、固くしる

第88図 第5号掘立柱建物跡

3.48 m、南側は3.18 mである。柱穴は隅丸方形で30×40 cm程度のものが多い。深さは、P4以外は50～70 cm台で他の建物よりやや深めである。柱痕は土層断面をとった全ての柱穴で確認できた。建替えはなかったものと思われる。遺物はP2とP5から、かわらけが出土した。第90図1はP2の上面で出土した。轆轤成形で口縁部の一部が欠失している。体部は外傾し、口縁部はさらに開く。底部は厚い。内面底部は一方向にかるく指ナゲされる。胎土は砂粒を少量含み、色調は淡褐色を呈する。焼成は普通程度である。口径13.1 cm、器高3.9 cm、底径5.6 cmである。

第6号掘立柱建物跡 (第89図)

L・M-14グリッドで検出された。重複する遺構はない。北側に1.5 mの間隔をおいて第7・9号掘立柱建物跡があり、南側は1 mの間をおいて第4号掘立柱建物跡がある。これらの建物跡はいずれも軸方向を同じくしている。また、第12号掘立柱建物跡と重複しているが、柱穴の重複がないため新旧関係はわからない。東西方向の建物で桁行4間、梁行2間である。規模は、桁行は北側は7.73 m、南側は7.89 mで、梁行は西側が3.38 m、東側は3.56 mである。P1-P2、P9-P10間は約1 mと狭い。P2、P9は浅いことから建物を支える柱で



第89図 第6号掘立柱建物跡

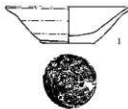
SB5 建物方向 N-7° - E  
L-15 規模(m) 5.08×3.48

	柱間	深さ
P1		0.51
P2	2.64	0.70
P3	2.40	0.58
P4	1.76	0.42
P5	1.72	0.66
P6	2.54	0.72
P7	2.54	0.55
P8	1.50	0.72
P1	1.68	

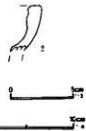
SB6 建物方向 N-83° - E  
M-14 規模(m) 7.89×3.56

	柱間	深さ
P1		0.54
P2	1.02	0.29
P3	2.43	0.54
P4	2.10	0.60
P5	2.18	0.53
P6	3.56	0.45
P7	2.20	0.47
P8	2.35	0.71
P9	2.34	0.18
P10	1.00	0.56
P11	1.90	0.60
P1	1.48	

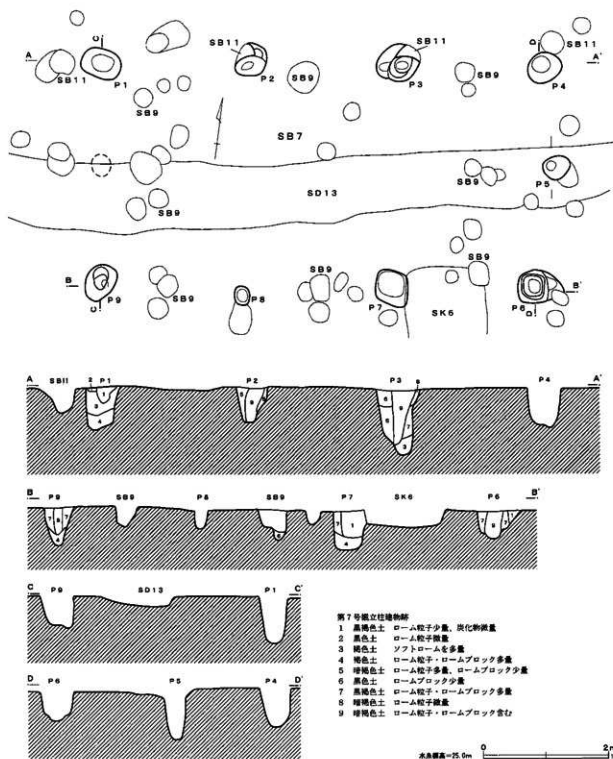
SB5



SB6



第90図 第5・6号掘立柱建物跡出土遺物



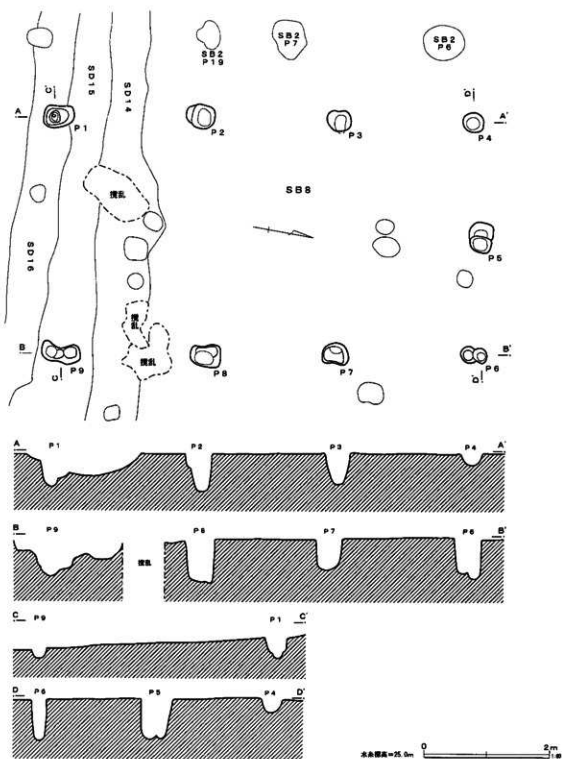
第91図 第7号独立柱建物跡

SB1 建物方向 N-79° - E  
 K-14 傾斜(m) 7.22x3.50

	柱間	長さ
P1	0.77	
P2	2.34	0.56
P3	2.40	1.00
P4	2.14	0.63
P5	1.62	0.70

	柱間	長さ
P6	1.94	0.46
P7	2.28	0.65
P8	2.34	0.25
P9	2.24	0.62
P1	3.52	

はないかもしれない。柱穴は隅丸方形が多い。深さはばらつきがあるが四隅のものは深くしっかりしている。いくつかの柱穴で柱痕が観察された。遺物は、P2から常滑製小片1点、P5から在地産鉢片1点。P7から第90図2の内耳鍋破片が出土した。この他にはP3・6・10から土器細片が出土したが図



第92図 第8号掘立柱建物跡

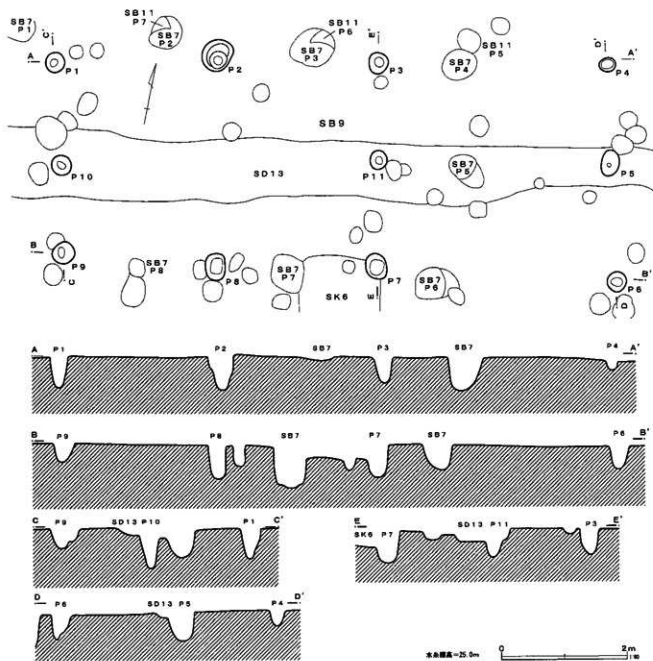
S B 8 建物方向 N-10° -W  
K-15 規模(m) 6.62×3.64

	柱間	深さ
P1		0.31
P2	2.32	0.61
P3	2.16	0.43
P4	2.10	0.19
P5	1.76	0.66
P6	1.88	0.65
P7	2.30	0.56
P8	2.06	0.73
P9	2.26	0.33
P1	3.68	

示できるものはない。

第7号掘立柱建物跡 (第91図)

L・M-13・14グリッドで検出された。第9・11号掘立柱建物跡と重複する。第9号掘立柱建物跡との新旧関係は不明であるが、第11号掘立柱建物跡とは、P3の重複から本建物跡が新しい。東西



第93図 第9号竪立柱建物跡

SB9 建物方向 N-82° - E  
M-13 規模(m) 8.69×3.42

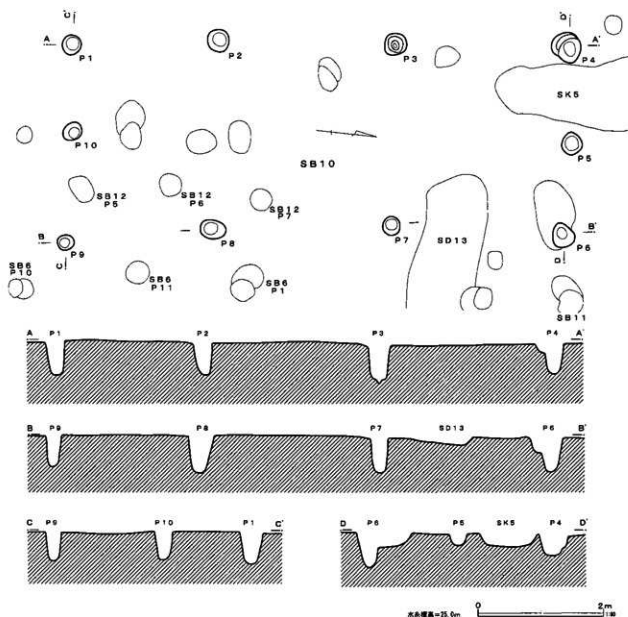
	柱間	高さ
P1		0.43
P2		2.60 0.54
P3		2.48 0.37
P4		3.58 0.24
P5		1.64 0.37
P6		1.78 0.36
P7		3.75 0.50
P8		2.50 0.51
P9		2.43 0.29
P10		1.38 0.52
P11		1.62

方向の建物で桁行3間、梁行2間である。規模は桁行北側は6.88m、南側は6.86m。梁行は西側は3.52m、東側は3.56mである。柱穴は隅丸方形が多く深さはP8以外は深い。遺物は、P5からかわらけ片、P8から片口鉢と壺片が出土したが図示できるものはない。

第8号竪立柱建物跡(第92図)

K・L-14・15グリッドで検出された。第14～16号溝跡と重複するが新旧関係は不明である。南





第94図 第10号掘立柱建物跡

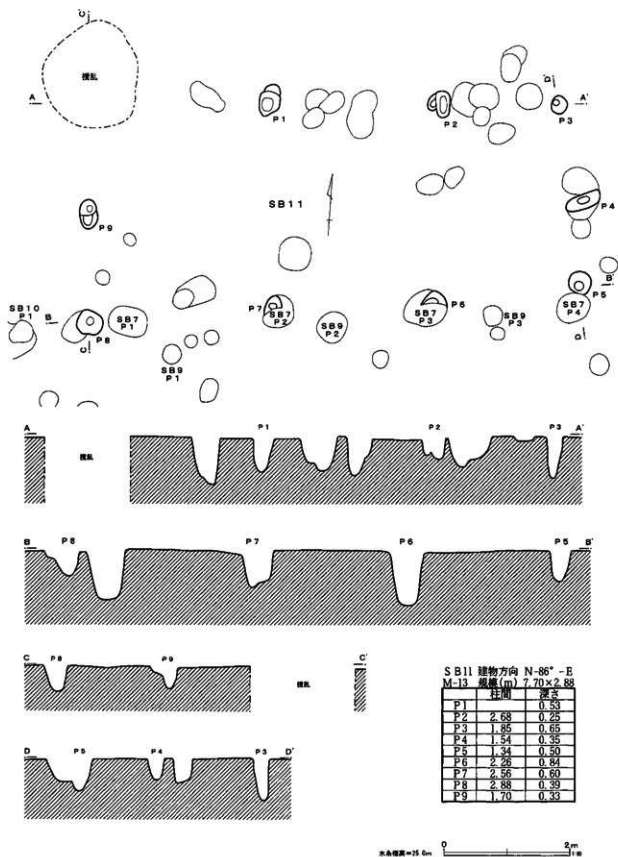
S B10 建物方向 N-6°-W  
L-14 規模(m) 7.83×2.94

	柱間	深さ
P1		0.49
P2	2.30	0.49
P3	2.76	0.64
P4	2.75	0.45
P5	1.54	0.29
P6	1.40	0.55
P7	2.73	0.56
P8	2.82	0.57
P9	2.28	0.47
P10	1.70	0.45
P11	1.40	

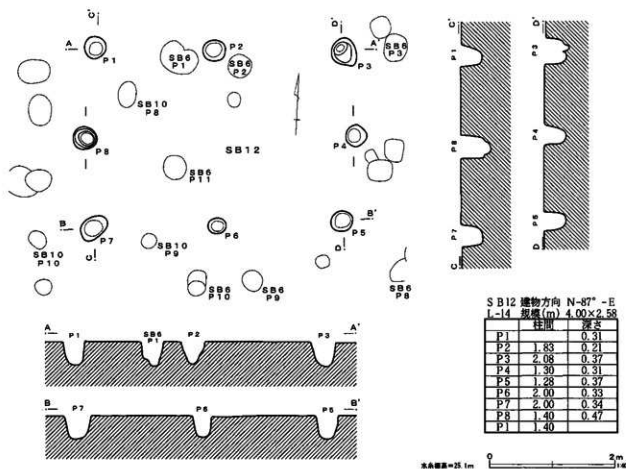
北方向の建物で桁行3間、梁行2間である。規模は桁行西側は6.58m、東側は6.62m、梁行は北側3.64m、南側は3.68mである。柱穴は整然と並ぶが深さにばらつきがある。遺物は出土しなかった。

第9号掘立柱建物跡(第93図)

L・M-13・14グリッドで検出された。第7号掘立柱建物跡・第13号溝跡と重複するが新旧関係は不明。東西方向で桁行3間、梁行2間である。規模は桁行北側は8.66m、南側は8.69m、梁行西側は3.0m、東は3.42mである。柱穴は全体に浅め



第95図 第11号掘立柱建物跡



第96図 第12号掘立柱建物跡

である。遺物は出土しなかった。

第10号掘立柱建物跡 (第94図)

L-13・14グリッドで検出された。第12号掘立柱建物跡、第13号溝跡と位置的に重複するが、直接重複する柱穴はなく新旧関係は不明である。南北方向の建物で桁行3間、梁行2間である。規模は桁行西側は7.81m、東側は7.83m、梁行北側は2.94m、南側は3.1mである。柱穴は直径30cmほどの円形が多く、深さはP5以外は約50cmを中心として揃っている。遺物は、P6から鉢片が1点出土したのみで、図示できるものはない。

第11号掘立柱建物跡 (第95図)

L・M-13グリッドで検出された。北西角の柱穴は攪乱で検出できなかった。第7号掘立柱建物跡と重複しこれより古い。第9号掘立柱建物跡とも接

するような位置関係にある。第13号溝跡と平行しており、第2区画内にあるのは本建物だけである。東西方向の建物で桁行3間、梁行2間である。規模は桁行南側で7.7m、梁行は東側で2.88mである。柱穴は小さいものも多く深さ0.25～0.84mとばらつきがある。遺物は出土しなかった。

第12号掘立柱建物跡 (第96図)

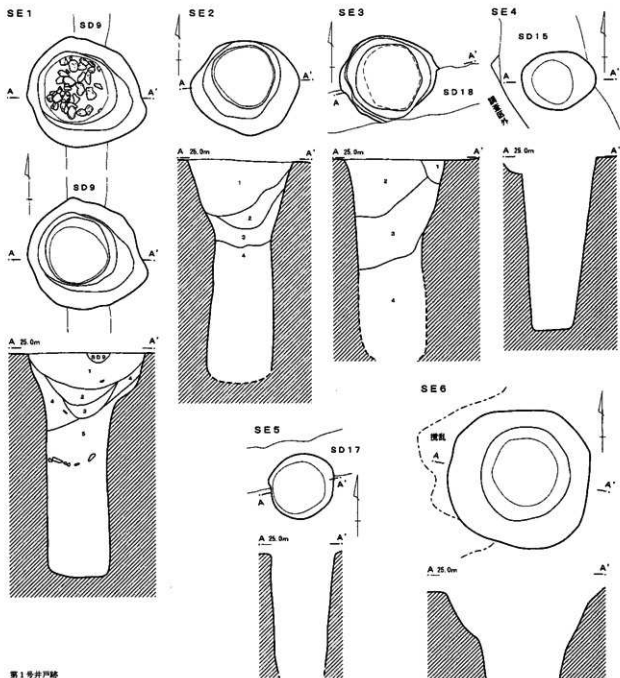
L・M-14グリッドで検出された。第6・10号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴に直接の重複はなく新旧関係は不明である。東西方向の建物で桁行2間、梁行2間である。規模は桁行北側は3.92m、南側は4.0mである。梁行は西側は2.8m、東側は2.58mであり、検出された中で一番小規模な建物である。柱穴の深さは30cm台が多くほぼ揃っている。遺物は出土しなかった。

## c 井戸跡

### 第1号井戸跡(第97図)

調査区の北側、L-13グリッドで検出された。第9号溝跡と重複しこれより古い。平面形はやや歪んで楕円形を呈する。規模は長径が1.9m、短径は1.7mである。底径は0.9mで、深さは3.54mである。覆土はローム粒子を多量に含みレンズ状の堆積を示すが、遺物の接合状況から一度に埋め戻された可能性が高い。1・2層から多量の遺物を出土し、最下層からも常滑甕や緑釉皿などを出土した。また、検出面から1.7mには人頭大から拳大の礫が多量に投げ込まれていた。第98図1~6は15世紀後半の緑釉皿である。いずれも最下層からの出土である。1・2は灰釉で他は鉄釉である。1は高台が削り出されるが全周はしない。胎土はくすんだ黄白色で砂粒を含み、黒色粒が多い。焼成は良好で硬質である。1は口径10.8cm、器高2.6cm、底径5cm。2は口径10.7cm、器高2.9cm、底径5.1cm。3は口径10.5cm、器高2.9cm、底径5.1cm。4は口径10.5cm、器高2.6cm、底径4.7cm。5は口径10.4cm、器高3cm、底径4.5cm。6は口径10.5cm、器高3.1cm、底径4.4cmである。7・8は轆轤成形のかわらけ。7は底面に板目状の圧痕がつく。底部内面の立上り部分に瓢箪形に粘土が貼付されている。やや黒ずんでいることから灯心を置いたものであろうか。胎土は砂粒と赤色粒を僅かに含み、白色針状物質が見られる。色調は淡褐色を呈し、焼成は良い。底径6.8cm。8は底部が厚く体部は外傾して立上りそのまま口縁部となる。胎土は赤色粒を多量に含み白色針状物質が見られる。色調は淡褐色から赤褐色を呈し焼成は良い。推定口径14cm、器高5.2cm、底径7.2cmである。9は在地産鉢。口縁部と体部は接合しないが同一個体である。胎土は礫を多量に含み褐色を呈する。上層出土。推定口径36.5cm、推定底径12.9cm。10は瓦質の蓋。外面は軽くなでられるが調整は雑である。端部から1.5cmに返りが付き、大ききから土釜の蓋であろう。胎土は砂粒を含み焼成

はあまり良くない。下層出土。推定口径14cm。11は常滑甕。口縁部と底部しかないため不確定ではあるが、胎土が同じことから同一個体として扱った。口縁部は約1/8、底部は約1/5の破片である。口縁部は最下層、底部は上層からの出土である。推定口径35cm、推定底径17.8cm。口縁部の形態から13世紀前半と思われる。12は同じく常滑甕胴部。11と同一個体かと思われたが復原径が違いすぎ別個体として扱わざるを得なかった。接合の結果、4個の大破片になったがそれ以上は接合しなかった。接合状況は、上層、下層、最下層の破片が入り混じっている。また、一部の破片には布を当てて漆を塗った痕跡があり、補修しながら使ったことを窺わせる。13は板磚の未製品と思われる。両面に鑿痕があり片面は被熱している。14は壺口縁部で備前の製品と思われる。約1/8の残存で、口縁部は玉縁である。外面は自然釉が掛かり内面は黒灰色である。接合はしないが第100図16と同一個体と思われる。胎土は砂粒と礫を僅かに含み灰色を呈する。最下層出土。推定口径20cm。15は壺の底部と思われる。胎土は砂粒を多く含み粗く、暗灰色を呈する。器表は小豆色に発色する。上層出土。推定底径11cm。16は壺肩部で備前の製品と思われる。外面には3本の沈線が施され、釉が斑状に掛かる。胎土は14と似ており同一個体の可能性が高い。下層出土。なお、この破片は戸宮前館跡第35号溝跡出土の破片(第27図7)と接合した。17は壺か壺の胴部破片。外面が砥石に転用されている。胎土、色調とも14・16に似ている。最下層出土。18は甕胴部で外面に押印がある。内面と破面の一部が被熱している。胎土は砂粒を少量含み灰色を呈する。下層出土。19は常滑甕。外面には横方向に押印が押される。押印は下半分がわからないが「大」の字が入っている。最下層出土。20・21は在地産鉢。いずれも胎土に砂粒、角閃石、礫を含み淡褐色を呈する。焼成は良い。22・23は丸瓦。22の凸面は縄叩きを縦方向に篋で消し



第1号井戸跡

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量、炭化物・焼土粒子少量  
多量に遺物を含む
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量、ソフトローム少量、ロームブロック少量  
多量に遺物を含む
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量、ソフトローム少量
- 4 黄褐色土 ロームブロック・ソフトローム多量、間に黒土が混入
- 5 黄褐色土 ロームブロック多量、4層との境に黒色土層が層状に入る

第2号井戸跡

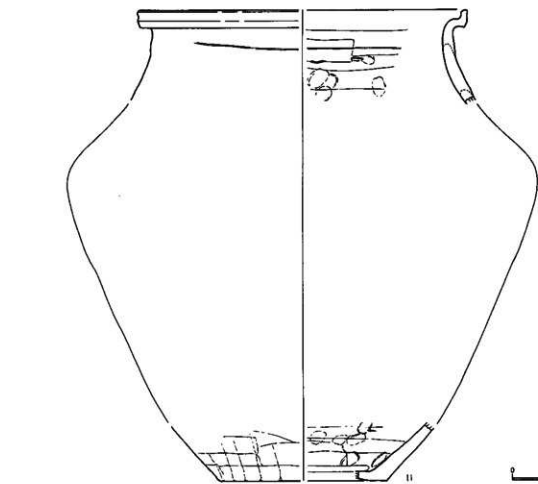
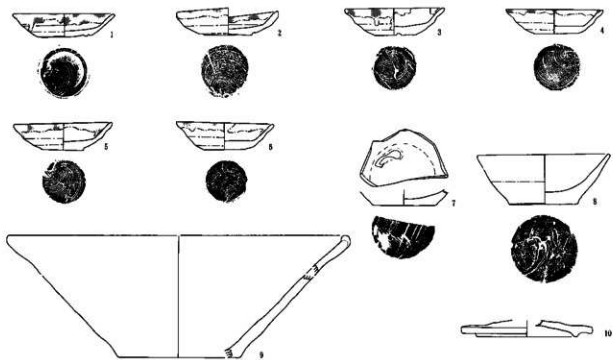
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量、炭化物少量
- 2 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
- 3 黒色土 ローム粒子少量、茶褐色土の粒子・ブロック多量
- 4 黒色土 ローム粒子・ロームブロック多量

第3号井戸跡

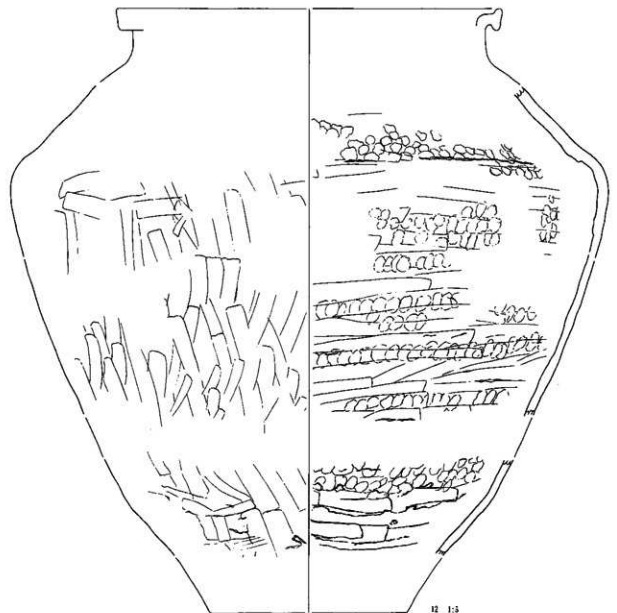
- 1 暗褐色土 ローム粒子・ソフトローム多量、炭化物少量
- 2 黒色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量、炭化物少量
- 3 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
- 4 黒色土 炭化物・白色結晶土ブロック少量  
ローム粒子・多量

第97図 井戸跡

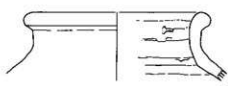
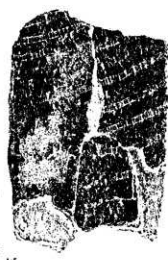




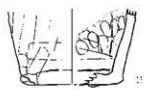
第98图 第1号井戸跡出土物(1)



12 1:3



14



13

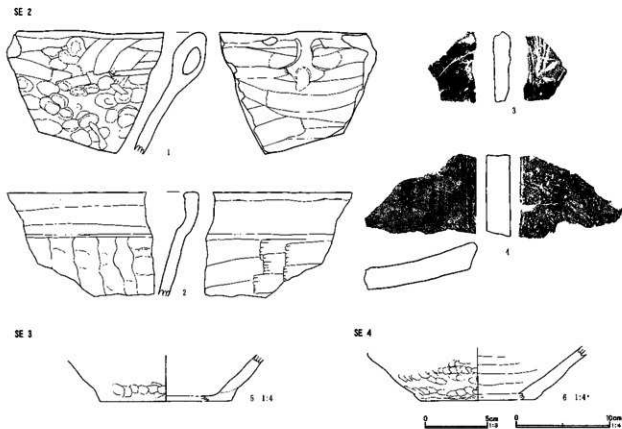


第99图 第1号井戸跡出土遺物(2)

ている。凹面は布目で、側面側は篋で厚さを半分ほどに調整する。胎土は白色砂粒を含み、暗灰色を呈し焼成は極めて良好である。下層出土。23は玉縁が欠けた小破片である。胎土は砂粒、礫が多く明灰色を呈する。上層出土。24は粘板岩製の砥石。最下層出土。25は小柄の柄。銅製で、全長8.7cm、幅1.4～1.5cm、厚さ0.4cmである。厚さ約0.1cmの銅板を巻いており、現状では内部は中空である。26は小柄。現存長17.8cm、柄は木製、本体は鉄製である。X線写真で判明した、柄と柄に挿入された茎部の形状を、外面図の下に掲載した。刀身は現存長15.5cm、刀身長8.6cm、刃幅は0.9cm、背幅約0.2cmの平造りである。切先の先端を欠き、茎先も破損して遊離した破片が認められる。刀身と茎との境（関節部）は刀身が狭まる両関となる。柄は長さ9.1cm、幅1.5～1.7cm、厚さ0.5cmである。茎が入る部分をくり抜いた2枚の柄木を合わせ、紐を碓に斜めに巻き締め、その上から黒漆を塗って固めている。

## 第2号井戸跡（第97図）

調査区の中央、L-15グリッドで検出された。重複する遺構はなく、第5号掘立柱建物跡と第8号掘立柱建物跡の中間に位置する。平面形はくずれているが円形である。規模は直径約1.5mである。深さは3.3mまで掘り下げ、ほぼ底面に達したと思われる。覆土にはロームを多く含み第1号井戸跡と同じく埋め戻された可能性が高い。遺物は、土器破片と瓦が少量出土した。第101図1・2は内耳鍋口縁部である。内外面とも調整は丁寧で、特に2は外面の指頭痕を縦方向に篋で消している。胎土は、1は礫を多量に含み暗灰色を呈する。焼成は良い。2は砂粒と少量の礫、角閃石を含み灰褐色を呈し、焼成は良い。3は丸瓦である。凸面は横方向のナデ、凹面は布目痕が残る。胎土は白色砂粒を多く含み色調は暗灰色を呈する。焼成は還元炭焼成で良好である。4は平瓦である。凹面は縦方向の篋調整後横方向になでている。凸面は全面に細かい砂が付着している。



第101図 第2・3・4号井戸跡出土遺物



側面は凹面側が丸く調整される。胎土は砂粒と礫を含み灰色を呈する。焼成は還元炎焼成で良好である。

### 第3号井戸跡 (第97図)

調査区の南側、L-16グリッドで検出された。第18号溝跡と重複し、これより新しいと思われる。平面形はほぼ円形である。規模は直径が1.6mで、深さは1.7mまで掘り下げたが、それ以上は危険な状態になったため断念した。覆土は他の井戸跡と同じくロームを多く含み、埋め戻された可能性が高い。遺物は小破片が数点出土した他に被熱した片岩や砂岩が多く出土した。第101図5は在地産鉢底部で、約1/8の残存である。底面は静止糸切痕が見られる。外面は指頭痕がかすかに見られる。胎土は砂粒と赤色粒を含み礫が少量見られる。焼成は良い。推定底径14cm。

### 第4号井戸跡 (第97図)

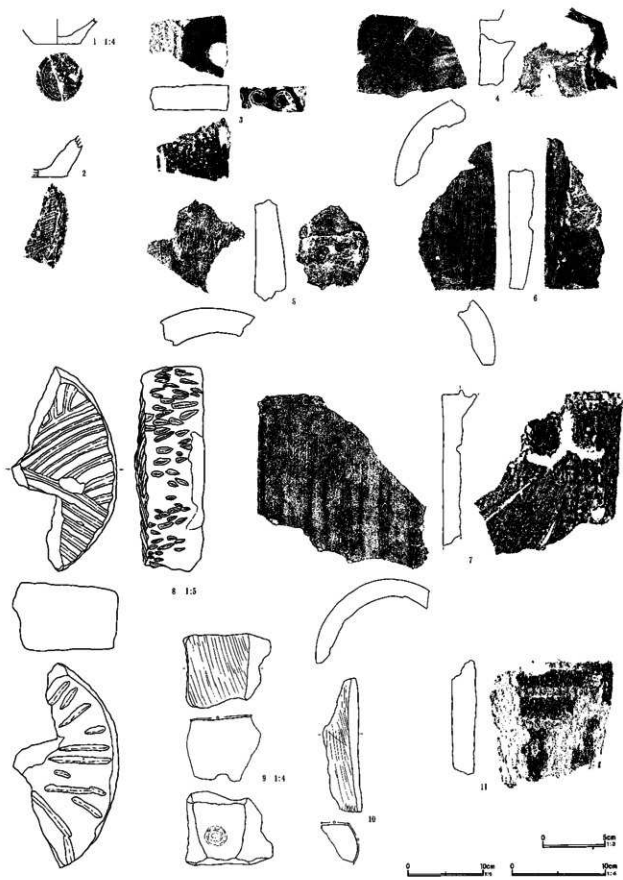
調査区の西側、J-16グリッドで検出された。第15号溝跡と重複するが新旧関係は不明である。平面形は第15号溝跡にかかっているため、楕円形に見えるが、本来は円形であろう。規模は1.2m×0.9mである。底径は0.65mで深さは2.7mである。遺物は、在地産と思われる土器片が3点と片岩片が4点だけである。第101図6は在地産鉢。底部は静止糸切である。外面は粘細の接合部分に沿って指頭痕が顕著で内面は横ナデされる。胎土は砂粒を含み、礫と赤色粒が多量見られる。焼成は良い。推定底径12cm。

### 第5号井戸跡 (第97図)

調査区の中央、L-15グリッドで検出された。第17号溝跡と重複するが新旧関係は不明である。平面形は直径1mの円形である。深さは1.8mまで掘り下げたが、危険な状態になったためそれ以上の調査は断念した。遺物は出土しなかった。

### 第6号井戸跡 (第97図)

調査区の北東側、N-12グリッドで検出された。攪乱の激しい所であったが、浅い攪乱の下から検出された。重複する遺構はない。平面形は円形で規模は直径が2.3mあり、検出された井戸跡の中では最大である。底径は1.0mで深さは1.9mと他の井戸跡に比べ浅めである。遺物は常滑甕、かわらけ、鉢、石臼等が出土した。第102図1は轆轤成形のかわらけ。剥離が著しいが底部は厚く、内面は中央が窪む。胎土は砂粒と赤色粒を少量含み白色針状物質が多く見られる。底径5cm。2は鉢底部。静止糸切で胎土には片岩を多量含む。3は蓋。端面には円錐状の貼付粘土が剥がれた痕跡がある。内面は端部から3.5cmに返り?の剥がれた痕跡がある。胎土は砂粒、礫を含み軽い。4~7は丸瓦。凸面は、4は横方向にナデられるが、他は縦方向のナデである。5・7には縄叩きの痕跡が残る。4には布目が見られるが、これは横ナデ後についたもので、成整形の工程に関わるものではない。凹面は布目で、4・7には吊紐痕が見られる。6は広端部で、6cmの幅で斜めに篋で切って厚さを調整している。胎土はいずれも砂粒、礫を含み4・5は表面黒色で燻し焼成、6は明灰色、7は暗灰色で還元炎焼成である。8は石臼の下白である。粉礫白が目が粗く、7本6分割である。側面には加工の際の整痕がそのまま残る。下面も同様に整痕が残る。石材は砂岩である。側面の厚さは9.2cm、推定径32cm。9は砥石であろう。片面が使用されている。大ききから置き砥石として使用したと思われるが、一方の面には窪みが認められることから縄文時代の石皿を転用したものであろう。石質は角閃石安山岩と思われる。10は凝灰岩製の砥石である。破損が激しいが、上面と側面を使っている。11は板碑の破片と思われる。片面に鑿による加工痕が残る。



第102図 第6号井戸跡出土遺物

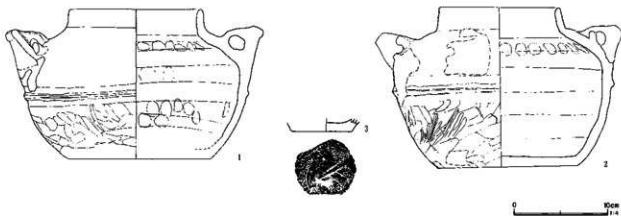
#### d 土壌 (第104図)

土壌は10基検出された。分布傾向は北東側にやや集中するが全体的には疎らである。調査区全体に攪乱が多いため、浅い土壌は消滅した可能性もある。集中する可能性としては、O-13グリッドに近接して検出されたことから、東側に分布が広がるかもしれない。土壌の形態は、第5・16号土壌を除くと、長方形で底面が平坦なものである。長さは1.2～2.9mまであり、幅は0.6～1.3m、深さは0.14～0.5mである。大別して長軸の長いものと短いものに分けられるが、これらの特徴は戸宮前館跡はじめ中世の遺跡に多く見られるものと同じである。遺物は第5号土壌以外は全く出土しなかった。第5号土壌については前述したように、第2区画を構成する溝の性格が強いように思われるため、これらの土壌とは意味付けが違ってくると思われる。各土壌についての説明は表に代え、ここでは第5号土壌について記述する。

第5号土壌はL-13・14グリッドで検出された。第9号溝跡と重複するように見えるが、土層断面で

は第9号溝跡に切られることはなく、第9号溝跡は第5号土壌の南側には延びていないことから、第5号土壌に切られているという確証にはならない。したがって同時存在の可能性も考えられる。形態も他の土壌と違い、長い不整形を呈する。他の土壌では遺物が殆ど出土しないのに対し、白色粘土が検出され、土釜が2個体分捨てられたような状態で出土した。このような状況から検出された他の土壌とは違い溝の一部と考えておきたい。

遺物は、土釜、かわらけの他土器細片が出土した。第103図1・2は第9号溝跡と接する付近から破片の状態が出土した。接合の結果、ほぼ完形に復元されたが把手は1の片方が残っていただけである。2は片方の把手部に2箇所穿孔が見られる。胎土は砂粒を多く含み礫が少量見られる。1は口径14cm、器高15.8cm、底径15cm。2は口径14.8cm、器高16.1cm、底径14.9cm。3は轆轤成形のかわらけ。底部に板状の瓦痕が見られる。胎土は砂粒と赤色粒を少量含む。底径5.4cm。

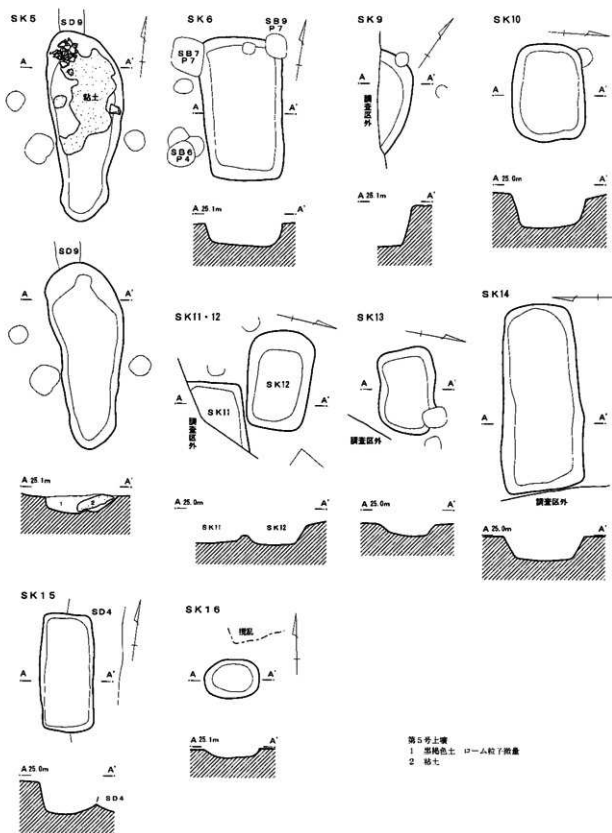


第103図 第5号土壌出土遺物

A区土壌計測表

番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位
1	B区				
2	B区				
3	B区				
4	B区				
5	L-13・14	2.90	1.10	0.28	N-4°-W
6	M-14	2.25	1.30	0.34	N-12°-W
7	K-13	(3.04)	1.00	0.90	N-51°-W
8	J-13-14	2.90	0.90	0.80	N-29°-W

番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位
9	J-15	(1.60)	(0.50)	(0.60)	-
10	N-13	1.50	1.20	0.50	N-90°-E
11	O-13	(1.00)	(0.70)	(0.12)	(N-71°-E)
12	O-13	1.60	1.00	0.30	N-85°-E
13	N・O-13	1.35	0.90	0.18	N-78°-E
14	J-13	2.90	1.30	0.38	N-86°-E
15	M-13	1.86	0.84	0.50	N-10°-W
16	I-15	0.86	0.60	0.14	N-89°-E



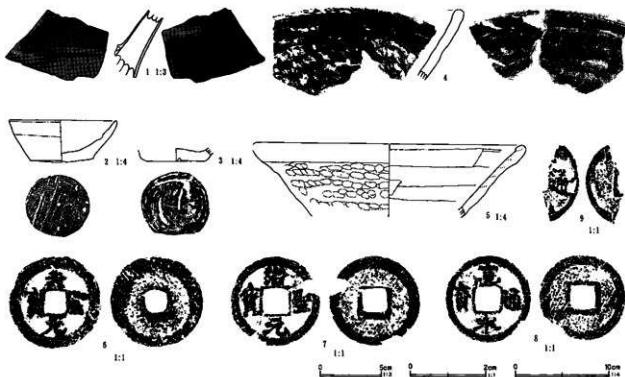
第104図 土塙

### e グリッド出土遺物

グリッドからは主にN-13グリッドを中心として遺物が出土した。東側は攪乱が激しいためこの付近に何らかの遺構があったことも考えられる。

第105図1は青磁の盤であろうか。軸は厚く緑がやや強い。胎土は白灰色で緻密。N-13グリッド出土。2・3は磁甕成形のかわらけ。2はほぼ完形で、表土掘削時に出土した。体部はやや内湾気味に立上り口縁部は薄い。淡褐色で砂粒と赤色粒を少量含み白色針状物質が入る。口径11.6cm。器高4.7cm。底径6.8cm。3は白色針状物質がなく淡褐色である。底径6.2cm。N-13グリッド出土。4・5は在地産鉢。体部外面は指頭痕が連続し口縁部は横ナゲさ

れる。4は砂粒、礫を多量含み、外面は黒色であるが胎土は灰白色を呈する。焼成は良くない。N-13グリッド出土。5は砂粒と少量の礫を含み灰色を呈する。焼成は良好。推定口径29cm。6～9は銭貨である。6は天聖元寶。残存状態は良いが外縁が一部削られている。7は紹聖元寶。外縁は傷みが激しく2片に折損している。8は寛永通寶。傷みが激しく右下が削れており、銭文も潰れている。9は「通」字だけで銭種不明である。この他に皇宋通寶の小破片で「宋」字だけが残っているものがある。他には青磁碗、香炉、梅瓶、灰釉平碗などの破片が出土した。(図版26)



第105図 グリッド出土遺物

第5表 出土銭貨計測表

番号	銭名	銭径(A)	銭径(B)	内径(C)	内径(D)	銭厚	量目	出土遺構	備考
第105図	天聖元寶	24.68	24.86	18.91	18.25	1.16~1.18	2.36	L-17	北宋 1023
	□宋□□	-	-	-	-	0.94	-	N-13	P31 破片 皇宋通寶 北宋 1038
第105図	紹聖元寶	23.44	24.10	19.59	18.97	1.24~1.43	-	N-13	欠損 北宋 1094
第105図	寛永通寶	23.22	23.32	18.46	19.35	0.81~0.84	-	K-13	欠損
第105図	□□通□	-	-	-	-	1.03~1.10	-	L-17	破片

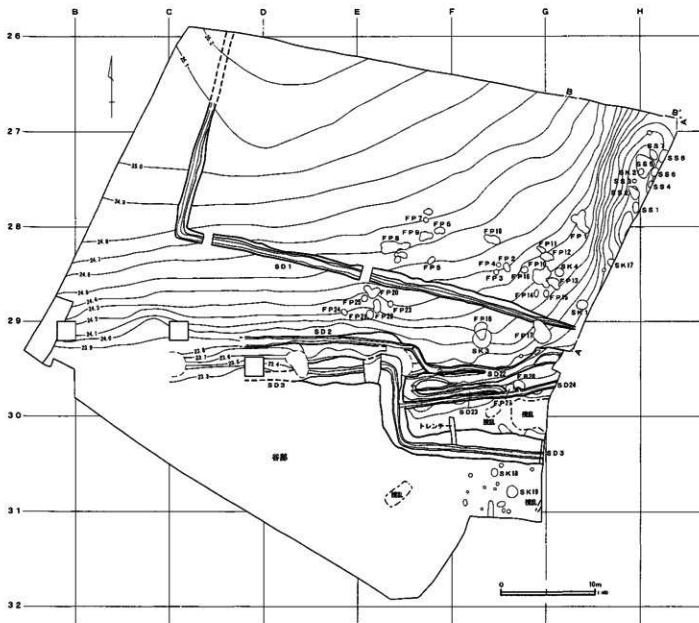
## (2) B区

### A 旧石器時代

#### 概観

在家遺跡B区からは石器72点、礫589点、総計661点の旧石器時代に帰属すると考えられる遺物が出土している(第6表)。遺物は発掘区の北東隅にあたるG-27、H-27グリッド付近に集中して分布しているが、この地点では埋没谷が検出されており、遺物はこの谷の谷頭を取り巻くようにまとまって分布している。東側が発掘区の境界に当たるため

分布がやや広がる可能性はあるが、遺物分布の中心である埋没谷の底の平場部分はほぼ掘り切っているため、爆発的に分布が拡大するとは考えがたい。遺物の出土層位は、埋没谷を埋める層中の最下層にあたる9層の下位で、自然科学的分析の結果、9層は、同地点で検出されたAs-BP Group(浅間板鼻褐色軽石群)の中で、少なくともAs-BP中部以上であり、As-Ok 2(浅間大窪沢第2軽石)よりも下位に



第106図 B区全測図

位置する層であると推定されている。

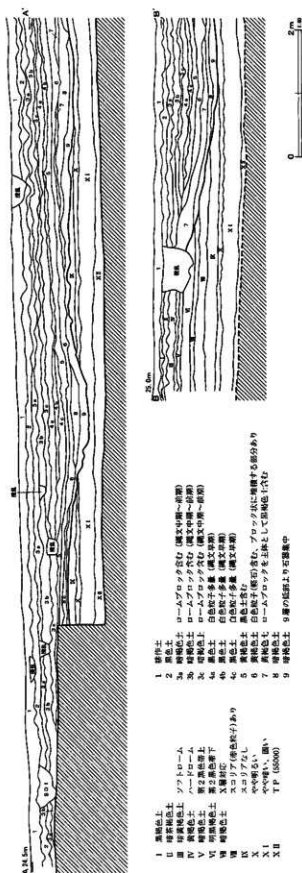
石器の分布は散漫であるが、遺物の主体となる礫は、視覚的にいくつかの密集部を形作り分布している。破碎礫の接合を試みた結果、69例の接合例が確認でき、いくつかの接合は視覚的な密集部をまたぐ。また、礫は全てが明確な赤化状態を示すものではないが一部にスス状の付着物が観察されるものもあり、何らかの被熱作用を受けたものが多いと考えられ、その視覚的まとめると、互いの接合関係から8基の「礫群」を構成していると解釈した。

石器は、これら礫と同じレベルから出土し、平面的にも礫の分布域に重複するが、ややそれよりも広範囲に分布している。定型的な製品類が極めて少なく、あまり大きくはない剥片が主体である。いずれも信州産と考えられる黒曜石を主に使用していることから、全ての石器を母岩分類できているわけではないが、母岩数も遺物数に比して多く、遺跡内での積極的な剥片剥離の痕跡はあまり認められない。しかし、黒曜石製の繊細な調整の施された後付き剥片や打面調整を有する石刃が出土しており、自然化学分析の結果も踏まえ「砂川期」およびそれ以降に編年上位置付けることが妥当であろう。

#### 基本層序 (第107図)

B区は大きくみると、台地と谷に下る傾斜地といった異なる地形を擁し、また、発掘により埋没谷も検出されていることからわかるように、土層の堆積は地点ごとに大きく異なっている。台地上では当地域の一般的なルーム層の堆積状況を示しているが、谷を埋積する土層からは、更に複数の鍵層となるテフラが検出されている。詳細は附編に譲るが、旧石器時代にかかわる部分についてのみ、簡単に触れておくこととする。

台地上での当地域の一般的なルーム層の堆積はIII層がソフトルーム層、IV層以下がハードルーム層に当たるが、第一黒色帯は視覚的に観察することはできない。V、VI層が黒色帯であるが、これが、通常第II黒色帯にあたり、V層が上部、VI層が下部に



第107図 基本土層

なる。VI層は武蔵野台地のX層に相当し、XII層からは東京軽石（TP）が確認されている。

G-27、H-27グリッド付近から検出された埋没谷はこの立川ローム層第IV層を切る形で開析されており、下底部はX層にいたる。谷を埋積する土層は、3a～9層まであり、3から4層では縄文土器が検出されている。火山ガラス分析、テフラ検出分析および屈折率の測定結果からはV層中に2枚のテフラが、谷の埋積層の3、4、6、9層からも複数のテフラが検出された。このうちV層から検出されたテフラは上位が始良Tn火山灰（AT）に由来しており、下位は同じくATに由来するが、浅間板鼻褐色軽石群（As-BPGroup）のうちその最下部に当たる室田軽石（Mp）に由来するテフラが含まれていることが確認された。また、谷を埋積する層では、3層から約8200年前に噴出した浅間藤岡軽石（As-Fo）が、さらに下位の4層からは1.1万年前に噴出した浅間総社軽石（As-Sj）が、9層からは1.6万年前に噴出したとされる浅間大窪第2軽石（As-Ok2）が検出された。

以上の結果を考え合わせると、IV層を切る谷の埋積層の最下層の9層の下位から検出された、石器ならびに礫群の出土層位は、As-BPGroup（約1.9～2.4万年前）の少なくともAs-BP中部以上にあり、As-Ok2（約1.6万年前）より下位にあたと推定できる。

#### 石器の分布（第108図～110図、図版19）

出土した72点の石器のほとんどは埋没谷の中および、肩部付近から出土しているが、柵掘りかけた台地上からも数点の石器が出土している。石器の出土層位は前述のように谷の中では9層の下位、すなわち、谷の下底部で、台地上ではIV層のハードローム中から出土している。

谷の周辺からは、黒曜石の小型の剥片が主として検出されている。分布は礫が谷の底近くに密集して分布しているのに対し、石器はばらけており、谷の肩部にも伸びている。使用石材に関しては視覚的に

いくつかの母岩を設定したが、母岩ごとの分布の集中は見られず、器種別では、削器がやや他から離れて出土しているものの、際立った偏りは見られない。やや分布を異にする台地上の石器に関しては、使用石材は遺跡内で単一のもの（単独母岩）であり、大きさが谷周辺のものに対して大き目のものが多い。

#### 出土石器（第111・112図、第7表、図版22）

特に谷部付近では使用石材にまともが認められ、小規模ながら剥片剥離の痕跡が追えるものもあるため、分類を比較的行ないやすいものに限り母岩の設定をし、単独母岩を除き11母岩を認定した。使用石材は透明感のある黒曜石が主体を占め、他の石材は黒色頁岩が7点出土しているほかは、単独もしくはそれに近い。

製品類の割合は非常に低く、黒曜石製の削器が1点出土しているほかは二次加工あるいは微細な剥離痕を有する剥片が3点あるのみで、残りは1点の石核を含み、小型の剥片、碎片である。

以下母岩ごとに特徴を記す。

黒曜石1：やや赤みがかった黒曜石である。製品はなく、2cm以下の剥片、碎片のみである。

黒曜石2：不純物を殆ど含まない透明に近い黒曜石である。削器が1点、その他4点は小型の剥片、碎片である。これらの剥片類は、形状などから二次加工を施した際の剥離物と考えられる。ある程度加工された状態の石器が当遺跡に持ち込まれ、刃部の再生などが行われたことを示唆すると考えられる。

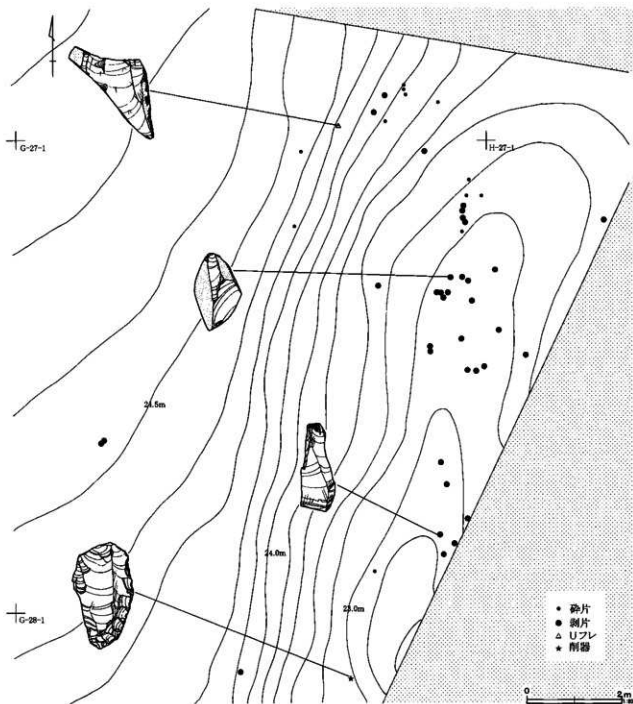
黒曜石3：不純物を殆ど含まない黒曜石である。透明感が高いが、黒曜石2より濁った色合いを呈する。製品はなく、すべて剥片、碎片である。

黒曜石4：不純物、節理を多く含む黒曜石である。そのためやや灰色がかかった外観を呈する。製品はなく、すべて剥片、碎片である。

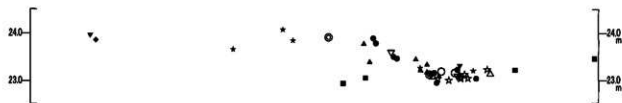
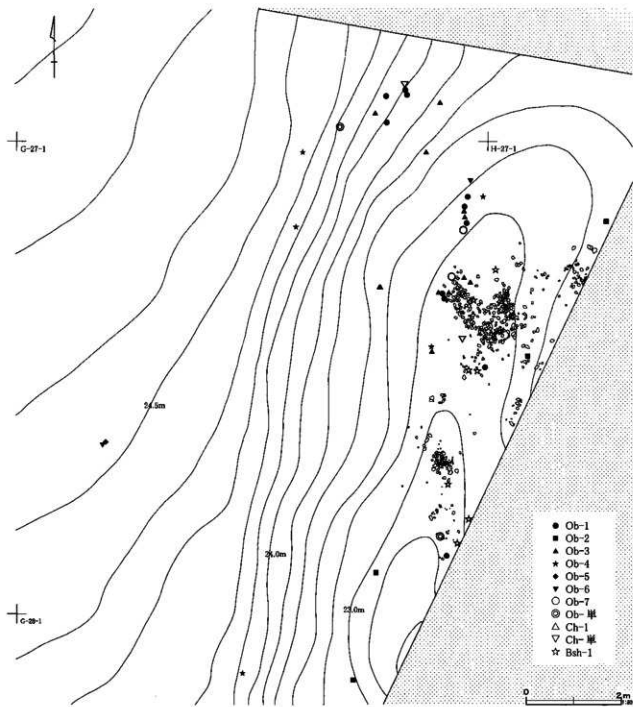
黒曜石5：不純物の少ない黒曜石である。黒曜石4とは、黒色の筋がみられる点で大きく異なる。製品はなく、すべて剥片である。

黒曜石6：気泡、節理を非常に多く含む黒曜石であ

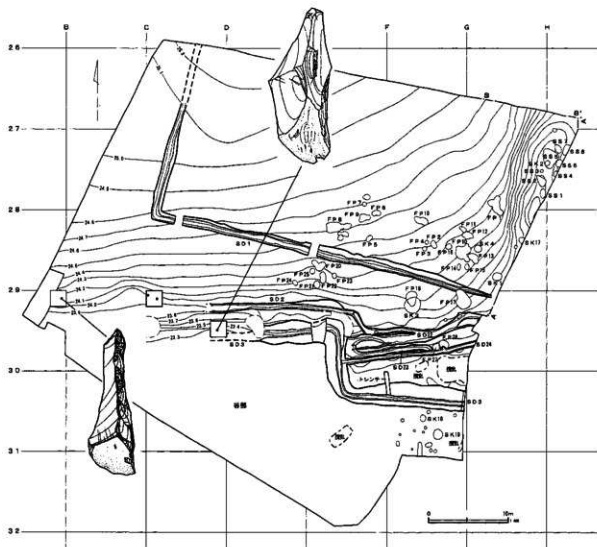




第108図 旧石器時代器種別分布図



第 109 図 旧石器時代母岩別分布図



第110図 旧石器時代遺物・遺構分布図

第6表 旧石器時代出土石器組成表

石材/器種	削器	Rフレ	Uフレ	石核	剥片	砕片	礫	計
黒曜石1					8	4		12
黒曜石2	1				2	2		5
黒曜石3					11	1		12
黒曜石4					3	5		8
黒曜石5			1		3			4
黒曜石6				1	7	3		11
黒曜石7					1	1		2
黒曜石(単)		1	2		1			4
チャート1					2			2
チャート(単)					2			2
チャート							558	558
黒色頁岩1					7			7
凝灰岩					1			1
細粒凝灰岩					1			1
玉髄					1			1
砂岩							31	31
計	1	1	3	1	50	16	589	661

る。小角礫を素材とする石核が1点、他11点は剥片、破片である。接合資料こそないが、遺跡内での剥離作業の認められる母岩である。

黒曜石7：不純物を殆ど含まない漆黒の黒曜石である。

剥片と破片が各々1点あり、両者は接合する。黒曜石単：SS1-3は不純物の少ない黒曜石である。

A-29-5-1は不純物を殆ど含まない漆黒の黒曜石である。G-26-24-1は、不純物を含む磨りガラス状の黒曜石であり、黒曜石3に類似する。いずれも各々1点出土しているのみであり、外で加工した石器を当遺跡に持ち込んだものと考えられる。

チャート1：節理の非常に多い緑色のチャートである。2点あるがいずれも剥片である。

チャート単：SS5-6、G-26-25-3ともに灰色がかったチャートである。ともに剥片である。後者は前者に比し風化の度合いが激しい。

黒色頁岩1：非常に緻密な黒色頁岩である。3 cm以上の剥片は2点のみで、他はすべて小型の剥片、破片である。

凝灰岩単：やや緑色がかった節理の多い凝灰岩である。分厚い剥片が1点見つかったのみである。

細粒凝灰岩単：非常に緻密な緑色凝灰岩である。大きな節理面を伴う。剥片が1点見つかったのみである。

以上からもわかるように、複数の石器で構成される母岩に関しても、その点数は少なく小剥片が多く、遺跡内での剥片の剥離作業は貧弱であったことが想定される。定型的な石器もほとんど見られないが、その中から以下11点を図示する。

1は削器。ほぼ完形。黒曜石2。幅の広いやや縦長の剥片を素材とし、打面を基端に残置して縦に用いている。素材の背面は単方向からの剥離で構成されており、単設打面の石核から剥離された剥片と考えられる。打面は調整されており、バルブが非常に発達している。背面右側縁の下半に連続して平坦な剥離を施し、刃部を作り出している。

2は微細な剥離痕を有する剥片。左側縁を除き大

部分が欠損している。黒曜石単。背面は単方向の剥離で構成され、単設打面の石核から剥離された剥片と考えられる。使用によるとみられる、不規則な微細剥離痕が右側縁の背、腹両面に観察される。

3は微細な剥離を有する石刃状の剥片。完形。3次調査出土の資料である。石材は、不純物を僅かに含む黒曜石である。背面は単方向の剥離で構成されており、単設打面の石核から剥離された剥片と考えられ、下半部には原礫面を残す。打面は非常に薄く、調整されていない。右側縁に使用によると考えられる微細な剥離が観察される。

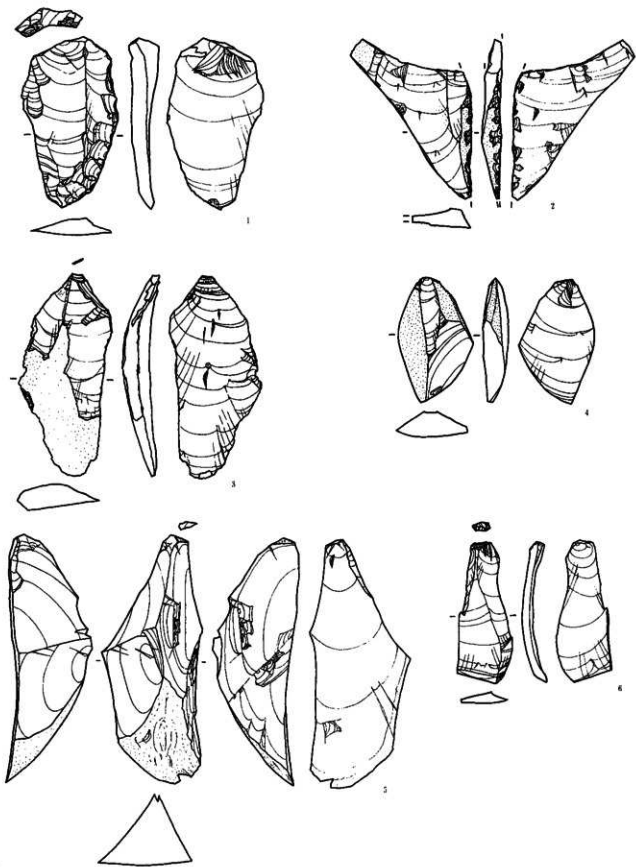
4は剥片。完形。黒曜石7。背面には原礫面が大きく残るが、上下両方向からの剥離面も一枚づつ認められる。打面は点状である。

5は縦長剥片。完形。細粒凝灰岩単。背面の末端部に原礫面を有する。背面構成から平坦な剥離面に打面を転位しながら剥離が進められてきたことがわかる。打面は調整されておらず、バルブは発達していない。

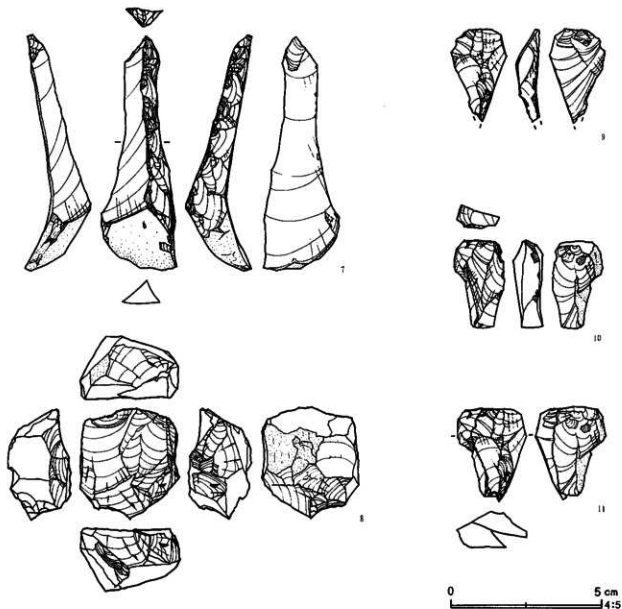
6は石刃状の剥片。完形。黒曜石単。左側縁の下半に原礫面を残す。背面構成は単方向で、単設打面の石核から剥離された剥片と考えられる。打面は調整されており、バルブはやや発達している。

7は、二次加工を有する剥片。端麗な稜付石刃を素材とする。完形。黒曜石単。背面末端部に原礫面を有する。背面の右半には石核の稜形成のための連続する剥離痕が認められる。それに対し、その打面となる左半は、上方からの1枚の剥離のみで構成されており、剥離面表面の風化度は右半に比べ強く、細かなキズなども多く見られる。バルブは発達しておらず、末端は腹面側に湾曲する。左側縁打面付近に急斜度の細かな縞状の二次加工が施され機能部が作出されている。

8は石核。ほぼ完形。黒曜石6。小角礫を素材とする。原礫面とそれを切る剥離面から構成される打面を用い、作業面いっばいの剥片を剥離しているが、加撃具との接点が高いのか、打点が複数認められ、



第111图 旧石器时代遗物素描图(1)



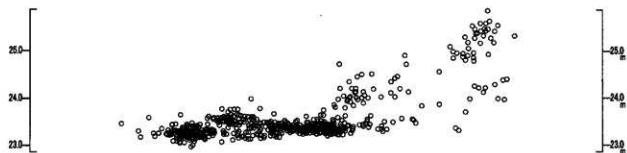
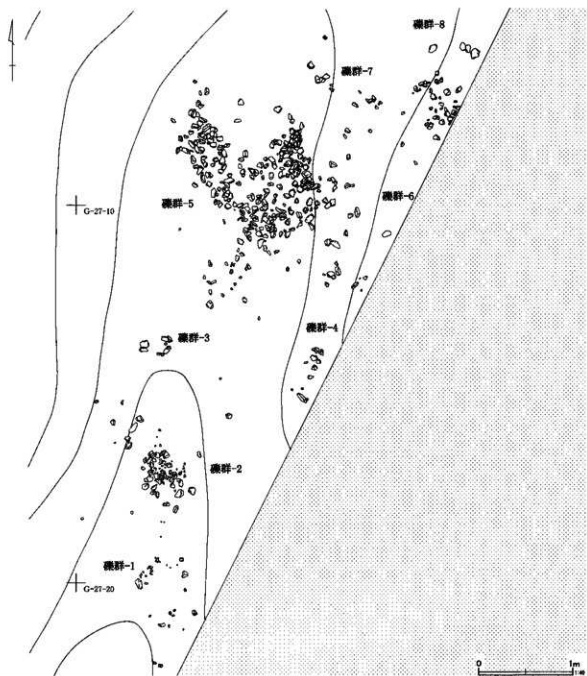
第112図 旧石器時代遺物実測図(2)

第7表 旧石器時代出土石器観察表

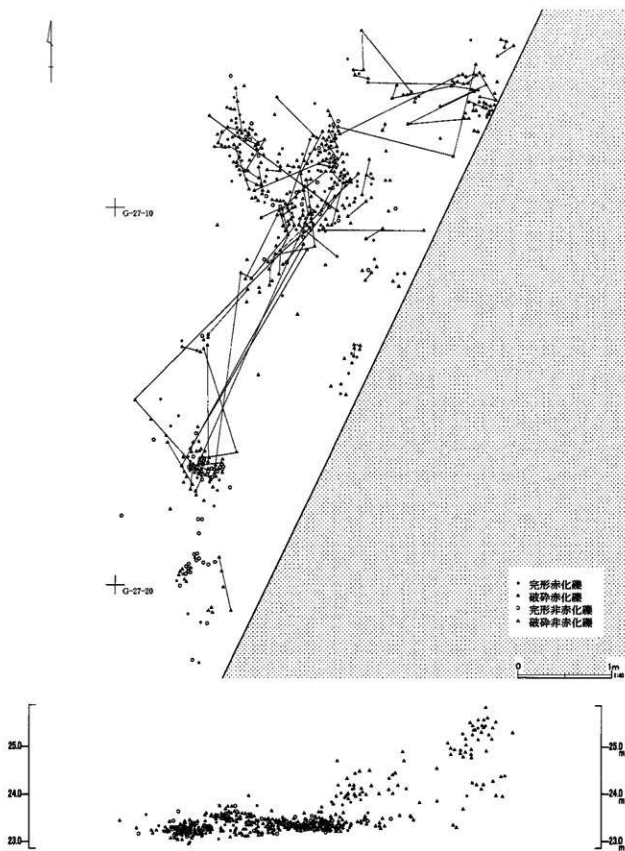
押図番号	器種	母岩	欠損	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g
1	刮器	黒曜石-2	完	56.0	32.0	10.0	10.8
2	微細な剥離痕を有する剥片	黒曜石-単	割	53.0	40.0	7.0	7.0
3	微細な剥離痕を有する剥片	黒曜石*	完	67.0	31.0	9.0	12.5
4	剥片	黒曜石-7	完	41.0	25.0	9.0	5.8
5	剥片	細粒凝灰岩-単	完	82.0	33.0	26.0	50.8
6	剥片	黒曜石-単	完	47.0	19.0	4.0	2.6
7	二次加工を有する剥片**	黒曜石-単	完	77.5	25.0	14.0	14.6
8	石核	黒曜石-6	完	36.0	33.0	21.0	22.6
9	微細な剥離痕を有する剥片	黒曜石-5	割	30.0	18.0	7.5	2.5
10	剥片	黒曜石-5	完	28.5	17.0	10.0	3.5

\* 3次調査出土のため母岩番号なし

\*\* 検付き剥片を素材にしている



第113図 旧石器時代遺跡分布図(1)



第 114 圖 旧石器時代遺物分布圖 (2)



打点付近も粗く崩れている。裏面に残る剥離痕は、作業面とは180度異なる方向を示すが大きく石核を消費してはならず、左右側面のやや小さめの剥離とともに石核調整を目的としている可能性が高いため、単設打面石核と認定している。

9は微細な剥離痕を有する剥片。末端部が欠損するが、ほぼ完形。10と接合する。黒曜石5。打面は非常に薄く、バルブは発達していない。右側縁に使用による微細な剥離がみられる。

10はやや厚手の剥片。完形。9と接合する。左側縁に原礫面を残す。打面は調整されており、バルブは発達していない。コーンが明瞭にみられる。

11は接合資料。9と10の接合資料。未回収の剥片1枚を間に介すが、同一の単剥離面打面を用い、打点を後退させながら、剥離を進行させている。

#### 礫の分布 (第113・114図、第8表、図版19)

B区からは589点の礫が出土しているがそのほとんどは埋没谷の底から東側の傾斜部に沿って分布している。構成礫の70%近くが破砕礫だが、分析の結果69例の接合例が見出せ、こぶし大前後のサイズの礫が集中して分布していることがわかる。

構成礫は95%近くがチャートで、砂岩が若干混じる。礫の表面は赤茶褐色に変色しているが、水の影響を受けた礫層構成礫の色味に似ているものも有り、全てが被熱の結果赤化したものであるかどうかは疑問が残るところではある。しかしながら、わずかに13点ではあるが、ススなどの付着物の観察でき

る礫も有り、また分布域を同じくする石器に水の影響と考えられるローリングの痕跡などが見られないことから、水流などで谷の底部に集積した自然礫ではなく、人為的に集積された「礫群」と認識するに至った。

「礫群」は最低3個体の礫が直径50cm範囲に入るまとまりを基準とした視覚的なもの、また接合の結果などから、8基に分離される。谷の底部に位置する2号、5号礫群が比較的規模も大きくまとまっており、さらにその2基に3号、8号礫群も加えた4基の礫群は互いに接合関係を有している。残る礫群に関しても、出土層位も互いに9層下位と安定しており、分布を同じくする石器と大きくは時間差を持たずに、8基の礫群とも併伴していた可能性が高いと考えている。

各礫群の構成礫の属性は大きくは異なる。構成礫の状態や属性から、礫層の礫を利用している可能性も考えられる。礫層の礫を用いて、被熱された2号礫群のような小規模だがまとまりの良い礫群が再利用され、集積、拡散し、5号礫群のような比較的分布域が広く他の礫群とも接合関係の多い礫群として、表出している可能性が高い。

2号礫群のような小規模な礫群は「砂川期」に伴うことが多く、石器の帰属時期との齟齬も生じない。

開析された各谷の窪地の底部に礫群を伴い、小規模の石器の製作と、使用のなされた空間が当遺跡として存在したと考えるのが妥当であろう。

第8表 礫群別礫属性表

礫群	完形礫	破砕礫	計	赤化礫	付着礫	チャート
SS-1	16 (485.3)	19 (328.3)	35 (813.6)	15 (738.0)	0 (0.0)	35 (813.6)
SS-2	46 (2561.3)	43 (1834.9)	89 (4396.2)	64 (4277.8)	0 (0.0)	89 (4396.2)
SS-3	3 (462.2)	7 (345.7)	10 (807.9)	9 (638.8)	0 (0.0)	8 (770.8)
SS-4	4 (641.2)	10 (293.6)	14 (934.8)	14 (934.8)	2 (143.6)	14 (934.8)
SS-5	95 (10946.2)	217 (13775.5)	312 (24721.7)	280 (22935.4)	9 (1161.5)	291 (23976.4)
SS-6	3 (972.0)	13 (1314.4)	16 (2286.4)	14 (1839.6)	2 (672.5)	16 (2286.4)
SS-7	2 (787.8)	18 (793.8)	20 (1581.6)	20 (1581.6)	0 (0.0)	20 (1581.6)
SS-8	3 (775.5)	50 (3654.0)	53 (4429.5)	50 (4331.5)	1 (0.0)	51 (4282.8)
その他	15 (397.7)	25 (562.6)	40 (960.3)	8 (209.1)	2 (0.0)	34 (869.6)
計	187 (18029.2)	402 (22902.8)	589 (40932.0)	474 (37486.6)	13 (1977.6)	558 (39912.2)

単位は個数 ( )内は重量g



















遺物番号	遺構	種別	器種 (赤化)	石材	母岩 (付着)	残存	接合	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	北-南 (m)	西-東 (m)	標高 (m)	押印番号
G-27-23-5		石器	F	Ob	Ob-6	完		34.0	17.0	6.3	3.2				
G-27-23-6		石器	F	Ob	Ob-6	完		16.0	9.0	2.3	0.3				
G-27-23-7		石器	KN	Ch	N	完		31.8	31.6	14.5	15.0				
G-27-23-8		石器	KN	Ch	N	完		26.6	20.3	14.5	8.0				
G-27-23-9		石器	F	Ob	Ob-6	完		18.5	17.0	3.6	1.0				
G-27-23-10		石器	F	Ob	Ob-6	完		26.0	31.0	8.8	4.0				
G-27-23-11		石器	Co	Ob	Ob-6	完		36.0	33.0	21.0	22.6				112888
G-27-24-1	磯群-外	磯	WNN	Sa	N	割		30.6	29.0	5.5	7.2				
G-27-3-1		石器	Ob	Ob-4	完	完		9.5	11.0	1.9	0.1	1.80	5.92	24.114	
G-27-4-1		石器	C	Ob	Ob-4	完		7.0	8.5	1.1	0.1	0.20	6.10	23.853	
G-27-5-1		石器	C	Ob	Ob-6	完		12.0	6.5	7.7	0.4	0.83	9.64	23.276	
G-27-5-2		石器	C	Ob	Ob-4	完		12.0	10.0	1.2	0.1	1.18	9.91	23.24	
G-27-5-3		石器	C	Ob	Ob-1	完		11.5	5.5	0.9	0.1	1.18	9.57	23.235	
G-27-5-4		石器	F	Ob	Ob-1	完		19.0	13.5	4.6	0.9	1.40	9.53	23.212	
G-27-5-5		石器	F	Ob	Ob-3	完		19.5	8.5	5.1	0.7	1.49	9.49	23.236	
G-27-5-6		石器	F	Ob	Ob-3	完		17.0	5.0	2.4	0.1	1.67	9.52	23.249	
G-27-5-7		石器	F	Ob	Ob-1	完		17.0	20.0	4.3	1.3	1.73	9.57	23.25	
G-27-5-8		石器	F	Ob	Ob-3	完		21.5	19.5	4.5	1.8	0.20	8.70	23.404	
G-27-5-9	磯群-外	磯	KN	Ch	N	完		27.9	20.9	15.3	8.8	0.89	9.69	23.21	
G-27-5-10	磯群-外	磯	KN	Ch	N	完		28.6	17.5	10.2	8.2	1.05	9.65	23.247	
G-27-5-11	磯群-外	磯	KN	Ch	N	完		42.5	27.4	24.8	36.3	1.48	9.94	23.185	
G-27-5-12	磯群-外	磯	WNN	Ch	N	割		45.0	32.2	16.9	26.3	1.54	9.94	23.172	
G-27-5-13	磯群-外	磯	WRN	Ch	N	割		33.0	16.3	14.0	8.3	1.42	9.72	23.19	
G-27-5-14	磯群-外	磯	KN	Ch	N	完		18.9	11.3	6.1	1.7	1.46	9.73	23.219	
G-27-5-15	磯群-外	磯	KN	Ch	N	完		54.9	32.4	24.0	46.6	1.60	9.75	23.308	
G-27-5-16	磯群-外	磯	KN	Ch	N	完		26.2	18.4	16.7	7.0	1.86	9.88	23.326	
G-27-5-17	磯群-外	磯	KN	Ch	N	完		67.7	41.5	34.0	136.3	1.87	9.93	23.276	
G-27-5-18	磯群-外	磯	WNN	Ch	N	割		26.3	22.1	18.3	12.3	1.26	9.63	23.169	
G-27-5-19	磯群-外	磯	KN	Ch	N	完		34.1	13.5	7.1	3.9	0.80	9.71	23.225	
G-27-5-20		石器	C	Ob	Ob-7	完	S104	6.0	6.0	1.3	0.1	1.93	9.49	23.167	
G-27-9-1		石器	F	Ob	Ob-3	完		30.5	22.5	8.9	4.4	3.06	7.86	23.302	
G-28-6	磯群-外	磯	WNN	Sa	N	割		28.0	23.0	3.0	2.3				
G-28-7	磯群-外	磯	WRN	Ch	N	割		27.8	21.7	15.7	6.8				
G-28-8	磯群-外	磯	WRN	Sa	N	割		34.5	28.6	18.1	16.1				
G-28-9	磯群-外	磯	WRN	Ch	N	割		38.6	20.1	15.2	11.0				
G-28-10	磯群-外	磯	WRN	Ch	N	割		51.7	26.8	25.5	40.7				
G-28		石器	C	Ob	Ob-2	完		8.0	14.0	2.0	0.2				
G-28-3-1		石器	F	Ob	Ob-4	完		21.5	18.0	6.2	1.7	1.22	4.80	23.716	
G-28-4-1		石器	Sc	Ob	Ob-2	完		56.0	32.0	10.0	10.8	1.33	7.15	22.952	111801
H-27-6-1		石器	F	Ob	Ob-1	完	S103	7.0	15.5	2.8	0.4				
H-27-6-2		石器	F	Ob	Ob-3	完		14.5	17.0	5.3	0.8				
H-27-6-3	磯群-外	磯	KN	Ch	N	完		35.9	19.2	14.2	11.3				

計測表凡例

- ・器種(赤化)欄は、石器に関しては器種、磯に関しては赤化の有無を表示。
- ・略号は、石器：Sc-削器、R-二次加工を有する剥片、U-微細な剥離痕を有する剥片、F-剥片、C-砕片、Co-石核。
- ・磯：KR-完形赤化磯、KN-完形赤化磯、WRR-破砕赤化磯(割れ面も赤化)、WRN-破砕赤化磯(割れ面は非赤化)、WNN-破砕非赤化磯。
- ・石材略号は、Ob-黒曜石、Ch-チャート、Tu-凝灰岩、SFT-細粒凝灰岩、BSh-黒色頁岩、Qu-玉髓、Sa-砂岩。
- ・母岩(付着)欄は、石器に関しては母岩、磯に関しては付着物の有無を表示。
- ・磯の略号は、S-煤状付着物有り、T-タール状付着物有り、N-付着物なし。
- ・接合は石器の接合がS101～、磯の接合がS1～の通し番号で表示。

## B 縄文時代

### a 炉穴

調査区から炉穴は28基検出された。B区の平坦な部分は、ほとんどが削平された状態であった。そのため、調査区の高い部分に位置する遺構の上部は失われており、炉穴の多くも炉床が露出した状況で確認された。

#### 第1号炉穴 (第115図・第117図1~16)

G-27・28グリッドに位置する。3基の重複から構成されており、炉床は北側2箇所と南側の北壁の1箇所を確認された。北側2箇所の炉床は同じ足場を使用していたと考えられる。長軸2.4m、短軸0.9m、深さ0.5mで、長軸方向はN-5°-Wである。

遺物は南側の、炉床のある掘り込み部分から、そのほとんどが検出されている。早期の条痕文系土器で、いずれも胎土に繊維を含み、器面には条痕、擦痕が施されている。1~9は器面に条痕を施すもので、1~3、5、9は同一個体で、口縁部の破片は1のみで、他はすべて胴部の破片である。6~8は同一個体で、いずれも胴部の破片である。10~16は器面に擦痕を施すもので、10~12で同一個体、13~16で同一個体と考えられる。

#### 第2号炉穴 (第115図)

F-28グリッドに位置する。炉床がほぼ露出した状況で検出された。長軸1.3m、短軸0.6m、深さ0.15mで、長軸方向はN-17°-Wである。遺物は検出されなかった。

#### 第3・4号炉穴 (第115図)

F-28グリッドに位置する。炉床が残存するのみである。第3号炉穴は長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.15mで、長軸方向はN-2°-Wである。長軸0.5m、短軸0.5m、深さ0.06mで、長軸方向はN-0°-Eである。遺物は検出されなかった。

#### 第5号炉穴 (第115図)

E-28グリッドに位置する。遺構の上部は削平されており、底面付近が残存するのみである。炉床は

北側に位置している。長軸0.9m、短軸0.5m、深さ0.1mで、長軸方向はN-44°-Eである。遺物は検出されなかった。

#### 第6号炉穴 (第115図)

E-28グリッドに位置する。遺構の上部は削平されており、底面付近が残存するのみである。炉床は東側に位置している。長軸1.0m、短軸0.6m、深さ0.06mで、長軸方向はN-90°-Eである。遺物は検出されなかった。

#### 第7号炉穴 (第115図)

E-27グリッドに位置する。炉床の一部のみが残存している。長軸0.5m、短軸0.5m、深さ0.1mである。遺物は検出されなかった。

#### 第8号炉穴 (第115図・第117図17)

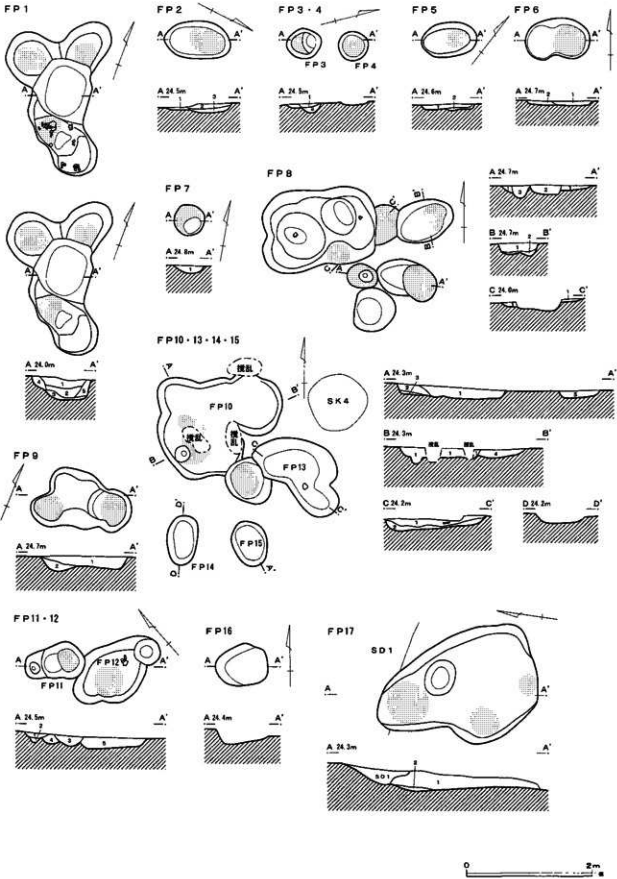
E-28グリッドに位置する。炉床が確認面に露出した状態で検出されたため、炉床と掘り込みの関係が不明のため、周囲の掘り込みも含めて第8号炉穴とした。炉床と考えられる、赤く焼けている部分が5箇所確認された。それぞれ時期差があると考えられるが、前後関係は不明である。遺物は西側の落ち込んでいる部分から出土した。17は早期の条痕文系の胴部破片で、器面に条痕が施されている。胎土に繊維を含む。

#### 第9号炉穴 (第115図)

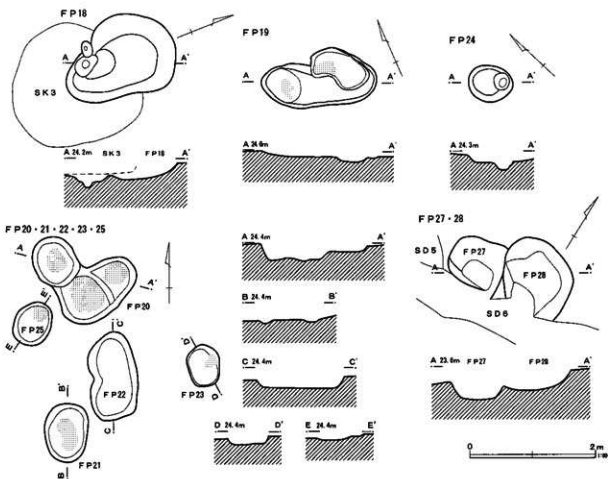
E-28グリッドに位置する。炉床は2箇所確認されたが、西側使用後に東側の炉床を使用したと考えられる。遺構の上部が削平されているため、炉床と足場の位置関係については不明である。長軸1.6m、短軸0.9m、深さ0.25mで、長軸方向はN-74°-Wである。遺物は検出されなかった。

#### 第10・13・14・15号炉穴 (第115図・第117図18~20)

F-28、G-28グリッドに位置する近接して検出された炉穴群である。第14、15号炉穴は確認時にわずかに、赤く焼けた部分が残っていたもので、掘り方が残存していたのみである。



第115圖 罅穴(1)



第1号伊次跡

- 1 暗褐色土 褐色土ブロック状に少量、ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物少量
- 3 褐色土 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化物少量、固くしまる
- 4 褐色土 ソフトローム多量
- 5 褐色土 ソフトロームブロック多量、焼土粒子少量

第2号伊次跡

- 1 褐色土 ローム粒子多量、炭化物・焼土粒子少量
- 2 褐色土 ローム粒子多量、炭化物、焼土粒子少量、焼土ブロック少量
- 3 褐色土 ローム粒子多量、炭化物少量、焼土粒子多量、焼土ブロック多量、ロームブロック少量、3層掘削断面

第3号伊次跡

- 1 褐色土 ローム粒子多量、炭化物少量、焼土粒子多量、焼土ブロック多量、ロームブロック少量
- 2 褐色土 ローム粒子多量、炭化物少量

第5号伊次跡

- 1 褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量
- 2 褐色土 ローム粒子・焼土粒子・焼土ブロック多量

第6号伊次跡

- 1 褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子多量、焼土ブロック少量
- 2 褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子少量

第7号伊次跡

- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量、ロームブロック少量、焼土ブロック多量

第8号伊次跡 (A-A')

- 1 褐色土 ローム粒子・焼土粒子・焼土ブロック多量
- 2 褐色土 ソフトローム多量、焼土粒子少量
- 3 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子・ロームブロック多量

第8号伊次跡 (B-B')

- 1 褐色土 ソフトローム多量、焼土粒子少量
- 2 褐色土 ソフトローム多量、焼土粒子・焼土ブロック少量

第8号伊次跡 (C-C')

- 1 褐色土 ローム粒子・焼土粒子・焼土ブロック多量

第9号伊次跡

- 1 褐色土 ソフトローム多量、焼土粒子・炭化物少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・焼土ブロック多量、ロームブロック少量

第10・15号伊次跡 (A-A'・B-B')

- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物多量、焼土ブロック少量、ロームブロック少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子、炭化物、ロームブロック少量
- 3 褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物少量、ソフトローム多量
- 4 暗褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物少量
- 5 暗褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物、ソフトローム少量

第11・12号伊次跡

- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・焼土ブロック多量、炭化物少量
- 2 暗褐色土 ソフトローム主体、焼土ブロック・炭化物少量
- 3 褐色土 ローム粒子・焼土粒子・焼土ブロック多量
- 4 暗褐色土 ソフトローム主体
- 5 褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子・焼土ブロック・ロームブロック少量

第13号伊次跡

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物少量を主体に散る、ローム粒子多量
- 2 褐色土 ソフトローム多量、焼土粒子・炭化物少量

第17号伊次跡

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物少量、(地山がやや暗く土層で地山とは区別しにくい)
- 2 暗褐色土 焼土ブロック面に多量、ローム粒子・焼土粒子多量

第116図 伊次 (2)

第10号炉穴の長軸2.0m、短軸1.7m、深さ0.25mで、長軸方向はN-57°-Eである。第13号炉穴は長軸1.6m、短軸0.9m、深さ0.25mで、長軸方向はN-57°-Wである。第14号炉穴は長軸0.8m、短軸0.3m、深さ0.15mで、長軸方向はN-5°-Eである。第15号炉穴は長軸0.7m、短軸0.5m、深さ0.1mで、長軸方向はN-27°-Wである。

遺物は第10号炉穴から出土している。18~20は条痕文系の土器で、18・19は条痕、20は捺痕を器面に施文している。いずれも胎土に繊維を含んでいる。

#### 第11・12号炉穴 (第115図・第117図24~26)

F-28、G-28グリッドに位置する。重複して検出されている。第11号炉穴は長軸0.9m、短軸0.6m、深さ0.22mで、長軸方向はN-57°-Wである。第12号炉穴は長軸1.5m、短軸0.9m、深さ0.2mで、長軸方向はN-81°-Wである。遺物は第12号炉穴から出土している。24~26は早期の条痕文系の土器で、胎土に繊維含む土器である。いずれも器面に捺痕を施文している。24と25は同一個体である。

#### 第16号炉穴 (第115図)

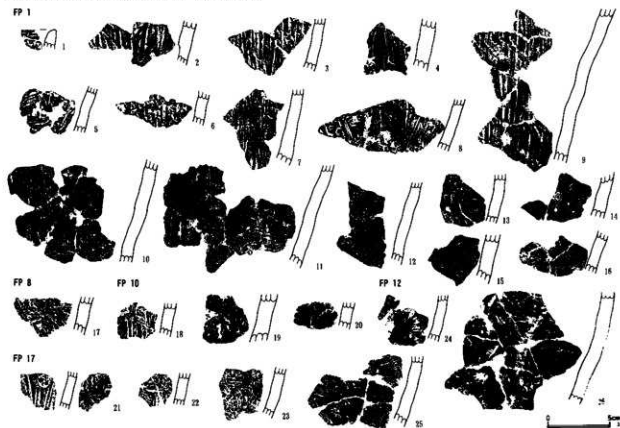
F-28グリッドに位置する。確認時に炉床がわずかに確認できたものである。長軸0.8m、短軸0.6m、深さ0.22mで、長軸方向はN-90°-Eである。遺物は検出されなかった。

#### 第17号炉穴 (第115図・第117図21~23)

F-28・29グリッドに位置する。炉床は3箇所確認されている。長軸2.6m、短軸1.8m、深さ0.4mで、長軸方向はN-12°-Wである。遺物は早期の条痕文系の土器が検出されている。21~23はいずれも胴部の破片で、21は内外面に条痕を施文する。22は外面のみ条痕を施文している。23は捺痕を施文する。胎土には繊維を含んでいる。

#### 第18号炉穴 (第116図)

F-29グリッドに位置する。確認時に炉床がわずかに露出していたものである。長軸1.8m、短軸1.4m、深さ0.4mで、長軸方向はN-4°-Wである。遺物は検出されなかった。



第117図 炉穴出土遺物

第19号炉穴 (第116図)

F-28グリッドに位置する。確認時に炉床面が2箇所確認できたものである。長軸1.8m、短軸0.9m、深さ1.6mで、長軸方向はN-68°-Wである。遺物は検出されなかった。

第20・21・22・23・25号炉穴 (第116図)

E-28グリッドに位置する。確認時に炉床が露出していた状況であったため、上部の掘り込みなどは確認することができなかったが、炉床が近接していることから、それぞれが重複しあっていた1つの炉穴群と考えられる。また炉床のみが残存していたため、重複関係や時期的な前後関係は明確にはできなかった。

第20号炉穴は、炉床が3箇所重複している。長軸1.5m、短軸1.3m、深さ0.25mである。第21号炉穴は長軸0.9m、短軸0.7m、深さ0.12mで、長軸方向はN-0°-Eである。第22号炉穴は長

軸

第1号土壇 (第118図・第119図1.2)

G-28グリッドに位置する。長軸1.15m、短軸

1.4m、短軸0.7m、深さ0.2mで、長軸方向はN-0°-Eである。第23号炉穴は長軸0.7m、短軸0.5m、深さ0.12mで、長軸方向はN-5°-Wである。第25号炉穴は長軸0.7m、短軸0.4m、深さ0.06mで、長軸方向はN-33°-Eである。いずれも遺物は検出されなかった。

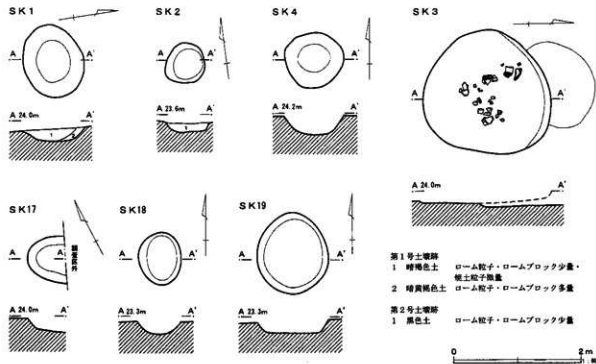
第24号炉穴 (第116図)

D-28グリッドに位置する。確認時に炉床がわずかに残存していたものである。長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.22mで、長軸方向はN-42°-Wである。遺物は検出されなかった。

第27・28号炉穴 (第116図)

F-29グリッドに位置する。南側は、第6号溝跡によってこぼされている。第27号炉穴の長軸0.9m、短軸0.8m、深さ0.46mで、長軸方向はN-42°-Wである。第28号炉穴の長軸1.2m、短軸0.8m、深さ0.32mである。遺物は検出されなかった。

0.9m、深さ0.2mである。長軸方向はN-81°-Eである。遺物は早期の条痕文系の土器片が出土して



第118図 土壇

いる。1.2ともに器面に条痕を施文するもので、胎土には繊維を含んでいる。周辺に炉穴が検出されていることから、それらにともなう遺物が流れ込んだ可能性が高い。

#### 第2号土壙 (第118図)

G-27グリッドに位置する。長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.16mである。長軸方向はN-63°-Eである。遺物は検出されなかった。

#### 第3号土壙 (第118図・第119図3.4)

F-29グリッドに位置する。遺構の確認段階においては、遺物の出土状況などから住居跡の可能性も考えられたが、炉跡や柱穴が周辺から検出されなかったため、土壙としたものである。

規模は長軸2.6m、短軸1.9m、深さ0.4mである。長軸方向はN-34°-Eである。

遺物は中期後葉の土器が、2個体出土した。3は加曽利E系のキャリパー形の深鉢で、胴部を欠損するものである。口唇直下に隆帯を1本巡らし、2本1組の隆帯を口縁部にやや弧状に巡らして、弧状の区画を5単位作り出している。弧の連結部分には表裏2箇所では隆帯で渦巻き文を施し、その直上の口

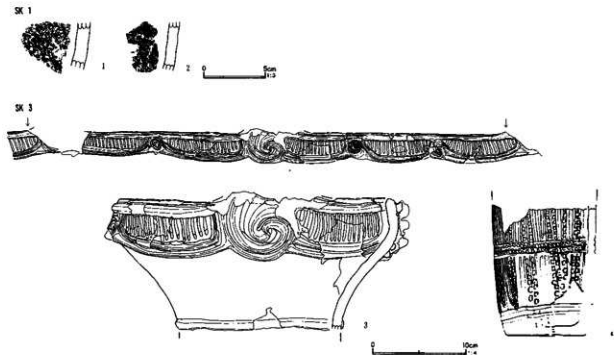
縁は波状の把起が付けられている。他3箇所連結部分には、頸部側に舌状の突起を貼り付け、その表面に沈線によって渦巻きを施文している。弧状の区画内は沈線を縦方向に充填している。頸部には無文帯を持ち、胴部との区画には隆帯を巡らしている。4は曾利系の胴部から底部にかけての深鉢である。胴部文様は縦方向の沈線を器面全体に条線状に施文をし、2本から4本の沈線の間隔を開けて、沈線と沈線の間を刺突文を1列から3列縦方向に充填している。その後中段と縦方向の沈線の下端に、胴部文様を区画するように沈線を横方向に施文している。中段の沈線の間には、横方向に2列の刺突文を充填している。

#### 第4号土壙 (第118図)

G-28グリッドに位置する。長軸1.0m、短軸0.9m、深さ0.2mである。長軸方向はN-89°-Eである。遺物は検出されなかった。

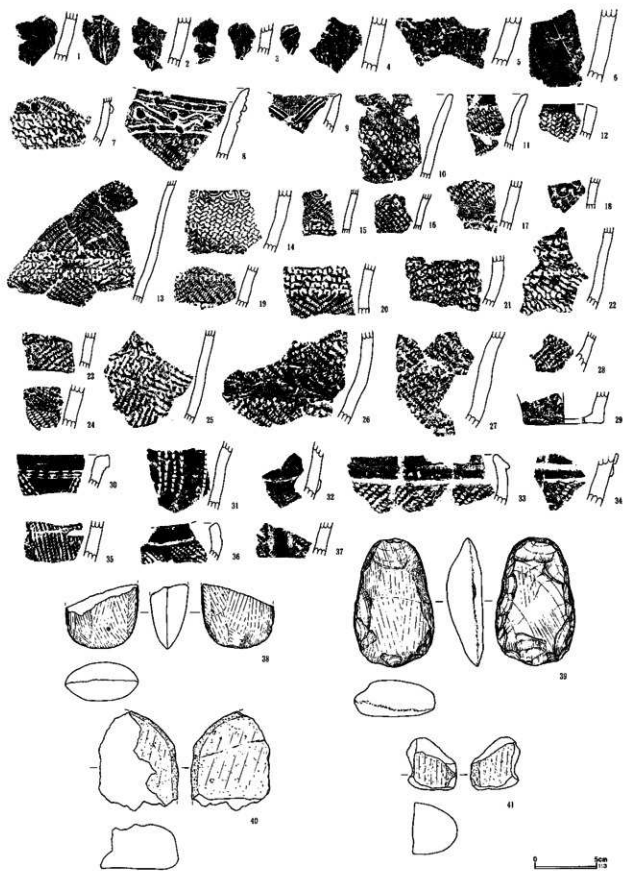
#### 第17号土壙 (第118図)

G-28グリッドに位置する。土壙の東側半分が、調査区界外に位置している。残存する長軸0.6m、短軸0.7m、深さ0.2mである。遺物は検出されなかった。



第119図 土壙出土遺物





第120図 グリッド出土遺物 (縄文時代)

## 第18号土壙 (第118図)

F-30グリッドに位置する。長軸0.9m、短軸0.8m、深さ0.2mである。長軸方向はN-16°-Wである。遺物は検出されなかった。

## c グリッド出土遺物 (第120図)

縄文時代の遺物は、谷への落ち際などを中心に検出されている。またF-28グリッドからは、土器や多くの礫が散乱した状態で検出された。周辺には炉穴が多数検出されており、土器についてはそのほとんどが、それらにともなっていたものと考えられる。また礫については、焼礫やスス付着の礫が多く含まれており、集石遺構があったと考えられる。出土した礫の総重量は3400gで、石質は70%がチャートで、そのほとんどが破砕礫であった。

## グリッド出土土器 (第120図1~37)

1~6は早期の条痕文系の、胎土に繊維をふくむ土器である。いずれも胴部の破片である。1~3は内外面に条痕を施文するものである。4~6は外面のみに条痕を施文するものである。

7~29は前期の関山式である。胎土に繊維を含む土器である。この時期に該当する遺構は検出されなかったが、遺物は割合まとまって出土している。7は口縁部文様帯を一部残す、胴部の破片である。口縁部文様には、内側に刻みを施した平行沈線文と、瘤状の貼付文を施文している。胴部にはループ文を多段に施文する。8は波状になる口縁部の破片で、平行沈線文と瘤状貼付文が口縁部に施文されている。胴部にはループ文を施文する。9は口縁部の破片で、山形に施文された平行沈線文と、刻みを施文する。胴部にはループ文を施文している。10~12は、文様帯を持たない口縁部の破片である。11はループ文、12は組紐文を施文している。13~28は胴部の破片である。13、15は羽状縄文で、コンパス文と帯状に多段のループ文を施文する。14はコンパス文を施文している。地文は組紐文である。16~18はコンパス文を施文するものである。20~22はループ文を多段に帯状に施文しているものである。19、23、

## 第19号土壙 (第118図)

F-30グリッドに位置する。長軸1.3m、短軸1.1m、深さ0.2mである。長軸方向はN-7°-Wである。遺物は検出されなかった。

25~27は末端をループとする地文を施文しているものである。24、28は単節の縄文を地文として、横方向に施文している。29は底部の破片で、底はややあげ底状となっている。

30、31は中期中葉の阿玉台系の土器である。30は口縁部の破片で、角押文状の結節沈線を施文して、三角形の文様を作りだしている。31は胴部の破片で、角押文状の結節沈線を縦方向に施文している。

32~37は中期後葉の加曾利E系の土器である。33は口縁部の破片で、隆帯を口唇下に巡らしている。口縁部には、単節LRの縄文を横方向に施文している。34は頸部の破片で、隆帯によって胴部と区画している。地文は、単節RLの縄文を縦方向に施文している。35は胴部の破片で、Lの捺糸文を施文している。36は波状口縁部の破片で、地文は単節RLの縄文を横方向に施文している。37は磨消沈線を施文する、胴部の破片である。地文は単節LRの縄文を縦方向に施文している。

## グリッド出土土器 (第120図38~41)

38は磨製石斧で、刃部のみが残存するものである。刃部の縁辺は、細かい刃こぼれ状となっている。全体に丁寧な研磨がなされている。残存している長さ5.8cm、幅5.1cm、厚さ3.1cm、重量は110.5gである。石質は砂岩である。39は磨製石斧の未製品で、剥離調整を行い、敲打によって形を整えた後の、研磨作業の工程の途中と考えられる。長さ10.2cm、幅6.5cm、厚さ2.9cm、重量249.1gで、石質は砂岩である。40、41は表裏の2面に磨面をもつ、磨石の破片である。40は火を受けて破砕している。長さ8.0cm、幅6.9cm、厚さ3.8cm、重量221.3gである。石質は安山岩である。41は長さ4.3cm、幅4.0cm、厚さ4.3cm、重量73.5gである。石質は安山岩である。

## C 中世以降

B区で検出された中世以降の遺構は、溝跡6条、土壌7基である。溝跡は台地上にあるものと台地の下で谷との境に掘られたものがある。いずれも直角に曲がり区画を成していることは明らかであるが、

### a 溝跡

#### 第1号溝跡(第121図)

C-26からG-29グリッドにかけて検出された。台地上は北北東から南南西に延び、C-28グリッドで直角に曲がり斜面を斜めに降りる。両端とも調査区内で消滅する。長さは台地上が15m、方向を変えて斜面部分が44m検出された。幅は0.8~1.65mで深さは最大44cmである。方向はN-15°-E・N-77°-Wを指す。

#### 第2号溝跡(第121図)

C-29からG-29グリッドにかけて検出された。調査区の南側で台地の下を東西に延びる。長さは

35.0m、幅は1.84mで、深さは0.46mである。主軸方向はN-90°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

#### 第3号溝跡(第121図)

D-29からF-30グリッドにかけて検出された。

### b 土壌(第117図)

土壌は全部で7基検出されたが縄文土器以外の出土はなく、形態も長方形のものはない。遺物を出土しない土壌については時期も不明であるため土壌は

### c 出土遺物(第123図)

b区からは、中世以降の遺物は殆ど出土しなかった。地形が、斜面部分が多いことが、該期の遺構が少ないことの最大の要因であろう。それに伴って必然的に遺物の出土量も少ない。

1は天目碗の体部下方の破片である。釉は薄く光沢がある。胎土は灰色がかかった黄白色で比較的緻密である。F-29グリッド出土。2は壺の口縁部で

戸宮前館跡とはやや距離があり規模も小さいことから館を構成する遺構とは考えられない。台地下に掘られたものは水成堆積が見られることから、用水や排水の機能を持ったものであろう。

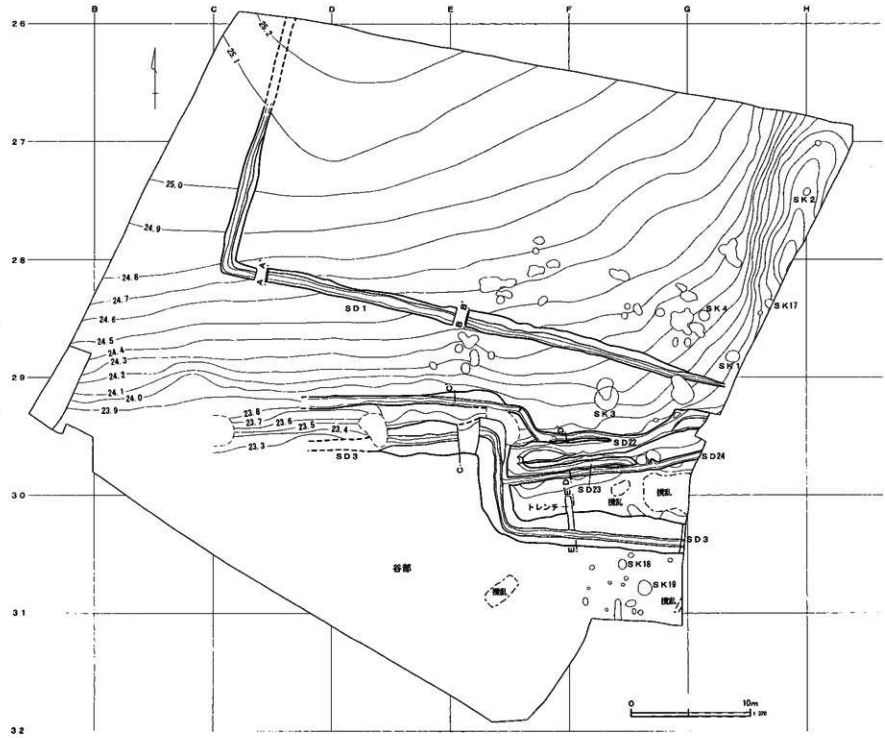
第2号溝跡の南側を同じ方向に延びる。E-29グリッドで南に折れ、第22~24号溝跡が分れる。約8mでまた東に曲がり調査区外に延びる。長さは45.0m、幅は2.94mで、深さは1.09mである。主軸方向はN-86°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

#### 第22~24号溝跡(第121図)

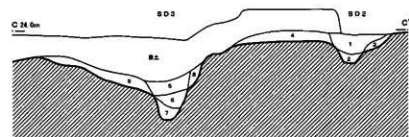
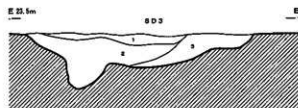
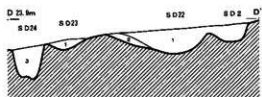
E-29からG-29グリッドにかけて検出された。西側は第3号溝跡で止まり、東は調査区外に延びる。第24号溝跡は、断面箱型で第3号溝跡に続くが、他の2条は浅い。第22号溝跡は長さは17.0m、幅は1.84mで、深さは0.4mである。N-80°-Eを指す。第23号溝跡は長さ10.6m、幅1.2mで、深さは0.25mである。主軸方向はN-83°-Eを指す。第24号溝跡は長さ17.0m、幅0.7mで、深さは0.57mである。主軸方向はN-83°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

一括して第117図に掲載したが、中には中世以降の可能性もある。

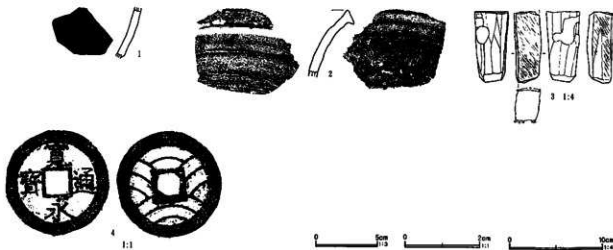
ある。断面は鋭い三角形を呈する。割れてから被熱しており外面及び破面は黒色に焼けている。胎土は砂粒と白色礫を含み、色調は灰色を呈する。焼成は良好である。表採。3は凝灰岩製の砥石で折損している。上面と下面を使用しており、側面は鑿の加工痕が残る。第1号溝跡出土。4は寛永通寶である、四文銭で背は11波である。グリッド出土であるが残存状態は良い。



第121図 遺跡(1)



第122図 溝跡(2)



第123図 B区出土遺物

第10表 出土銭貨計測表

番号	銭名	銭径(A)	銭径(B)	内径(C)	内径(D)	銭厚	重量	出土遺構	備考
第123図	寛永通寶	28.32	28.37	21.05	21.3	1.20~1.24	4.73	グリッド	四文銭 11枚

## V 宮廻館跡

### 1. 調査の概要

宮廻館跡は川崎市大字下広谷地内に所在する。遺跡は、北側で在家遺跡と小さな谷を挟んで隣接する。南は大谷川沿いの低地との境である。台地上は畑であるが地形は大谷川に向かって緩やかに標高を減じ、台地沿いに走る市道を境としてやがて水田に変わる。

調査は、便宜上路線内を横断する道路を境として北からA区～E区に分けて呼称した。調査年度は平成11年度にA・B・C区とE区の一部を、平成12・13年度にE区の一部を調査した。D区は未調査である。調査時のグリッドは、路線が長いのでC区の東と西で別に設定した。

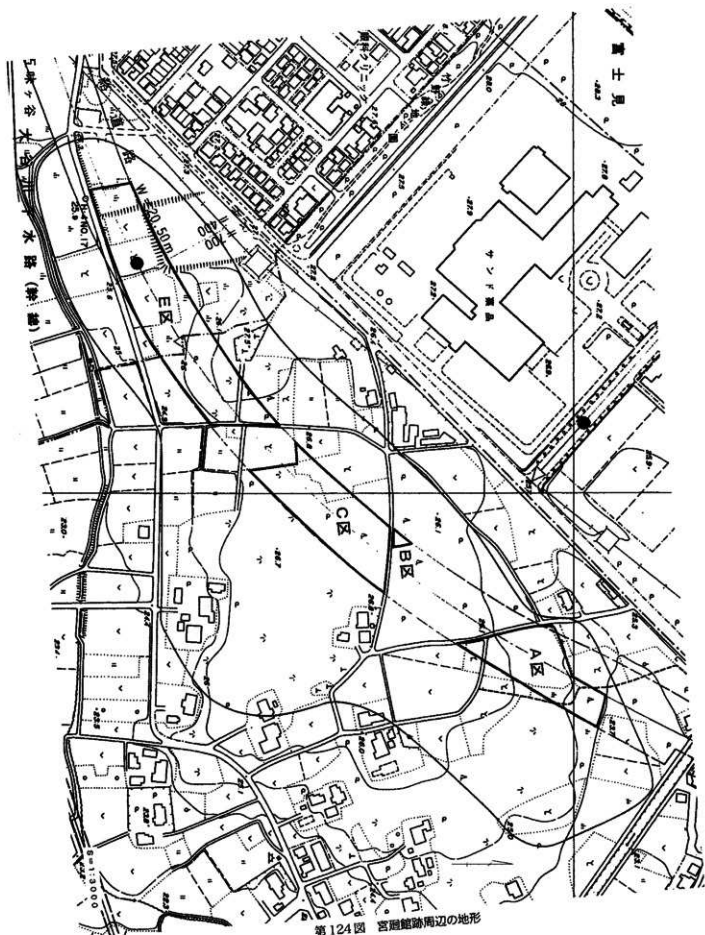
A区は台地上にあるが、北側は在家遺跡と画する谷に向かって緩やかに下がる。縄文時代早期を中心とする遺構・遺物及び中世以降の遺構・遺物が検出された。縄文時代の遺構は、北側の緩やかな斜面を中心に早期の炉穴6基、土壇9基が検出された。また、中世と思われる堀跡に伴う土壇の下から小さな谷状の地形が検出され、地形は思ったより変化に富んでいたことを窺わせた。中世以降では一部に土壇を伴う南北方向の堀跡が検出された他、井戸跡1基、溝跡12条、土壇53基が検出された。堀跡からは遺物が出土せず時期が決定できないが、この堀跡が100mほど南に続けばC区の館跡部分にあたる。調査区外で確認できなかったが、現地形でも堀跡の延長上は畑の境がC区まで続いていることから堀跡も続くと思われる。遺物は旧石器時代の尖頭器1点、ナイフ形石器1点、縄文時代では、早期条痕文系土器、前記関山式土器、中期勝坂系土器、中世以降では青磁碗片、瓦、砥石などが検出された。

B区はA区の南側で台地上の平坦な地形である。B区の大部分は、試掘調査で遺構が検出されなかったため、その部分は文化財保護課の調整により調査

から除外した。検出された遺構は、中世以降の溝跡1条、土壇5基、ピット5基である。溝跡は南北方向であるが、隣接するC区では検出されていないためC区との間の道路部分で止まるか、方向を変えるものと思われる。C区の館跡との関連性も薄いものと考えられる。遺物は、蓋と思われるものが1点出土した。

C区は台地上から、台地が大谷川に向かって緩やかに下がっていく南斜面になる。遺構は中世館跡が中心となる。館跡は方形に廻る堀や溝によっていくつかの区画に分けられる。中心部は二重の堀跡と土壇によって囲まれ、中に掘立柱建物などがあつたと思われる。北側の区画内には遺構らしき遺構は殆ど見られない。館は一度に造られたものではなく、堀跡の重複状況などから、おおよそ3時期の変遷が考えられる。館廃絶後は中心部に土壇や地下式墳が密に作られるが、外側には検出されないことから、中心の区画はかなり意識されていたものと考えられる。検出された遺構は掘立柱建物跡5棟、溝跡(堀跡を含む)18条、井戸跡1基、地下式墳14基、土坑166基である。遺物は常滑産瓦・鉢、瀬戸産平碗・摺鉢のほか在地産の土器類、銭貨などが出土した。

E区は路線が西に向かう部分で、C区の南西に位置する。台地が低くなり低地部との境にあたるため遺構密度も比較的薄い。検出された遺構は、中世以降の掘立柱建物跡13棟、井戸跡22基、竪穴式遺構7基、溝跡46条、土壇58基である。遺物は井戸跡から常滑産瓦、板碑などの他、溝跡から近世陶磁器類が出土した。染付けを中心とした近世陶磁器類が地形的に低いE区から多く出土し、台地上の他の調査区から殆ど出土していないということは、中世から近世にかけての土地利用の違いを窺わせる。



第124図 宮殿庭跡周辺の地形

## 2. 検出された遺構と遺物

### (1) A区

#### A 旧石器時代

A区ではローム層中からの確実な遺物の出土はないが、縄文包含層下部出土の尖頭器（第126図1）を始め、形態などから旧石器時代に帰属すると考えられる遺物9点を図示する。

#### 出土石器（第126図、第11表、図版39）

1は、片面周縁加工の尖頭器。完形。石材は、不純物を殆ど含まない黒曜石である。幅の広いやや縦長の剥片を素材とし、打面を基端に残置して縦に用いている。打面は調整されており、バルブはあまり発達していない。周縁から施される二次加工は平坦で比較的最長い、器面全体を覆うには至っていない。

2は、ナイフ形石器。完形。石材は玉髄である。断面が台形を呈するやや厚手の単打面の剥片を素材とし、打面を基端に残置して縦に用いている。素材の背面構成は単方向で、バルブは殆ど発達していない。背面の左側縁基端部と右側縁先端部の一部のみにブランディングが施されている。中央に通る稜の先端部付近には潰れ状の小剥離がみられる。

3は、二次加工を有する剥片。基端部が大きく欠損し、全体形は不明である。石材は縞模様に入る黒曜石である。素材打面部に当たる左側面には急斜度の、右側縁部には平坦な剥離が施されている。

4は、二次加工を有する剥片。一部欠損している。石材は、透明度の高い黒曜石である。折損した剥片を素材とする。素材はコーンが明瞭にみられる単打面の剥片で、下半部の折損後、折れ面を一部覆うよ

うに背腹両面から剥離が施されている。

5は剥片。完形。石材は、不純物を殆ど含まない黒曜石である。背面構成は単方向で、打面は調整されておらず、バルブが発達している。

6は剥片。完形。石材はガラス質黒色安山岩である。一部に原礫面を残す。背面構成は単方向で、打面は調整されている。バルブが非常に発達している。

7は、石核。完形。石材は、節理を伴う黒曜石である。ズリ状の角礫を素材としており、先行する剥離として作業面とは90度異なる剥離が左側面に観察できる。節理面を打面とし、明瞭な擦痕が観察できる。作業面は右側面から正面へと順次移動しているが、有効な剥離は正面の一面に限られ、小型の縦長の剥片が剥離されている。

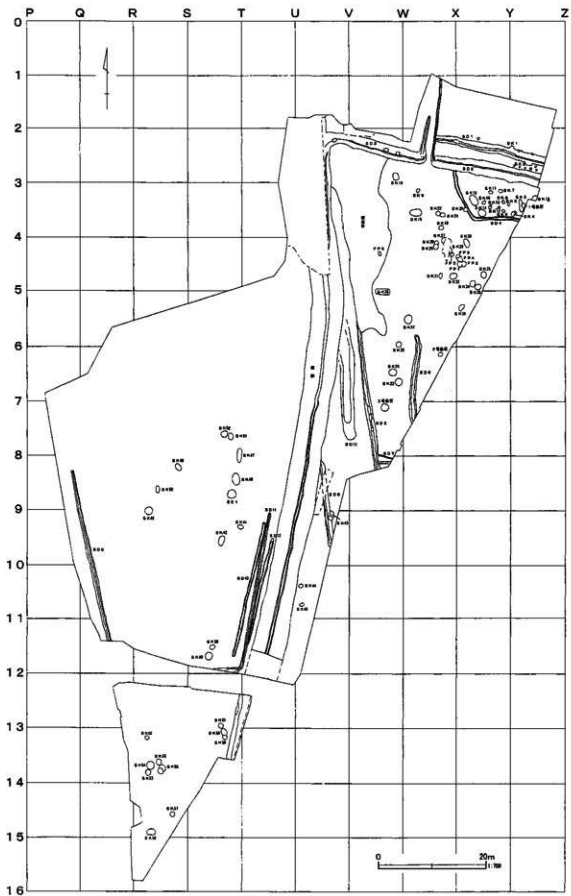
8は、微細な剥離痕を有する小型の石刃状剥片。基端部、先端部ともに欠損している。石材は透明な黒曜石である。背面構成は単方向で両側縁は平行する。両側縁に使用による微小な剥離が観察される。

9は、二次加工を有する剥片。完形。石材はガラス質黒色安山岩である。剥片を素材とし、打面部を上にして縦に用いている。打面は二次加工により除去されている。石器の製作、使用は2段階に分けられ、もともとは背面両側縁に平坦な剥離を施した片面加工の石器だったと考えられ、再利用する際に、基端部と先端部に急峻な剥離を施して突出部を作りだし、現在の形に整形したと考えられる。

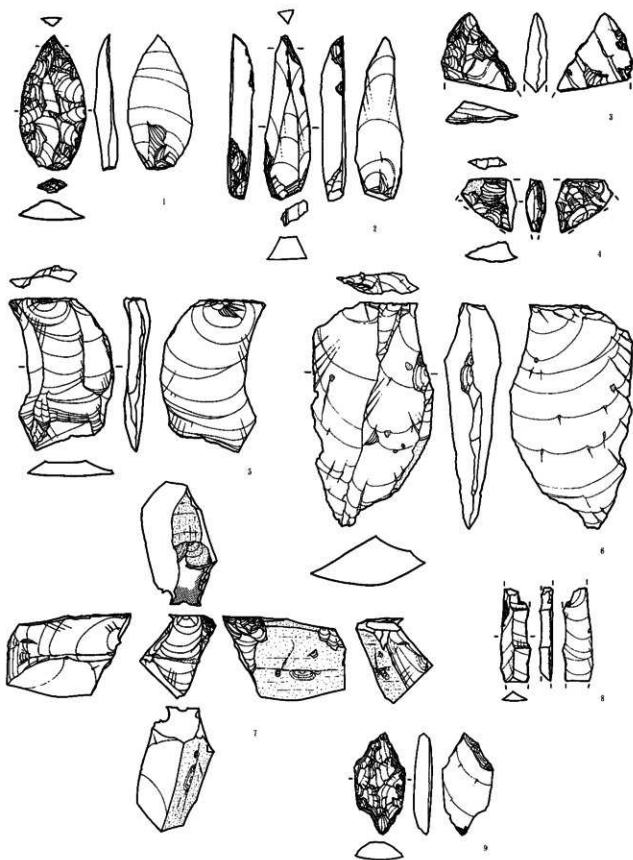
第11表 旧石器時代出土石器観察表

押図番号	器種	石材	欠損	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g
1	尖頭器	黒曜石	完	44.0	22.0	7.0	5.6
2	ナイフ形石器	玉髄	完	54.5	15.5	8.0	6.6
3	二次加工を有する剥片	黒曜石	割	21.0	25.5	8.0	3.1
4	二次加工を有する剥片	黒曜石	割	18.5	19.0	8.0	1.8
5	剥片	黒曜石	完	50.5	34.5	7.0	9.3
6	剥片	ガラス質黒色安山岩	完	74.0	41.0	18.0	39.8
7	石核	黒曜石	完	28.0	24.0	41.0	19.2
8	微細な剥離痕を有する剥片	黒曜石	割	30.0	10.0	4.5	1.0
9	二次加工を有する剥片	ガラス質黒色安山岩	完	34.0	17.0	6.0	3.3





第125图 A区全测图



第 126 图 旧石器时代遺物実測図

## B 縄文時代

### a 炉穴

調査区から炉穴は6基検出された。

#### 第1・2・3・4号炉穴 (第127図)

X-4グリッドに位置する。4基が重複して検出された。炉床は2箇所検出されている。長軸2.6m、短軸1.4m、深さは第4号炉穴部分で0.7mである。遺物は検出されなかった。

### b 集石

#### 第1号集石 (第128図)

Y-3グリッドに位置する。平面形は楕円形で、第3号土壌と重複して検出された。規模は長軸0.9m、短軸0.7m、深さ0.2mである。礫は覆土上層から64点出土している。礫の石質は2点が砂岩で、他はチャートである。礫の総重量は1574gである。

土器や石器などの遺物は検出されなかった。

#### 第2号集石 (第128図・第130図1~9)

W-6グリッドに位置する。円形に近い平面形を呈している。規模は長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.2mである。礫は覆土上層から出土している。礫の石質は83%がチャートで、砂岩が15%である。礫の総重量は3939gである。集石内からは中期中葉の勝坂系の土器が出土した。1は楕円区画内に単沈線を施文するものである。2は隆帯の両脇にキャタピラ状の爪形文を施文して、区画内に沈線文を蛇行させて施文している。3は隆帯の両脇にキャタピラ状の爪形文を施文して、その外側に結節沈線状に角押し文を施文する。区画内には蛇行する沈線文を施

### c 土壌

土壌は9基検出された。それぞれの平面形態や規模などについては、第11表に記している。

#### 第2号土壌 (第128図・第130図12.13)

遺物は中期の土器が出土している。12は阿玉台系の胴部の破片で、隆帯が施文されている。13は半截竹管によって沈線が施文されている。

#### 第14号土壌 (第128図・第130図14~26)

遺物は前期中葉の関山式土器が出土している。い

#### 第5号炉穴 (第127図)

W-4グリッドに位置する。長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.2mである。遺物は検出されなかった。

#### 第6号炉穴 (第127図)

V-4グリッドに位置する。長軸0.8m、短軸0.5m、深さ0.2mである。

遺物は検出されなかった。

文している。4はキャタピラ状の爪形文を施文している。5は胴部の破片で、蛇行する沈線文を施文する。6は沈線によって、田の字状に施文されると考えられる胴部の破片である。7、8は隆帯上に刻みを施文するもので、隆帯に沿って沈線が施文されている。9は底部の破片である。

#### 第3号集石 (第128図・第130図10、11)

V-7グリッドに位置する。円形に近い平面形を呈している。規模は長軸1.4m、短軸1.3m、深さ0.4mである。礫は覆土上層から出土している。礫の石質は88%がチャートで、砂岩が10%である。礫の総重量は3650gである。集石内から土器片1点、石器1点が出土した。10は中期の勝坂系の深鉢で、口縁部に無文帯を持つものと考えられる。口縁部と隆帯で区画している。隆帯上には刻みを施している。文様は沈線によって区画され、区画内には大形の爪形文が施文される。11は砥石として使用された石器の破片である。長さ7.5cm、幅7.0cm、厚さ4.2cm、重量164.0gで、石質は砂岩である。

ずれも胎土に繊維を含んでいる。14~19は口縁部文様帯の破片である。14は波状口縁の頂部にあわせて、棒状の貼付文を施文するもので、貼付上には刺突文を施文している。口縁部の文様は、交互刺突を施す平行沈線文を施文する。15、16は同一個体と考えられるもので、半截竹管によって、交互刺突文を行なう平行沈線文を、山形状に施文している。17は半截竹管によって平行沈線文を施文する。18

は交互刺突を行なう平行沈線文を施文するものである。19は交互刺突を行なう平行沈線文を施文するものである。20～26は胴部の破片である。20はコンパス文を施文している。15、16と同一個体であると考えられる。21～26は同一個体の胴部破片で、粗く燃られた原体で施文する、地文のみが施されるものである。

#### 第16号土壘 (第128図・第130図27)

27は前期中葉の関山式で、深鉢の胴部の破片である。地文は粗く燃られた原体で、施文されている。胎土は繊維を含む。

#### 第18号土壘 (第128図・第130図28, 29)

28、29は前期中葉の関山式で、胎土に繊維を含むものである。28は口縁部の文様帯の一部で、交互刺突を行なう平行沈線文によって、山形文を施文している。地文は単節LRの縄文を、横方向に施文している。29は胴部の破片で、粗く燃られた原体

で地文を施文している。

#### 第23号土壘 (第128図・第130図30, 31)

時期不明の小破片の土器が、出土している。30は胎土に繊維含んでいる。

#### 第33号土壘 (第128図・第130図32)

32は早期の条痕文系の土器で、器面に条痕を施文している。

#### 第36号土壘 (第128図・第130図33, 34)

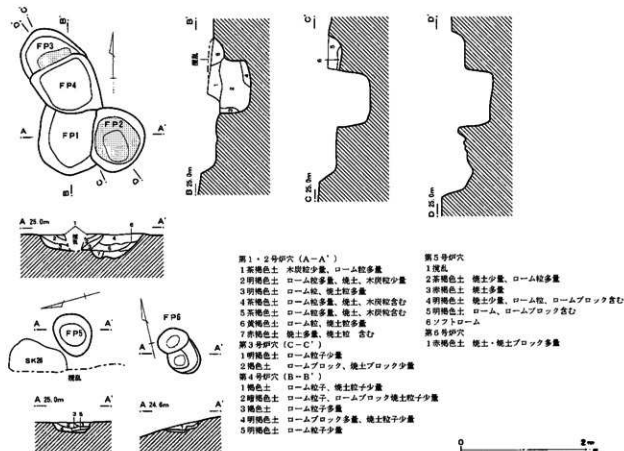
33は単節RLの縄文を施文する胴部の破片で、34は底部の破片である。

#### 第37号土壘 (第128図・第130図35)

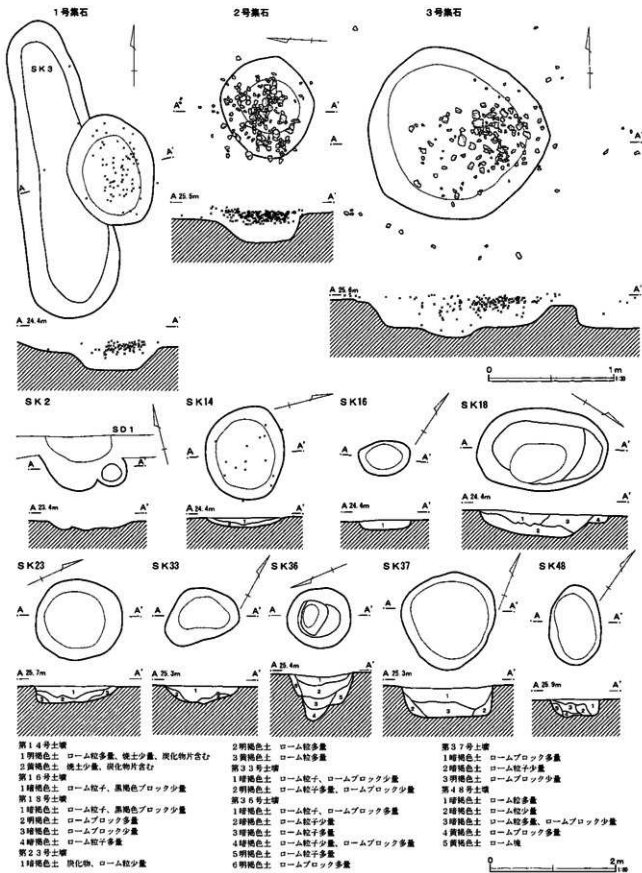
35は中期中葉の勝坂系の土器で、隆帯上には刻みを施している。

#### 第48号土壘 (第128図・第130図36～39)

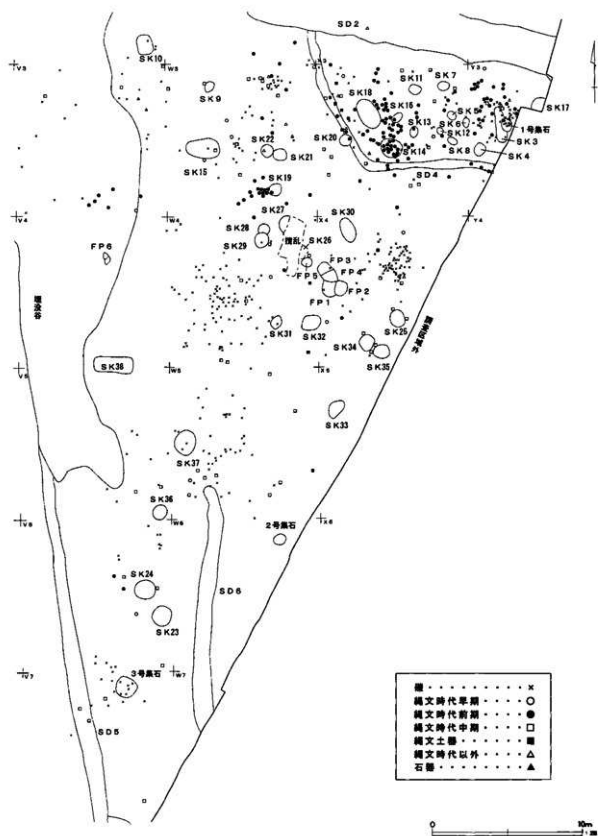
36～39は前期中葉の関山式の土器である。組紐文を地文として施文している。36は口縁部の破片で、口縁部にはコンパス文を施文している。37はやや



第127図 炉穴



第128図 縄文墓石・土壇



第129図 遺物出土分布図

外反する器形のもので、コンパス文を施文している。38、39は地文のみが施文される、胴部の破片である。

#### d グリッド出土遺物 (第129・131・132図)

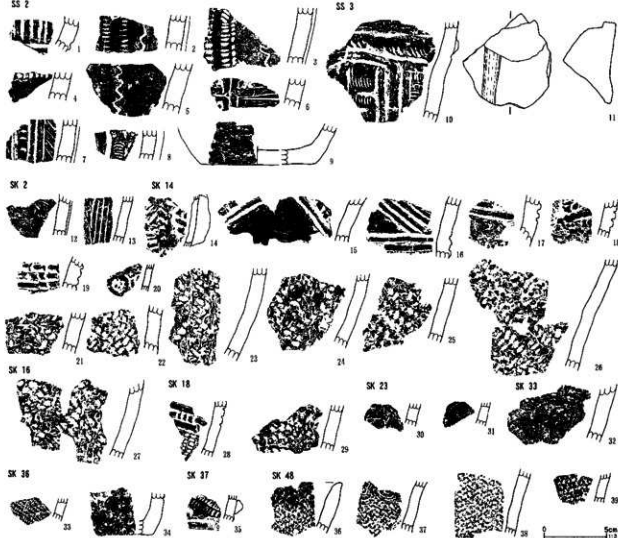
縄文時代の遺物は、調査区北東の斜面部分から、そのほとんどが出土している。第129図の遺物の分布状態から、礫については、やや密に分布している範囲が、数箇所確認できる。遺構としては確認できなかったが、これらは集石遺構としてまとまっていたものが、周辺に散乱した可能性が高い。

分布していた土器については、時期によって分布の状況に変化が認められた。早期の土器は条痕文系で、ほとんど出土しなかった。前期とした土器のほとんどは関山式土器で、この時期の出土量が一番多

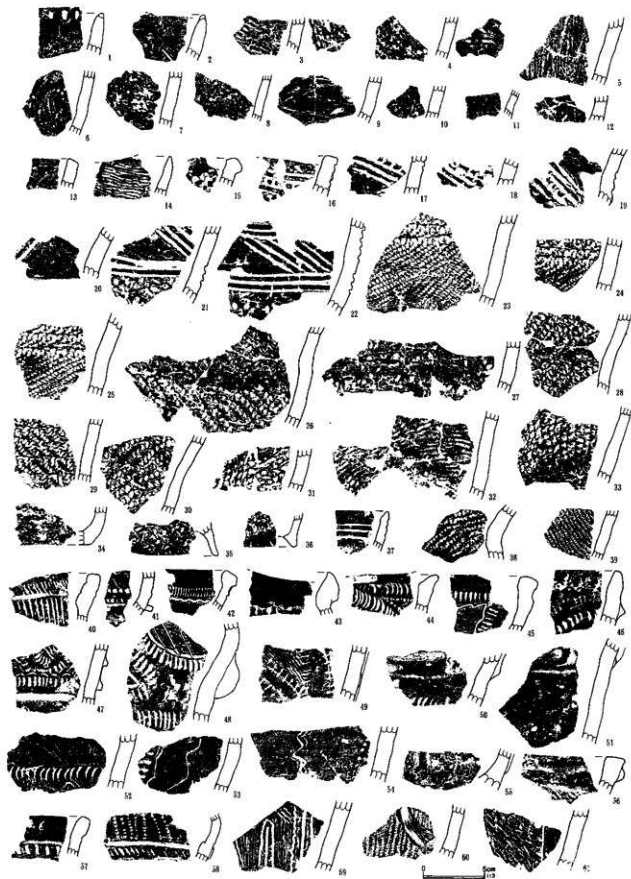
かった。斜面の北側に密に分布しており、その周辺は前期の土壌が検出されていることから、これらの遺構に関連するものと考えられる。中期とした土器の大半は勝坂期のものである。全体的にまばらに分布しており、土器としてのまとまりは確認されなかった。しかしながら、礫の集中する箇所には分布が認められるため、集石遺構との関連性が高い。

#### グリッド出土土器 (第131図)

1～12は早期の条痕文系の土器で、胎土に繊維を含むものである。1は口縁部の破片で、口唇部に刺突を施すものである。2は小突起を持つ口縁部の破片である。3、4は内外面に条痕を施文する。5～9は、外面に条痕文が施されている胴部の破片である。10、11は外面に擦痕が施されている。12は



第130図 集石・土壇出土遺物



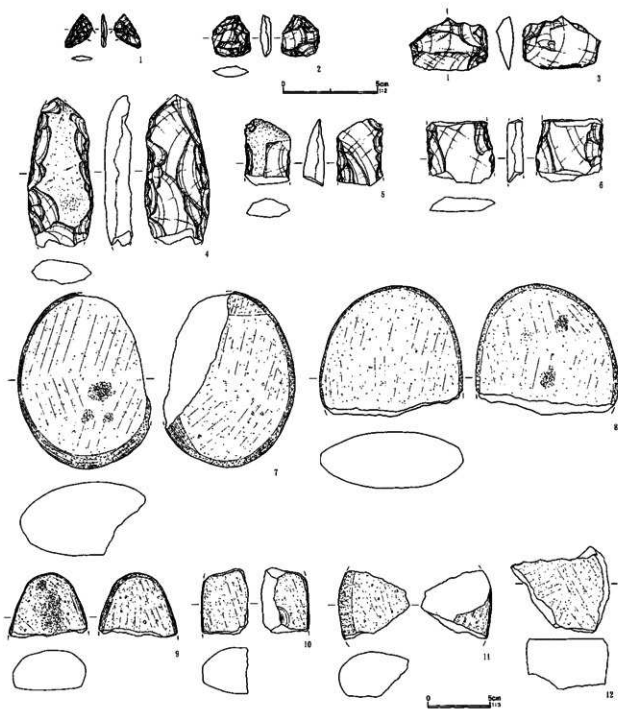
第131図 グリッド出土土器(縄文時代)



底部に近い破片で、外面に条痕文が認められる。

13～39は前期の土器である。13～36は関山式である。いずれも胎土に繊維を含んでいる。1、2は地文のみが施文される口縁部の破片で、2は波状口縁になっている。15は波状口縁部の破片で、

頂部には小突起が貼付されている。口縁部には半軟竹管によって、交互刺突を行なう平行沈線文を施文している。16は波状口縁の破片で、波頂部には貼付した小突起などが剥がれた痕跡が認められる。口縁部には、交互刺突を行なう平行沈文を施文してい



第132図 グリッド出土石器（縄文時代）

る。17～22は口縁部文様帯の破片である。いずれも平行沈線文によって、文様を施文するものである。17～19は交互刺突を施文している。21、22は同一個体と考えられるものである。23～33は胴部の破片である。23～25、29はループ文を多段に施文して、帯状となるものである。23～25は地文として、単節Lの縄文を、横方向に施文している。26～28、30～33は地文のみが施文されるものである。無節Lを施文する32以外は、粗く燃られた原体で地文が施文されている。34は底部の破片で、35、36は台付土器の脚部と考えられる。37～39は諸磯式である。37は平行沈線文を施文する口縁部の破片である。38、39は胴部の破片で地文のみが施文されている。

40～61は中期の土器である。40は五領ケ台式で、波状文口縁の破片である。口唇下には刻みを施文している。波頂部の内面には、沈線によって文様が施文されている。41、42、44～49は勝坂系の土器である。41は隆帯の両脇に、結節沈線が施文されるものである。42、44～46は口縁部の破片で、キャタピラ状の爪形文や、小波状文などを施文している。46は隆帯の両側に、キャタピラ状の爪形文を施文している。47～49は頸部から胴部の破片で、47は隆帯に沿って、キャタピラ状の爪形文を施文して、さらに蓮花文を施文している。48は隆帯にキャタピラ状の爪形文を施文して、区画内には斜行する沈線文を施文するものである。49は隆帯の両脇にキャタピラ状の爪形文を施文しているものである。43、50～55は阿玉台系の土器で、50と51は頸部の破片である。口縁部との区画に、隆帯が施文されている。50の胴部には、爪形文が施文されている。52～54は胴部の破片で、爪形文や小波状文、結節沈線が施文されるのものである。55は底部に近い破片で、隆帯のみが施文されている。56～61は加曾利E系の土器である。56～58は口縁部から頸部にかけての破片で、56は隆帯によって、口縁部と区画をしている。口縁部には単節RLの縄文が、地文

として施されている。58は頸部の隆帯上に刻みを施文する。59～61は胴部の破片である。59は沈線により逆U字状や小波状を施文するもので、地文は櫛歯状の条線である。61は磨消沈線文を施文する。グリッド出土土器(第132図1～12)

1は石鏝で左脚部を欠損している。残存している長さ1.7cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重量0.6gである。石質は黒曜石である。2は石鏝の未製品と考えられる。長さ2.2cm、幅2.1cm、厚さ0.6cmで重量は3.1gである。石質はチャートである。3は微細な剥離を有する剥片で、素材の鋭い縁刃を搔器などに、利用しているものである。長さ2.8cm、幅4.1cm、厚さ1.0cm、重量11.3gで、石質はチャートである。4～6は打製石斧である。4は基部の先端と、刃部を欠損するものである。側縁部がゆるやかに外湾する。残存する長さ11.9cm、幅5.2cm、厚さ2.1cm、重量155.2g、石質は砂岩である。5は刃部側を半分欠損するものである。残存する長さ5.3cm、幅3.7cm、厚さ1.8cm、重量34.8g、石質は砂岩である。6は基部と刃部を欠損するものである。残存する長さ5.0cm、幅5.4cm、厚さ1.3cm、重量49.9g、石質は砂岩である。7～12は磨石で、7は両面と側面を磨面として使用し、正面と側面に敲打痕が認められる。左側の一部を欠損するもので、残存する長さ14.1cm、幅10.5cm、厚さ5.9cm、重量1074.3gである。石質は閃緑岩である。8～10は側縁部分に面を取って加工するものである。8と9の表面には敲打痕が、10の裏面には凹部が認められる。いずれも破損品で、8の残存する長さ10.5cm、幅11.4cm、厚さ4.8cm、重量802.3gで、石質は閃緑岩である。9の残存する長さ5.1cm、幅6.2cm、厚さ3.6cm、重量109.3gで、石質は安山岩である。10の残存する長さ6.3cm、幅3.8cm、厚さ3.7cm、重量86.5gで、石質は閃緑岩である。11と12は破片で、11の残存する長さ5.4cm、幅5.6cm、厚さ4.8cm、重量126.8gで、石質は安山岩である。12の残存する長さ6.9cm、幅7.8cm、厚さ4.6cm、重量268gで、石質は砂岩である。

## C 中世以降

### a 土塁と堀跡 (第134図)

調査に入る段階で土塁状の高まりが残っていた。U-7グリッドから北に約45m遺存しており、幅は堀で約1mである。U-7グリッド付近が一番高く、周囲との比高差は0.6mである。遺存状態はあまり良くなく、肩部分は崩れており北に行くほど低くなる。U-7グリッドより南側は土塁状の高まりは見られないが、これはこの部分で耕地が変わるため既に削平されたものと思われる。

表土を除去したところ土塁に沿って西側に堀跡が検出された。堀跡は南北方向に伸び、北側は擾乱が大きく入っているが、更に北に伸びようである。南は土塁の遺存する部分より更に延びて調査区外に出る。検出された長さは118mに及ぶ。幅は平均5.5mで場所によっては6mを超える。深さは2.2~2.8mで、土塁の高さを加えると現状で3.4mの比高差となる。断面形は葉研形を呈し、傾斜は西側が35°~40°、土塁側は38°~53°を測る。底幅は30~50cmである。覆土はおそらく自然堆積と思われる。土層断面ではロームを多量に含む層は、1

### b 井戸跡

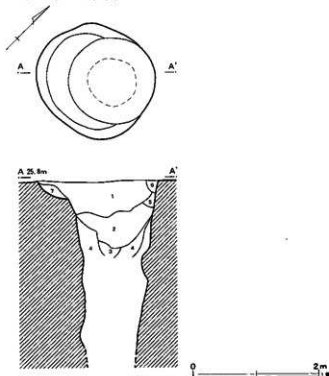
#### 第1号井戸跡 (第133図)

S-8グリッドで検出された。重複する遺構はない。平面形は円形である。南西側が25cmほどの深さで一回り大きく掘り下げられている。規模は検出面の直径は1.92mであるが、井戸本体は直径1.4mである。深さは2.6mまで掘り下げたが危険なためそれ以上の調査は断念した。覆土はローム粒子とロームブロックを多量に含み埋め戻されたと思われる。

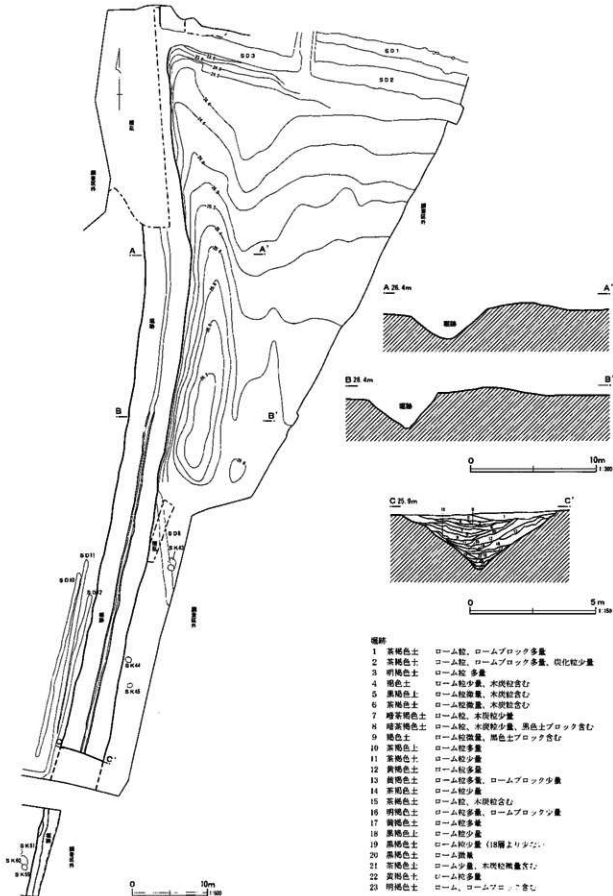
遺物は、内耳土器底部の小破片が1点と砥石が1点で、他には片岩などの礫が少量出土したのみである。第141図7は中央が厚く、両端に向かって薄く砥がれている。上面、下面とも良く使用されている。側面はいくらか使用されているがまだ加工の際の鑿痕の稜が消える程には砥がれていない。石材は凝灰岩である。

~3層と10・12・13・16・17層の2箇所に集中している。このうち下の集中は堀の東側、つまり土塁のある側から流れ込んだものと理解され、ある一時期に土塁が何らかの理由で崩れたことを意味する。土層断面の位置から土塁が現状より南に続いていたことを窺わせるものである。これより下層は黒褐色土が30cmほど堆積しており、堀が少し埋まった時点で土塁が崩れている。この堀跡は現在の耕地の境界にあたっており、南側の延長線上にはC区宮廻館跡がある。これと何らかの関係が想定されそうであるが、今回の調査では、遺物は全く出土せず時期決定もできないため断定は避けておく。

は交互刺突を行なう平行沈線文を施文するものである。19は交互刺突文を行なう平行沈線文を施文するものである。20~26は胴部の破片である。20はコンパス文を施文している。15、16と同一個体であると考えられる、21~26は同一個体の胴部破片で、粗く燃らされた原体で施文する、地文のみが施されるものである。



第133図 井戸跡



第134図 堀跡と土層

### c 溝跡 (第135~138図)

溝跡は13条検出された。直線のなものと、直角に曲がるものがあり、殆どが前者に属する。第5・13号溝跡は土塁の下から検出され、重複のある溝の中では古いのが、これらの溝跡は規模も小さく途中で切れてしまうものが多いためその性格ははっきりしない。後者に分類されるのは第2~4・11号溝跡である。第2・3号溝跡は企画性を持っており、何らかの区画を意図した溝と考えられる。第1号溝跡は第2号溝跡より古いと同じくその可能性が考えられる。第10号溝跡は道路に沿って曲がるもので地境的なものかもしれない。第1号溝跡は第2号溝跡の北側に1.5~2.5mの間隔で東西方向に延びる。

第12表 溝跡計測表

番号	グリッド	長さ1	長さ2	幅1	幅1'	幅2	深さ1
1	W-2~Y-2	20.80		1.75		1.05	0.58
2	W-1~Y-2-3	35.20		2.80		0.39	0.48
3	U-2~W-1	25.40		2.32		0.35	0.51
4	W-2~Y-3	17.80		0.67		0.50	0.12
5	V-5~V-8	27.40		1.25		0.75	0.44
6	W-5~W-7	15.70		1.26		0.75	0.36
7	V-7~V-8	2.40		1.65		1.12	0.18

#### 溝跡土層註記

##### 第1号溝 (第135図 A-A'・C-C')

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量含む (耕作土)
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量含む (S D1)
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量含む (S D1)
- 4 暗褐色土 ロームブロック少量含む (S D1)
- 5 暗褐色土 ロームブロック少量含む (S D1)
- 6 暗褐色土 ローム粒子少量含む
- 7 黒褐色土 ローム粒子少量含む (S D2)
- 8 黒褐色土 ローム粒子少量含む (S D2)
- 9 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む (S D2)
- 10 暗褐色土 ローム粒子少量含む (S D2)
- 11 暗褐色土 ロームブロック少量含む
- 12 暗褐色土 ロームブロック少量含む
- 13 黄褐色土 地山
- 14 暗褐色土 ローム粒子少量含む (耕作土)
- 15 黄褐色土 ロームブロック少量含む
- 16 明褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む
- 17 黄褐色土 ソフトローム主体、一部は凝れ込み
- 18 暗褐色土 ローム粒子少量含む
- 19 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む
- 20 明褐色土 ロームブロック少量含む

##### 第2号溝 (第135図 B-B')

- 1 暗褐色土 ローム粒少量、炭化物片含む
- 2 明褐色土 ローム粒少量、ロームブロック含む

##### 第3号溝 (第135図 E-E')

- 1 黒褐色土 ローム粒少量、炭化物片含む
- 2 黒褐色土 ローム粒少量、炭化物片含む
- 3 明褐色土 ローム粒少量、ロームブロック含む

西側は第2号溝跡で止まるが、東側の土層断面で第2号溝跡より古いことが確認されている。第2号溝跡との間にビット列が検出された (第136図)。ビットは方形の掘りこみで75cmの間隔で5個が並ぶ。反対側にもビットがあることから溝に伴うものと考えておきたい。第2・3号溝跡は斜面の下縁を東西方向に延びる。溝底の状態から双方とも2回程程度の掘り直しがあったと考えられる。第3号溝跡は西に延び堀跡にぶつかるが、掘り直し前の溝は堀跡に沿って南に曲がっている。攪乱が堪かり堀跡との新旧関係は捉えられなかった。最終段階の溝はW-2グリッドで双方とも北に直角に曲がる。遺物は第2号

番号	グリッド	長さ1	長さ2	幅1	幅1'	幅2	深さ1
8	U-8~U-9	14.60		1.19		0.90	0.41
9	P-8~Q-11	32.30		0.84		0.42	0.33
10	S-11~T-9	25.50		0.50		0.45	0.09
11	S-11~T-9	31.50		0.64		0.47	0.20
12	T-9~T-11	20.60		0.56		0.38	0.07
13	U-6・V-5~V-7	(16.50)		2.29		2.15	0.22

##### 第13号溝 (第137図 A-A')

- 1 黒褐色土 ローム粒少量
- 2 黒褐色土 ローム粒、ロームブロック含む
- 3 明褐色土 ローム粒、ロームブロック少量
- 4 黄褐色土 ローム粒主体

##### 第5号溝 (第137図 B-B')

- 1 明褐色土 ローム粒少量含む
- 2 褐色土 ローム粒少量、木炭少量含む
- 3 暗褐色土 ローム粒、木炭含む
- 4 赤褐色土 ローム粒、木炭少量含む
- 5 赤褐色土 ローム粒、ロームブロック、木炭含む
- 6 明褐色土 ローム粒、ロームブロック少量含む
- 7 黄褐色土 ローム粒少量含む

##### 第6号溝 (第137図 D-D')

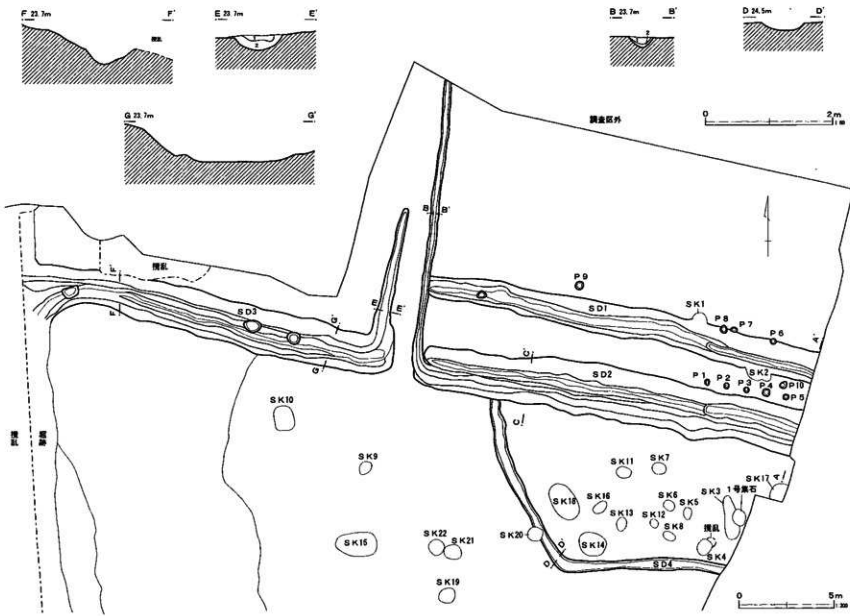
- 1 暗褐色土 ローム粒少量含む
- 2 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む
- 3 明褐色土 ローム粒子少量含む
- 4 黄褐色土

##### 第8号溝 (第137図 E-E')

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量含む
- 2 黒褐色土 ロームブロック少量含む
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量含む
- 4 暗褐色土 ロームブロック少量含む
- 5 暗褐色土 ロームブロック少量含む

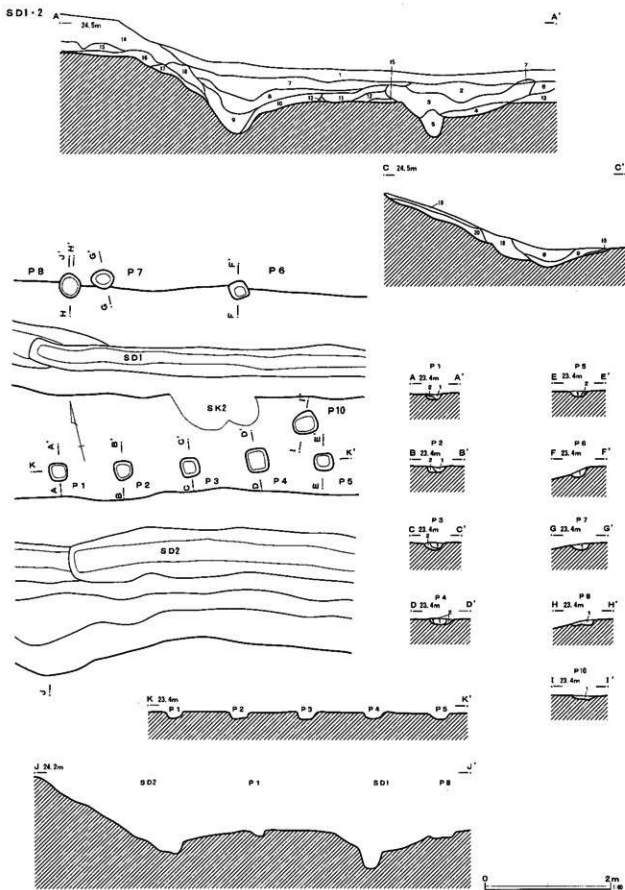
##### 第9号溝 (第138図 A-A')

- 1 褐色土 ローム粒少量含む
- 2 暗褐色土 ローム粒少量含む
- 3 明褐色土 ローム粒少量含む

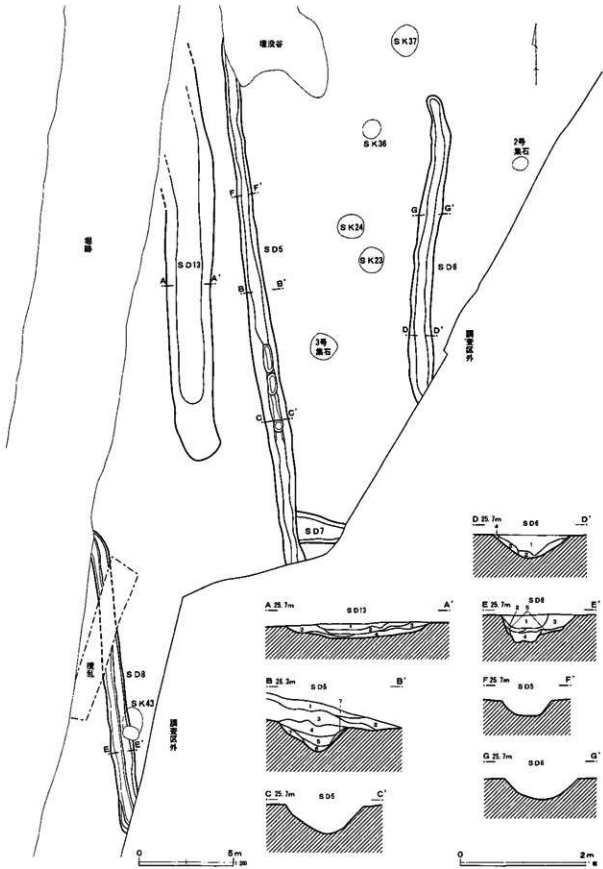


河床断面

第135图 河床 (1)



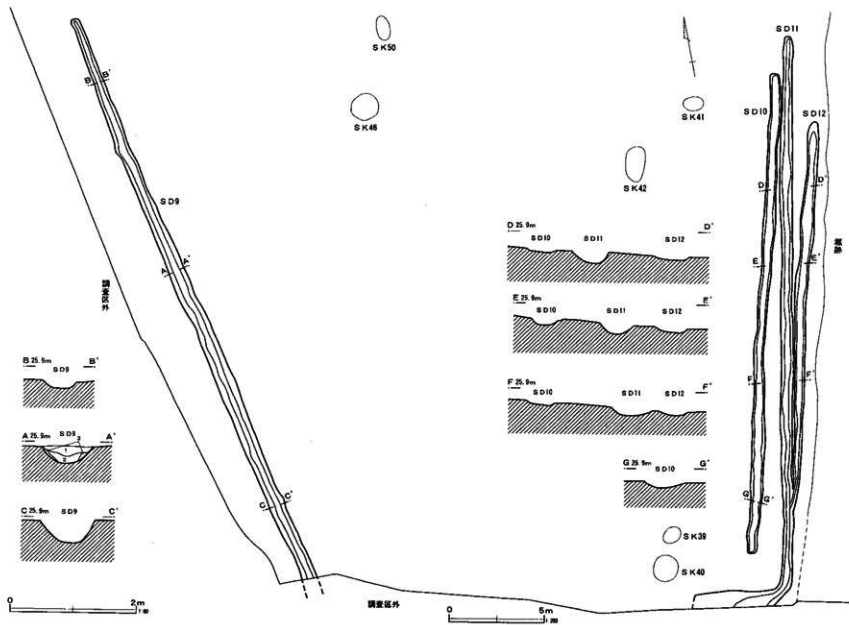
第136圖 溝跡(2)



第137图 溝跡(3)



第138圖 測跡(4)



溝跡から18後半～19世紀の染付等が出土したが細片である。図示できたのは金属製品2点である。第141図10は両端を欠く棒状の鉄製品である。用途は不明。残存長3.3cm、断面は長方形を呈し、図示した部分での大きさは0.3×0.5cmである。11は中空の銅製品である。長さ1.6cm、幅1.6cm、厚さはd 土壌

土壌は53基検出された。分布は北側のW・X-3・4グリッドにやや集中しており、調査区中央は少数が散在する。調査区南側のR・S-13グリッドには重複するものが2箇所見られる。これらの土壌は形態から3分類できる。1. 長方形を呈するものである。角が丸みを帯びて楕円状になるものも含めた。第3・10・15・30・38・42・47・50・58号土壌が該当する。2. 大形で円形乃至不整楕円形を呈するものである。不整楕円形のものには楕円状を呈するものと区別し難いものがある。第17・24・32・40・43・46・49・54号土壌が該当する。3. 小形で円形乃至楕円形を呈するもの

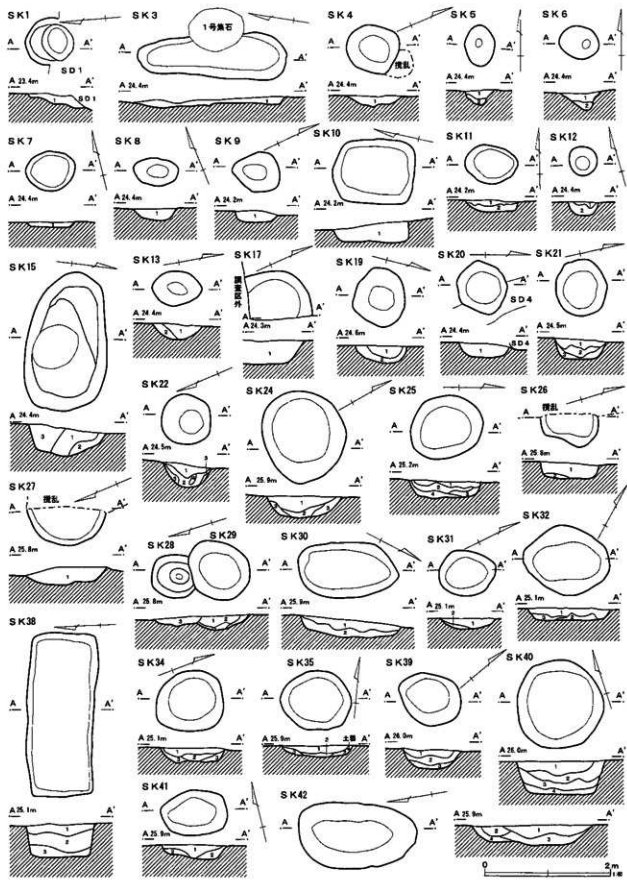
第13表 土壌計測表

番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位	重複関係	形態
1	Y-2	-0.74	-0.72	0.16	-	S D1	円形
2	Y-2	-1.36	-0.86	0.27	N-18°-E	S D1	楕円形
3	Y-3	2.32	0.72	0.16	N-83°-E	1号集石	楕円形
4	Y-3	0.84	0.82	0.11	-	-	円形
5	X・Y-3	0.64	0.46	0.24	N-3°-E	-	楕円形
6	X-3	0.66	0.52	0.31	N-90°-E	-	楕円形
7	X-3	0.62	0.58	0.13	-	-	円形
8	X-3	0.7	0.44	0.21	N-68°-W	-	楕円形
9	W-3	0.76	0.64	0.21	N-35°-E	-	楕円形
10	V-2	1.28	1.02	0.36	N-7°-W	-	長方形
11	X-3	0.82	0.58	0.24	N-88°-W	-	楕円形
12	X-3	0.46	0.44	0.22	-	-	円形
13	X-3	0.82	0.52	0.27	N-10°-E	-	楕円形
14	X-3	1.48	1.24	0.15	N-57°-W	-	楕円形
15	W-3	2.2	1.3	0.51	N-0°-E	-	楕円形
16	X-3	0.8	0.54	0.17	N-63°-E	-	楕円形
17	Y-3	-0.96	-0.74	0.37	N-20°-E	-	(楕円形)
18	X-3	2.04	1.3	0.46	N-31°-W	-	楕円形
19	W-3	0.94	0.82	0.31	N-70°-E	-	楕円形
20	X-3	0.82	0.8	0.26	-	S D4	円形
21	W-3	0.88	0.82	0.35	-	-	円形
22	W-3	0.78	0.78	0.41	-	-	円形
23	V-6	1.36	1.3	0.27	-	-	円形
24	V-6	1.42	1.3	0.32	-	-	円形
25	X-4	1.16	0.94	0.23	N-8°-W	-	楕円形
26	W-4	0.92	-0.52	0.26	N-5°-E	-	(楕円形)
27	W-3-4	1.14	-0.6	0.24	N-23°-E	-	(楕円形)
28	W-4	0.76	0.7	0.25	-	S K29	(円形)
29	W-4	1.02	0.92	0.22	N-76°-E	S K28	楕円形
30	X-4	1.62	0.88	0.27	N-18°-W	-	楕円形
31	W-4	0.9	0.74	0.2	N-8°-E	-	楕円形

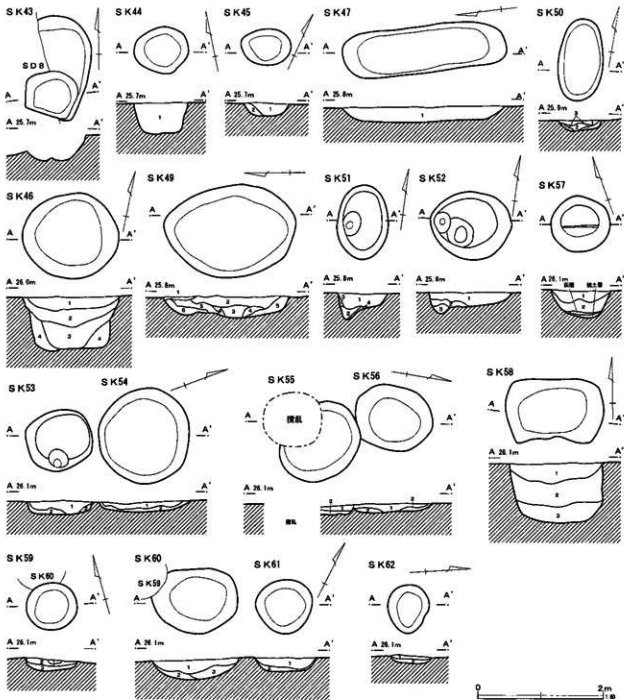
最大で0.6cmである。片側の端部はつぶれている。用途は不明であるが、刀子など小形の刃物の装具である可能性がある。第3号溝跡からは19世紀の染付磁器片など13点が出土したが図示できるものはない。第6号溝跡からは須恵器の壁片が1点出土しただけである。

ビット状のものも含まれるが、大きさによる分類が困難なため土壌として扱った。この種の土壌は調査区北側に集中して見られる。調査区北側は縄文時代の遺構が分布していることから、遺物が出土しなかった土壌の中には該期のものが含まれている可能性はある。遺物は第47号土壌から平瓦片1点と土器細片5点、第50号土壌から皿と思われる陶器小片が1点、第52号土壌からこれも皿と思われる陶器細片1点と内耳土器片1点が出土したのみで図示できるものはなかった。

番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位	重複関係	形態
32	W-X-4	1.4	1.06	0.25	N-75°-E	-	楕円形
33	X-5	1.10	0.9	0.32	N-14°-E	-	楕円形
34	X-4	1.14	1.00	0.25	N-13°-W	-	楕円形
35	X-4	1.10	0.9	0.18	N-86°-E	-	楕円形
36	V-5	1.00	0.96	0.75	-	-	円形
37	W-5	1.54	1.48	0.48	-	-	円形
38	V-4-5	2.56	1.08	0.8	N-86°-W	-	長方形
39	S-11	1.02	0.8	0.33	N-59°-E	-	楕円形
40	S-11	1.38	1.36	0.55	-	-	円形
41	S-T-9	1.08	0.7	0.2	N-79°-W	-	楕円形
42	S-9	1.84	1.02	0.31	N-15°-E	-	楕円形
43	U-8-9	1.54	-0.82	0.43	N-13°-E	S D8	楕円形
44	U-10	0.86	0.8	0.49	-	-	円形
45	U-10	0.8	0.6	0.24	N-90°-E	-	楕円形
46	R-8-9	1.5	1.34	0.9	N-83°-E	-	楕円形
47	S-7-8	2.56	0.72	0.26	N-0°-E	-	長方形
48	R-8	1.26	0.82	0.24	N-39°-W	-	楕円形
49	S-8	2.06	1.44	0.32	N-0°-E	-	楕円形
50	R-8	1.26	0.72	0.17	N-5°-W	-	楕円形
51	S-7	1.14	0.78	0.28	N-8°-W	-	楕円形
52	S-7	1.28	1.06	0.23	N-5°-W	-	楕円形
53	R-13	1.02	0.94	0.19	-	-	円形
54	R-13	1.5	1.42	0.2	-	-	円形
55	R-13	1.38	-0.91	0.18	N-57°-W	S K56	楕円形
56	R-13	1.24	1.02	0.16	N-15°-E	S K55	楕円形
57	R-14	0.92	0.88	0.39	-	-	円形
58	R-14	1.56	0.98	0.94	N-88°-W	-	長方形
59	S-13	0.8	0.74	0.2	-	S K60	円形
60	S-13	1.36	1.02	0.32	N-27°-W	S K59	楕円形
61	S-12	0.86	0.84	0.24	-	-	円形
62	R-13	0.76	0.64	0.14	N-87°-W	-	楕円形



第139圖 土坑(1)



第140図 土壌(2)

## 土壌土層註記

## 第1号土層

1 明褐色土 ロームブロック少量含む

## 第3号土層

1 黒褐色土 ロームブロック少量含む

## 第4号土層

1 明褐色土 ロームブロック、ローム粒子少量含む

## 第5号土層

1 明褐色土 ローム粒子少量含む

2 明褐色土 ロームブロック少量含む

## 第6号土層

1 明褐色土 ローム粒子少量含む

2 明褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量含む

## 第7号土層

1 黒褐色土 ロームブロック少量含む

## 第8号土層

1 明褐色土 ローム粒子少量含む

2 明褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量含む

## 第9号土層

1 明褐色土 黒褐色ブロック、ロームブロック少量含む

## 第10号土層

1 黒褐色土 ロームブロック、ローム粒子少量含む

## 第11号土層

1 明褐色土 ローム粒子、黒褐色ブロック少量含む

2 明褐色土 ロームブロック少量含む

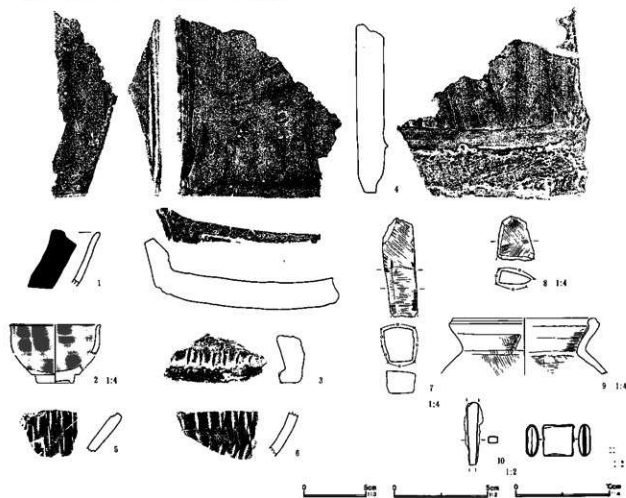
- 第12号土壌  
1 暗褐色土 ローム粒子、黒褐色ブロック少量含む  
2 暗褐色土 ロームブロック少量含む
- 第13号土壌  
1 暗褐色土 ローム粒子、黒褐色ブロック少量含む  
2 暗褐色土 ロームブロック少量含む
- 第15号土壌  
1 暗褐色土 ローム粒子少量、黄土粒子微量含む  
2 暗褐色土 ロームブロック(10-15mm)少量含む  
3 暗褐色土 ロームブロック(10-20mm)少量含む
- 第17号土壌  
3 黄褐色土
- 第19号土壌  
1 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む  
2 暗褐色土 ロームブロックローム粒子多量含む
- 第20号土壌  
1 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む
- 第21号土壌  
1 暗褐色土 ローム粒含む  
2 暗褐色土 ローム粒多量含む  
3 黄褐色土 ローム粒少量含む
- 第22号土壌  
1 暗褐色土 ロームブロック少量含む  
2 暗褐色土 ロームブロック多量含む  
3 暗褐色土 ローム粒子少量含む  
4 黄褐色土 ローム塊多量含む
- 第24号土壌  
1 暗褐色土 炭化物、ローム粒少量含む  
2 暗褐色土 ローム粒多量含む  
3 黄褐色土 ローム粒少量含む
- 第25号土壌  
1 暗褐色土 木炭粒、ローム少量含む  
2 暗褐色土 木炭粒及びローム粒含む  
3 黄褐色土 ローム粒、ロームブロック含む  
4 黄褐色土 ローム粒、ロームブロック含む
- 第26号土壌  
1 褐色土 ローム粒子少量含む  
2 暗褐色土 ローム粒子少量含む
- 第27号土壌  
1 褐色土 ローム粒子少量含む
- 第28号土壌・第29号土壌  
1 褐色土 ローム粒子少量含む  
2 暗褐色土 ローム粒子少量含む  
3 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む
- 第30号土壌  
1 褐色土 ローム粒子少量含む  
2 暗褐色土 ローム粒子少量含む
- 第31号土壌  
1 褐色土 ローム粒子少量含む  
2 暗褐色土 ローム粒子少量含む
- 第32号土壌  
1 褐色土 ローム粒子少量含む  
2 暗褐色土 ローム粒子少量含む  
3 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む
- 第34号土壌  
1 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む  
2 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量含む  
3 黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む
- 第35号土壌  
1 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む  
2 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量含む  
3 黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む
- 第38号土壌  
1 暗褐色土 ロームブロック少量含む  
2 黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む  
3 暗褐色土 ロームブロック多量含む
- 第39号土壌  
1 褐色土 ローム粒少量含む  
2 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック含む  
3 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック多量含む

- 第40号土壌  
1 褐色土 ローム粒少量含む  
2 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック含む  
3 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック多量含む  
4 黄褐色土 ローム粒、ロームブロック含む
- 第41号土壌  
1 暗褐色土 ローム粒、黄土少量含む  
2 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック多量含む
- 第42号土壌  
1 暗褐色土 ローム粒含む  
2 黄褐色土 ローム粒少量、木炭粒含む  
3 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック含む  
4 黄褐色土 ローム粒、ロームブロック含む
- 第44号土壌  
1 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む
- 第45号土壌  
1 黄褐色土 ローム粒子少量含む  
2 暗褐色土 ロームブロック少量含む
- 第46号土壌  
1 暗褐色土 ローム粒少量含む  
2 暗褐色土 ローム粒、木炭粒微量含む  
3 暗褐色土 ローム粒多量、木炭粒を微量含む  
4 褐色土 ローム粒、ロームブロック含む
- 第47号土壌  
1 暗褐色土 黒褐色ブロック少量、ロームブロック、ローム粒子多量
- 第49号土壌  
1 黄褐色土 ロームブロック、ローム粒子少量含む  
2 暗褐色土 ローム粒子少量含む  
3 暗褐色土 ロームブロック少量含む  
4 暗褐色土 ローム粒子微量  
5 黄褐色土 ローム粒子少量含む  
6 暗褐色土 ロームブロック多量含む
- 第50号土壌  
1 暗褐色土 ローム粒少量含む  
2 暗褐色土 ローム粒多量含む  
3 黄褐色土 ローム粒多量含む
- 第51号土壌  
1 暗褐色土 ローム粒子少量含む  
2 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む  
3 暗褐色土 ローム粒子多量含む  
4 黄褐色土 ロームブロック多量含む
- 第52号土壌  
1 暗褐色土 ローム粒子少量、ロームブロック多量含む  
2 暗褐色土 ローム粒子多量含む  
3 黄褐色土 ロームブロック多量含む
- 第53号土壌・第54号土壌  
1 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック少量含む  
2 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック多量含む
- 第55号土壌・第56号土壌  
1 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック少量含む  
2 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック多量含む
- 第57号土壌  
1 暗褐色土 少量のローム粒、微量の木炭、黄土を含む  
2 黄褐色土 ローム粒、木炭粒、黄土粒微量含む
- 第58号土壌  
1 暗褐色土 ローム粒多量含む  
2 黄褐色土 ローム粒、木炭粒含む  
3 黄褐色土 ローム粒、ロームブロック含む
- 第59号土壌  
1 赤褐色土 黄土粒子、珪ブロック多量含む  
2 暗褐色土 ローム粒子少量含む  
3 暗褐色土 ローム粒子、黄土粒子少量含む
- 第60号土壌・第61号土壌  
1 暗褐色土 ロームブロック少量含む  
2 黄褐色土 ロームブロック少量含む  
3 暗褐色土 ローム粒子少量含む
- 第62号土壌  
1 黄褐色土 ローム粒、ロームブロック少量含む  
2 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック多量含む

## e 出土遺物

第141図1は鋳蓮弁文の青磁碗。胎土は暗灰色である。釉は緑色が強い。V-4グリッド出土。2は天目碗。底部は完存しているが口縁部は1/10以下の残存である。外面は錆釉が底部近くまで掛けられる。胎土は黄色みの強い黄白色で砂粒を僅かに含む。底径4cm。T-7グリッド出土。3・4は軒平瓦。3は上向き刺頭文である。胎土は砂粒と礫を含み、赤色粒が少量混じる。焼成は良くない。X-2グリッド出土。4は所謂「掛かりの瓦」である。凹面は縦方向に篋ケズリした後横方向にナデ調整し、更に側面に沿って4cmの幅で縦方向になる。一部に布目が残る。広端側は斜めに篋ケズリし瓦当周縁の幅を薄くしている。凸面は縦方向に篋調整し瓦当接合部は横方向に強くなでている。側面の掛かりの部分

外側は縦方向に丁寧になで、内側は縦方向に軽くなでるが、布目が残っており型造りであることが分かる。立上り部には鋭い篋ケズリ痕が残り、基部の厚さを調整したと思われる。上端面は、丸瓦との当りを調整するため、内側を大きく面取している。瓦当面は剥離しているが、左上端が僅かに残り長さ3mmの凸線が1本見られる。唐草の末端なのか別の意匠なのか判断できない。瓦当は平瓦凸面に粘土を貼りつけており、接合のための浅い篋刻みが残る。補強粘土も薄い。砂粒と礫を多量含む。W-6グリッド出土。5・6は土器片を砥石に転用したものである。表探。8は凝灰岩製の砥石。9は土師器甕。グリッド出土。



第141図 A区出土遺物

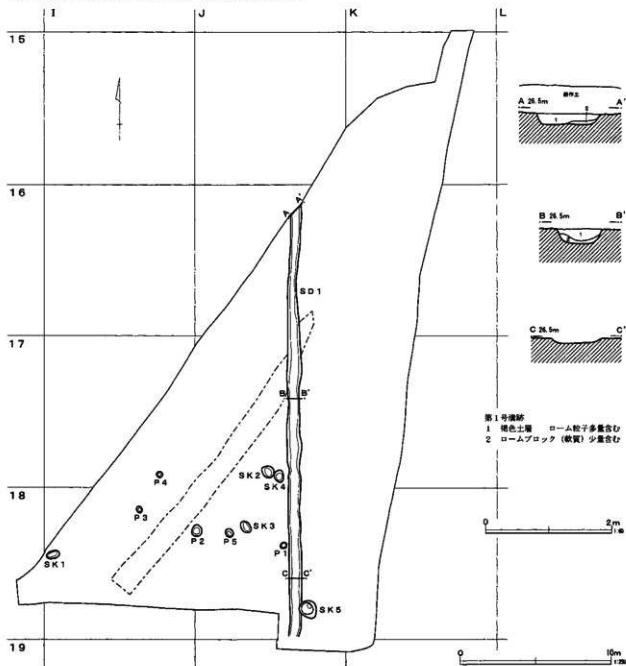
## (2) B区 A 中世以降

### a 溝跡

#### 第1号溝跡 (第142図)

J-16からJ-18グリッドにかけて検出された。調査区の中央を南北に抜け、両端とも調査区外に延びる。南側の道路を隔てたC区での第10号溝跡と同一の溝である。J-18グリッドで第5号土壇と重複するが新旧関係は不明である。検出された長さは

29.2mである。幅は0.5~1mで、深さは58cmである。覆土はローム粒子と軟質のロームブロックを多く含んでおり埋められた可能性もある。遺物は出土しなかった。



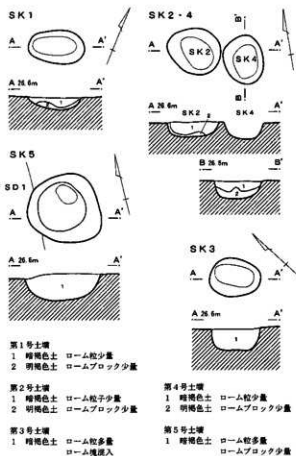
第142図 B区全測図

## b 土壌とピット

B区では土壌5基とピット5基が検出された。A区の項で述べたように土壌とピットとの区分は難しいが、ここでは調査時の類別にしたがってそのまま掲載する。分布は調査区の南側に纏まっている。第5号土壌以外は第1号溝跡の西側にあり、溝跡が土壌の分布に関与しているかどうかは判らない。第2号土壌と第4号土壌は隣接しているが、重複しているものではなく、遺物も出土していない。土壌の形態は長方形を呈するものは無く、楕円形や不整形円形である。

## c 出土遺物

出土した遺物は1点のみである。第144図1はコースター形のかわらけと思われる。約2/5の残存である。平板な作りで、中心に向かって僅かに窪む。端部は下方に小さく曲げられる。器表は荒れていて、調整は観察できない。胎土は少量の砂粒と粒の大きな赤色粒を含む。色調は明灰色を呈し、焼成は良いほうである。グリッド出土。



第1号土壌  
1 暗褐色土 ローム粒少量  
2 明褐色土 ロームブロック少量

第2号土壌  
1 暗褐色土 ローム粒少量  
2 明褐色土 ロームブロック少量

第3号土壌  
1 暗褐色土 ローム粒多量  
ローム塊成入

第4号土壌  
1 暗褐色土 ローム粒少量  
2 明褐色土 ロームブロック少量

第5号土壌  
1 暗褐色土 ローム粒多量  
ロームブロック少量

第14表 土壌計測表

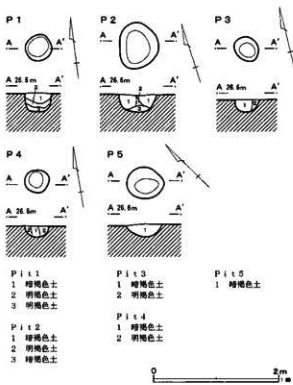
番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位
1	I-18	0.89	0.53	0.19	N-68°-E
2	J-17	0.87	0.71	0.23	N-56°-W
3	J-17	0.76	0.63	0.26	N-10°-E
4	J-17	0.83	0.61	0.32	N-41°-W
5	J-18	1.23	1.10	0.42	N-40°-W

第15表 ピット計測表

番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位
1	J-18	0.42	—	0.30	—
2	I-J-18	0.73	0.61	0.27	N-6°-E
3	I-18	0.42	0.34	0.20	N-23°-W
4	I-17	0.39	—	0.18	—
5	J-18	0.58	0.49	0.20	N-48°-W



第144図 B区出土遺物



Pit 1  
1 暗褐色土  
2 明褐色土  
3 明褐色土

Pit 3  
1 暗褐色土  
2 明褐色土

Pit 5  
1 暗褐色土

Pit 2  
1 暗褐色土  
2 明褐色土  
3 暗褐色土

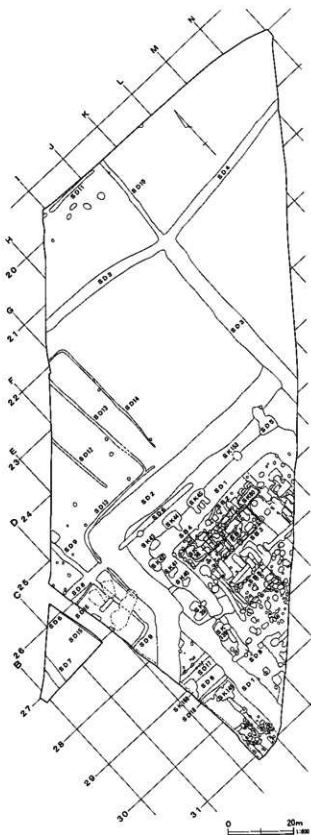


### (3) C区

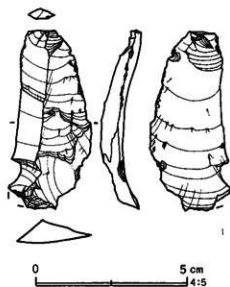
#### A 旧石器時代

C区ではローム層中からは遺物は確認されなかったが、形態などから旧石器時代に帰属すると考えられる石器1点を図示する。

第146図1は、微細な剥離痕を有する剥片である。一部欠損しているが、ほぼ完形で、石材は、やや気泡が入る、透明度の高い黒曜石を使用している。打面は調整されていない1枚の剥離面で、パルプは発達していない。全体的に腹面側にやや湾曲している。背面は大きく5枚の剥離面で構成されているが、打面側の剥離面2面は、この剥片を剥離する際の一連の過程に剥離された面と考えられる。一方、背面の下方の2面と打面は、表面の風化の度合いが上半に比べて強く、より古い剥離面と判断される。また、下方から腹面とは180度異なる剥離方向の小さな剥離が見られるが、これは意図的な剥離ではなく、剥離時に偶発的にできたものと考えられる。両側縁基端部側に使用によると考えられる微小な剥離が連続して観察される石刃状の剥片であり、旧石器時代の所産と認定した。



第145図 C区全測図



第146図 旧石器時代遺物実測図

## B 縄文時代

遺構は検出されなかったが、土器の破片と石器が少量出土している。これらをグリッド出土遺物として一括した。

### グリッド出土遺物 (第147図)

1～5は早期の条痕文系土器である。1は胴部の破片で、内外面に条痕文が施文されている。外面の条痕は格子状に施文されている。胎土には繊維が含まれている。2は胴部の破片で、内外面に条痕文が施文されている。胎土には繊維が含まれている。3～5は内面にもわずかに条痕文が認められるが、明確ではないため図示はしなかったものである。いずれも胴部の破片で、胎土には繊維を含んでいる。3以外はいずれも硬く焼成が良好なものである。

6～13は前期中葉の関山式である。6は口縁部の破片で、沈線によって格子状に文様が施文されている。

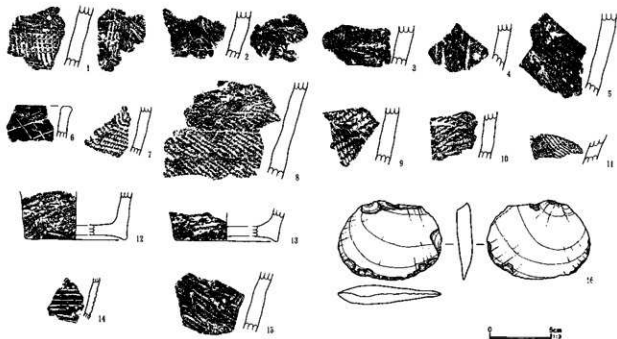
胎土には繊維が含まれている。7は胴部の破片で、半截竹管によって施文されているコンパス文が、一部認められる。地文は無節R Lの縄文を、横方向に施文している。胎土には繊維が含まれている。8は胴部の破片で、単節R Lの縄文が地文として、横方

向に施文されている。胎土には繊維が含まれている。9は胴部の破片である。地文として単節L Rの縄文を施文している。胎土には繊維を含んでいる。10は胴部の破片で、地文は無節Lの縄文を施文している。胎土には繊維が含まれている。11は胴部の破片で、地文は無節Rの縄文を横方向に施文している。胎土に繊維を含んでいる。12と13は底部の破片で、あげ底となっている。12は胴部に、単節L Rの縄文を横方向に施文するもので、胎土には繊維が含まれている。推定される底径は8.2cmである。13の推定される底径は8.0cmで、胎土に繊維を含んでいる。

14は前期後葉の諸磯式である。胴部破片で、半截竹管による沈線を施し、部分的に刺突を施している。

15は中期後葉の加曾利E系の、胴部破片である。地文は無節L Rの縄文を縦方向に施文している。

石器は16の1点のみが出土している。16は素材となる剥片の形状を利用して、ほとんど手を加えずにそのまま搔器として使用されたと考えられる。長さ6.3cm、幅8.3cm、厚さ1.6cm、重量は79.3gである。石質はホルンフェルスで、やや風化している。



第147図 グリッド出土遺物(縄文時代)

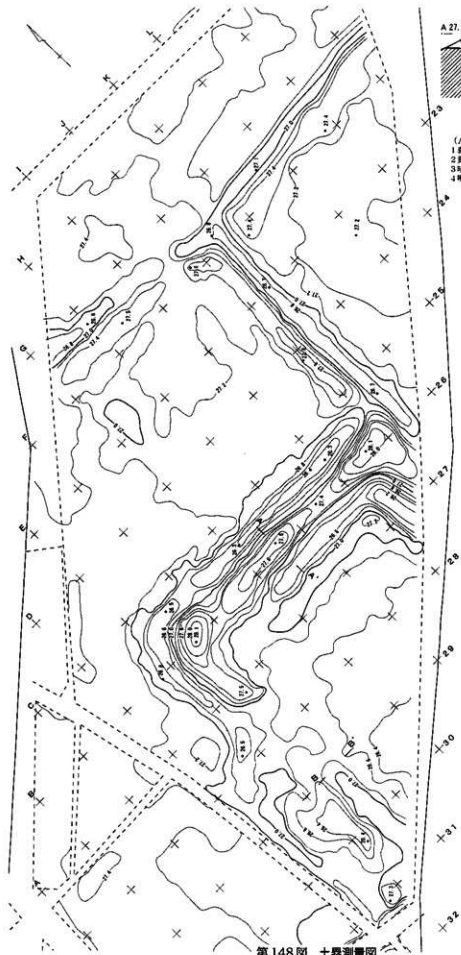
## C 中世以降

### a 区画と土塁・溝（堀）跡

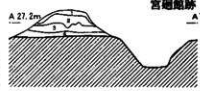
C区は宮庭跡の中心部分である。第148図は調査開始時の等高線図である。現地形で土塁や堀跡が良好な状態で残っているのが良くわかる。主郭を含めて3区画が確認できる。主郭の北側に2面の区画があり西側にも予想された。ここでは主郭部を第1区画、その北側を第2区画、東側を第3区画とする。

第1区画は第1・2・3・5・8号溝跡と土塁によって構成され、時期差が考えられる。区画の形態は始めは長方形で、改修されて変形していくと考えられ、区画のほぼ半分を対角線状に検出したと思われる。土塁は北側が良く遺存しており、北東と北西の角が高くなっている。外側と内側に堀跡（第2・1号溝跡）が残っていた。土塁の高さは現状で約1mあり、堀跡との比高差は最大1.8mであった。また、内堀の内側に沿って僅かに高まりが見られる。現場で目視した限りでは、はっきりしなかったが、土塁が崩れて裾部に溜まった可能性もあり、内側にも土塁があったかどうか断定はできない。西側は中央部が切れ、約15m南に高さ0.5mの低い土塁が残っていた。この部分の堀跡は外側にだけ残っていた。第1号溝跡は内堀にあたる。東側は調査区外に出ているが、検出された範囲では土塁の内側を「コ」字状に廻る。西側は西辺のほぼ中央で止まる。断面は箱葉研状を呈し幅は4m前後、深さは1.9m、底面の幅は1mである。調査区南西部の外側の堀を調査時に第1号溝として遺物を取り上げているが本来この部分は内堀にはあたらない。本溝跡は埋没過程において掘り直しがあつた可能性はあるが、東側の第5号溝の部分を除いて、堀そのものの規格を変更するような大きな掘り直しは無いと思われる。第2号溝跡は外側の堀である。東は第3号溝跡の手前で止まる。西側は途中から南西に斜めに折れ調査区外に出るが、折れる部分は更に南に延びる溝跡があり、本溝跡には平面規格を変更する掘り直しがあつたものと考えられる。本溝跡掘削の際に内側に土塁が築

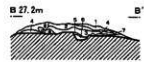
かれたものと考えられる。なお、土層断面からは、本溝跡は第1号溝跡より古いという結果となった。溝の規模は幅5.8m、深さ1.5m前後で底面の幅は北側では2m前後あるが西側ほど狭くなり斜めに折れた部分では0.6mほどである。第3号溝跡は区画の東側で北に延び第2・3区画を構成する。本区画に掛かる部分は約10mで南は調査区外に延びる。土層断面で第1号溝跡より新しいという結果が出ていることから、当初は第2号溝跡の部分までであったと思われ、外郭を拡張する際に掘り直されたものと考えられる。第5号溝跡は土塁の下から検出された。第1号溝跡の東辺に一致し第2号溝跡の溝底に痕跡が認められる。本区画を構成する最も古い溝で第2号溝が掘られ、土塁が築かれるときに埋められたと考えられる。長方形の区画を成し本館跡の原型となるものと考えられる。西辺中央に内側に張り出す平場は、橋脚等に関する施設ではないかと考えられているが、本溝跡或いはこの後の改修時に造られた可能性が高い。土塁下で検出された部分は断面は葉研状を呈する。第8号溝跡は区画の西側にあり、第2号溝後が斜めに改修される前の堀跡の外側に直角に掘られている。他の溝跡との位置関係などから一番駅に苦しむ部分である。新旧関係がわからないため曖昧な推定にならざるを得ないが、第5号溝跡が大きく改修された時に同時に掘られたか、第2号溝跡が斜めにつけかえられる前に掘られた可能性が考えられる。これらの溝の他に第6号溝跡が土塁下から検出された。西は調査区外に出ており直角に南に曲がって第7号溝跡に続く可能性も考えられるが、断定はできない。東は途中で止まっている。土塁下から検出されたことから第2号溝跡より古いことは確実であり、位置関係から第5号溝跡と同時存在した可能性は薄いと考えられる。ここでは第5号溝跡より古いものと考えておきたい。区画内には掘立柱建物跡5棟の他、地下式墳や多数の土壌が検出



宮庭船跡



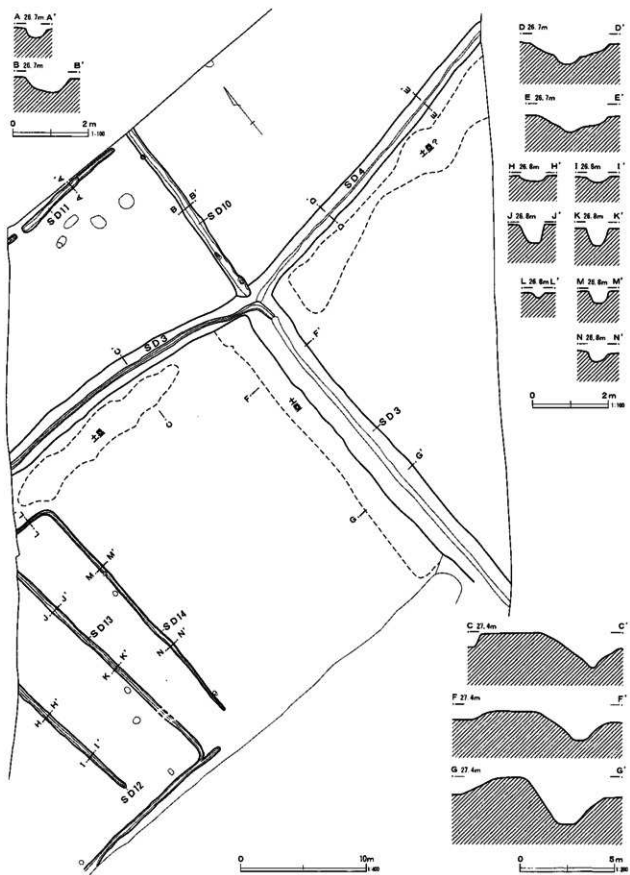
- (A-A')
- 1 黄土
  - 2 黄褐色土 ローム粒子多量、ブロック含む
  - 3 暗褐色土 ローム粒子少量含む、しまっている
  - 4 明褐色土 3層よりローム多量含む、固くしまっている



- (B-B')
- 1 明黄褐色土 黒褐色土含む、ロームブロック混在
  - 2 暗褐色土 ローム粒子含む
  - 3 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒子含む
  - 4 黄褐色土
  - 5 明褐色土 ロームブロックが混在
  - 6 暗褐色土 黒褐色土含む、ローム粒子混在
  - 7 明褐色土 ローム粒子混在、しまっている
  - 8 暗褐色土 ローム粒子含む
  - 9 暗褐色土 ロームブロック含む

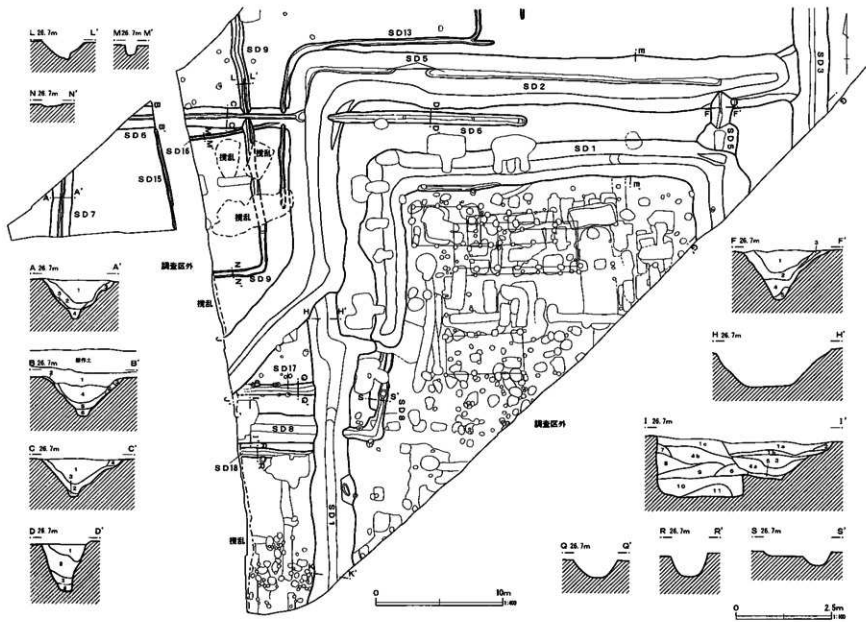


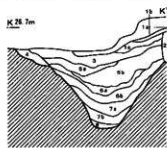
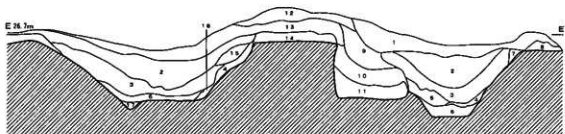
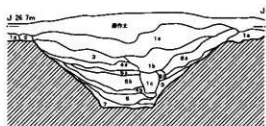
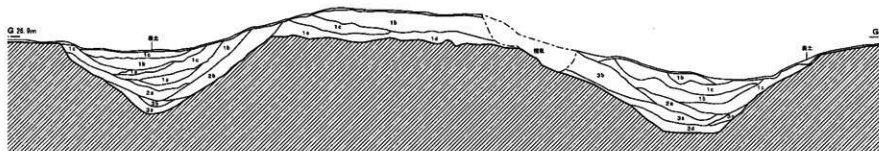
第 148 図 土層測量図



第149図 区画と溝跡 (1)

第150图 区画之溝(堀)跡(2)





第151図 溝跡断面図

第7号溝跡 (A-A')

- 1 明褐色土 ローム粒子多量
- 2 暗褐色土 ローム粒子、ブロック
- 3 明褐色土 ローム粒子、ブロック多量
- 4 明褐色土 ローム粒子、大ブロック多量

第6号溝跡 (B-B')

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量
- 2 黄褐色土 固くしまっている
- 3 暗褐色土 ロームブロック
- 4 明褐色土 ローム粒子多量
- 5 明褐色土 ローム粒子、ローム粒子少量
- 6 明褐色土

第5号溝跡 (C-C')

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック
- 3 明褐色土 ローム粒子、ロームブロック
- 4 明褐色土 ローム粒子主体

第6号溝跡 (D-D')

- 1 明褐色土 ロームブロック多量
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックが混在
- 3 明褐色土 ロームブロック多量
- 4 明褐色土 ロームブロック多量

第1号溝跡 (E-E')

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量
- 3 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック・黒褐色ブロック少量
- 4 暗褐色土 ロームブロック多量
- 5 明褐色土 ロームブロック多量、軟質
- 6 暗褐色土 ロームブロック少量、黒褐色ブロック多量
- 7 黄褐色土 ローム塊 (腐植土)
- 8 暗褐色土 ロームブロック多量 (土層)
- 9 暗褐色土 ロームブロック多量、黒褐色ブロック少量
- 10 暗褐色土 ロームブロックローム粒子少量
- 11 明褐色土 ロームブロック多量、ローム粒子少量
- 12 暗褐色土 ロームブロック多量
- 13 黒褐色土 ロームブロック、ローム粒子少量
- 14 明褐色土 ロームブロック、ローム粒子少量

第5号溝跡 (F-F')

- 1 明褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量
- 2 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック含む
- 3 黒褐色土 ローム粒子少量
- 4 褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量
- 5 暗褐色土 ローム粒子含む

第1・3号溝跡 (G-G')

- 1 暗黄褐色土 ロームブロック、ローム粒子多量、褐色土を挿入、ローム粒子の多い層にa・dとする (埋戻土)
- 2 暗黒褐色土 ローム粒子少量、ローム粒子少ないものをa、多いものをbとする (自然堆積)
- 3 黄褐色土 ローム粒子を主体にし、褐色土を僅かに混入する。  
a ローム粒子、黒色土少量  
b 黒色土多量のため褐色土を要する  
c ロームブロック多量、d より多量  
d ロームブロック多量

第8号溝跡 (I-I')

- 1 暗褐色土  
a ロームブロック少量  
b ロームブロック・黒褐色土少量  
c ロームブロック多量
- 2 明褐色土 ロームブロック主体
- 3 暗褐色土 ローム粒子が混在
- 4 黒褐色土  
a ローム多量  
b ローム少量  
黒褐色土多量
- 5 黄褐色土 黒褐色土少量
- 6 黄褐色土 黒褐色土少量
- 7 暗褐色土 黒褐色土、ローム粒子少量
- 8 黄褐色土 ロームブロック少量
- 9 黄褐色土 ローム粒子少量
- 10 暗褐色土 ローム粒子少量

## 第2号溝跡 (J-J')

1 焼褐色土	ローム粒子少量
2 焼褐色土	ローム粒子、ロームブロック黒褐色ブロック少量
3 焼褐色土	ロームブロック多量
4 焼褐色土	ロームブロック少量、黒褐色ブロック多量
5 焼褐色土	ロームブロック、ローム粒子多量
6 黒褐色土	ロームブロック多量、軟質
7 明褐色土	ロームブロック少量
8 暗褐色土	ローム粒子少量

## 第1号溝跡 (K-K')

1 明褐色土	ローム多量 a 3~4cm大のブロック少量 b やや厚みが強く、ローム少量 c ローム粒子、ブロック、黒褐色土少量
2 焼褐色土	ローム粒子少量
3 焼褐色土	
4 黄褐色土	ローム多量
5 明褐色土	ローム粒子少量 a bよりやや暗く、ロームも少ない。

第16表 溝跡計測表

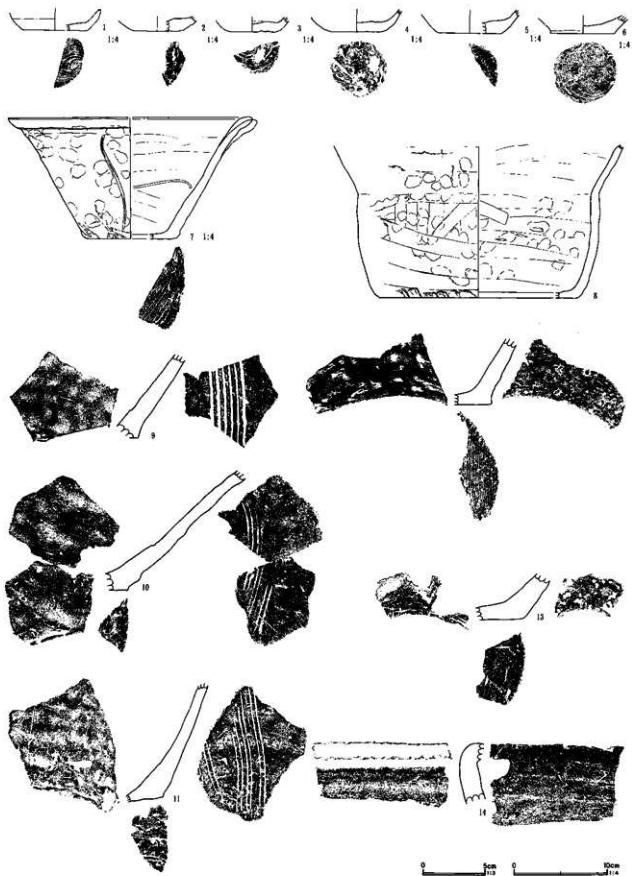
番号	グリッド	長さ	最大幅	幅最小	最大深	最小深	方位	方位	方位
1	E-30~I-27	74.30	6.20	3.00	1.93	1.02	N-2°-W	N-88°-E	N-5°-W
2	D-28~J-25	85.60	6.60	4.50	2.01	1.44	N-41°-E	N-2°-W	N-88°-E
3	G-21~J-26	73.30	4.20	1.90	1.41	0.82	N-83°-W	N-90°-E	
4	J-21~N-21	37.00	2.10	1.50	0.55	0.42	N-82°-E		
5	D-25~I-26	54.90	4.20	1.90	1.40	1.15	N-5°-E	N-88°-W	N-3°-E
6	C-25~G-25	41.70	2.30	1.00	1.37	0.51	N-89°-W		
7	B-26~B-27	7.00	2.20	2.00	1.13	1.01	N-3°-E		
8	D-29~E-27	35.80	3.10	0.66	0.69	0.07	N-88°-W	N-5°-W	N-8°-E
9	D-24~D-27	32.20	1.20	0.52	0.62	0.05	N-80°-E	N-6°-W	
10	J-19~J-21	21.10	1.40	0.80	0.36	0.28	N-5°-E		
11	H-19~J-19	14.90	0.84	0.44	0.21	0.11	N-89°-E		
12	E-23~E-24	15.30	0.70	0.40	0.17	0.14	N-6°-W		
13	D-26~F-22	67.70	0.80	0.50	0.49	0.34	N-0°-E	N-90°-E	N-5°-W
14	F-21~G-24	32.70	0.55	0.24	0.32	0.10	N-2°-W	N-90°-E	
15	C-26~C-27	10.60	0.42	0.16	0.21	0.09	N-12°-W		
16	C-26~D-25	9.20	0.42	0.30	0.32	0.14	N-80°-E		
17	D-28~E-28	8.20	1.10	1.04	0.38	0.32	N-90°-E		
18	D-29~E-29	7.80	1.02	0.86	0.68	0.51	N-87°-W		

された。掘立柱建物跡は重複しているが、柱穴の重複はなく新旧関係を捉えることは出来なかった。土壌の多くは長方形を呈するものであるが、重複が激しく個々の形や規模もはっきりしない。性格は墓墳や貯蔵のためのものなどが考えられ、時期は館廃絶後のものと考えられる。地下式墳は特徴的な分布を示す。第1号溝跡の外壁に沿って構築されている。全ての地下式墳の土層断面があるわけではないが、一部は溝跡より古いという結果が得られている。井戸跡は1基検出されただけであるが、土塁を除去した段階で検出され、第6号溝跡と重複している。可能性としては第5号溝跡の段階が考えられる。

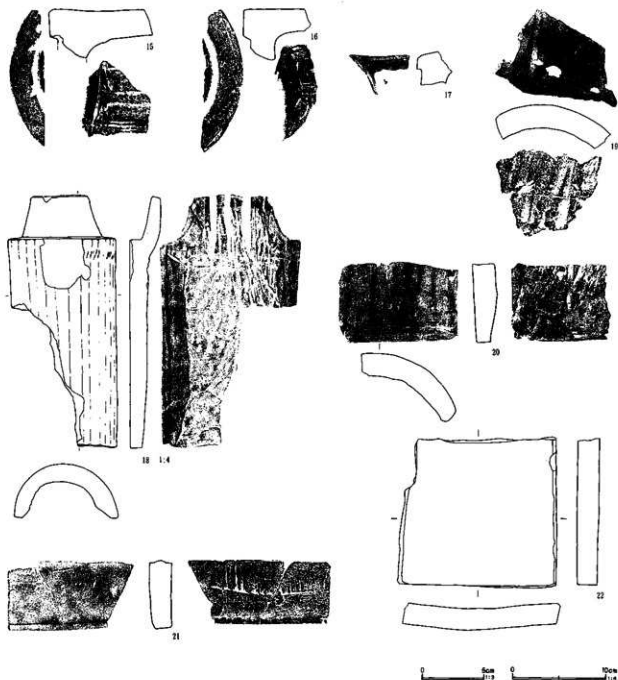
遺物は主に土塁と溝跡から出土したが、土塁からは近世・近代のものも含まれ、一部はゴミ捨て場となっていたようである。第152~154図は土塁出土の遺物である。第152図1~6はかわらけである。4は底部が完存していた。内面は中心部と体部立上

り際に轆轤目が強くその間は環状の盛り上がりを見せる。体部は内湾して立上る。胎土は砂粒と赤色粒を少量含む軟質で色調は淡橙褐色を呈する。底径5.4cm。E-30グリッド土塁出土。2は、やや厚めの底部破片である。胎土は赤色粒と砂粒を少量含む、白色針状物質が見られる。褐色を呈し、焼成は1より良い。推定底径5.6cm。E-29グリッド土塁出土。3は、二次被熱している破片である。胎土は2と同様で焼成は良い。推定底径5.6cm。E-29グリッド土塁出土。1は、4と同様の立上りを示し、底部は薄く作られる。胎土は赤色粒が見られないが白色針状物質がやや多く入る。色調は淡褐色で、焼成は良い。推定底径7cm。E-28グリッド土塁出土。5は、大形で底部が厚い。胎土には白色針状物質が入る。焼成は良い。推定底径7cm。E-29グリッド土塁出土。6は、この個体だけ作りが違う。体部は直線的に開くものと思われ、底部は厚めであるが、内面中





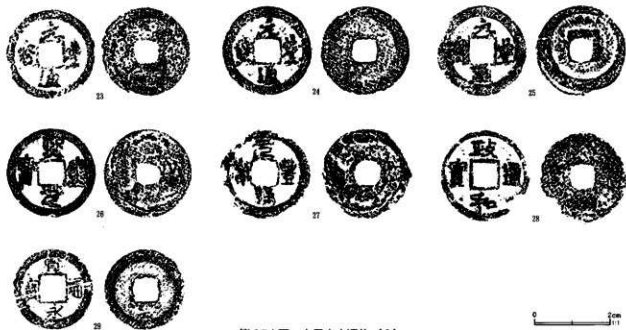
第 152 图 土器出土遺物 (1)



第153図 土壘出土遺物(2)

央を3~4回指ナデして窪ませている。胎土は赤色粒が多く、他の5個体とは技法、胎土ともに違いが明確である。底径6.7cm。G-26グリッド土壘出土。7・12・13は在地産の片口鉢である。7は二次被熱しており内面は厚く煤が付着している。薄い底部から体部は直線的に外傾して開き、口縁端部は比較的鋭く仕上げられ内傾する。片口部は小さく摘み出

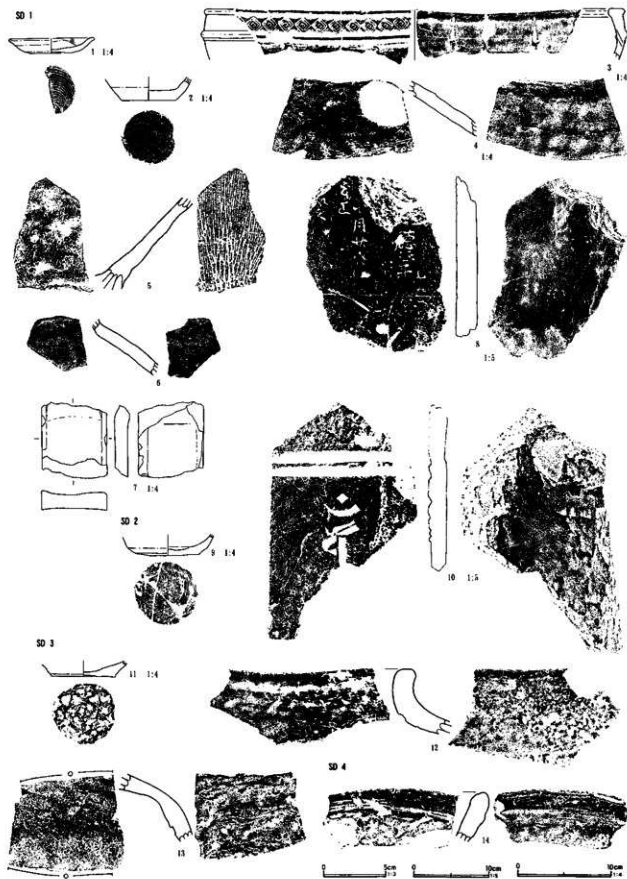
される。内面は横ナデされ、外面は縦方向にナデで指頭痕を消しており、口縁部は横ナデされる。胎土は砂粒と礫を少量含むが混入物としては少ないほうである。焼成は普通である。推定口径26cm、器高12.8cm、推定底径9cm。E-29グリッド土壘出土。12は底部が静止糸切される。体部外面は指頭痕が顕著で、その上を軽く横方向になでている。内面は



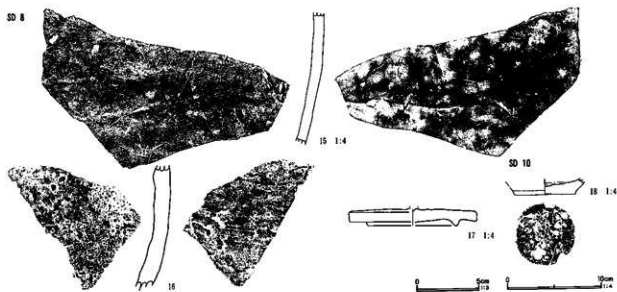
第154図 土壘出土遺物(3)

器面が荒れていて判らない。胎土は多量の礫、砂粒を含む。焼成は普通である。E-29グリッド土壘出土。13は底部を篋調整している。体部は器面が荒れているが外面は横方向に比較的丁寧に調整しているようである。胎土は多量の礫を含み、片岩が見られる。焼成は普通である。E-29グリッド土壘出土。8は内耳鍋である。約1/5の残存である。平底の底部から内湾気味に立ち上り、一度直線的に開いて口縁部に続くが、口縁部は残存していない。調整は内外面ともにナデ調整される。胎土は砂粒、礫を含み、赤色粒が多量混入する。色調は淡褐色で、焼成は比較的良好。推定底径21cm。E-29グリッド土壘出土。9～11は在地産の摺鉢である。9は瓦質で6本1単位の幅広い卸目が施されている。器壁は厚く、胎土は礫と砂粒を多く含み片岩が見られる。また、角閃石と赤色粒がごく少量入る。焼成は良い。E-29グリッド土壘出土。10は7本1単位の浅い卸目が施されている。胎土は礫と砂粒を含み片岩が僅かに見られる。色調は淡褐色を呈し、焼成はあまり良くない。E-29グリッド土壘出土。11は卸目や胎土が10と同様であり、同一個体かと思われるほどであるが底部の厚さが違うため分けた。ただし、底部

の残存はごく僅かであるため同一個体の可能性は捨てきれない。E-28グリッド土壘出土。14は常滑の壺の口縁部である。縁帯は欠失している。長く垂下する縁帯がついていたものと思われる。胎土は礫と砂粒を多く含み、黒色の発泡が見られる。E-28グリッド土壘出土。第153図15～19・20～22はI-26グリッドの土壘部分から出土したものであるが燻し焼成され近世以降の瓦である。15・16は軒丸瓦である。いずれも瓦当面を欠失している。17は棧瓦の瓦当部である。18は丸瓦である。凸面は縦方向に篋調整している。一部に僅かに叩きの痕跡が残るが、縄であるのかどうか判断できなかった。凹面は布目で糸切痕が残る。玉縁測線は曲線に仕上げられている。瓦全体が丁寧に仕上げられている印象を受ける。胎土は砂粒を含み、僅かに赤色粒が見られる。色調は褐色であるが、凸面のかなりの部分と凹面の半分は黒色を呈する。長さ26.8cm。幅11.4cm。玉縁の長さ4cm。E-30グリッド土壘出土。第154図は土壘出土の銭貨を纏めた。23～25は行書元豊通寶である。いずれもE-28グリッド出土。26は篆書の熙寧元寶である。E-29グリッド出土。27は篆書の元豊通寶である。E-29グリッド出土。



第155図 溝跡出土遺物(1)



第156図 溝跡出土遺物(2)

28は政和通寶。E-30グリッド出土。29は寛永通寶である。29以外は全て北宋銭である。第155・156図は溝跡出土の遺物である。第155図1～10は第2号溝跡出土である。1～8については第1号溝跡西側出土となっているが、本来は第2号溝跡となるべきものである。1は緑釉皿である。胎土は白灰色を呈する。推定口径9.2cm。器高1.6cm。推定底径4.8cm。西側の床面出土。15世紀後半。2はかわらけである。底部は中心が突起状に残り轆轤目が顕著である。胎土は赤色粒と砂粒を少量含み、白色針状物質が見られる。焼成は良いほうである。底径5.8cm。3は瓦質の火鉢である。口縁部外面には菱形の押印が連続して押される。穿孔が2箇所あり、粘土の盛り上がりから焼成前に開けられたものであることがわかる。内側から外側に向かって穿孔している。胎土は砂粒と礫を少量含む。4は常滑壺である。上端は粘土の接合面を外れている。5は摺鉢である。外面は指頭痕の上を横方向になでている。内面の釘目は9本1単位で密に施されている。胎土は白色砂粒が多く一部白色粒が発泡している。色調は暗赤褐色に発色している。6は在地産の壺であろうか。口縁部が外側に開く鍋かとも思われたが、それよりは調整が丁寧である。小破片のため断定できない。胎

土は砂粒と少量の礫を含み、角閃石が多量に含まれる。7は硯である。使い込まれたためであろうか、陸は中央部が窪んでおり、縁も欠けて殆ど無くなっている。更に裏側を使用している。裏側は中央部を浅く窪ませ、浅い線刻をして体裁を整えている。石材は粘板岩である。8は板碑である。下方の破片で、年号と真言が刻まれている。年号は「□徳□年 七月廿八日」である。9はかわらけである。内面底部は轆轤目が強く残る。胎土は砂粒と赤色粒を少量含み、橙褐色を呈し軟質である。底径6.8cm。10は板碑である。主尊は金剛界大日如来を表す。裏面は中央部に浅い捺痕が見られ、砥石に転用された可能性がある。幅は15.5cmである。第156図15～17は第8号溝跡から出土したものである。15は常滑壺の胴部下方の破片である。内面は全面にわたって平滑であることから、摺鉢として転用したものと思われる。16は常滑の壺の破片と思われる。胎土は砂粒と礫を含み、白色の発泡が多く見られる。17は瓦質で、土釜の蓋と思われる。中心部が厚く返りの内側が薄くなる。上面はほぼ平坦であるが中央部に向かって極僅かに膨らみを持つ。中央に構みの痕跡を示す立上りが僅かに残る。器面調整は下面はナズられ上面はナズツク状の磨きが粗く行われる。胎土

は砂粒と礫を含み片岩が見られる。焼成は良い。推定口径13.6cm。

第2区画は第3号溝跡が第1区画の東側から30mほど北に延び直角に折れて西に向かう。その先は調査区外に出るため西側はどこまでを区画しているかわからなかった。可能性としては調査区西端の第7号溝跡があるが、第7号溝跡は第6号溝跡に続くことも考えられ断定はできない。土塁は第1区画の北東角から第3号溝跡に沿って北に延び、西に折れてから3mほど切れて西に続く。調査によってこの切れている部分は、後世に土塁が崩されて溝が埋められたものであることが判明した。土塁は内部の平坦面からの高さが最大0.73mであった。長さは東側が34mで、北側は切れた部分を入れて31mであった。幅は遺存状態の最も良い所で上面が2mであった。下端は畑の耕作や崩落によってかなり変形しているが3～3.5mほどであったと思われる。第3号溝跡は直角に折れて東側と北側を区画する。東側は第1区画の東側を区画しながら南北に延び、南は調査区外に出る。この部分の長さは44m検出した。断面形は箱薬研状を呈し幅3.2m、深さ1.4mで底面の幅は0.8mである。土塁との比高差は最も残りの良い所で2.5mを測り、傾斜は約55°である。北側は東側に比べやや規模が小さくなる。深さはさほど変わらないが、幅が2.8m前後となり底面の幅は0.2～0.3mと狭い。長さは32m検出した。区画内には溝跡が3条(第12～14号溝跡)検出されたが

#### b 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は5棟検出された。いずれも第1区画内において、土壌を調査した後土壌の下から検出された。第1～4号掘立柱建物跡は北側に集中し、重複している。少しづつ場所をずらして建てているが、柱穴の重複を確認していないため新旧関係はわからない。第5号掘立柱建物跡は中央部西寄りにおいて単独で存在する。建物跡の南側にはピットが集中して検出され、他の建物の存在も予想されるが調査区外に掛かることもあり復原できなかった。

区画に伴うものではないであろう。

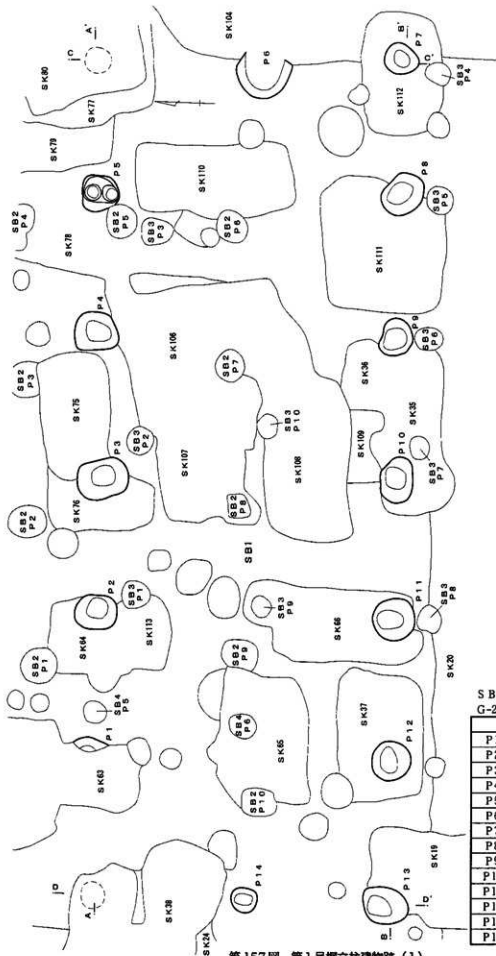
遺物は北側の第3号溝跡から少量出土した。第155図11はかわらけである。器表の荒れが著しい。色調は橙褐色を呈し、胎土は砂粒と赤色粒を少量含み、軟質である。底径6.8cm。12は在地産の壺である。口唇部は平に造られている。胎土は砂粒と礫を多量含み色調は黒灰色であるが、器表は淡褐色を呈する。焼成は良い。13は常滑壺片である。断面の上下両面を礫石に転用している。

第3区画は第2区画の東に並び、等高線図では北側の溝跡(第4号溝跡)の内側に土塁状の高まりが低く見える。第4号溝跡は幅2m前後で深さは0.5mほどであり第3号溝跡に比べ浅く傾斜も緩い。検出された長さは37mである。第3号溝跡との新旧関係は不明である。区画内には遺構は全く検出されず、遺物も出土しなかった。第3・4区画の北側に第10号溝跡が恰も第3号溝の延長の如く検出された。掘削前には見えなかったものである。B区の第1号溝跡の続きで浅いものであるが、第3・4号溝跡との新旧関係はわからない。

遺物は第4号溝跡から在地産の鉢口縁部が出土した。第155図14は口縁部は丸く作られ内面のナデは比較的丁寧である。胎土は砂粒と礫を多く含み焼成は普通である。第156図18は第10号溝跡から出土したかわらけである。器表が荒れているが底面には僅かに板目状の圧痕が見られる。色調は橙褐色を呈し胎土は赤色粒と砂粒を僅かに含む。底径6.8cm。

#### 第1号掘立柱建物跡(第157図)

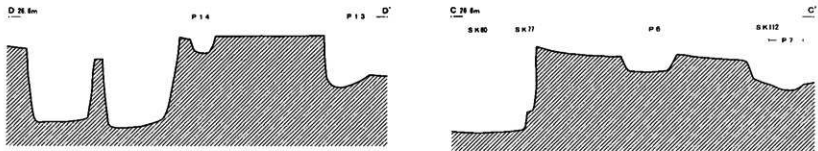
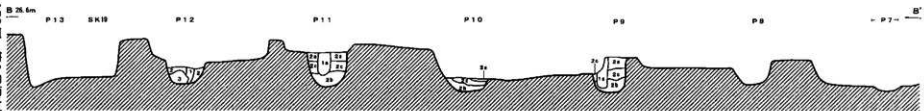
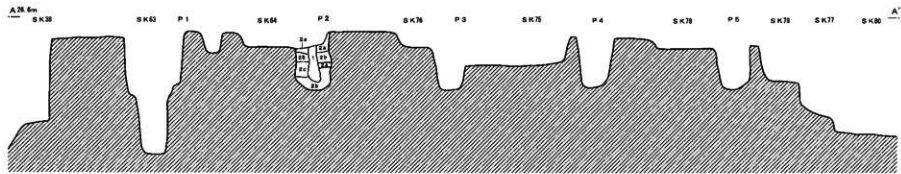
第1号掘立柱建物跡は第2～4号掘立柱建物跡と重複する。桁行6間、梁行2間で一番大きな建物である。規模は桁行が13.3m、梁行は4.8mである。柱穴は方形が基調で、いくつかの柱穴で柱痕が観察された。柱痕は太さ13～20cmで底面に達していないものが多い。掘り方土は軽く固められている。柱穴の状態から建替えはなかったものと思われる。遺物は出土しなかった。



S B1 建物方向 N-87° - E  
 G-27 規模(m)13.30×(4.80)

	柱間	深さ
P1		0.87
P2	2.25	0.95
P3	2.10	0.77
P4	2.25	0.81
P5	2.30	0.73
P6		0.24
P7	2.20	0.09
P8	2.20	0.47
P9	2.25	0.63
P10	2.25	0.66
P11	2.10	0.52
P12	2.25	0.42
P13	2.25	0.84
P14	2.40	0.24

第157図 第1号掘立柱建物跡(1)

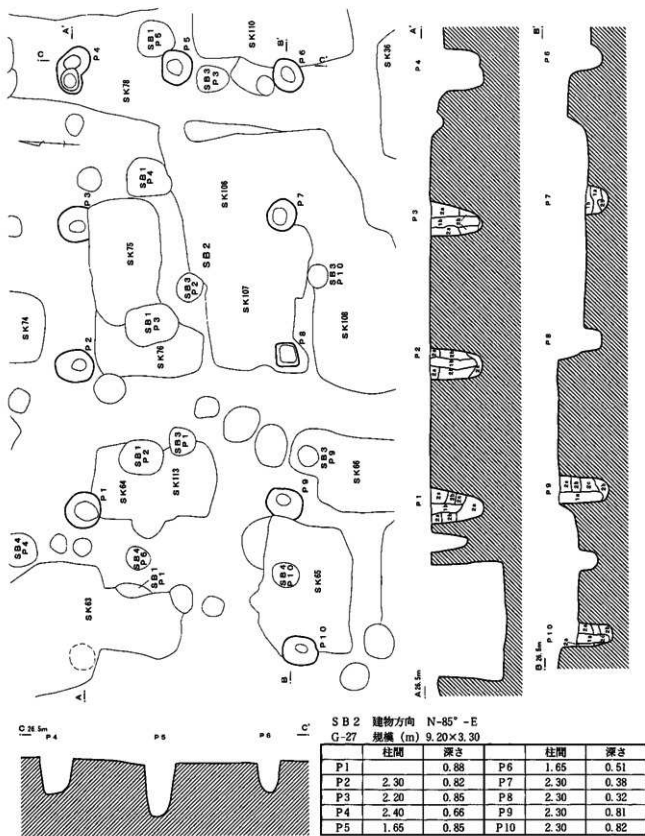


第158图 第1号独立建筑物(2)

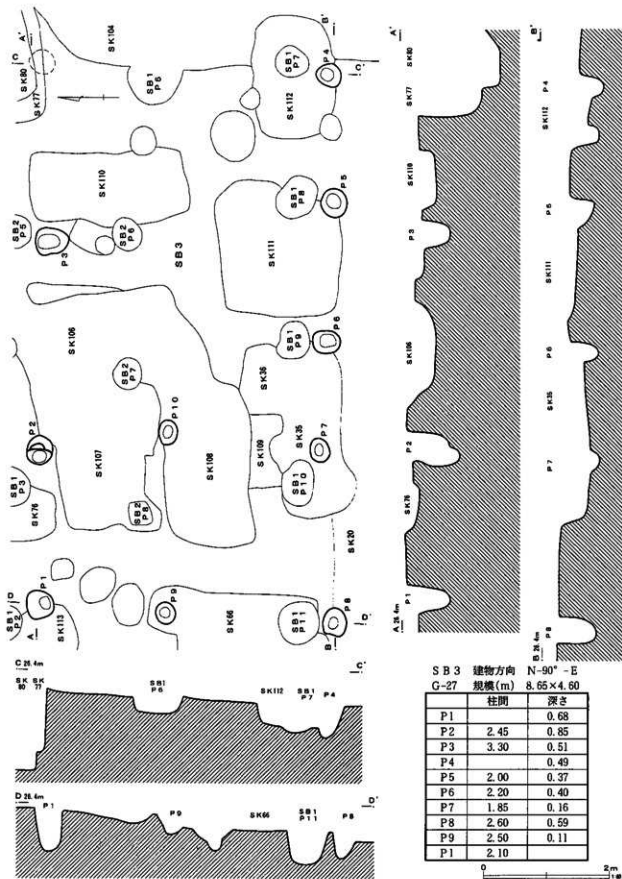


比例尺 1:50

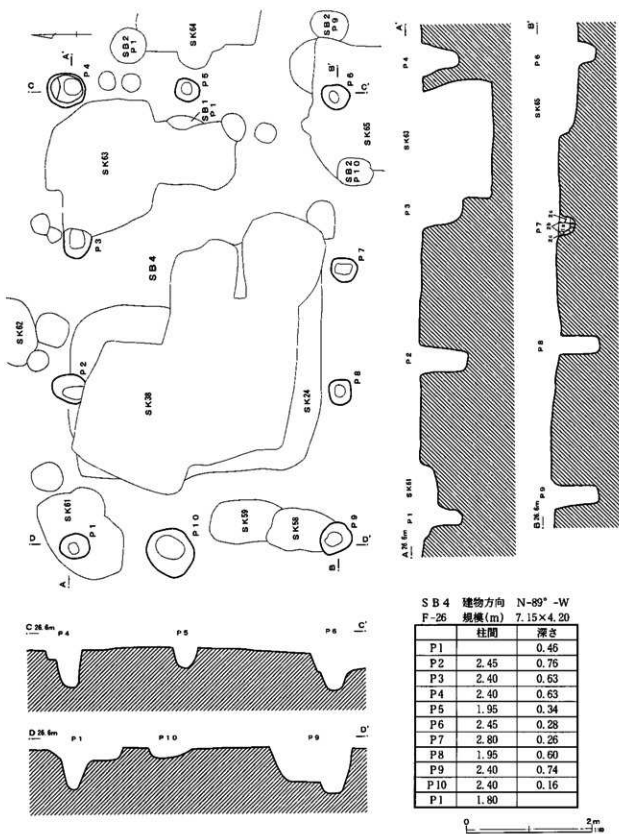




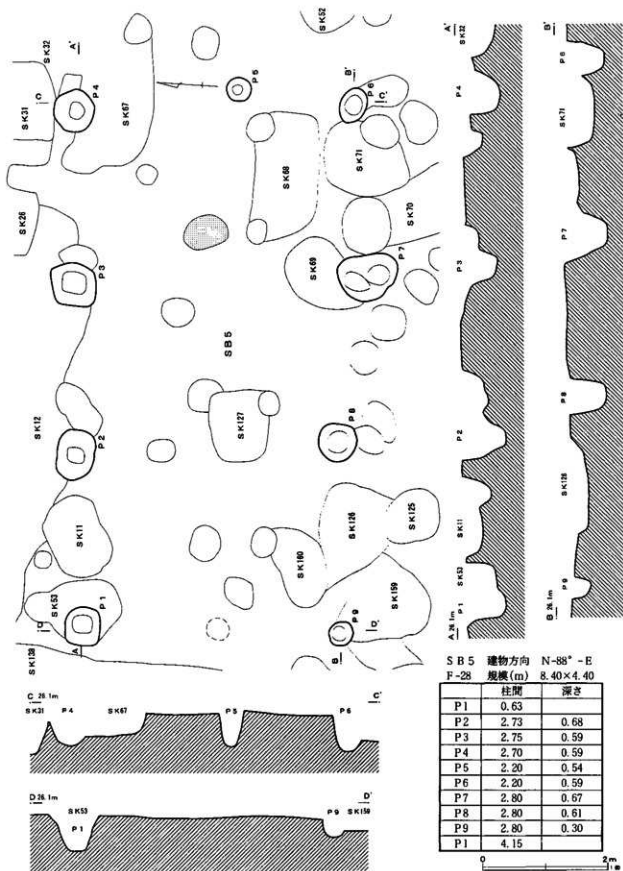
第 159 图 第 2 号掘立柱建物跡



第160図 第3号竪立柱建物跡



第161図 第4号掘立柱建物跡



第162図 第5号掘立柱建物跡

### 第2号掘立柱建物跡 (第159図)

第1・3・4号掘立柱建物跡と重複する。桁行4間、梁行2間で、規模は9.2m×3.3mである。柱穴は方形で柱痕や掘り方の状況は第1号掘立柱建物跡と同様であるが、他の建物に比べ柱穴が深い。土層断面や柱穴の状態から本建物も建替えはなかったと考えられる。遺物はP1から白磁皿が出土した。第163図1は割り高台で高台内に「上」の墨書が書かれる。釉は外面は体部中位まで掛けられ、内面には重ね焼の跡が残る。胎土は黄白色で焼成は良い。推定口径10.1cm。器高2.4cm。底径4.1cm。15世紀後半。

### 第3号掘立柱建物跡 (第160図)

第1・3号掘立柱建物跡と重複する。桁行3間、梁行2間で、規模は8.65m×6mである。東側の中間の柱は第1号掘立柱建物跡のP6と重複しているが新旧関係は個んでいない。P3とP6の間に柱穴が検出された。柱筋として通ることから建物に伴うと考えた。柱穴は丸みの強いものもあるが、方形が基調である。深さは確認面から60cm前後あったと考えられる。柱穴の状態から建替えはなかったと考えられる。遺物は出土しなかった。

### 第4号掘立柱建物跡 (第161図)

第1・2号掘立柱建物跡と重複する。桁行3間、梁行2間で、規模は7.15m×4.2mで検出された建物の中で最も小さい。P7が第1号掘立柱建物跡のP14と重なるが、柱穴列の配置からこれに比定するしかないようである。また、P10は他の柱穴に比べ浅い。梁間が4.2m程度であり、第2・5号掘立柱建物跡のように梁間の柱穴が検出されない例もあることから、特に柱穴と断定しなくても良いかとも考えられる。柱穴は方形で深さは60~70cmである。本建物も建替えはなかったと考えられる。遺物は出土しなかった。

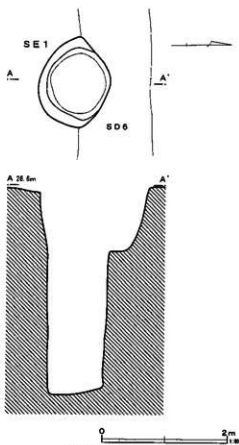
### 第5号掘立柱建物跡 (第162図)

区画の中央西寄りに単独で存在する。桁行3間、梁行2間で、規模は8.4m×4.4mである。西側の

梁間の柱穴が検出されなかった。建物内部の東寄りに焼土が検出された。0.75m×0.5mの楕円形の範囲で掘りこみは無かった。位置的に建物に伴うものと考えておきたい。柱穴は方形で、北側の梁行が大きさも揃っている。深さは60cm前後である。本建物についても建替えはなかったと考えている。遺物は出土しなかった。



第163図 第2号掘立柱建物跡出土遺物



第164図 井戸跡

## c 井戸跡 (第164図)

井戸跡は1基しか検出されなかった。E-25グリッドで土塁を除去したところ検出されたものである。第6号溝跡と重複するが新旧関係は不明である。形態は円形で直径は1.5m程度と考えられる。上部は僅かに漏斗状に開き、1mほど下がった所で筒状に掘りこんでいる。深さは3.2mで、底面は直径約

## d 地下式墳

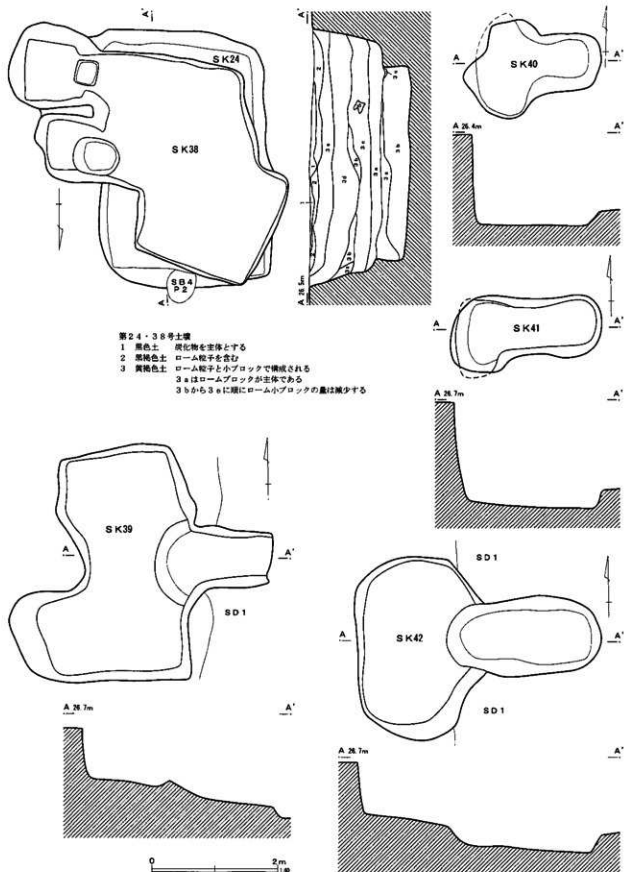
地下式墳は、調査時には全て土城番号をつけていた。整理の段階で地下式墳として14基を抽出した。抽出の基準として、ある程度の大きさや深さがあり、入り口状の施設を持っているものとした。しかし、場合によって重複する土城を含んでいる可能性もあり、また第53号土城(第172図)のように入り口状の施設はあっても、非常に小形で判断に困ったものもある。更に「室」との区別が難しいものも多く、選別の結果が曖昧なものになった事は否めない。

地下式墳の分布は第1区画内に限られ、西側で第8号溝跡の周辺にあるもの(SK145・169)、第1号溝跡内にあるもの(SK38・80)、そして、第1号溝跡の外側の壁に沿って整然と並んでいるものがある。第1号溝跡内にあるものは、本館跡の地下式墳の分布の中で最も特徴的なものである。これらの地下式墳は、一見すると土塁を内側から掘り込んでいのように見受けられる。調査時には、溝跡の検出段階では認識されず、溝を掘り上げた段階で壁面に確認されたため、全ての地下式墳について土層断面をとることはできなかったが、SK139とSK153・SK169については溝跡との重複関係を知ることが出来る(第150・151図)。SK139は土塁を切っており、遺物からも新しいことがわかる。SK153・SK169は、どちらの地下式墳も溝跡より古いという結果が得られた。この結果は一見すると不自然に感じられる。溝の壁に整然と並んで掘り込まれている状態を見れば、溝や土塁が本来の機能を失ってから掘り込んだものと考えたくなる。また、そうでなければ整然とL字形に並ぶ理由が説明できないと思

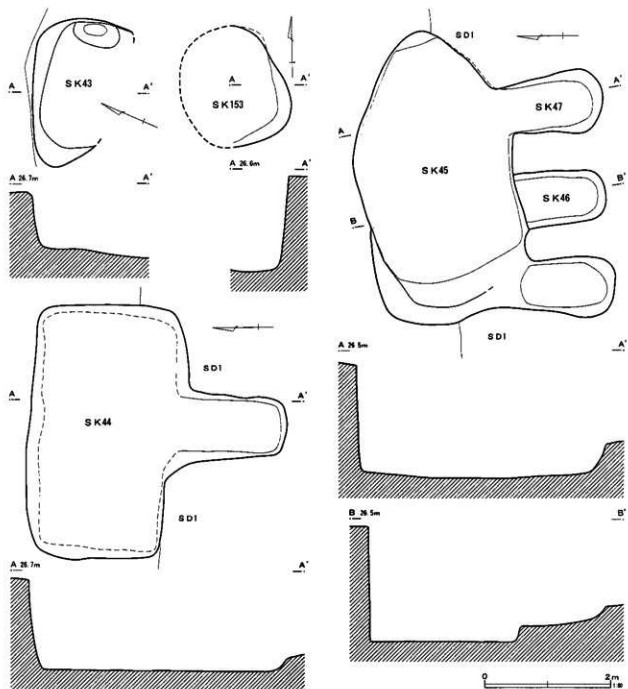
90cmである。遺物は出土しなかった。土塁の下から検出されたということで、館跡の中心的な時期以前の遺構であり、館に土塁が築かれて最も形態が整った時期には、調査区内には井戸は無かったことになる。地形は緩やかに南に下がっていることから、区画内で南に下がった所には存在すると思われる。

われる。土層断面から得られた結果と矛盾することとなる。これをどの様に解釈すれば良いであろうか。考え方は二通りできる。一つは土層断面の重複関係を誤認したとするものである。この場合は単純に地下式墳を新しいものと考え溝の壁に沿って掘り込んだと解釈する。ただし、この場合には地下式墳の一部は、溝の斜面にあるために奥行きが浅く「地下式」としては奇異な印象を受ける。もう一つは調査結果のとおり地下式墳が古いと考えるものである。この場合は、溝の壁に沿って整然と並んでいる理由が説明されなければならない。地下式墳が溝や土塁より古いならば、土塁や溝が無い状態(平坦地)でL字形に地下式墳が配置されるための必然性(規制)がなければならない。その可能性として第5号溝跡を考えておきたい。第5号溝跡は、館の一番古い段階の溝として認識しているが、第1区画の一番外側を廻り、地下式墳とは3~4mの距離が開くものと推定できる。地下式墳は第5号溝跡に規制されてその内側に3~4mの間隔を置いてL字形に配置構築されたと考えるのである。その後、第5号溝が第2号溝に拡張され、同時に土塁が造られる時に埋められたと理解する。このような解釈が成り立つならば、先の疑問に対して説明することが出来ると思う。

遺物を出土した遺構は少ない。第168図1~7はSK80出土遺物である。1・2はかわらけ。1は口縁の一部を欠くがほぼ完形である。底部は厚く、体部は直線的に開く。内面は底部から轆轤目が強く残る。胎土は砂粒を少量含み、白色針状物質が入る。色調は橙褐色を呈し、焼成は良い。口径10.6cm、



第165図 地下式墳(1)



第145号土壁

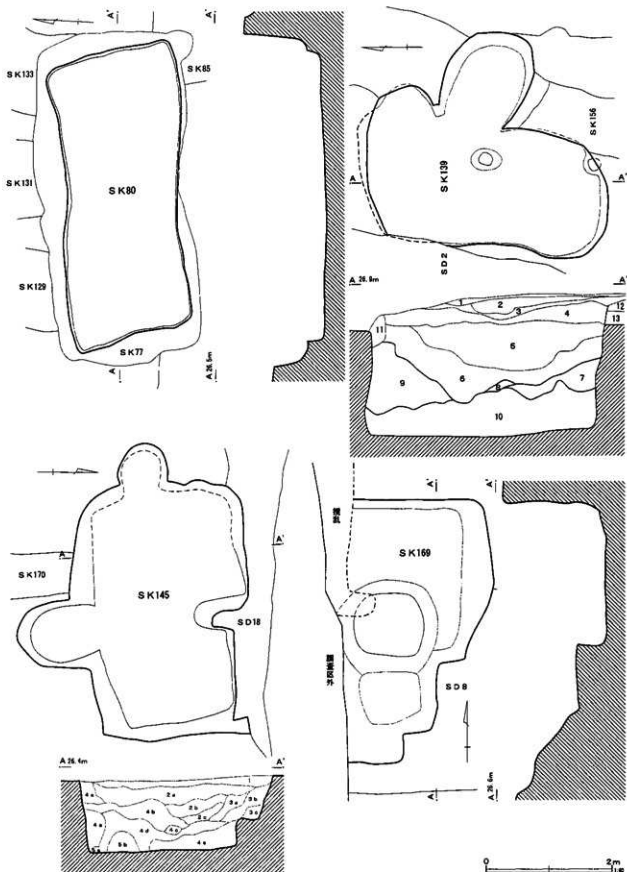
- |   |      |                     |
|---|------|---------------------|
| 1 | 明褐色土 | ローム粒子少量             |
| 2 | 暗褐色土 | a 均質                |
|   |      | b 黄褐色ローム粒子少量        |
|   |      | c ローム粒子多量、ロームブロック   |
| 3 | 黄褐色土 | a 暗褐色土多量            |
|   |      | b ローム粒子・ブロック多量      |
|   |      | c ロームブロック極めて多量      |
| 4 | 黒褐色土 | a ロームブロック多量         |
|   |      | b ローム粒子含む、ロームブロック少量 |
|   |      | c ローム粒子多量           |
|   |      | d ローム粒子・ロームブロック少量   |
|   |      | e ローム粒子・ロームブロック多量   |
| 5 | 黄褐色土 | a 黒褐色土少量            |
|   |      | b ローム粒子多量           |

第139号土壁

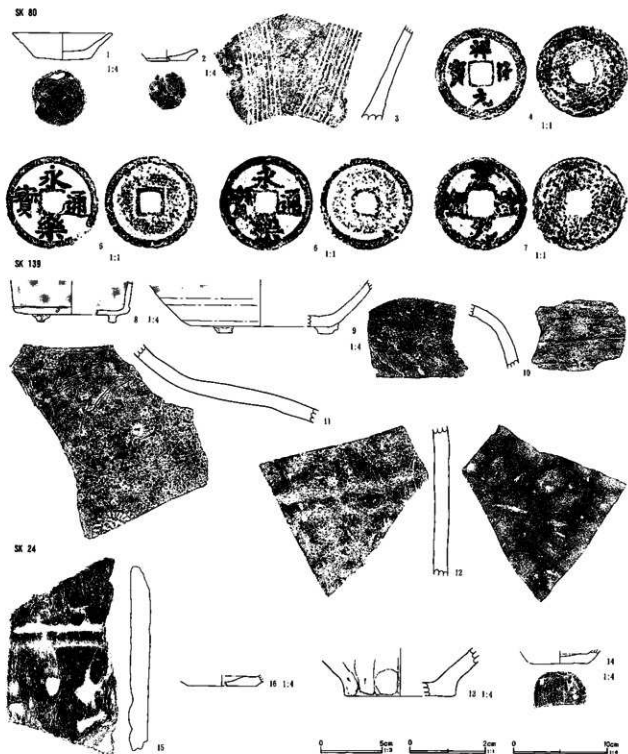
- |    |      |                 |
|----|------|-----------------|
| 1  | 黄褐色土 | ロームブロック多量       |
| 2  | 暗褐色土 | ロームブロック・ローム粒子多量 |
| 3  | 黄褐色土 | ローム粒子多量         |
| 4  | 暗褐色土 | ローム粒子多量         |
| 5  | 暗褐色土 | ロームブロック少量       |
| 6  | 暗褐色土 | ローム大ブロック少量      |
| 7  | 黒褐色土 | ロームブロック少量       |
| 8  | 暗褐色土 | ロームブロック少量       |
| 9  | 黄褐色土 | ロームブロック多量、天井崩落土 |
| 10 | 黄褐色土 | ローム塊多量、天井崩落土    |
| 11 | 黄褐色土 | ローム塊            |
| 12 | 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック少量 |

第166図 地下式構(2)





第167图 地下式墳(3)



第168図 地下式竈出土遺物

第17表 地下式竈計測表

番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位	備考	番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位	備考
1	F-26-27	4.06	2.62	1.26	N-4°-E	S K24	8	F-26	4.06	3.96	1.59	N-2°-E	S K44
2	F-26-27	4.00	3.18	1.65	N-82°-W	S K38	9	F-G-26	4.6	3.62	1.64	N-81°-E	S K45
3	E-27-28	3.7	3.00	1.33	N-0°-E	S K39	10	G-H-26-27	4.5	1.82	0.4	N-80°-E	S K80
4	E-27	2.16	1.64	1.5	N-83°-E	S K40	11	E-28	3.86	3.32	1.79	N-9°-E	S K139
5	E-26-27	2.36	1.20	1.67	N-88°-E	S K41	12	D-E-29	4.64	3.52	1.42	N-83°-E	S K145
6	E-26	3.84	2.86	1.47	N-90°-E	S K42	13	H-26	-1.82	-1.5	0.63	N-21°-W	S K153
7	E-26	2.38	-1.54	1.03	N-82°-E	S K43	14	D-28-29	4.12	-2.3	1.8	N-0°-E	S K169

器高2.9cm、底径6cm。2は小型のかわけ。色調は淡褐色を呈し、胎土に砂粒と赤色粒を少量含む。底径4.2cm。3は在地産の摺鉢である。体部外面は指頭痕をナデ消している。櫛目は8本1単位で疎らに施される。胎土は砂粒を多量に含み、赤色粒と礫を少量含む。色調は器表は黒色で胎土は橙褐色を呈する。焼成は良い。4～7の銭貨は計測表を参照されたい。8～14はSK139出土である。8は内外面に鉄軸が掛かる。外面の軸は体部の立上りまで以下は露胎である。底部は脚が貼付される。瀬戸美濃系の製品で時期が降る。9は深皿。約1/5ほどの破片から復原実測した。破片上端に灰軸が見られる。上面の破面は一部が砥石代わりに使われている。15世紀中頃から後半と考える。10～13は常滑の甕である。10は肩部の破片で甕の可能性もある。11は

#### e 土壇

土壇は殆どが第1区画内に集中しており重複が激しい。全ての新旧関係を把握することは不可能で、重複の激しさから本来の形状がわからないものもある。調査時に187まで番号が振られたが、整理の段階で地下式墳としたもの及び欠番となったものがあり、最終的には167基である。その殆どは長方形のもので、長さは9mを超えるものから短いものは1mに満たないものまでである。幅は1m前後でほぼ一定している。深さは検出面の状況によって左右されるが、20cmから50cmの範囲に殆どが収まる。この他には第134・140号土壇のように円形のもの少数存在する一方楕円形や不整形のものも見られる。長方形の土壇については出土遺物や形態から墓壇と考えられるものが少数ながら存在する。以下にある程度性格の推定できるものや特殊な遺構、そして土壇から出土した遺物について纏めて記述する。記述しないものについては計測表に代える。なお、紙数の都合で土壇の図面を一部割愛した。

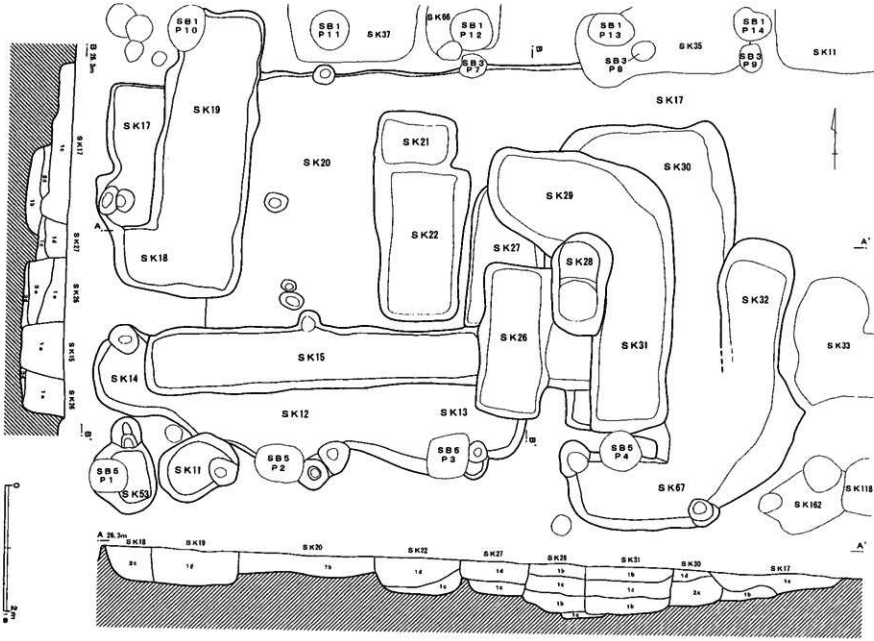
#### 第53号土壇（第172図）

F-28グリッドで検出された。第5号掘立柱建物跡のP1と重複しているが新旧関係は掘んでいな

押印が見られる。破面には褐色のクルル状の物質が付着しており、漆で補強していた可能性がある。12は内面が平滑に磨耗しており第156図15と同一個体と考えられる。13は底部破片で、底面は砂が付着する。内面は12と同じく平滑に擦られており、摺鉢に転用されたと考えられる。推定底径8.8cm。14はかわらけ。内面底部は轆轤痕が強く残る。胎土は砂粒を少量含み白色針状物質がわずかに混入する。色調は橙褐色で、焼成は良い。推定底径6cm。15・16はSK24出土遺物。16はかわらけ。残存状態はあまり良くないが内面底部に強く轆轤目が残る。胎土は砂が多く白色針状物質を僅かに含む。推定底径7.2cm。15は板碑。山型と種子の一部が残る。彫はやや浅く鈍い。種子は阿弥陀如来である。

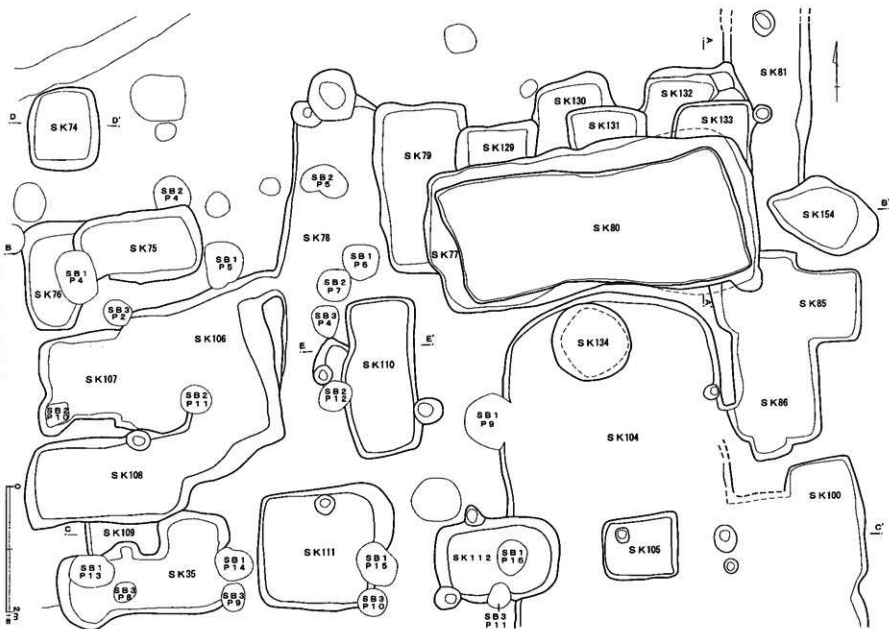
い。長方形で長さ1.02m、幅0.7m、深さは0.52mである。北側に階段状の掘り込みが2段認められた。その長さを加えると全体の規模は1.5mになる。底面直上から、かわらけ5点と銭貨6枚が出土した。かわらけは南辺の両隅と東壁に沿って検出された。隅に検出されたものは正位で出土したことから、その位置に置かれたものと考えられる。東壁際に検出されたものは縦位であることから転落した可能性が考えられる。本遺構は出土遺物の内容や出土状態から墓壇であることは間違いないであろう。形態的な特徴は地下式墳に合致する。ただし、規模があまりにも小さく、検出面からの深さではあるが0.5mという深さで「地下式」になったのであろうか。階段状の段も小さく疑問が残る。

第179図8～12はかわらけ。8は口縁部を約1/5欠失している。直線的に開く体部で、底部内面は中央部が窪み指ナデ痕が一部に見られるが轆轤目が強く残る。外面は板目状の圧痕が僅かに残る。色調は淡褐色で、胎土は少量の砂粒、角閃石と赤色粒を比較的多く含む。焼成はやや軟質。口径11.6cm、器高3.4cm、底径6.6cm。9は口縁部の約3/5を欠失

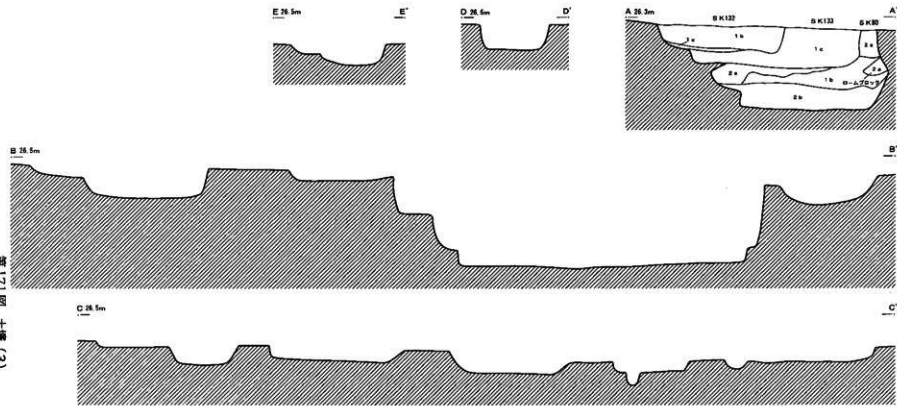


第169図 土城(1)

第170図 土壌(2)



第171図 土層 (3)



(第169図)

- 1 黒褐色土 黒色土主体、ロームブロック混入、ロームブロックの多い層に a~d
- 2 黄褐色土 ロームブロック主体、黒色土混入、黒色土の多い層 a~d
- 3 暗黒色土
- (第171図・第176図)
- 1 黒褐色土 黒色土主体、ローム混入、ロームの少ない層に a~d
- 2 黄褐色土 ローム主体、黒色土混入、黒色土の少ない層に a~d
- 3 黒褐色土
- (第172・173・174図)
- 第141号土層
- 1 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック多量、軟質
- 2 黄褐色土 ローム塊の崩壊土

第80号土層

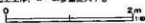
- 1 黄褐色土 ローム主体、黒色土塊かに混入する
- 2 黒褐色土 黒色土主体、ローム塊かに混入
- 3 黄褐色土 ロームブロックを混入する
- 4 黄褐色土 ローム主体、黒色土塊かに混入
- 第90号土層
- 1 黄褐色土 ローム主体、黒色土塊混入する
- 2 黄褐色土 ローム主体、黒色土多量混入する
- 3 黒褐色土 黒色土主体、ローム塊混入する
- 4 黄褐色土 ローム主体、黒色土少量混入する
- 5 黒褐色土 黒褐色土主体、ローム塊かに混入する
- 6 黄褐色土 ローム主体、黒色土多量混入する
- 7 黒褐色土 黒色土主体、ローム少量混入する
- 8 黄褐色土 ローム主体、黒色土塊かに混入する
- 9 黒褐色土 黒色土主体、ローム塊かに混入する

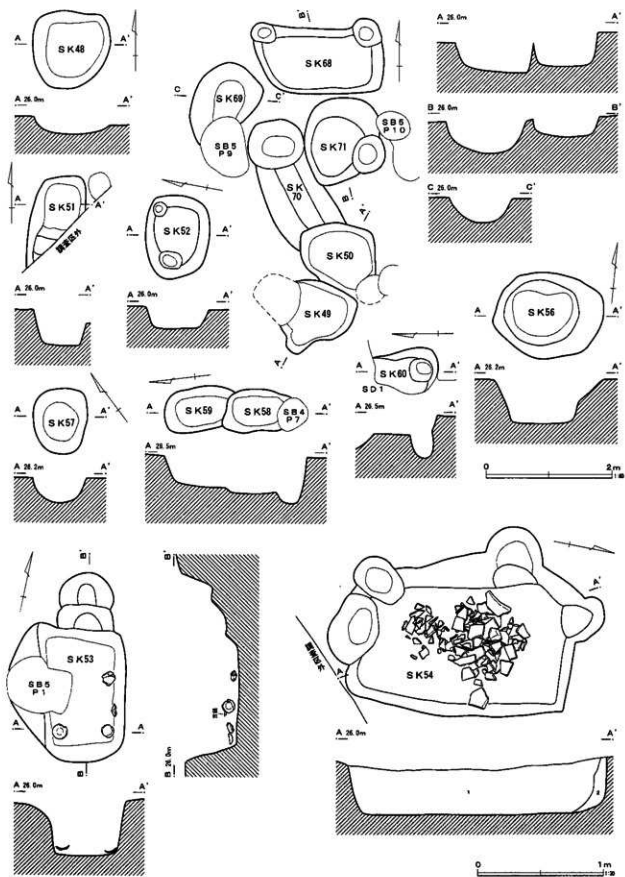
第91号土層

- 1 黒褐色土 黒色土主体、ローム少量混入する
- 2 黒褐色土 黒色土主体、ローム塊かに混入する
- 3 黄褐色土 ローム主体、黒色土多量に混入する
- 4 黒褐色土 黒色土主体、ローム塊かに混入する
- 5 黒褐色土 黒色土主体、ローム少量混入する
- 第104号土層
- 1 黒褐色土 黒色土主体、ロームを塊かに混入する
- 第132号土層
- 1 黒褐色土 黒色土主体、ロームを少量混入する
- 2 黒褐色土 黒色土主体、ロームを少量混入する
- 第133号土層
- 1 黒褐色土 黒褐色土層主体、ロームを少量混入する
- 第139号土層 ?
- 1 褐色土 ロームブロック多量
- 第140号土層
- 1 暗褐色土 ローム粒子多量、白色粒子含む

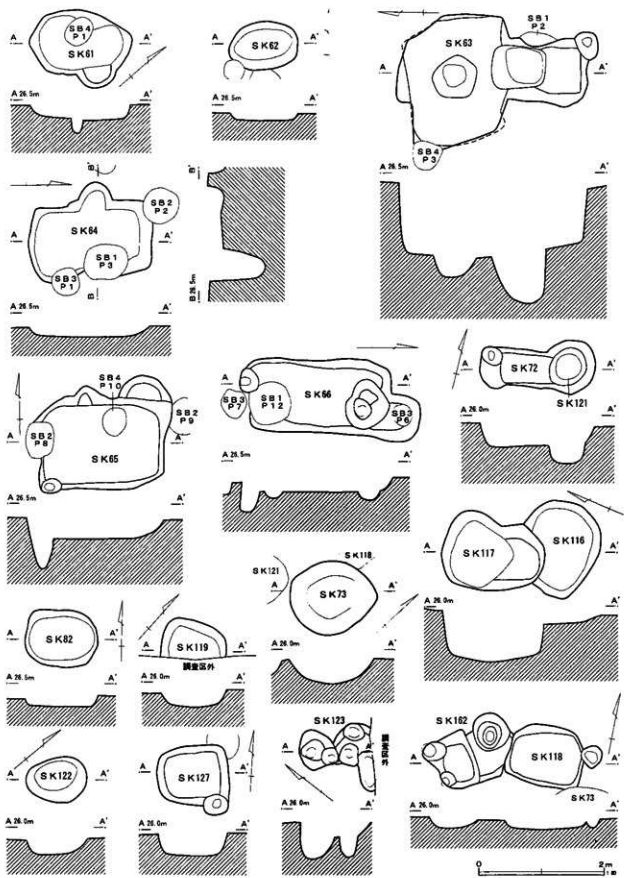
第141号土層

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量
- 第142号土層
- 1 暗褐色土 ローム粒子多量
- 2 褐色土 ソフトローム多量
- 3 暗褐色土 ソフトローム含む、ローム粒子含む
- 第143号土層
- 1 褐色土 ソフトローム多量、ローム粒子含む、炭化物わずかに含む
- 第144号土層
- 1 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量に混在
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量混在
- 3 暗褐色土 黒褐色土含む、ロームブロック混在
- 第145号土層
- 1 黒褐色土 黒色土主体、ローム塊かに混入する
- 2 黒褐色土 黒色土主体、ローム塊混入する
- 3 黒褐色土 黒色土主体、ローム多量混入する



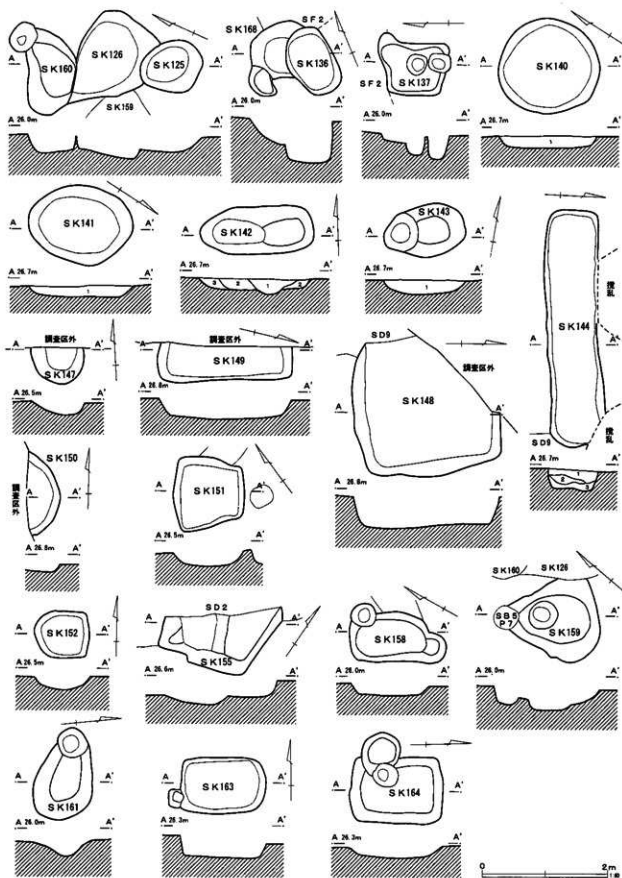


第172図 土坑(4)

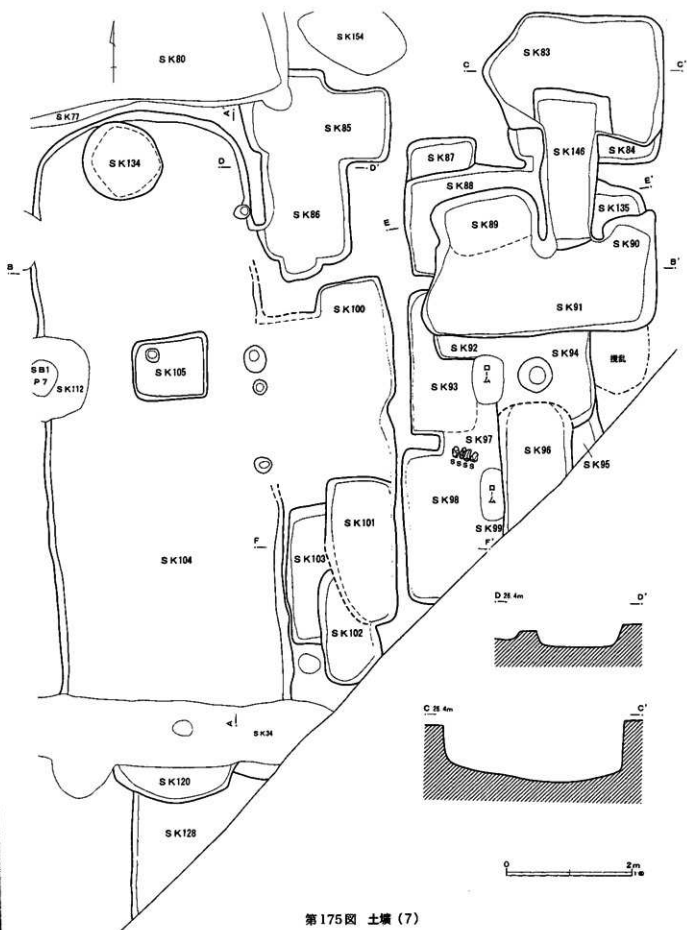


第173図 土壇 (5)





第174図 土坑(6)



第175図 土塙(7)

する。底部内面はナデられない。色調は淡褐色で、胎土は砂粒、赤色粒を含み白色針状物質が入る。焼成はやや軟質。推定口径11.4cm、器高3.4cm、底径6.4cm。10は口縁部の約1/2を欠失する。底部内面はナデられず中央が突起状に残る。板目状の圧痕が顕著である。色調は淡褐色から橙褐色で、胎土は少量の砂粒と赤色粒をやや多く含む。焼成はやや軟質。口径11.7cm、器高3.7cm、底径6.9cm。11は底部以外は、口縁部約1/10と体部約1/4の残存。底部内面は中央部が高いことからナデていないと思われる。色調は橙褐色で、胎土は赤色粒を含み白色針状物質を僅かに混入する。焼成は軟質。推定口径11.6cm、器高3.2cm。底径6cm。12は口縁部約1/10の残存。底部から体部への移行が均一でないため括れるような立上りとなる。底部内面中央はナデることなく軸轆回転のまま強く窪ませる。色調は暗褐色で、胎土は砂粒と赤色粒がやや多く白色針状物質を僅かに含む。焼成は良い。推定口径10.4cm、器高3.5cm、底径5.8cm。13～18は纏まって出土した。13は「太平通寶」で初鑄は976年。14・15は「皇宋通寶」で15は篆書である。初鑄は1038年。16は篆書の「元祐通寶」である。初鑄は1086年。17は「洪武通寶」。明の1368年の初鑄。18は判読

不明である。

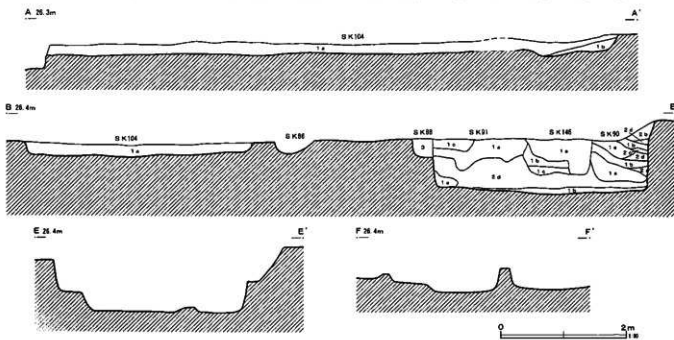
#### 第54号土壙 (第172図)

G-28グリッドで検出された。長方形で、長さ1.74m、幅1.28m、深さは0.45mである。ピットが4基あるが伴うものかどうか判らない。覆土はロームを多量に含み埋め戻されたと考えられる。覆土上位から常滑産の瓦片が出土したが、埋め戻される際に捨てられたものと思われる。

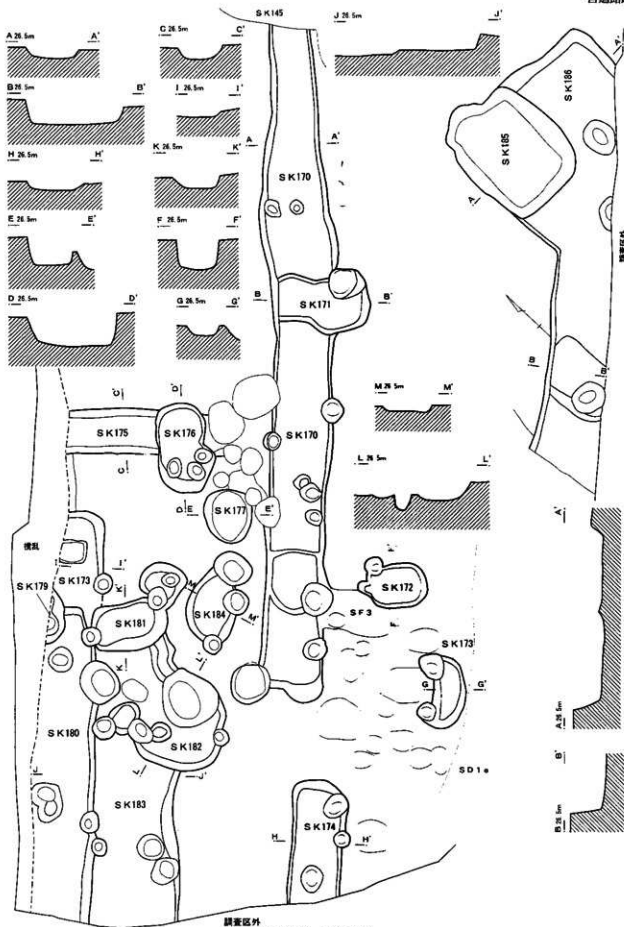
第179図19はかわらけ。約1/2の残存。底部内面は軸轆目が強く残る。胎土は砂粒をやや多めに含み、白色針状物質が僅かに入る。焼成は良い。推定口径10.2cm、器高3.4cm、底径5.6cm。20は常滑の大甕。口縁部の約2/3が残存し胴部破片は少ない。底部は出土しなかった。肩部以下が接合し胴部の大破片があったため、復元を試みたが実際より大きめになったと思われる。口縁部縁帯は長く垂下し肩部には曲線の扉書きがある。口径56cm。15世紀前半。

#### 第97号土壙 (第175図)

H-27グリッドで検出された。区画内の東寄りにあり、土壌の重複が最も激しい一角である。周囲を取り囲むように第92・93・94・96・98号土壙が重複しており、遺構の形態すらわからないほどである。遺構の特徴は人頭大よりやや小振りの礫が4個並ん



第176図 土壙 (8)



調査区外  
第 177 図 土壇 (9)



で置かれていることである。更に1mの間隔を置いてロームが高さ30cmの塊状に検出された。ロームは他の土壌によって切られた可能性もあり、更に広い範囲にあったと考えられる。覆土に焼土が含まれていたかどうか判らないが、周辺に焼土は検出されていないことから、火葬土壌の可能性は低いと思われるが、墓塚の可能性はあるかと思われる。遺物は出土していない。

#### 第104号土壌 (第175図)

G・H-27グリッドで検出された。第1号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。隅丸長方形で、長さ9m以上、幅3.4mの大型である。深さは35cm前後である。検出時には輪郭が不明瞭で、明確には捉え難かった。底面はほぼ平坦で中央には第105号土壌があり、東側の壁際に沿ってピットが疎らに並ぶが、遺構に伴うという確証はない。規模は第2号掘立柱建物跡に匹敵するものであ

るが、柱穴らしいものも見当たらず、遺物も出土していないため、遺構の性格を具体的に知る手掛かりはない。

第178図1~4は第16号土壌出土。1は常滑産で、器壁が薄いことから小型の壺或いは甕であろう。胎土は砂粒と少量の礫を含む。2は常滑産。底部との接合面で外れている。胎土は砂粒と礫を多量に含む。色調は外面は小豆色に発色し、内面は黒灰色である。3はかわかけ。内面は剥離しているが輪軸目が強く残るものと思われる。胎土は少量の砂粒と白色針状物質を僅かに含み焼成は比較的硬質。底径5.6cm。4は在地産摺鉢。6本1単位の櫛目が粗く入る。胎土は多量の赤色粒と砂粒を含み礫が少量混入する。5・6は第52号土壌出土。5は所謂有穴球状製品で、土製である。直径4.5cm、高さ3.9cm、重さ88.86gである。上面は平坦に切られ中心に小孔が開く。孔は貫通せず、中に棒状の鉄製品が2本

第18表 土壌計測表

番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位	番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位
1	欠番					34	G・H-27-28	(7.88)	1.04	0.47	N-90°-E
2	F-29	(1.60)	(1.04)	0.18	N-76°-W	35	G-27	(2.54)	1.14	0.49	N-82°-E
3	F-29	(2.82)	1.02	0.31	N-90°-E	36	G-27	1.12	(0.68)	0.34	N-90°-E
4	欠番					37	F-27	2.00	1.38	0.42	N-90°-E
5	F-29	(5.14)	1.36	0.55	N-0°-E	38	F-26-27	4.00	3.18	1.65	N-82°-W
6	F-29	(1.68)	(0.92)	0.14	N-90°-E	39	E-27-28	3.70	3.00	1.33	N-0°-E
7	F-28	2.02	1.25	0.52	N-33°-E	40	E-27	2.16	1.64	1.50	N-83°-E
8	欠番					41	E-26-27	2.36	1.20	1.67	N-88°-E
9	欠番					42	E-26	3.84	2.85	1.47	N-90°-E
10	欠番					43	E-26	2.38	(1.54)	1.03	N-82°-E
11	F-28	1.26	0.90	0.33	N-68°-E	44	F-26	4.06	3.96	1.59	N-2°-E
12	F-28	(4.52)	(1.40)	0.19	N-86°-W	45	F・G-26	4.60	3.62	1.64	N-81°-E
13	F・G-28	(1.24)	(0.70)	0.15	N-69°-W	46	G-26	(1.34)	0.84	0.31	N-5°-W
14	F-27-28	1.30	1.28	0.31	N-50°-W	47	G-26	(1.58)	0.98	1.08	N-12°-W
15	F・G-27-28	(5.22)	1.02	0.71	N-90°-E	48	F・G-28	1.22	1.20	0.31	-
16	F-27-28	11.50	1.10	0.62	N-8°-E	49	G-28	1.30	1.18	0.54	N-74°-W
17	F-27	(2.28)	(0.90)	0.50	N-5°-E	50	G-28	1.38	(1.06)	0.56	N-54°-W
18	F-27	(0.90)	(0.52)	0.46	N-0°-E	51	G-28	(1.32)	0.80	0.60	N-13°-E
19	F-27	(4.50)	(1.50)	0.71	N-7°-E	52	G-28	1.30	1.00	0.36	N-70°-E
20	F-27	(5.08)	4.02	0.48	N-90°-E	53	F-28	1.50	1.00	0.52	N-12°-W
21	F-27	1.26	(0.96)	0.22	N-85°-W	54	G-28	1.74	1.28	0.45	N-6°-W
22	F-27	(2.34)	1.46	0.48	N-2°-E	55	欠番				
23	F-27	2.82	2.04	0.88	N-5°-W	56	F-27	1.74	1.36	0.74	N-86°-E
24	F-26-27	4.06	2.62	1.26	N-4°-E	57	F-27	1.02	0.86	0.45	N-37°-E
25	F-27	1.02	0.90	0.69	N-10°-W	58	F-27	(0.90)	0.68	0.60	N-5°-E
26	G-27-28	2.40	1.02	0.67	N-6°-E	59	F-27	(0.98)	0.66	0.50	N-0°-E
27	G-27	(2.10)	(1.15)	0.37	N-0°-E	60	E・F-26	0.98	0.72	0.66	N-0°-E
28	G-27	1.60	0.94	0.30	N-8°-E	61	F-26	1.62	1.16	0.31	N-39°-E
29	G-27	(3.09)	1.70	0.46	N-63°-W	62	F-26	1.10	0.72	0.13	N-10°-W
30	G-27-28	(5.34)	2.62	0.44	N-0°-E	63	F-26-27	2.98	2.08	1.23	N-3°-W
31	G-27-28	(2.60)	1.20	0.69	N-0°-E	64	F-26-27, G-26	(1.40)	1.16	0.25	N-0°-E
32	G-27-28	3.28	1.18	0.66	N-0°-E	65	F-27	2.16	1.60	0.39	N-90°-E
33	G-27-28	(1.20)	1.06	0.40	N-18°-E	66	F・G-27	2.64	1.18	0.24	N-0°-E

番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位	番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位
67	G-28	(2.34)	1.18	0.49	N-87°-E	128	H-28	(2.02)	(1.74)	0.11	N-2°-E
68	G-28	1.98	1.02	0.35	N-90°-E	129	C-26	1.26	(0.60)	0.79	N-90°-E
69	F・G-28	1.32	0.92	0.44	N-45°-E	130	G・H-26	1.24	(1.02)	0.56	N-80°-E
70	G-28	(1.84)	0.98	0.42	N-24°-W	131	G・H-26	1.24	(0.54)	0.69	N-85°-E
71	G-28	1.48	1.10	0.52	N-24°-E	132	H-26	1.62	(1.10)	0.55	N-84°-E
72	G-28	(1.12)	0.64	0.39	N-74°-E	133	H-26	1.28	(0.58)	0.47	N-87°-W
73	G-28	1.42	1.16	0.45	N-42°-E	134	G・H-26	1.24	1.22	不明	-
74	G-26	1.32	1.12	0.41	N-0°-E	135	H-27	(0.90)	(0.82)	0.60	N-11°-E
75	G-26	1.98	1.14	0.50	N-80°-E	136	F-29	1.10	0.74	0.66	N-0°-E
76	G-26-27	1.72	0.84	0.27	N-0°-E	137	F-29	(1.12)	0.82	0.16	N-0°-E
77	G・H-26-27	(5.20)	(2.28)	1.11	N-79°-E	138	F-27-28	8.52	(0.92)	0.24	N-2°-E
78	G-26-27	(4.86)	(1.46)	0.23	N-8°-E	139	E-28	3.86	3.32	1.79	N-9°-E
79	C-26	2.68	1.43	0.70	N-5°-W	140	I・J-20	1.56	1.52	0.21	-
80	G・H-26-27	4.50	1.82	0.40	N-80°-E	141	I-19-20	1.64	1.22	0.17	N-24°-W
81	H-26	(2.84)	1.38	0.18	N-0°-E	142	I-19	1.80	0.74	0.21	N-87°-W
82	H-26	1.14	0.92	0.17	N-90°-E	143	I-19	1.28	0.82	0.24	N-70°-E
83	H-26-27	(2.90)	(1.52)	0.80	N-66°-W	144	D-26	3.72	0.84	0.32	N-87°-E
84	H-26-27	(2.42)	(2.32)	0.97	N-90°-E	145	D・E-29	4.64	3.52	1.42	N-83°-E
85	H-26-27	2.38	1.14	0.45	N-86°-W	146	H-26-27	(2.34)	1.20	1.05	N-4°-W
86	H-26-27	3.24	1.42	0.35	N-6°-W	147	K-19	0.84	(0.58)	0.20	N-90°-E
87	H-27	1.08	(0.56)	0.48	N-84°-E	148	D-24	(2.32)	(2.30)	0.51	N-90°-E
88	H-27	(2.16)	1.58	0.69	N-84°-E	149	C-26	2.12	(0.60)	0.30	N-10°-W
89	H-27	1.64	(0.94)	0.35	N-75°-E	150	C-26-27	1.34	(0.54)	0.10	N-4°-W
90	H-27	1.80	(0.86)	1.18	N-0°-E	151	F・G-26	1.14	1.12	0.21	N-39°-E
91	H-27	(2.78)	1.46	0.83	N-90°-E	152	G-28	0.86	0.74	0.23	N-90°-E
92	H-27	(0.94)	(0.36)	0.28	N-90°-E	153	H-26	(1.82)	(1.50)	0.63	N-21°-W
93	H-27	2.26	(1.04)	0.37	N-0°-E	154	H-26	1.54	1.06	0.47	N-77°-W
94	H-27	(1.54)	(1.54)	0.35	N-9°-W	155	D-28	(1.56)	(1.08)	0.42	N-77°-E
95	H-27	(0.50)	(0.48)	0.40	N-9°-W	156	E-28	(2.68)	(1.02)	0.30	N-11°-E
96	H-27	(1.80)	1.12	0.31	N-0°-E	157	F-28	1.20	0.82	0.39	N-49°-W
97	H-27	(1.08)	(0.92)	0.38	N-0°-E	158	F-28	1.26	0.76	0.26	N-29°-W
98	H-27	2.42	(1.26)	0.40	N-2°-W	159	F-28	(1.34)	(1.32)	0.32	N-32°-W
99	H-27	(0.52)	(0.30)	0.33	N-0°-E	160	F-28	1.24	0.82	0.32	N-79°-E
100	H-27	(3.14)	(1.12)	0.23	N-8°-W	161	G-28	(1.02)	(0.92)	0.38	N-71°-W
101	H-27	2.32	(1.12)	0.39	N-6°-W	162	G-28	(1.20)	0.90	0.18	N-62°-E
102	H-27	(1.82)	0.90	0.33	N-5°-W	163	E-29	1.34	0.88	0.37	N-90°-E
103	H-27	2.12	(0.58)	0.26	N-6°-W	164	E-29	1.46	1.06	0.29	N-2°-E
104	G・H-27	(9.22)	3.42	0.36	N-0°-E	165	E・F-29	1.10	1.00	0.35	N-85°-W
105	H-27	1.18	1.02	0.21	N-86°-E	166	F-29	1.92	1.60	0.48	N-72°-W
106	G-26-27	2.82	(2.74)	0.54	N-15°-W	167	E-29, F-29-30	1.10	0.94	0.56	N-13°-W
107	G-27	1.40	(1.16)	0.52	N-0°-E	168	F-29	1.26	0.60	0.43	N-50°-E
108	G-27	2.60	1.36	0.53	N-90°-E	169	D-28-29	4.12	(2.30)	1.80	N-0°-E
109	G-27	(1.14)	(0.50)	0.17	N-85°-E	170	D-29-30	(10.54)	1.20	0.38	N-1°-W
110	G-27	2.48	1.16	0.44	N-4°-W	171	D-30	1.56	0.86	0.30	N-88°-W
111	G-27	2.10	1.98	0.25	N-90°-E	172	D-30	1.10	0.68	0.50	N-83°-E
112	G-27	1.94	1.22	0.43	N-86°-E	173	D・E-30	1.10	0.52	0.19	N-21°-E
113	F・G-27	1.18	(0.54)	0.17	N-90°-E	174	D-30-31	(1.92)	0.82	0.26	N-4°-E
114	F-29	(2.40)	(1.74)	0.17	N-90°-E	175	D-30	(1.38)	0.72	0.23	N-89°-W
115	F-29	4.12	2.00	0.31	N-73°-W	176	D-30	1.40	0.90	0.53	N-4°-W
116	F-29	1.54	1.20	0.17	N-67°-E	177	D-30	0.84	0.76	0.46	N-2°-W
117	F-28-29	1.62	1.20	1.79	N-17°-W	178	D-30	(1.60)	(0.70)	0.20	N-2°-E
118	G-28	1.20	0.94	0.20	N-90°-E	179	D-30	(0.94)	(0.64)	0.36	N-5°-W
119	G-28	1.02	0.64	0.28	N-65°-E	180	D-30-31	(4.90)	(1.00)	0.21	N-0°-E
120	H-28	1.86	(0.56)	0.52	N-86°-W	181	D-30	1.20	0.74	0.35	N-77°-E
121	G-28	0.90	0.86	0.65	N-25°-E	182	D-30	(2.58)	(1.56)	0.22	N-49°-W
122	G-28	0.96	0.72	0.25	N-42°-E	183	D-30-31	(3.02)	(1.36)	0.31	N-0°-E
123	G-29	1.14	1.02	0.59	N-36°-W	184	D-30	(0.98)	0.80	0.09	N-29°-E
124	欠番					185	E-30	2.04	1.50	0.51	N-4°-E
125	F-28	1.00	0.82	0.25	N-46°-W	186	E-30	2.88	(2.46)	0.40	N-3°-E
126	F-28	1.70	1.18	0.24	N-70°-W	187	E-30	(3.44)	(0.94)	0.58	N-53°-E
127	F-28	1.12	0.94	0.38	N-8°-W						

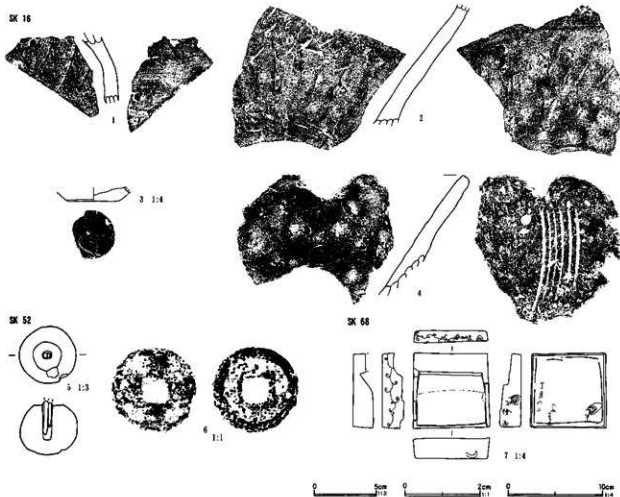
遺存していた。6は銭貨であるが判読不能。7は第68号土壇出土硯。周縁は殆ど欠けて、陸は折損したものを削り直して、細い沈線を入れ再使用している。側面及び底面にも細い線刻が見られる。文様は右に流れる唐草で推出な描画である。右側面と底面には渦巻き状の模様と文字が見られる。側面の文字は「種高」であり下に文字があったかどうかは判ら

f 焼土遺構

焼土を伴う遺構を焼土遺構として分類した(第180図)。いずれも非常に浅い掘り込みで底面しか残っていない状態であった。第1号焼土遺構は長方形で、長さ1.6m、幅0.85m、深さ5cmである。第2号焼土遺構は、2.1m×0.5~0.9mの範囲に焼土と炭化物が広がっており、焼土の下に炭化物層が見られた。不整形で、長方形のものが複数あるのかもしれない。土層断面から重複する柱穴より新し

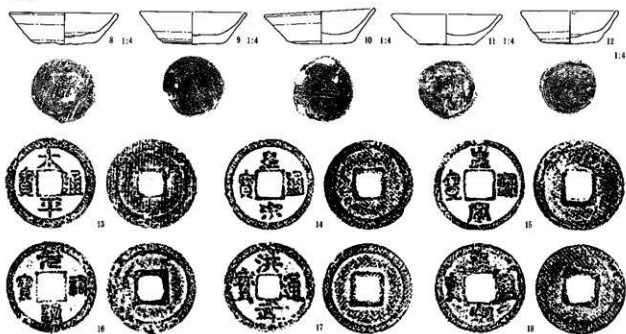
いが、人の名前であろうか。渦巻き状の模様は花押を連想させる。更に底面左側には「十一月六三」の日付がある。その右にも「六三」とあり続けて浅い線刻で何か書かれているがわからない。伴出遺物が無いため時期は不明。石材は黒色で泥岩か粘板岩と思われる。

い。第3号焼土遺構は他の土壇と重複しており、全体の形状は留めていないが長方形と思われる。長さは1.15m残存していた。幅は約0.7mで深さは5cmである。遺物が出土していないことから、遺構の時期は明らかでないが、第2号焼土遺構が柱穴より新しいことや、形状が他の土壇と類似することから、館跡の中でも後出する遺構と思われる。その性格は火葬土壇の可能性も考えられよう。

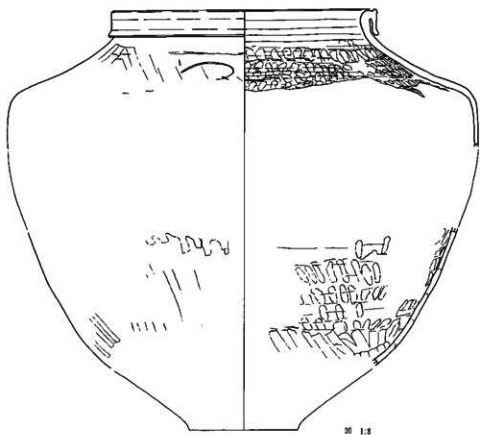
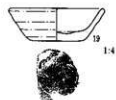


第178図 土壇出土遺物(1)

SK 53

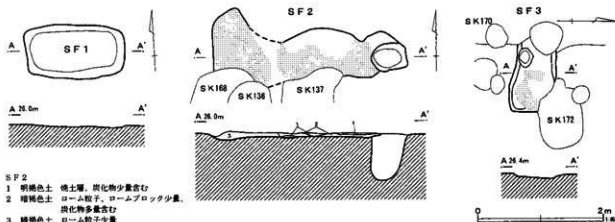


SK 54



第179図 土壙出土遺物(2)





第180図 焼土遺構

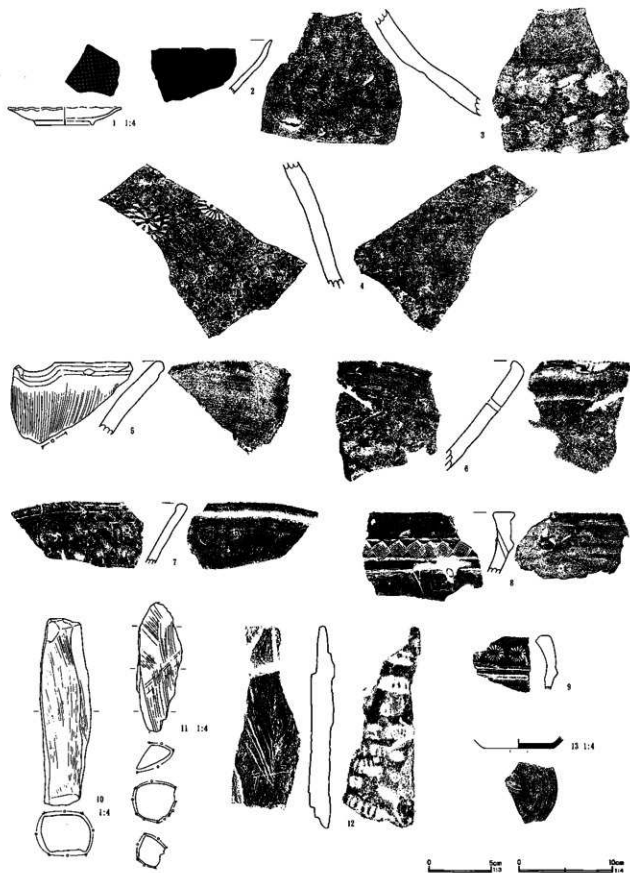
g グリッド・表採・その他の遺物

1は白磁皿。底部内面には植物文が彫刻される。表採。15世紀後半。2は平碗。口唇部は薄く作られる。胎土は黄白色で比較的きめが細かい。表採。3・4は常滑産。4は押印が押される。グリッド出土。5は常滑産片口鉢。破面の一部が砥石に転用される。グリッド出土。13世紀。6・7は在地産鉢。6は

口唇部と破面から切りこみが入る。胎土は砂粒、礫、赤色粒を多量含み、焼成は普通である。グリッド出土。7は灰色で、砂粒を少量含み、焼成は良い。E-29グリッド出土。8・9は在地産火鉢。8は口縁部外面に菱形の押印が連続して押される。口唇部下に焼成前の穿孔がある。胎土は砂粒と礫を含み焼成

第19表 出土銭貨計測表

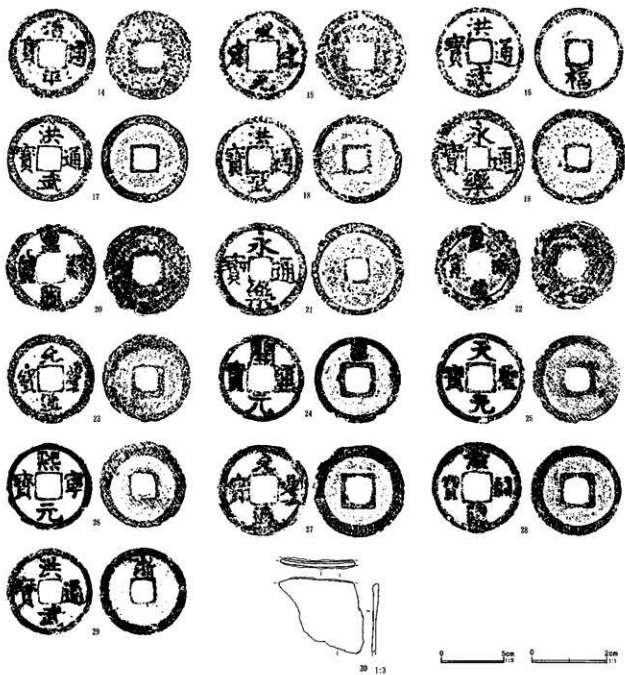
番号	銭名	銭径(A)	銭径(B)	内径(C)	内径(D)	銭厚	重量	出土遺構	備考
第151回	元徳通寶	23.83	23.18	18.79	19.17	1.41~.46	3.28	行書 E-28	北宋 1078
第151回	元徳通寶	23.87	23.75	18.38	18.76	1.12~.22	3.24	"	行書 北宋 1078
第151回	元徳通寶	24.26	24.15	18.49	17.80	1.07~.14	(3.42)	"	行書 北宋 1078
第151回	熙寧元寶	23.78	23.92	19.11	18.93	1.07~.15	2.71	王墓 E-29	兼書 北宋 1068
第151回	元徳通寶	24.36	-	(18.5)	18.51	1.22~.28	-	"	行書 北宋 1078
第151回	政和通寶	-	-	20.97	21.03	0.95~.13	-	王墓 E-30	北宋 1111
第151回	皇祐通寶	22.12	22.11	16.82	16.88	1.07~.26	2.45	王墓 E-29	欠損 未掲載
	無文	21.24	-	-	-	0.65~0.79	(1.23)	SK52	欠損 未掲載
	無文	21.36	-	-	-	0.66~0.76	(2.61)	"	欠損 未掲載
第178回	判読不明	-	-	17.47	18.64	1.30~1.68	(1.13)	"	欠損
第179回	太平通寶	24.41	24.17	18.54	18.89	1.03~.08	(2.06)	SK53	北宋 976
第179回	皇宋通寶	24.18	24.07	19.94	20.00	1.04~.16	2.06	"	北宋 1038
第179回	皇宋通寶	24.47	24.51	20.82	21.06	1.06~.23	2.76	"	北宋 1038
第179回	元祐通寶	24.76	24.5	19.72	20.19	1.40~.41	3.20	"	北宋 1086
第179回	洪武通寶	24.19	24.27	19.84	19.75	1.54~.62	3.35	"	明 1368
第179回	判読不明	24.32	24.27	20.51	21.08	1.11~.21	3.30	"	"
	皇祐通寶	-	-	-	-	-	(1.72)	SK63	欠損 北宋 1038 未掲載
第168回	祥符元寶	24.55	24.72	19.56	19.37	1.19~.41	4.51	SK80	北宋 1009
第168回	永樂通寶	25.22	25.16	20.79	20.65	1.35~.40	3.51	"	明 1408
第168回	永樂通寶	25.14	24.97	20.21	20.36	1.04	3.44	"	明 408
第168回	判読不明	25.01	25.07	20.70	20.70	1.25~.27	3.38	"	"
第181回	治平通寶	24.21	23.88	18.76	19.45	1.17~.22	2.11	D-30 P1	北宋 1064
第181回	皇祐通寶	24.50	24.21	20.14	20.10	0.95~.10	2.62	"	北宋 1101
第181回	洪武通寶	24.50	23.78	20.89	20.25	1.49~.78	3.26	"	明 1368
第181回	洪武通寶	23.39	23.26	18.53	18.57	1.41~.45	2.58	"	明 368
第181回	洪武通寶	23.54	23.55	19.84	19.58	1.56~.66	2.46	"	明 368
第181回	永樂通寶	25.54	25.50	20.84	20.70	1.37~.63	3.10	"	明 408
	南唐元寶	-	-	-	-	1.14~.30	-	P27 P1	欠損 錢圖 955 未掲載
第181回	皇宋通寶	-	-	-	-	1.18~.20	(2.58)	G28 P1	北宋 1038
第181回	永樂通寶	-	-	-	-	1.24~.29	(2.10)	"	明 1408
第181回	皇宋通寶	-	-	-	-	0.74~0.83	-	H21	北宋 1038
第181回	元徳通寶	23.92	23.92	18.59	19.11	1.14~.22	2.69	"	北宋 1078
第181回	開元通寶	23.28	23.26	20.27	20.16	1.11~.26	2.51	表採	唐 845
第181回	天聖通寶	24.14	24.18	20.82	20.60	0.90~0.94	2.60	"	北宋 1023
第181回	熙寧元寶	-	-	19.85	19.92	1.39~1.52	3.05	"	欠損 北宋 1068
第181回	元祐通寶	-	-	19.55	19.56	1.09	1.98	"	北宋 1078
第181回	元祐通寶	24.32	24.44	20.00	20.68	1.08~.97	2.30	"	北宋 1086
第181回	洪武通寶	22.15	19.48	19.44	19.62	1.32	2.43	"	明 1368
第181回	不明	-	-	-	-	-	-	"	銭銭 破損 未掲載



第181図 グリッド・表採・その他出土遺物(1)

は良い。F-29 グリッド出土。9 は口縁部外面に放射状の丸い押印が押される。内面は厚く剥離している。胎土は砂粒と礫を含み、角閃石が僅かに入る。焼成は良い。グリッド出土。10・11 は凝灰岩の砥石。10 は裏面が一度剥離しているが、再び使用している。D-30 グリッド出土。11 は側面が三角形で底面と両側面の使用頻度は少ない。E-29 グリッド出土。12 は板碑の破片と思われるが砥石に転用している。

D-30 グリッド出土。13 は須恵器坏。底部は周辺部削り、白色針状物質を多量に含む鳩山窯跡群の8世紀代の製品である。H-22 グリッド出土。第182図の銭貨は計測表を参照されたい。30 は現存長5.5×6.0cm、厚さ0.3～0.5cmの鉄板である。やや彎曲し端部が肥厚していることから、鉄鍋など容器の口縁の一部と考えられる。



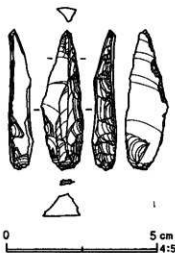
第182図 グリッド・表探・その他出土遺物(2)

#### (4) E区 A 旧石器時代

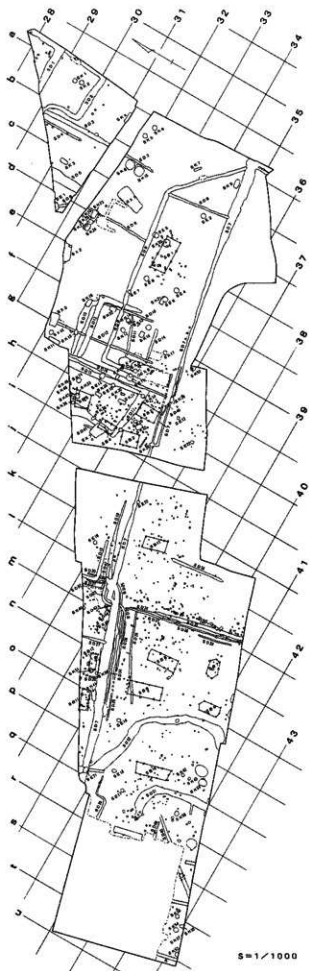
E区ではローム層中からは遺物は確認されなかったが、形態などから旧石器時代に帰属すると考えられる石器1点を図示する。

第184図1はナイフ形石器である。完形で、石材は、不純物を殆ど含まない透明感の強い黒曜石を使用している。背面が腹面と同方向の剥離で構成され、単段打面の石核から剥離されたと考えられる、やや厚手の石刃状の剥片を素材とし、打面を基端に残置して縦に用いている。素材となる剥片の打面は小さく非調整で、その直下には階段状の剥離が残る。バルブは発達していない。背面左側縁基端部と背面右側縁には急斜度の比較的大きな剥離と微細な刃潰し状の剥離を併用した綿密なブランティングが施され、左側縁を刃部とする二側縁加工のナイフ形石器に整形されている。刃部にあたる左側縁には背面、腹面ともに使用による微小な剥離が観察される。

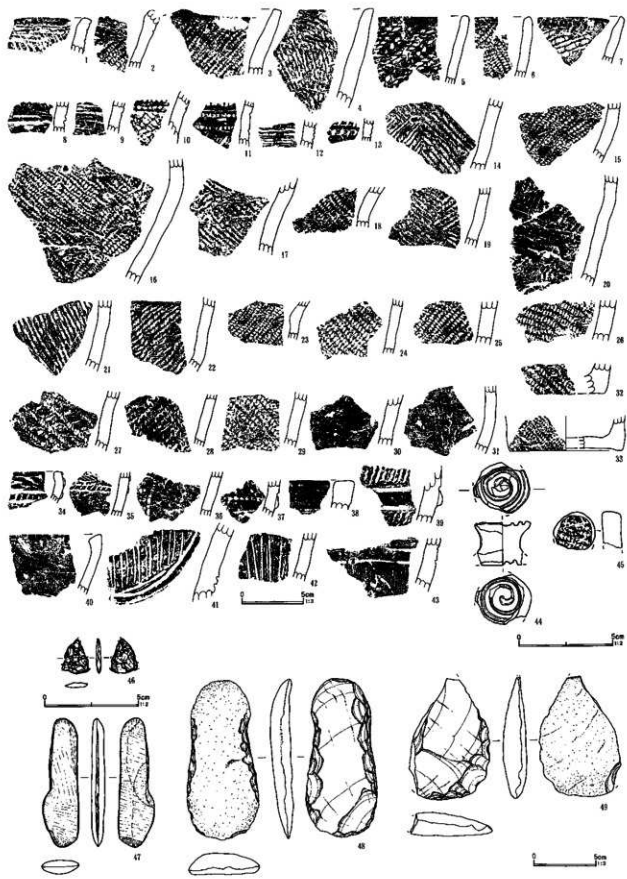
帰属する時期に関しては、石刃状の剥片を素材として用いているが、甲高でブランティングも急峻で厚いことから「砂川期」及びそれ以降に置くことが妥当と考えられよう。



第184図 旧石器時代遺物実測図



第183図 E区全測図



第 185 図 グリッド出土遺物 (縄文時代)

## B 縄文時代

遺構は検出されなかったが、調査区内から縄文時代の土器、石器、土製品が、量は少ないが出土している。これらをグリッド出土遺物として一括した。グリッド出土遺物（第185図）

1～33は前期中葉の黒浜式である。出土した土器の大半を占めている。1～7は口縁部の破片である。1は口縁部に半載竹管によって、沈線文を横方向に施文する。胴部には斜め方向に施文する。2は口縁部に半載竹管を刺突して、弧状に連続して施文している。地文は単節L Rの縄文を、横方向に施文する。3～7は地文のみを施文するものである。3は波状口縁をもつものである。5は1段3条の単節R Lの縄文を施文する。8～31は胴部の破片である。8と9は平行沈線文を施文するものである。10と11は円形の刺突文を施文するものである。12は平行沈線文を施文したのちに、円形刺突文を施文するものである。13は刺突文を施文する。14～19は羽状縄文を施文するものである。14、17、19は無節RとLの非結束の羽状縄文で、15、16、18は単節R LとL Rの非結束の羽状縄文である。20～29は地文のみを施文するものである。20、22、28は無節L、21は無節Rの縄文を施文する。23の地文は1段3条の単節R Lの縄文を施文する。24、26は前々段多条R Lの縄文、25は前々段多条L Rの縄文を施文する。27は付加条の2種巻きで、軸縄部分の縄文を、器面上にはほとんど現われていないものの、軸縄単節L Rに1段Lを付加するもので、末端を結ぶものと考えられる。29は単節R Lの縄文を施文する。30、31は無文である。32、33は底部の破片で、33はあげ底になっている。

## C 中世以降

### a 掘立柱建物跡

#### 第1号掘立柱建物跡（第186図）

調査区の東側、d・e-33・34グリッドで検出された。第20号土壌と重複するが、新旧関係は不明である。東西棟で桁行4間、梁行2間としておく

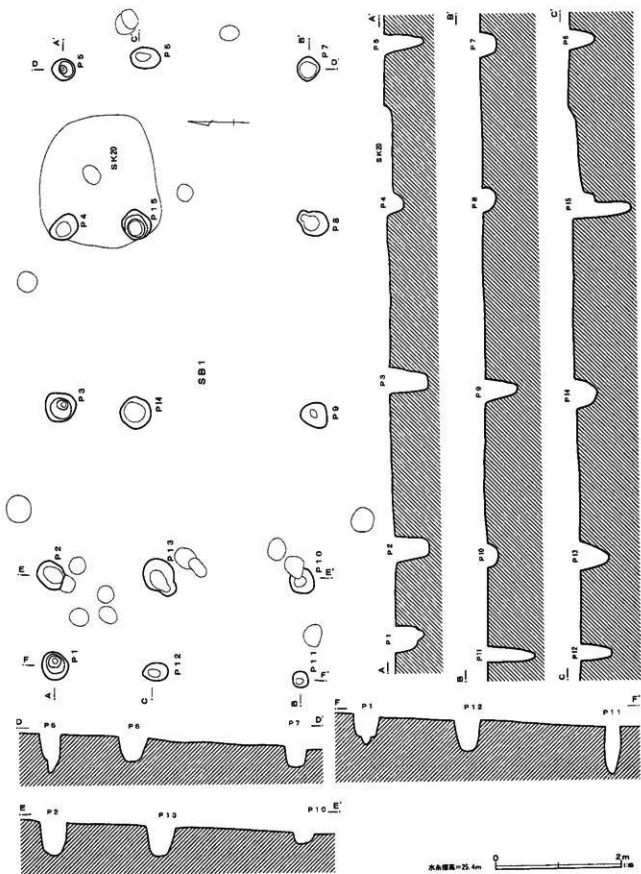
34、35は前期後葉の諸磯b式である。34は口縁部の破片で、口縁部には浮線によって文様が施文される。35は胴部の破片で、2本の浮線が施文され、浮線の上には向きを変えて、刻みを施文している。

36～43は中期の土器である。36、37は中期中葉の阿玉台系で、36は結節沈線文を蕨手状に施文する。胎土に金雲母を含んでいる。37は隆帯の脇に結節沈線文を施文している。38～43は中期後葉の加曾利E式期の土器で、38はキャリバー形深鉢の口縁部の無文部分である。39はキャリバー形深鉢の頸部で、隆帯で口縁部と頸部とを区画する。地文はLの燃糸文を施文する。40は曾利系深鉢の口縁部の破片である。41は連弧文土器で、地文は条線である。42は地文が条線の胴部の破片である。43は頸部周辺の破片で、地文は磨齒状の条線である。

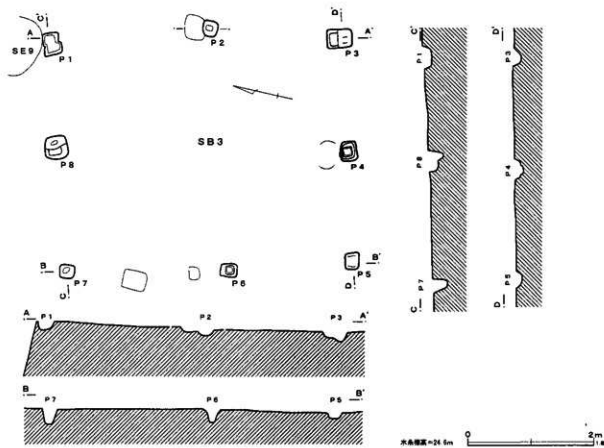
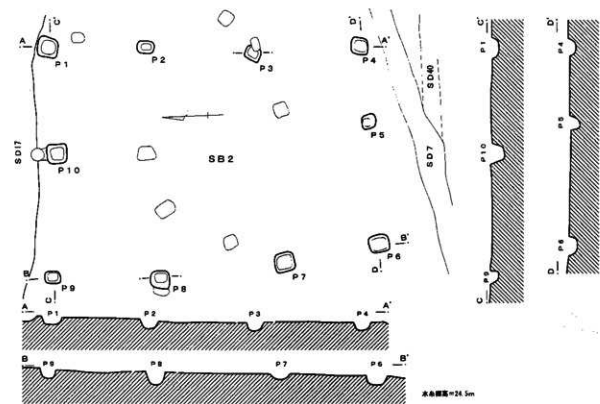
44、45は土製品である。44は耳栓で両面に、渦巻文を施文している。45は土製圓盤で中期の土器片を使用している。径は2.0cmである。

46～49は出土した石器である。46は石織で調整は粗雑である。両脚部の先端が欠損し、長さ1.8cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重量0.7g、石質は黒曜石である。47は磨製石斧の未製品で、研磨の工程中と考えられる。長さ10.2cm、幅3.0cm、厚さ1.1cm、重量49.3g、石質は凝灰岩である。48、49は打製石斧である。48は素材となる剥片に、最小限の調整剥離を加えたのみで、正面には大きく自然面を残す。長さ12.7cm、幅5.7cm、厚さ1.8cm、重量143.3g、石質は砂岩である。49は左側縁部分を大きく欠損する。裏面には自然面を大きく残り、調整などはほとんど加えられない。長さ9.7cm、幅6.5cm、厚さ1.9cm、重量112g、石質はホルンフェルスである。

が、3間×1間の身舎に北側に4尺、西側に5尺の縁または庇を付けた建物とかもしれない。規模は、桁行北側で9.3m、梁行東側は3.9mである。柱穴は隅丸方形基調で、深さは20cm～60cmとばらつく。方向はN-90°-Eを指す。遺物は出土しなかった。



第186图 第1号独立柱建物跡



第187图 第2·3号独立柱建物跡



第2号掘立柱建物跡 (第187図)

調査区の中央部、h・i-35グリッドで検出された。重複する遺構はないが、北側は第17号溝跡に南側は第7・40号溝跡に近接する。南北棟で桁行3間、梁行2間である。規模は桁行東側で4.92m、梁行は北側で3.6mである。柱穴は方形で深さは10cm～20cmと浅い。主軸方向はN-2°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第3号掘立柱建物跡 (第187図)

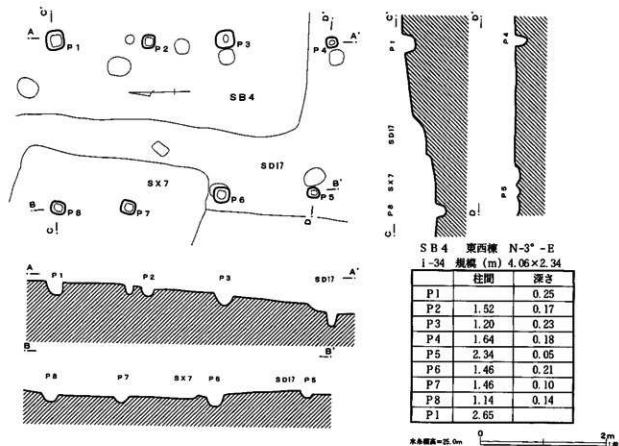
調査区の中央部、i-35グリッドで検出された。第2号掘立柱建物跡とは第10号井戸跡、第32号土壌を挟んで西側に位置し、同じように第7・40号溝跡の間にある。南北棟で桁行2間、梁行2間である。規模は桁行東側で4.52m、梁行は北側で3.66mである。柱穴はきっちりした方形で深さも10cm～28cmと第2号掘立柱建物跡とよく似ている。主軸方向はN-14°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第4号掘立柱建物跡 (第188図)

調査区の中央部、i-34グリッドで検出された。第17号溝跡・第7号竪穴状遺構と重複する。桁行3間、梁行1間で、規模は桁行東側は4.36m、梁行北側は2.65mである。柱穴の深さは10cm～20cmであるが、東側と西側では柱穴底面の標高差がありすぎる。建物とすれば溝に張り出す形で西側の床下の柱を長く伸ばした構造であろうか。疑問が残る。

第5号掘立柱建物跡 (第189図)

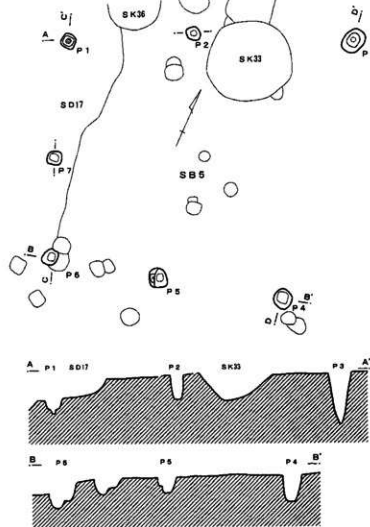
調査区の西側、i-33・34グリッドで検出された。第17号溝跡・第33号土壌と重複する位置にある。桁行2間、梁行2間であるが東側が開き中間の柱穴は検出されなかった。規模は桁行北側は4.48m、梁行西側は3.46mである。柱穴は方形で深さは20cm～40cmが多い。方向はN-66°-Eを指す。遺物は、出土しなかった。



第188図 第4号掘立柱建物跡

## 第6号竪立柱建物跡 (第190図)

調査区の西側、n-39・o-38・39グリッドで検出された。第29号溝跡と重複するが新旧関係は不明である。桁行は5間、梁行2間である桁行西側は柱穴が1基検出されなかった。規模は桁行東側は



第189図 第5号竪立柱建物跡

SB1 建物方向 N-90°-E  
d-33 規模(m) 8.84×3.90

	柱間	深さ
P1		0.45
P2	1.40	0.55
P3	2.70	0.60
P4	2.80	0.21
P5	2.50	0.61
P6	1.30	0.40
P7	2.65	0.28
P8	2.45	0.21
P9	3.00	0.50
P10	2.65	0.17
P11	1.60	0.77
P12	2.30	0.48
P1	1.55	
P12		
P13	1.50	0.47
P14	2.60	0.35
P15	2.95	0.80
P6	2.70	

SB2 建物方向 N-2°-W  
h-35 規模(m) 5.11×3.12

	柱間	深さ
P1		0.11
P2	1.52	0.12
P3	1.70	0.10
P4	1.70	0.11
P5	1.15	0.16
P6	1.95	0.15
P7	1.50	0.09
P8	1.95	0.23
P9	1.65	0.16
P10	1.90	0.20
P1	1.70	

SB3 建物方向 N-14°-W  
l-35 規模(m) 4.52×3.74

	柱間	深さ
P1		0.13
P2	2.55	0.13
P3	2.06	0.14
P4	1.80	0.14
P5	1.94	0.10
P6	1.95	0.21
P7	2.50	0.28
P8	1.95	0.24
P1	1.70	

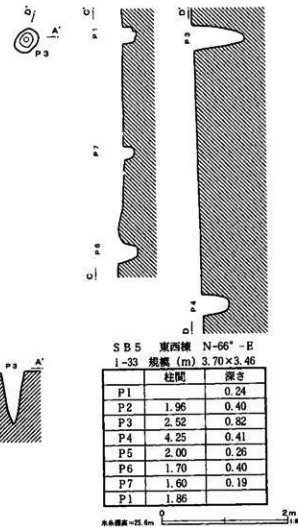
SB6 建物方向 N-17°-W  
o-39 規模(m) 8.75×3.49

	柱間	深さ
P1		0.54
P2	1.80	0.44
P3	1.78	0.56
P4	1.70	0.44
P5	1.74	0.18
P6	1.83	0.23
P7	1.76	0.38
P8	1.73	0.16
P9	1.70	0.44
P10	3.50	0.44
P11	1.80	0.81
P12	1.75	0.30
P13	1.80	0.29
P1	1.70	

8.85 m、梁行は3.5 mである。柱穴は隅丸方形で深さは20 cm～50 cmが多い。方向はN-17°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

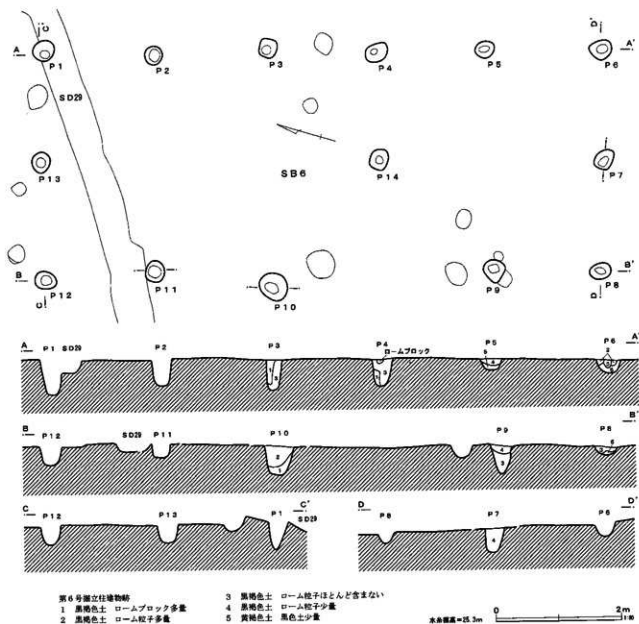
## 第7号竪立柱建物跡 (第191図)

調査区の西側、n・m-40グリッドで検出された。



SB5 東西棟 N-66°-E  
l-33 規模(m) 3.70×3.46

	柱間	深さ
P1		0.24
P2	1.96	0.40
P3	2.52	0.82
P4	4.25	0.41
P5	2.00	0.26
P6	1.70	0.40
P7	1.60	0.19
P1	1.86	



第190図 第6号掘立柱建物跡

SB7 建物方向 N-78° -E  
m-40 規模(m) 3.22×2.48

	柱間	深さ
P1		0.30
P2	1.50	0.24
P3	1.70	0.49
P4	1.75	0.33
P5	1.10	0.27
P6	1.72	0.31
P7	1.50	0.26
P8	1.80	0.52
P1	1.95	

SB8 建物方向 N-6° -W  
n-39 規模(m) 7.47×3.48

	柱間	深さ
P1		0.20
P2	2.50	0.28
P3	2.80	0.39
P4	2.26	0.27
P5	2.20	0.23
P6	1.28	0.26
P7	2.62	0.35
P8	2.80	0.17
P9	2.05	0.39
P10	1.66	0.16
P1	1.26	

SB9 建物方向 N-9° -W  
n-40 規模(m) 4.76×2.80

	柱間	深さ
P1		0.21
P2	2.00	0.31
P3	2.63	0.21
P4	1.60	0.18
P5	1.30	0.28
P6	2.06	0.16
P7	2.70	0.13
P8	1.45	0.35
P1	1.65	

SB10 建物方向 N-14° -W  
p-40 規模(m) 8.30×2.80

	柱間	深さ
P1		0.17
P2	1.90	0.40
P3	2.20	0.31
P4	1.85	0.20
P5	3.50	0.34
P6	1.30	0.22
P7	1.50	0.18
P8	2.56	0.27
P9	2.20	0.25
P10	2.24	0.17
P11	1.30	0.20
P12	1.65	0.20
P1	1.30	

する遺構はない。東西棟で桁行2間、梁行2間である。梁間の柱が外側に張り出す。規模は桁行は3.2m、梁行は西側で2.94mである。柱穴は方形が基調で深さは20cm～30cmが多い。方向はN-78°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

#### 第8号獨立柱建物跡 (第192図)

調査区の西側、n-38・39グリッドで検出された。重複する遺構はない。第6号獨立柱建物跡の東に位置する。桁行3間、梁行2間で、規模は桁行西側は7.47m、梁行北側は2.92mである。柱穴は方形基調で深さは20cm代が多い。方向はN-6°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

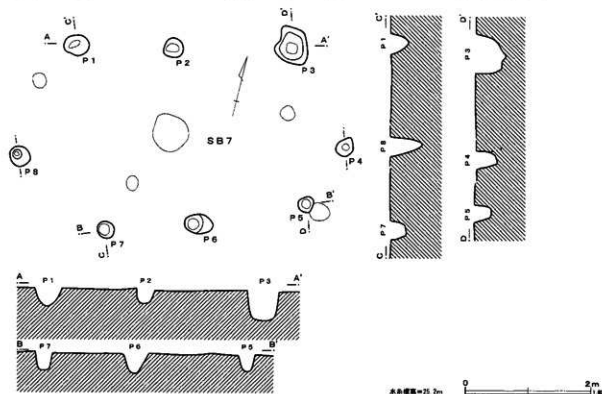
#### 第9号獨立柱建物跡 (第192図)

調査区の西側、n-40・41グリッドで検出された。

重複する遺構はない。桁行2間、梁行2間である。第7号獨立柱建物跡の西にあり、同じように梁間の柱が外側に出ている。桁行東側は4.76m、梁行南側は2.7mである。柱穴は方形基調で、深さは10～30cm代である。方向はN-9°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

#### 第10号獨立柱建物跡 (第193図)

調査区の西側、p・q-39・40グリッドで検出された。重複する遺構はない。桁行東側が広く、台形状に開いてしまうが、柱筋が通るので図のように想定した。桁行4間、梁行2間である。桁行西側は8.3m東側は9.55m、梁行は北側で2.95m、南側は2.8mである。柱穴は方形で深さ20cm代が最も多い。方向はN-14°-Wを指す。遺物は出土しなかった。



第191図 第7号獨立柱建物跡

SB11 建物方向 N-60°-E  
p-37 規模(m) 5.15×1.90

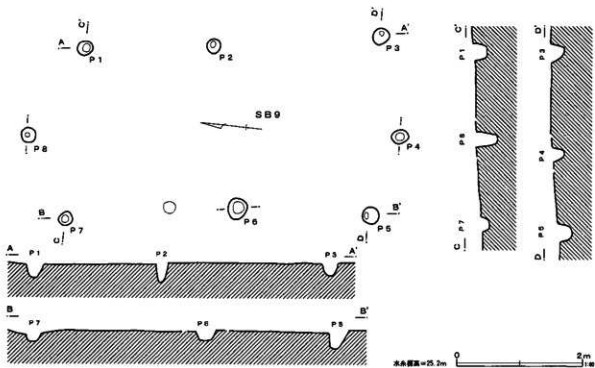
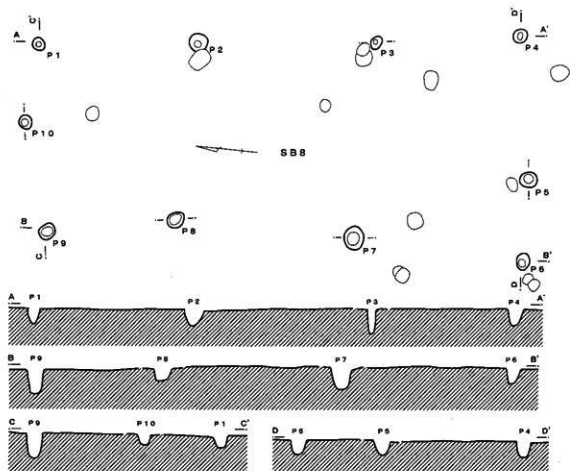
柱間	深さ
P1	0.35
P2	1.90 0.44
P3	1.40 0.44
P4	1.90 0.47
P5	1.85 0.39
P6	2.10 0.35

SB12 建物方向 N-25°-W  
p-37 規模(m) 4.15×1.85

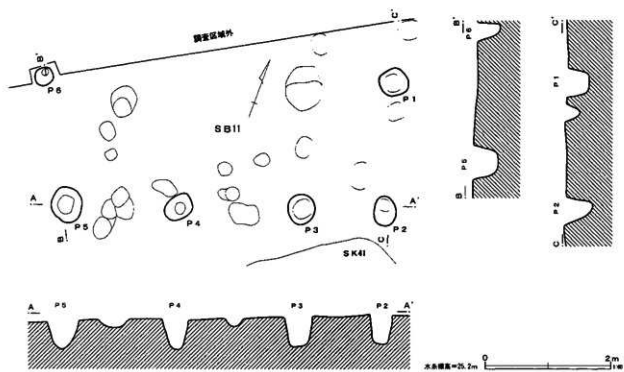
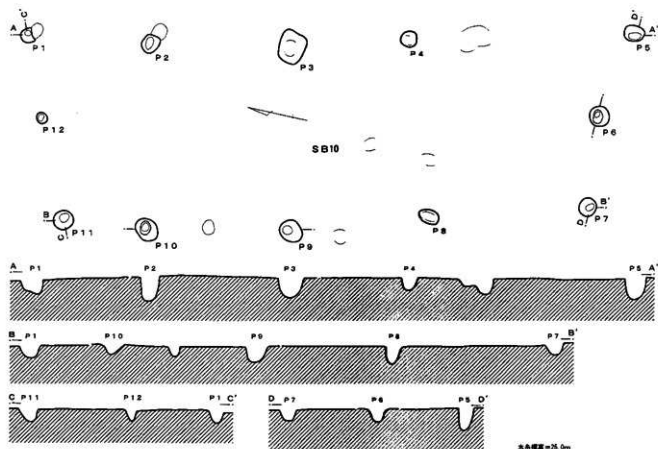
柱間	深さ
P1	0.43
P2	1.85 0.28
P3	2.30 0.36
P4	1.85 0.27
P5	0.18
P6	1.55

SB13 建物方向 N-15°-W  
k-37 規模(m) 6.10×3.00

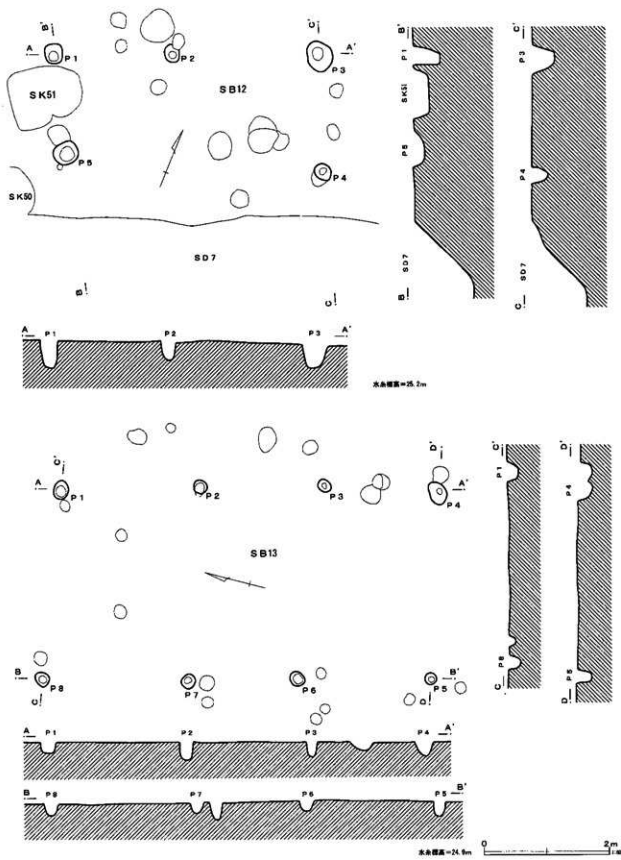
柱間	深さ
P1	0.17
P2	2.25 0.25
P3	1.95 0.23
P4	1.80 0.21
P5	3.00 0.22
P6	2.10 0.15
P7	1.70 0.17
P8	2.30 0.17
P9	3.00



第 192 图 第 8·9 号独立柱建物跡



第193图 第10·11号掘立柱建物跡



第194图 第12·13号掘立柱建物跡

## 第11号掘立柱建物跡(第193図)

調査区の西側、 $o \cdot p-37$ グリッドで検出された。重複する遺構はないが北側は調査区外に掛かる。検出されたのは東西3間、南北1間であるが、桁行3間、梁行2間の建物になると思われる。規模は、東西方向が5.15mで、南北方向は2.9m検出された。柱穴は方形で他の建物より大きい。深さは35cm～45cmほど揃っている。遺物は出土しなかった。

## 第12号掘立柱建物跡(第194図)

調査区の西側、 $n \cdot o-37$ グリッドで検出された。第11号掘立柱建物跡の東に位置する。南側を第7b井戸跡

井戸跡は22基検出した。検出された井戸跡は全て円形である。ただし、第21号井戸跡は第7号溝跡より新しく、形態も他のものと違っていることから新しい時期の土壌と考えたほうがよいと思われる。井戸跡の分布は、台地上にあるもの、緩やかな台地斜面上の端部にあるもの、低地部にあるものの3種類がある。井戸は生活に必要なものであるから、当然建物などの付近で日常生活の範囲内に造れることになるが、台地上にある第1号井戸跡は半分が調査区外にあり、建物なども調査区外にあると思われる。深さは検出面から1.6mしか調査できなかったが、断面は漏斗状を呈し、かなり深くなると思われる。第1号井戸跡には第6号溝跡が絡んでおり、断面には溝跡は見られないことから、井戸跡が新しいか同時存在と考えられる。第6号溝跡は南に延び台地を下っていることから井戸の排水溝とも考えられる。斜面端部にあるものは、第12号を除く第2～15号井戸跡である。このうち第2～8号井戸跡は、第1号掘立柱建物跡の周囲に集中している。第5号井戸跡は、第8号溝跡のすぐ側であって第8号溝跡に排水していた痕跡が見られるが第8号溝は近世の溝であることから井戸跡も近世のものと考えられる。これら全ての井戸が同時に必要だったとは思えないが、建物や溝跡と密接に関係していたと思われる。第9～15号井戸跡は、第2～5号掘立柱建物跡の

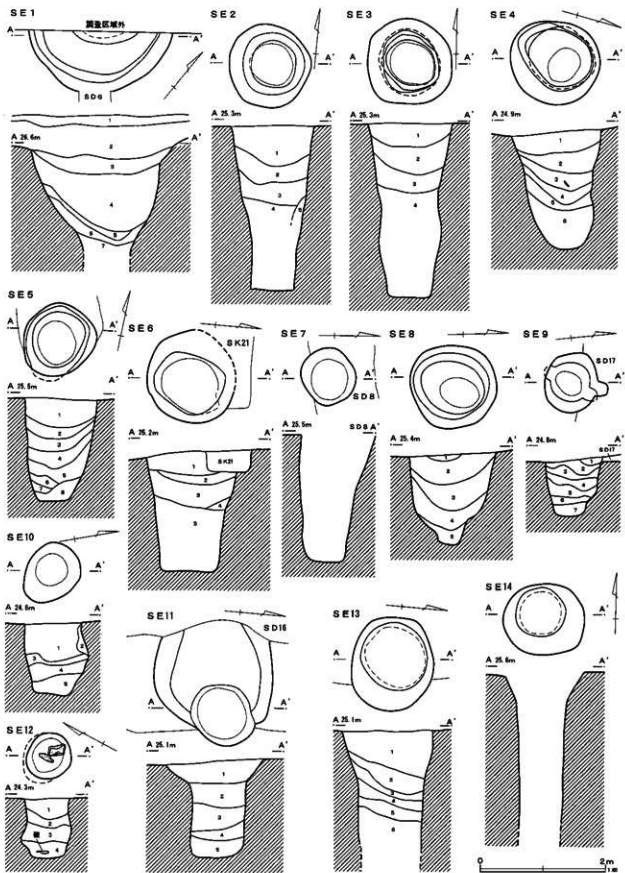
号溝跡と重複しこれより古い。検出されたのは東西2間、南北1間であるが、南北は2間乃至3間であったと思われる。検出された規模は東西が4.15m、南北は2.55mである。柱穴は方形で深さは20～40cm前後である。遺物は出土しなかった。

## 第13号掘立柱建物跡(第194図)

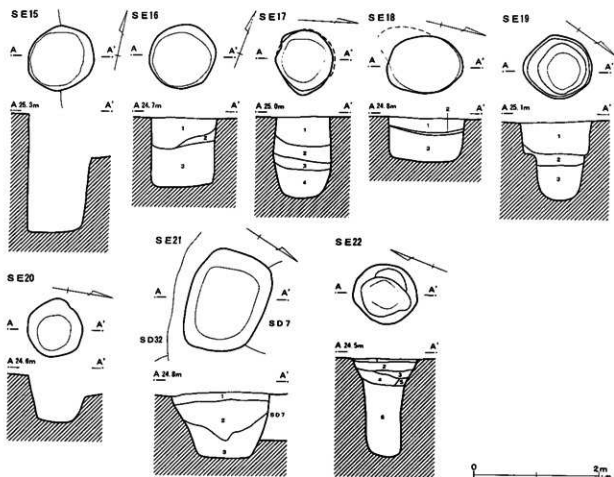
調査区の中央、 $k-37$ グリッドで検出された。重複する遺構はない。南北棟で桁行3間、梁行1間である。規模は桁行は東側が6.0m、梁行は3.0mである。柱穴は方形で深さは10～20cm代である。方向は $N-15^{\circ}-W$ を指す。遺物は出土しなかった。

周辺に分布しこれらの建物に関連するものであろうが、溝跡や個々の建物との具体的な組み合わせははっきりしない。第11号井戸跡は西側に浅い溝状の落ち込みがあり、第16号溝跡に排水していた可能性が考えられ、第16号溝は近世と思われることから井戸跡も新しい可能性がある。第13・14号井戸跡は深く、底面まで検出できなかったが断面は上部が漏斗状を呈する。低地部にあるものは第12・16～22号井戸跡である。第12・22号井戸跡は、第2号掘立柱建物跡のある一群に属するのか、或いは調査区外の南側に別の建物があるのかもしれない。他の井戸跡は西側にある建物群に関係するであろう。低地部の井戸跡は断面が筒状を呈する。井戸跡は検出面の高さによって断面形が大きく異なり、また地下水面の高さによっても掘り方が変わってくると思われる。台地の上にあるものは断面が上部は漏斗状を呈し下部は筒状の掘り込みになる。台地上で検出された井戸跡は総体的に深く底面まで検出するのが困難であった。低地部に掘り込まれたものは筒状のものが多く、上から広く掘る必要がなかったと思われる。底面まで検出できたのは18基である。これらの井戸跡の底面の標高を見ると23.4m～23.9mの間に12基が入り、その高さに水脈があることがわかる。調査時にも井戸跡には透明な水が湧いてきた。それより深く掘られていたのは5基で、底面未確認





第195図 井戸跡 (1)



第196図 井戸跡(2)

のものを含めると7基となる。最深は22.5m程度まで掘り込まれていた。一番浅いものは24.1mである。紙数の都合で、各井戸跡の記述は省略し、遺物を出土した遺構について記述する。それ以外の井戸跡に関しては計測値を表に示した。遺物は、底面まで調査できた遺構数の割には少ない。

#### 第2号井戸跡(第195図)

c-34グリッドで検出された。第1号掘立柱建物跡とは9m東に距離を置く。第1号掘立柱建物跡の周囲には、建物を囲むように本井戸跡を含めて5基の井戸跡がある。建物跡は構造上も一番整っていることから長く使用されたのかもしれない。第2号井戸跡は、整った円形を呈し、下方に向かって径を減じる。土層断面は検出面から1.4mしか取れなかったが全体にロームの含みは少なく一度に埋められたものではないかもしれない。遺物は在地産の鉢片

第20表 井戸跡計測表

番号	グリッド	検出面径	底径	深さ
1	e-30	(2.26)	-	(1.60)
2	c-34	1.30	0.70	2.60
3	f-34	1.40	0.65	2.76
4	e-34	1.40×1.30	0.46	1.90
5	d-33	1.20×1.06	0.48	1.60
6	e-f-34	1.40	0.90	1.90
7	f-33	0.90	0.54	2.00
8	e-33	1.40×1.30	0.30	1.45
9	i-35	1.00×0.80	0.36	0.90
10	i-35	1.00×0.80	0.50	1.15
11	h-34	1.04×0.90	0.80	1.55
12	h-36	0.70	0.50	0.94
13	h-33	(1.50)×1.30	-	(1.90)
14	h-i-33	1.30×1.10	-	(2.60)
15	h-34	1.06×0.96	0.80	1.85
16	i-35-36	1.00	0.90	1.10
17	q-39	1.00×0.90	0.60	1.30
18	q-39	1.20×0.90	1.08	0.70
19	p-38	1.10×1.00	0.50	1.26
20	j-k-36	0.90	0.50	0.75
21	q-38	1.60×1.20	0.80	1.00
22	h-36	1.00×0.90	0.45	1.50

が2点出土しただけで図示できたのは1点である。第197図1は橙褐色を呈し、胎土には大径の赤色粒と砂粒、礫を含み、焼成は極めて良い。二次被熱している。

### 第3号井戸跡 (第195図)

f-34グリッドで検出された。第2号井戸跡と同じく第1号掘立柱建物跡の周囲にある井戸跡の一つであるが建物跡とは西に14m離れている。また、第10・13・14号溝跡などが近接している。形状は井戸跡土層注記

#### 第1号井戸跡

- 1 黒褐色土 赤土
- 2 黒褐色土 ローム状礫層
- 3 暗褐色土 ロームブロック少量
- 4 暗褐色土 ローム殻・ロームブロック(φ2~3cm)少量
- 5 暗褐色土 ローム殻・ロームブロック(φ1~2cm)少量
- 6 暗褐色土 ローム殻少量、ロームブロック(φ2~5cm)大少量
- 7 暗褐色土 ローム殻・ロームブロック(φ~1cm)少量

#### 第2号井戸跡

- 1 黒褐色土 ローム状礫層、白色粒少量
- 2 黒褐色土 ローム殻、白色粒少量
- 3 黒褐色土 ローム状礫層、粘土ブロック(φ3~15cm)少量
- 4 黒褐色土 ローム状礫層、礫(φ1~3cm)やや多く混じる。
- 5 暗褐色土 ローム状礫層

#### 第3号井戸跡

- 1 暗褐色土 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 ローム殻少量、炭化物・白色粒少量、ロームブロック(φ1~3cm)大・粘土粒少量
- 3 黒褐色土 ローム殻、炭化物・粘土粒・白色粒少量
- 4 黒褐色土 ローム殻、ロームブロック(φ1cm)大少量
- 5 暗褐色土 ローム殻、暗褐色土ブロック少量

#### 第4号井戸跡

- 1 黒褐色土 1 暗褐色土
- 2 黒褐色土 ローム状礫層、暗褐色土ブロック少量
- 3 黒褐色土 ローム状礫層
- 4 暗褐色土 ローム殻、炭化物・暗褐色土ブロック少量
- 5 暗褐色土 ローム殻、礫(φ1~2cm)少量
- 6 暗褐色土 ローム殻、暗褐色土ブロック少量
- 7 暗褐色土 ローム殻少量

#### 第5号井戸跡

- 1 黒褐色土 3 黒褐色土
- 2 黒褐色土 ローム殻少量、ロームブロック少量
- 3 暗褐色土 ローム殻、粘土粒少量
- 4 暗褐色土 ローム殻、ロームブロック(φ1~2cm)大少量
- 5 暗褐色土 ローム殻、暗褐色土ブロック少量
- 6 黒褐色土 ロームブロック少量
- 7 黒褐色土 ローム殻、ロームブロック少量
- 8 黒褐色土 ロームブロック・粘土ブロック少量

#### 第6号井戸跡

- 1 黒褐色土 2 黒褐色土
- 2 黒褐色土 ローム殻少量、粘土粒少量、小石少量
- 3 暗褐色土 ローム殻少量、粘土粒少量、暗褐色土ブロック(φ5~10cm)大少量
- 4 暗褐色土 ローム殻、粘土粒、暗褐色土ブロック(φ2~5cm) 2 黒褐色土
- 5 暗褐色土 暗褐色土少量
- 6 暗褐色土 褐色土と暗褐色土が互層に堆積する。

#### 第7号井戸跡

- 1 黒褐色土 ローム殻、白色粒少量
- 2 暗褐色土 ローム殻少量、白色粒少量
- 3 暗褐色土 ローム殻、ロームブロック(φ~1cm) 少量、白色粒少量
- 4 暗褐色土 ローム殻少量、白色粒少量
- 5 暗褐色土 ローム殻少量、白色粒・黒褐色土ブロック(φ~1cm) 少量

第2号井戸跡とよく似ている。断面の中位が膨らんでいるのは壁の崩落によるものと思われる。遺物は常滑製品を中心に井戸跡の中では比較的多く出土した。第197図2~13が本井戸跡出土遺物である。2は常滑産と思われる小型の鉢である。約1/10の残存である。体部は直線的に開きそのまま口縁部となる。体部外面は横方向にナデられ、内面は非常に滑らかで、摺鉢として使用されたことがわかる。色調は暗い小豆色で、胎土は白色砂粒を多く含む。推

#### 第9号井戸跡

- 1 黒褐色土 ローム殻(φ1mm以下)少量
- 2 黒褐色土 ローム殻(φ1mm)少量
- 3 黒褐色土 黒褐色土少量
- 4 黒褐色土 ローム殻(φ2~3mm)少量
- 5 黒褐色土 ローム殻ほとんど含まない。
- 6 黒褐色土 ローム殻ほとんど含まない。
- 7 黒褐色土 ロームブロック少量

#### 第10号井戸跡

- 1 黒褐色土 ローム殻(φ3mm)少量
- 2 黒褐色土 大粒ロームブロック少量
- 3 黒褐色土 ローム殻(φ3mm)少量含む 赤味を帯びる。
- 4 黒褐色土 大粒ロームブロック少量
- 5 黒褐色土 ロームブロック(4層より小型)

#### 第11号井戸跡

- 1 黒褐色土 ロームブロック少量
- 2 暗褐色土 ローム殻(φ5mm以下)・ロームブロック少量
- 3 黒褐色土 ロームブロック少量
- 4 黒褐色土 ロームブロック(3層より小型)少量
- 5 暗褐色土 ロームブロック(大型)少量

#### 第12号井戸跡

- 1 黒褐色土 ローム殻(φ1mm以下)少量
- 2 暗褐色土 ローム殻(φ1mm以下)・赤色粒少量
- 3 黒褐色土 ローム殻ほとんど含まない。
- 4 暗褐色土 ローム殻(φ3mm)少量

#### 第13号井戸跡

- 1 暗褐色土 大粒ロームブロック(φ3cm以上)少量
- 2 黒褐色土 ローム殻・白色粒少量
- 3 黒褐色土 黒褐色土ブロック状
- 4 黒褐色土 ローム殻(φ3mm)少量
- 5 黄褐色土 黒褐色土
- 6 暗褐色土 黒褐色土・赤色粒(φ3mm)少量

#### 第14号井戸跡

- 1 暗褐色土 ローム殻ほとんど含まない 若干赤味帯びる。
- 2 黒褐色土 小石(φ1cm)
- 3 黒褐色土 ロームブロック(φ5mm)少量

#### 第17号井戸跡

- 1 黒褐色土 大粒ロームブロック(φ1cm以上)
- 2 黒褐色土 大粒ロームブロック(φ1cm以上)少量
- 3 黒褐色土 ローム殻ほとんど含まない、暗褐色土ブロック(φ2~5cm)大少量

#### 第18号井戸跡

- 1 黒褐色土 ローム殻少量
- 2 黒褐色土 ロームを器底に貼ったものか?
- 3 黒褐色土 ローム殻ほとんど含まない 赤味帯びる。

#### 第19号井戸跡

- 1 黒褐色土 ローム殻(φ2~3mm)少量
- 2 黒褐色土 暗褐色土含む ローム殻ほとんど含まない。
- 3 黒褐色土 ロームブロック・小石少量

定口径18cm、器高7.3cm、推定底径13.6cm。3～12は常滑産の甕である。3は口縁部で口唇は平坦に作られ、縁帯はやや短く頸部から離れている。胎土は砂粒が多く、礫が少量含まれる。14世紀後半。4は肩部の破片で矢車文の押印が押されている。自然釉が掛かり、胎土は砂粒が多くかなり発泡している。5は肩部の破片で細かい格子目文が押される。胎土は砂粒と礫を多量に含む。色調は内面が灰黒色、外面は暗赤褐色を呈する。6は5と同じ押印が押され同一個体と思われる。胴部下方の破片で、内面が非常に滑らかなことから摺鉢に転用されたと思われる。7・8は肩部の破片である。7は胎土に砂粒と礫を含み、色調は暗灰色で光沢はない。8は胎土に砂粒と礫を含み黒色の発泡が見られる。9～11は胴部破片である。9と11は、8と胎土が同じで同一個体と思われる。10は破面を砥石として転用している。撥形の破片で手に持つと大変軽い。胎土は白色砂粒を多く含むが礫は見られない。12は肩部の破片であるが斜めに器面調整した後、肩の一番張る部分を磨き状に横方向に調整する。胎土は白色砂粒を含み、色調は器面が赤褐色、器壁中心部は黒色で焼成温度が上がらなかつたと思われる。13は内耳鍋と思われる。色調は明灰色で、胎土には砂粒と赤色粒を多く含む礫が混じり角閃石が僅かに見られる。焼成は非常に良い。

#### 第4号井戸跡 (第195図)

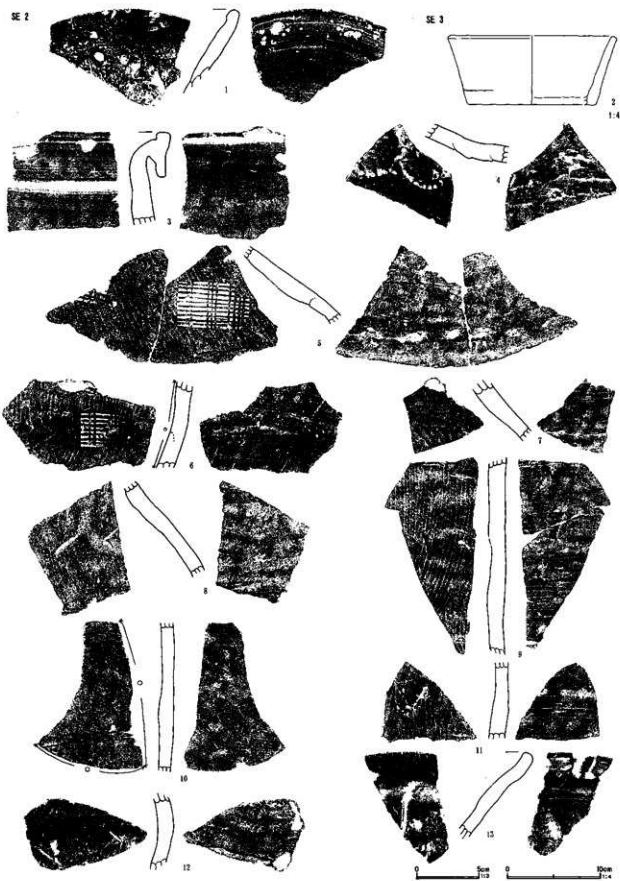
e-34グリッドで検出された。第1号掘立柱建物跡の南西4mに位置する。底面は平坦にならず中央部が一番深くなる。覆土はロームの含みが少ない。遺物は青磁碗や常滑甕破片を多く出土した。

第198図は本井戸跡出土遺物である。14は青磁蓮弁文碗である。軸は粗い慣入が入り緑色が強い。内部で細かく発泡しているが、非常に透明で軸を通して胎土が透けて見える。胎土は青味を帯びた灰色を呈する。15～30は常滑産の甕である。15は小型の甕の口縁部である。外反し先端を上方に摘み出す。胎土には砂粒と少量の礫を混入する。16は甕の口

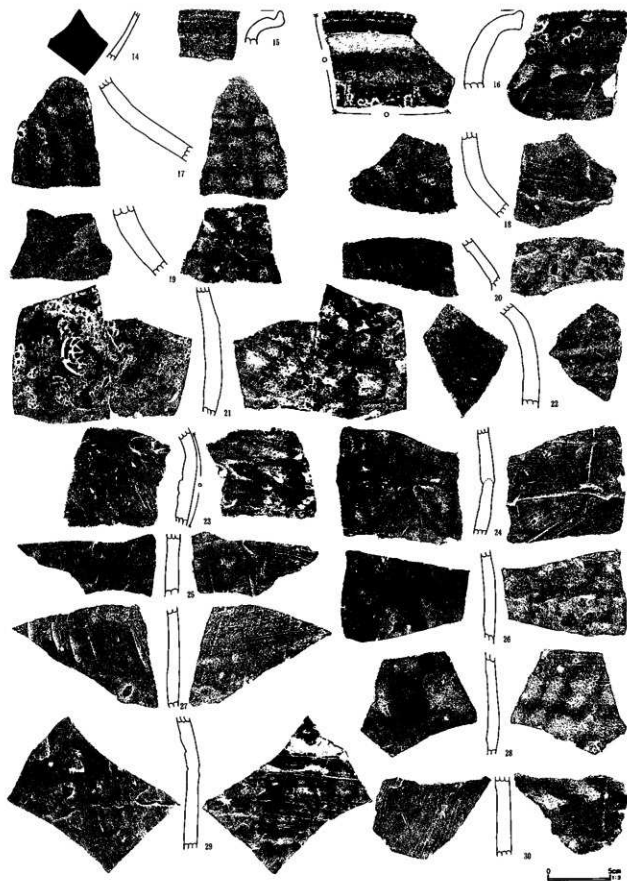
縁部である。15と同じく先端を上方に摘み出し、断面は三角形を呈する。口縁部には自然釉が掛かる。破面を使って砥石に転用している。胎土は砂粒を含み白色の発泡が見られる。礫は少ない。ともに13世紀前半と思われる。17～19は頸部から肩にかけての破片である。外面は降灰し一部は溶けている。17は胎土に砂粒と礫を含み黒色の発泡が見られる。18は黒っぽく発色し、胎土に砂粒と少量の礫を含み、白色の発泡が見られる。19は18と同様の胎土であるが二次被熱している。20～23は肩部の破片である。20は小型の甕と思われ、器壁が薄い。胎土には砂粒を含み。21は肩から胴部に移る部分で、断面図は立ててあるが実際にはかなり斜めになる。外面は厚く自然釉が掛かり、かなり具象的な矢車文の押印が施される。胎土は砂粒と少量の礫を含み、16と軸の掛かり方も似ている。22は外面に釉が掛かるが黒っぽく発色し、細かい気泡が見られる。胎土は砂粒を含み礫は含まれない。白色の発泡が見られる。23は外面を砥石に転用している。24～40は胴部破片である。24は下半の破片で内面に降灰し、外面の発色は良くない。胎土は砂粒と少量の礫を含み、黒色の発泡が見られる。25は湾曲が大きいことからかなり下方の破片と思われる。須恵器を思わせるような灰色の色調を呈する。胎土は砂粒を含み。26～29は同一個体と思われる。27と29は内面に僅かに降灰している。外面は縦方向の筧調整、内面は横方向の筧調整がされる。色調は外面が小豆色に発色し、内面は橙褐色を呈する。胎土は多量の砂粒を含み黒色の発泡が少量見られる。30は砂粒と微細な白色粒を多量含む焼成はあまり良くない。

#### 第6号井戸跡 (第195図)

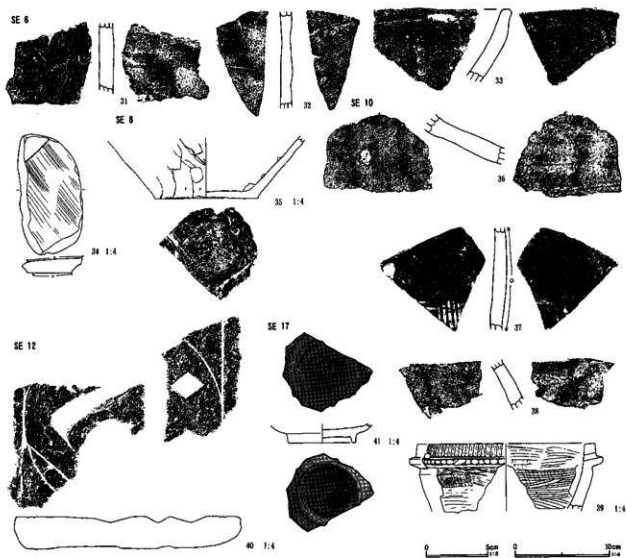
e・f-34グリッドで検出された。第21号土壇と重複しこれより新しい。第4号井戸跡等と共に第1号掘立柱建物跡を取り囲むように存在する井戸跡の一つである。検出面では円形を呈するが下方はやや長方形気味である。覆土はロームを多量に含む層があり埋められた可能性がある。遺物は常滑の甕片



第197図 井戸跡出土遺物(1)



第198図 井戸跡出土遺物(2)



第199図 井戸跡出土遺物(3)

などが少量出土した。第199図31～34が本井戸跡出土遺物である。31・32は甕の胴部破片である。31は小豆色、32はそれより明るい発色で、胎土には砂粒を多量に含む。33は常滑産の鉢である。小豆色に発色し、内面には降灰し斑状に釉が掛かる。胎土には砂粒を少量含む。13世紀前半。34は片岩を砥石に使ったものである。両面を使用し破面は使っていない。

第8号井戸跡(第195図)

e-33グリッドで検出された。本井戸跡も第1号掘立柱建物跡に近接し、建物の西側4mにある。

円形で掘り込みは浅いほうである。底面中央が水溜め状に窪む。覆土にはロームはあまり含まれない。遺物は常滑産が1点出土した。第198図35は鉢と思われるが、内面全面に自然釉が掛り、滓のような塊が付着し、使用された痕跡はない。胎土は砂粒を少量含む薄い。焼成は極めて良好である。推定底径11cmである。

第10号井戸跡(第195図)

i-35グリッドで検出された。第2・3号掘立柱建物跡の間に位置する。掘り込みは浅いが検出面が低かったので下方だけの残存と思われる。平面

はやや楕円形で、断面は崩落したらしくやや膨らむ。埋め戻されたものかどうかははっきりしないが、4層に含まれるロームは膨らんだ部分が崩落したものかもしれない。遺物は常滑の壺片と石鍋の破片が出土した。第199図36～38は常滑の壺である。36は多量の砂粒と礫を混入し発色は良くない。37は押印が押される。胎土は砂粒を少量含み、黒灰色を呈する。外面を使って砥石に転用している。39は石鍋である。口縁部の約1/5が残存していた。断面が方形の鈎を作り出し、鈎から1cmほど置いて下方は黒色に処理される。鈎の上面から孔が開けられている。石材は滑石である。推定口径11cm。

#### c 竪穴状遺構

竪穴状遺構は7基検出された。その分布は全て調査区東側に限られ、低地部には見られなかった。形態は長方形と隅丸長方形に大まかに分類されるが、底面に柱穴や炉と考えられる焼土があるものとそれらの施設の明確でないものに分けられる。前者には第1号竪穴状遺構が該当し、他は全て後者に入る。第1号竪穴状遺構は居住施設と考えても無理はないと思われるが、他の遺構に関しては疑問である。第3・7号竪穴状遺構は共に溝跡より新しく底面の施設も無いことから、時期の降る貯蔵施設など考えたほうが良いと思われる。

#### 第1号竪穴状遺構 (第200図)

c-d-31・32グリッドで検出された。重複する遺構はない。長方形で長さ7.28m、幅3.63m、深さ0.8mである。底面はかなり起伏があるが、掘り方で掘ってしまっているかもしれない。中央部と北東隅が高く掘り残されているが、中央部が高く、周囲を低くする掘り方は竪穴住居跡と共通するものである。底面にビットが2基検出された。中軸線上に並ぶことから柱穴と考えて良いであろう。北側のビットは直径40cmで、深さは90cmである。南側は30cmの方形で深さは10cmと浅い。どちらも抜き取り状の痕跡が見られる。北側の柱穴と壁の間に長さ80cm、幅55cmの細長い掘り込みがある。深さは50cm

#### 第12号井戸跡 (第195図)

h-9グリッドで検出された。第7号溝跡の南側で低地部である。円形で断面は水袋状に膨らむ。底面近くから板碑が出土した。第198図40は種子の一部が残る。幅は24.5cmである。

#### 第17号井戸跡 (第196図)

調査区の西側、q-39グリッドで検出された。第10号掘立柱建物跡の西約6mにある。円形で、低地部分にあるため深さは1.3mと浅い。遺物は青磁皿が出土した。第198図41は高台まで軸がかけられ、やや緑色が強いが発色は薄い。胎土破白っぽく緻密である。内面には重ね焼の痕跡が残る。底径7.6cm、

で、土層断面図では遺構に最初から伴うものと見られる。底面で壁から50cmの距離にあり入り口に伴うものと考えられようか。柱穴間の南寄りには焼土が検出された。直径30cmの範囲で掘り込みは無かったが炉と考えてよいであろう。遺構の覆土は3層と5層にロームが多く含まれることから埋め戻された層と考えられ、一度埋めた後に掘り直していると思われる。柱穴の抜き取り痕も関係してくると思われる。遺物は出土しなかった。

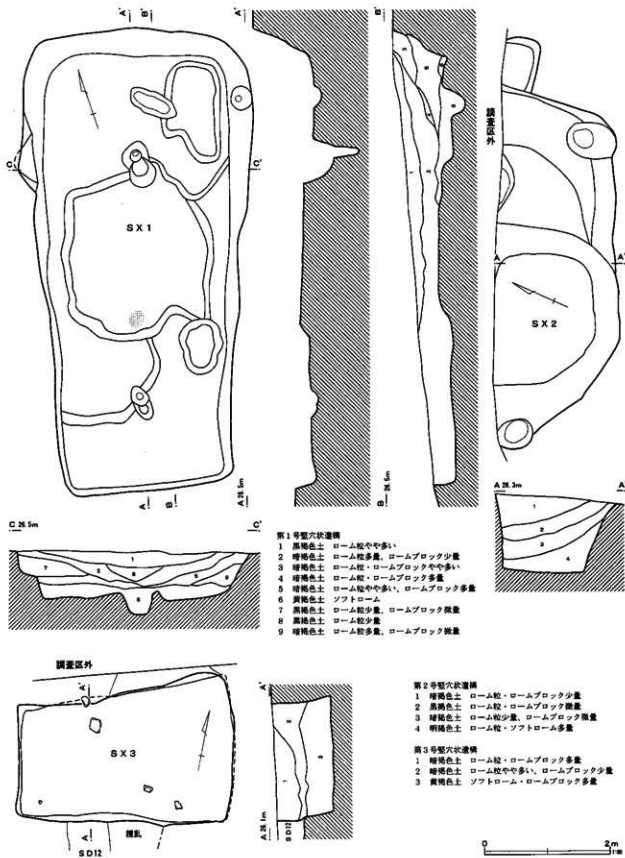
#### 第2号竪穴状遺構 (第200図)

f-31グリッドで検出された。重複する遺構はないが、北側半分が調査区外に掛かる。平面形は長方形が基調と思われるが西側は丸くなる。底面は段を有し、南側が40cmほど深くなる。規模は東西方向が6.4m、南北方向は2.2m検出された。深さは1.05mである。土層は自然堆積と考えられる。遺物は出土しなかった。

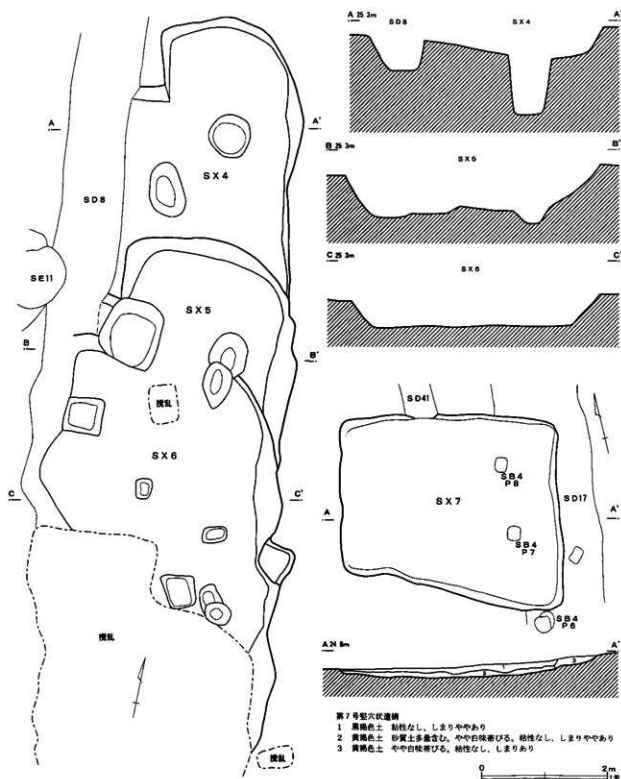
#### 第3号竪穴状遺構 (第200図)

g-31・32グリッドで検出された。第12号溝跡と重複しこれより新しい。長方形であるが東辺が西辺より長く台形状に見える。長さは3.4m、幅は東辺が2.55m、西辺は1.75mで、深さは0.94mである。底面は平坦で、壁は垂直に掘り込まれる。柱穴などは検出されなかった。覆土はロームを多量に含

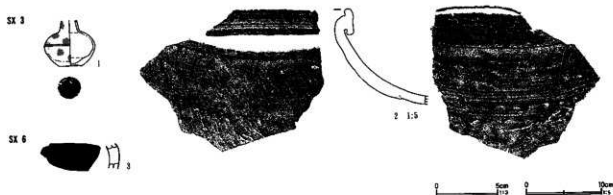




第200図 竪穴状遺構(1)



第201図 型穴状遺構(2)



第202図 竪穴状遺構出土遺物

み埋め灰されたと思われる。底面から10cmほど浮いた状態で礫が数個検出された。遺物は常滑産甕など極僅かである。第202図1は瀬戸産の小型甕である。胴部の約2/3が残存している。球状の胴部に細い頸部がつくが、口縁部は欠失している。胴部中央に一本の細い沈線が入り、鉄軸が底面近くまで掛けられる。内面底部は中央部が強く窪む。胎土は灰黄白色である。底径2.4cm。2は常滑甕である。口縁部縁帯の幅は約3cmである。外面は薄く降灰している。胎土は砂粒と礫を多量に含み、黒色の発泡が見られる。14世紀前半頃か。

#### 第4・5・6号竪穴状遺構 (第201図)

g・h-34・35グリッドで検出された。3基連続しており番号順に重複している。また、西側を第8号溝跡が南北に延び、全ての竪穴状遺構と重複しているが、断面を取っていないため新旧関係は不明である。第6号竪穴状遺構の南側は攪乱によって壊されている。平面形はいずれも隅丸長方形ではないかと思われるが、第4号・5号共に西側に屈曲しているようである。深さに違いが見られるものの、**底d 溝跡**

溝跡は46条検出された。このうち自然流路と判断される2条(第31・32号溝跡)を除くと44条である。ここでも溝跡のあり方は区画と関係してくるが、館跡の区画との関連を窺わせるものは少ない。

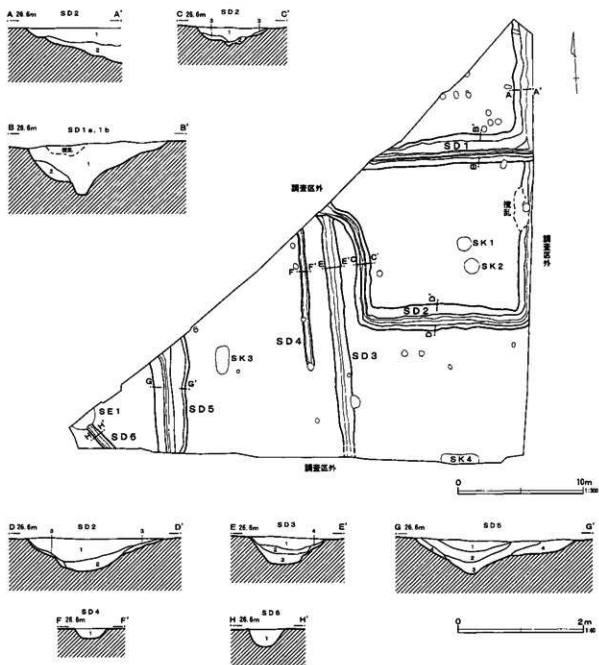
具体的な区画は見えないが規模や断面などの特徴から、第1号溝跡と第5号溝跡がそれに該当する可能性が考えられる。第1号溝跡は調査区の北東端に

面はいずれもほぼ平坦で壁はやや斜めに立上る。第4号では底面に土壌状の掘り込みが2基検出された。深さは中央のものが90cmと深く西側は5cmであった。第5号は第4号より50cm底面が低い。やはり深さ30cmほどの土壌状の掘り込みが見られる。西側にある方形の掘り込みは遺構に伴うかどうか判らない。第6号の底面は南側で第5号より約20cmほど低い。前2者と違うのは、底面に検出されるのが方形の掘り込みである。深さは30~50cmである。遺物は第6号から瓶子破片が出土した。第202図3は胴部破片で灰矽が掛かる。文様は植物文と思われる。胎土は明灰色を呈する。14世紀。

#### 第7号竪穴状遺構 (第201図)

i・j-34グリッドで検出された。第4号掘立柱建物跡、第17・41号溝跡と重複する。前者との新旧関係は不明であるが、後者より新しい。平面形は、東辺が西辺より長く第3号竪穴状遺構と同じく台形状になる。長さは3.5mで幅は2.8mである。深さは0.26mと浅い。底面は中央が緩やかに窪む。底面にはピット等は検出されず、遺物も出土しなかった。

検出された東西方向の溝であるが、両端は調査区外に掛かり12.6mの検出に留まった。幅は2.3m、深さは約80cmである。断面は整った葉研状を呈する。C区でこれに続く溝跡を探すと、位置的には第17号溝跡となるが、この溝は浅く断面はU字型で新しい時期のものと判断されることから一致しない。第2号・8号溝跡は規模がこれより大きく、これも一致



## 第2号溝跡 (A-A')

- 1 埴輪色土 ローム粒子多量
- 2 埴輪色土 ローム粒子・ロームブロック多量

## 第1号溝跡 (B-B')

- 1 埴輪色土 ローム粒子・ロームブロック多量
- 2 埴輪色土 ロームブロック少量

## 第2号溝跡 (C-C')

- 1 埴輪色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量
- 2 埴輪色土 ローム粒子・ロームブロック多量
- 3 埴輪色土 ローム粒子多量

## 第2号溝跡 (D-D')

- 1 埴輪色土 ローム粒子や中多く、炭化物少量
- 2 埴輪色土 ローム粒子・ロームブロック多量
- 3 埴輪色土 ローム粒子多量

## 第3号溝跡 (E-E')

- 1 埴輪色土 ローム粒子多量
- 2 埴輪色土 ローム粒子少量
- 3 埴輪色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量
- 4 埴輪色土 ローム粒子多量

## 第4号溝跡 (F-F')

- 1 埴輪色土 ローム粒子多量

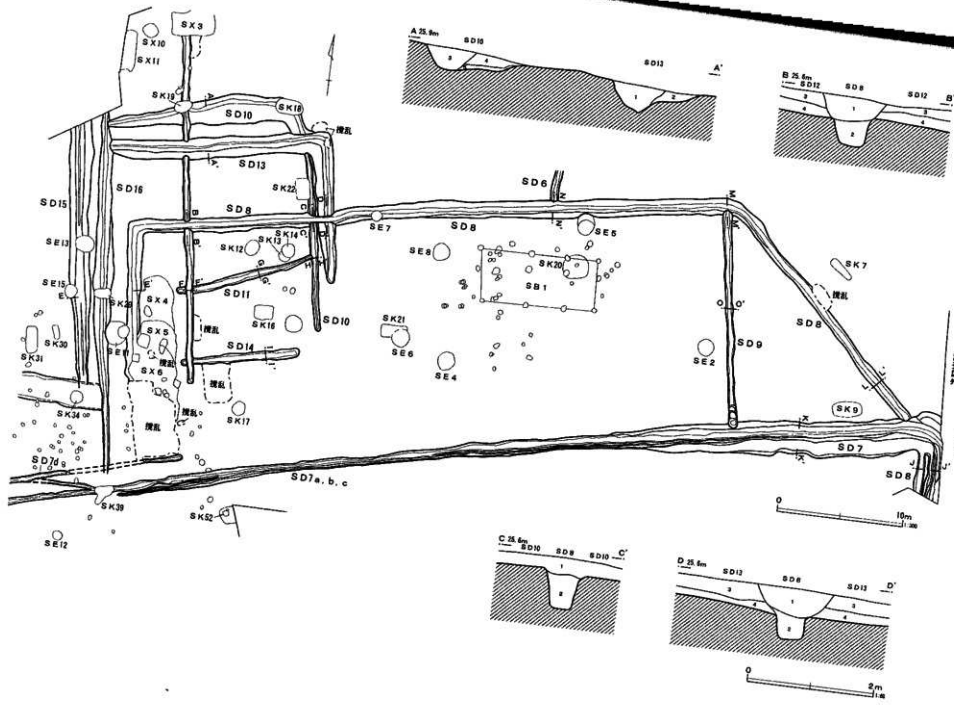
## 第5号溝跡 (G-G')

- 1 埴輪色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量
- 2 埴輪色土 ローム粒子多量
- 3 褐色土 ローム粒子多量
- 4 埴輪色土 ローム粒子・ロームブロック多量

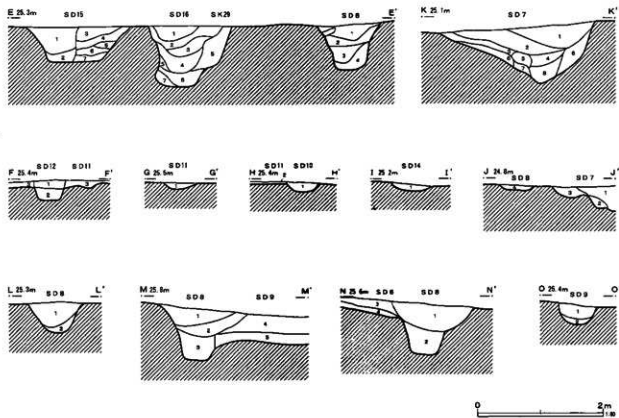
## 第6号溝跡 (H-H')

- 1 埴輪色土 ロームブロック少量

第203図 溝跡 (1)



第204図 遺跡 (2)



第10・13号溝跡 (A-A')

- 1 暗褐色土 ロームブロック多量、ローム粒子やや多い
- 2 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量、ロームブロック多量
- 4 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックやや多い
- 5 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量

第12・13号溝跡 (B-B')

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックやや多い
- 3 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量
- 4 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒子やや多い

第8・10号溝跡 (C-C')

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量、ロームブロック多量
- 2 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックやや多い

第8・13号溝跡 (D-D')

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックやや多い
- 3 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量
- 4 暗褐色土 ロームブロック多量、ローム粒子やや多い

第8・15・16号溝跡 (E-E')

- SD15 炭化物少量、ローム粒子含む
- 1 暗褐色土 ローム粒子、炭化物少量
  - 2 暗褐色土 ローム粒子少量
  - 3 暗褐色土 ローム粒子少量
  - 4 暗褐色土 ローム粒子少量
  - 5 暗褐色土 ロームブロック多量
  - 6 暗褐色土 ローム粒子少量
  - 7 黄褐色土 ローム粒子多量

SD16

- 1 黄褐色土 大粒ローム粒子多量
  - 2 黄褐色土 ローム粒子少量
  - 3 黄褐色土 大粒ローム粒子多量
  - 4 暗褐色土 ローム粒子少量
  - 5 黄褐色土 大粒ローム粒子少量 SK29
  - 6 暗褐色土 大粒ローム粒子少量 SK29
  - 7 黄褐色土 ローム粒子少量 SK29
- SD9
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量
  - 2 黄褐色土 ローム粒子ほとんど含まない
  - 3 暗褐色土 ローム粒子少量
  - 4 黄褐色土 ローム粒子ほとんど含まない

第11・12号溝跡 (F-F')

- 1 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量
- 2 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒子やや多い
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量

第11号溝跡 (G-G')

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量

第10・11号溝跡 (H-H')

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量、ロームブロック多量
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量

第7・8号溝跡 (J-J')

- 1 黄褐色土 ローム粒子少量
- 2 黄褐色土 ロームブロック少量
- 3 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量
- 4 暗褐色土 ロームブロック多量、ローム粒子含む

第7号溝跡 (K-K')

- 1 黄褐色土 ローム粒子少量
- 2 黄褐色土 ローム粒子少量、炭化物少量
- 3 黄褐色土 炭化物少量、ローム粒子やや多い
- 4 暗褐色土 炭化物少量
- 5 黄褐色土 ロームブロック少量、炭化物やや多い
- 6 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量
- 7 黄褐色土 ロームブロック少量
- 8 黄褐色土 ロームブロック少量、炭化物少量

第8号溝跡 (L-L')

- 1 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックやや多い
- 2 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む

第8・9号溝跡 (M-M')

- 1 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量、ローム粒子やや多い
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量
- 3 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックやや多い
- 4 黄褐色土 ローム粒子少量、ロームブロック少量
- 5 黄褐色土 ローム粒子少量、ロームブロックやや多い

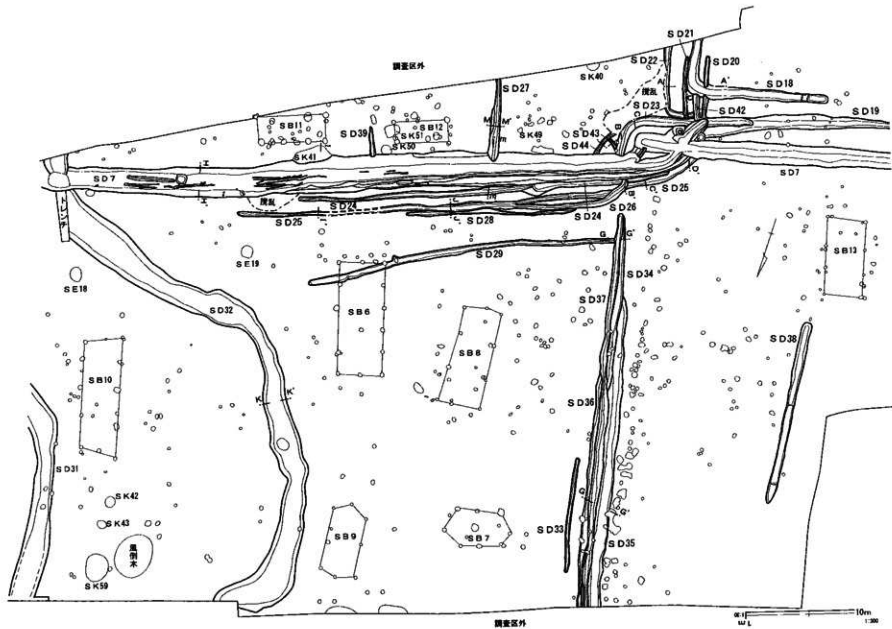
第6・8号溝跡 (N-N')

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックやや多い
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量
- 4 暗褐色土 ローム粒子やや多い

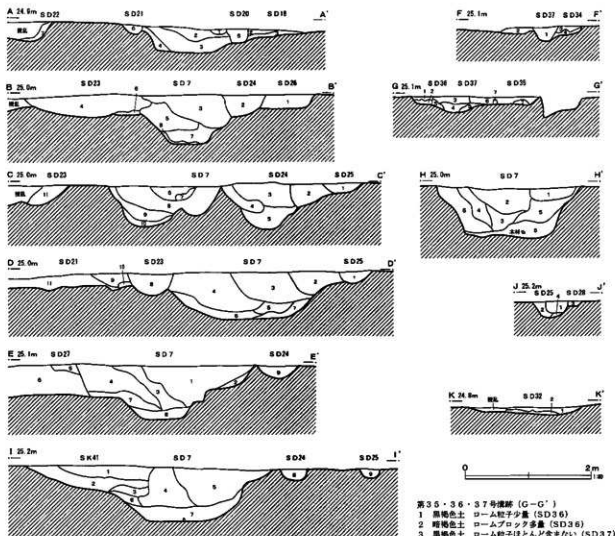
第9号溝跡 (O-O')

- 1 黄褐色土 ローム粒子少量、ロームブロック少量
- 2 黄褐色土 ローム粒子多量、ロームブロックやや多い

第205図 溝跡 (3)



第 206 図 遺跡 (4)



第18・20・21・22号横断 (A-A')

- 1 黒褐色土 ロームブロック多量
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量
- 3 黒褐色土 ローム粒子多量
- 4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック
- 5 黒褐色土 ローム粒子少量
- 6 黒褐色土 ローム粒子含む
- 7 黒褐色土 ローム粒子ほとんど含まない

第7・23・24・26号横断 (B-B')

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量 (SD26)
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量 (SD24)
- 3 暗褐色土 ローム粒子 炭化粒子少量
- 4 暗褐色土 ローム粒子少量 (SD23)
- 5 暗褐色土 ロームブロック・黒色土多量
- 6 黒褐色土 ロームブロック多量
- 7 黒褐色土 ローム粒子少量
- 8 黒褐色土 ロームブロック多量

第7・23・24・25号横断 (C-C')

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量 (SD25)
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量 (SD24)
- 3 暗褐色土 ローム粒子 炭化粒子少量 (SD24)
- 4 暗褐色土 ロームブロック・黒色土多量
- 5 暗褐色土 ローム粒子少量
- 6 暗褐色土 ロームブロック
- 7 黒褐色土 ローム粒子
- 8 暗褐色土 ローム粒子
- 9 暗褐色土 ローム粒子多量
- 10 暗褐色土 ロームブロック多量
- 11 暗褐色土 ローム粒子多量 (SD23)

第7・21・23・25号横断 (D-D')

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量 (SD23)
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量 (SD24)
- 3 暗褐色土 ローム粒子 炭化粒子少量 (SD24)
- 4 暗褐色土 ロームブロック・黒色土多量
- 5 暗褐色土 ローム粒子少量
- 6 暗褐色土 ローム粒子
- 7 暗褐色土 ロームブロック多量
- 8 暗褐色土 ローム粒子多量 (SD23)
- 9 暗褐色土 ローム粒子
- 10 暗褐色土 ロームブロック多量
- 11 黒褐色土 ローム粒子 (SD21)

第7・24・27号横断 (E-E')

- 1 暗褐色土 ローム粒子 炭化粒子少量
- 2 暗褐色土 ロームブロック多量
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量
- 4 暗褐色土 ローム粒子多量 黒褐色土
- 5 黒褐色土 ローム粒子ほとんど含まない (SD27)
- 6 暗褐色土 ロームブロック多量 (SD27)
- 7 暗褐色土 ローム粒子少量
- 8 黒褐色土 ローム粒子少量
- 9 暗褐色土 ローム粒子少量 (SD24)

第34・37号横断 (F-F')

- 1 黒褐色土 ローム粒子多量
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量
- 3 黒褐色土 ローム粒子ほとんど含まない (SD34)
- 4 黒褐色土 ロームブロック多量 (SD34)

第35・36・37号横断 (G-G')

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量 (SD36)
- 2 暗褐色土 ロームブロック多量 (SD37)
- 3 暗褐色土 ローム粒子ほとんど含まない (SD37)
- 4 暗褐色土 ローム粒子多量 (SD37)
- 5 暗褐色土 ロームブロック多量 (SD37)
- 6 黒褐色土 ローム粒子少量 (SD35)
- 7 ロームブロック (SD35)

第7号横断 (H-H')

- 1 黒褐色土 炭化粒子少量
- 2 暗褐色土 大粒ロームブロック多量
- 3 暗褐色土 大粒ロームブロック非常に多量
- 4 暗褐色土 大粒ローム粒子多量
- 5 暗褐色土 大粒ローム粒子少量
- 6 黒褐色土 大粒ロームブロック 赤味帯り

第7・24・25号横断 第41号土層 (I-I')

- 1 暗褐色土 ローム粒子 炭化粒子少量 (SK41)
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量 (SK41)
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量 (SK41)
- 4 暗褐色土 ローム粒子 炭化粒子少量
- 5 暗褐色土 大粒ロームブロック多量
- 6 暗褐色土 ローム粒子少量
- 7 暗褐色土 大粒ロームブロック少量 赤味帯り
- 8 黒褐色土 ローム粒子少量 (SD24)
- 9 暗褐色土 ローム粒子少量 (SD35)

第25・28号横断 (J-J')

- 1 黒褐色土 ローム粒子
- 2 暗褐色土 ローム粒子・黒色土
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量
- 4 暗褐色土 ロームブロック主体

第32号横断 (K-K')

- 1 黒褐色土 白色粒子多量
- 2 暗褐色土 白色粘土ブロック多量

第207図 溝跡 (5)



しなと思われ。消去法で行くと第7号溝跡が幅、深さ(底面標高)共に一致し、これが方向を変えて続く可能性もある。ただし、第7号溝跡は館跡の外側を画する溝の可能性もあり、拙速な判断は避けておきたい。第5号溝跡は南北方向に延びるが、これも長さ8mしか検出されていない。道路の南側では検出されなかったことから道路下で方向を変えろと思われる。

他に区画を造り出しているように見えるものとして第2号溝跡、第8号溝跡、第10・13号溝跡がある。第8号溝跡は1回程度の掘り直しが考えられるものの、最終的には近世の溝であることが出土遺物からわかる。接続する第7号溝跡は最低3回の掘り直しが認められ長期に亘って存在したことが窺えるが、遺物は第8号溝跡と同じく近世が中心である。第10号溝跡は第8号溝跡より新しいことから更に時期が降る。第13号溝跡は第8号溝跡より古いが第10号溝跡と規格が類似しており、第10号溝跡は第13号溝跡を再区画したのと考えられる。よって、第13号溝跡も第8号・10号溝跡と時間的に大きな隔たりは無いと理解したい。第10・13号溝跡が接続する第16号溝跡や、これと絡む第15号溝跡も近世の溝と考える。第2号溝跡は台地上にあって「コ」字状に廻りこんでいるが、調査区の北東部にあたり調査区外に掛かるため、どの程度の区画かわからない。壁の傾斜は緩く底面は丸みを帯びる。内部には土壌が2基確認されただけである。遺物が出土していないため時期も不明である。

他に調査区西側の低地部に複数の溝が関係する大きな区画が考えられる。第34～37号溝跡は重複しながら南北方向に延びる小規模な溝である。北側は切れているが、その北側に東西に伸びる小規模な溝群と区画を構成していたものと思われる。東側のピット列は溝と同時期と考えておきたい。東西に伸びる複数の溝は第7号溝跡を中心として複雑に重複している。このうち第23・24・25号溝跡は、第7号溝跡より新しい。これに絡み合う溝も多くは掘り直

しの結果と考えられ、時期は近世で第7号溝跡の前後に掘り込まれたものと考えておく。

このようにE区で検出された溝跡の殆どは近世に掘り込まれたと考えられる。紙敷の都合で個々の溝跡の記述は省略し計測表に代える。また、溝跡の遺構図面は一部割愛した。遺物は、第7・8号溝跡から近世の遺物が纏まって出土した他は殆ど出土しなかった。第7・8号溝跡出土遺物は17世紀代が少量含まれ、中心は18世紀から19世紀後半である。以下に出土遺物について簡単に記述する。

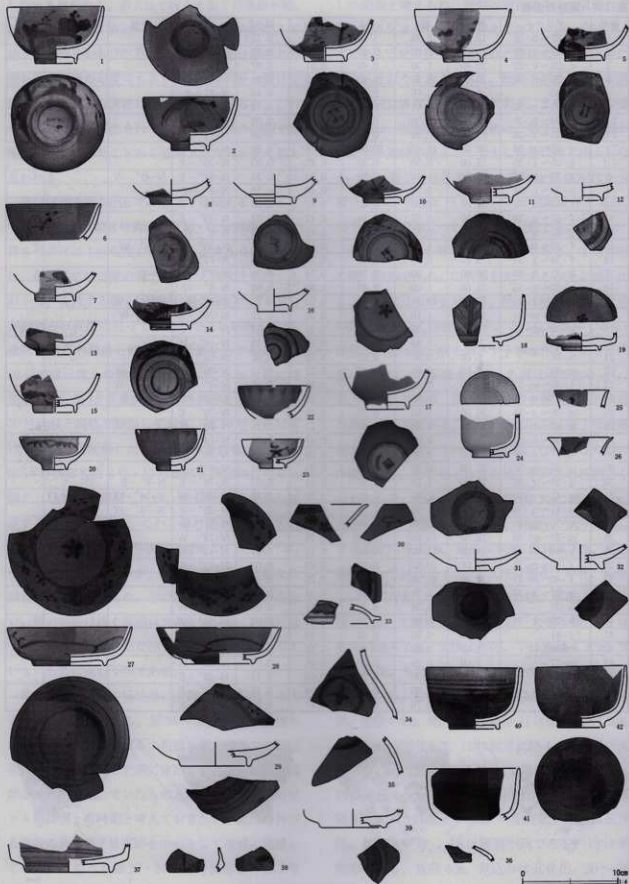
第208図は第6号溝跡出土遺物である。1は常滑の壺口縁部である。口唇部を欠失する上に狭み出し、断面は三角形を呈する。胎土は砂粒を含み白色の発泡が多い。13世紀前半。2は在地産鉢である。口縁部内面は粘土痕を残さず丁寧な作りである。内面は使用により平滑である。色調は淡褐色を呈し、胎土に砂粒を含み、礫が多く片岩を混入する。焼成は良好で硬質である。第209～215図は第7号溝跡出土遺物である。1～39は磁器。1～16は丸形の中碗である。その殆どは佐佐見・平戸系の所謂「くらわんか手」である。1は口径10.3cm、器高6cm、底径4.6cm。文様は梅花、草花。銘崩し「大明年製」。2は推定口径10cm、器高5.6cm、底径4.1cm。見込み輪割。3は底径4.5cm。文様は梅花、草花。銘崩し「大明年製」。4は文様は雪の輪、草花。5は底径4.2cm。文様は草花。銘崩し「大明年製」。6は推定口径4.2cm。文様は草花。7は底径4.3cm。文様は草花。8は底径4.5cm。文様は雪の輪?銘崩し「大明年製」。9は底径4.5cm。銘は不明。10は肥前系。底径4.4cm。銘「大明年製」。11は推定底径4.7cm。銘崩し「大明年製」。12は推定底径4.4cm。銘「大明年製」。13は推定底径4cm。文様は雪の輪、梅花。14は底径4.5cm。15は推定底径4.7cm。16は推定底径3.6cm。17は底径4.6cm。外面青磁。見込み五弁花。銘崩し「寿」。18は腰張形碗である。19は半筒形である。底径4cm。見込みは五弁花。20～26は小坏である。20～23は丸形。20は口径7.5cm、

第21表 溝跡計測表

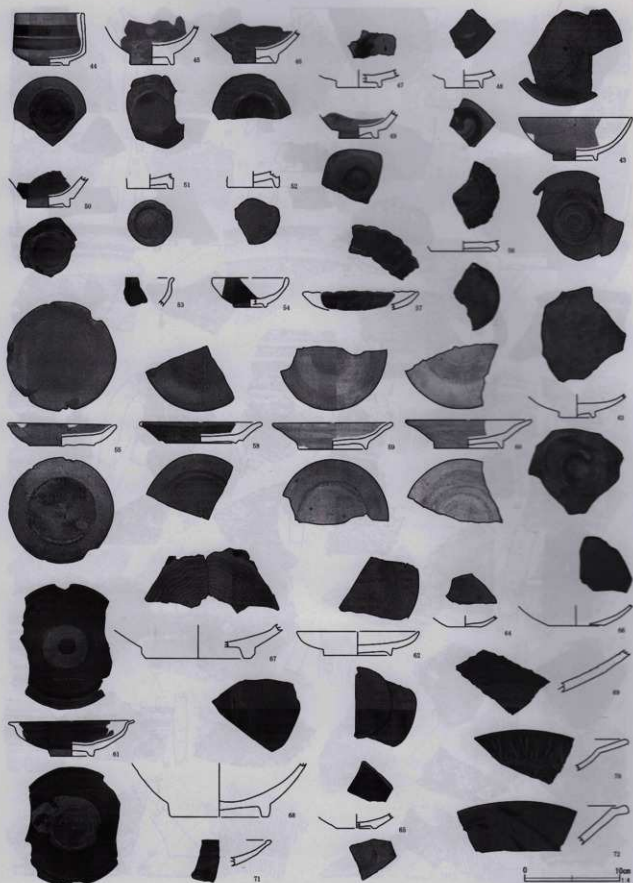
番号	グリッド	長さ1	幅1	幅2	深さ1	深さ2	方位	方位	方位	備考
1	a-27~b-28	12.60	2.30	1.50	0.79	0.72	N-90°-E			
2	a-27~c-29	44.00	2.10	0.80	0.48	0.23	N-7°-E	N-87°-W	N-61°-W	
3	c-29~c-32	32.40	1.30	0.40	0.51	0.07	N-0°-E			
4	c-29~c-30	10.40	0.60	0.40	0.19	0.06	N-0°-E			
5	d-30	8.00	3.15	2.00	0.56	0.46	N-2°-E			
6	d-33~e-30	25.50	0.66	0.30	0.28	0.11	N-2°-E			
7a	a-34~h-35	72.00	(0.50)	0.20	0.83	0.04	N-80°-E			
7b	a-35~r-38	17.00	2.80	0.30	0.93	0.08	N-71°-E			
7c	a-35~c-34	28.00	(1.40)	(0.50)	0.68	0.32	N-79°-E			
7d	g-35~i-35	19.00	0.50	0.20	0.20	0.03	N-76°-E			
8	a-35~h-34	88.00	1.40	0.70	0.93	0.33	N-81°-E	N-46°-W		
9	c-33~c-34	15.00	0.74	0.44	0.44	0.18	N-8°-W			
10	f-34~h-32	34.00	2.10	0.40	0.42	0.03	N-78°-E	N-9°-W		
11	f-33~g-34	11.00	0.65	0.34	0.12	0.03	N-70°-E			
12	g-32~g-34	27.00	0.65	0.40	0.41	0.04	N-6°-W			
13	f-33~h-33	30.00	1.70	0.60	0.59	0.15	N-80°-E	N-8°-W		
14	f-34~g-34	9.20	0.76	0.40	0.24	0.06	N-77°-E			
15	h-32~h-34	20.00	1.90	0.70	0.74	0.26	N-7°-W			
16	h-32~h-35	28.00	1.60	0.40	0.80	0.03	N-6°-W			
17	h-35~i-33	30.00	(3.20)	1.20	0.93	0.22	N-6°-E	N-84°-W		
18	i-36~m-36	14.50	1.10	0.60	0.36	0.22	N-76°-E	N-9°-W		
19	k-36~m-36	20.00	1.20	0.30	0.41	0.17	N-64°-E			
20	m-36	5.00	0.40	0.30	0.15	0.10	N-14°-W			
21	m-36	5.00	0.30	0.20	0.22	0.02	N-15°-W			
22	m-36	7.00	0.60	0.40	0.21	0.13	N-20°-W	N-64°-W		
23	i-36~m-37	12.00	0.80	0.60	0.38	0.26	N-0°-E	N-64°-W		
24	m-37~o-38	30.00	(0.90)	0.20	0.28	0.03	N-69°-E			
25	m-36~p-38	36.00	0.60	0.20	0.28	0.06	N-70°-E			
26	h-37~m-37	10.00	0.60	0.36	0.27	0.21	N-70°-E			
27	h-36~h-37	6.00	0.80	0.30	0.51	0.38	N-14°-W			
28	m-37~o-38	13.00	0.40	0.12	0.09	0.05	N-70°-E			
29	m-37~o-38	22.00	0.60	0.30	0.25	0.04	N-69°-E			
30	q-39~r-39	12.00	1.10	0.20	0.31	0.03	N-78°-E	N-6°-E		
31	q-41~r-40	24.00	2.95	1.40	0.29	0.17	N-86°-W	N-14°-W		
32	o-41~q-38	41.00	1.55	1.10	0.24	0.07	N-28°-E	N-78°-W		
33	m-39~m-40	9.00	0.36	0.24	0.07	0.02	N-11°-W			
34	m-37~m-39	13.00	(0.60)	(0.20)	0.15	0.10	N-13°-W			
35	l-40~m-38	24.00	(1.00)	(0.80)	0.13	0.01	N-13°-W			
36	l-40~m-38	18.00	(0.60)	0.20	0.19	0.03	N-13°-W			
37	l-40~m-37	31.40	(0.60)	(0.34)	0.25	0.01	N-13°-W			
38	k-37~k-39	14.60	0.76	0.54	0.34	0.13	N-6°-W			
39	o-37	2.00	0.36	0.20	0.11	0.07	N-23°-W			
40	h-35~i-35	14.00	0.30	0.20	0.05	0.04	N-86°-W			
41	i-41	2.00	0.50	0.40	0.16	0.07	N-9°-W			
42	m-36	2.00	0.50	0.46	0.25	0.17	N-21°-W			
43	m-37	1.00	0.26	0.20	0.08	0.07	N-56°-W			
44	m-37	2.00	0.30	0.26	0.19	0.13	N-20°-E			
45	q-41~s-42	21.00	1.00	0.60	0.34	0.12	N-41°-E			
46	r-41	4.00	0.70	0.30	0.11	0.03	N-79°-E			



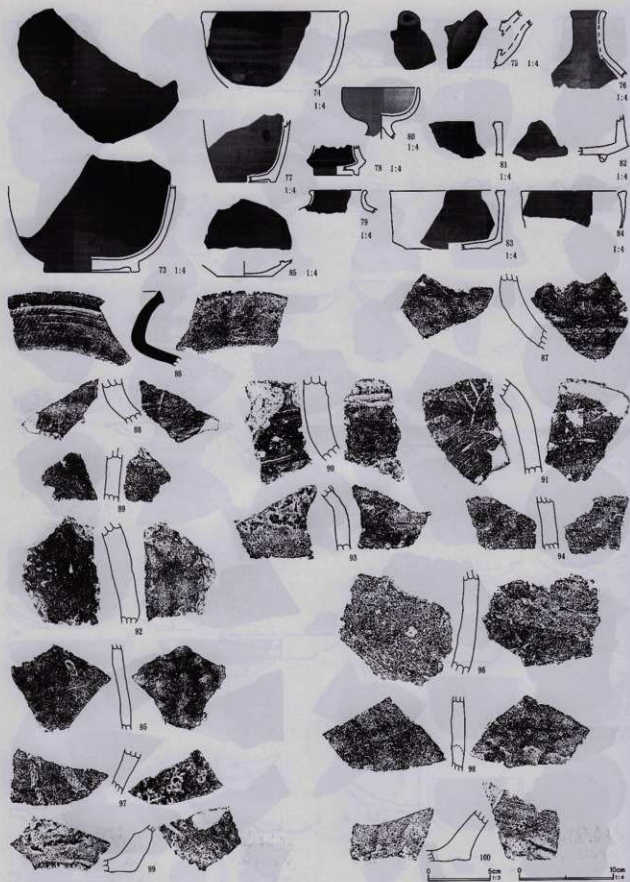
第208図 第6号溝跡出土遺物



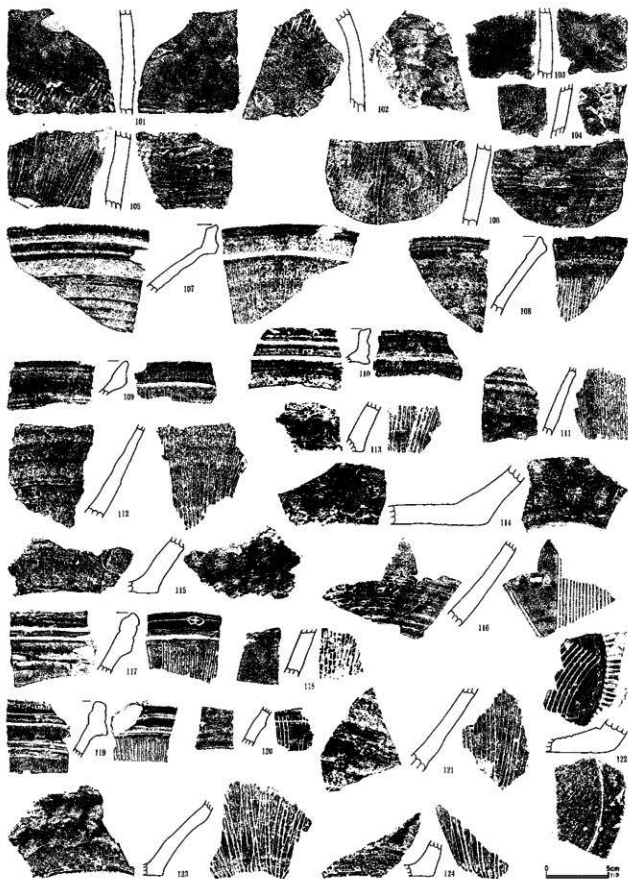
第209图 第7号溝跡出土遺物(1)



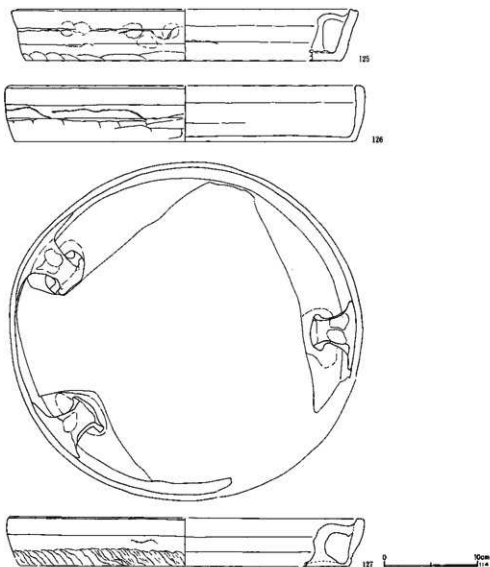
第210図 第7号溝跡出土遺物(2)



第211图 第7号遗址出土遗物(3)



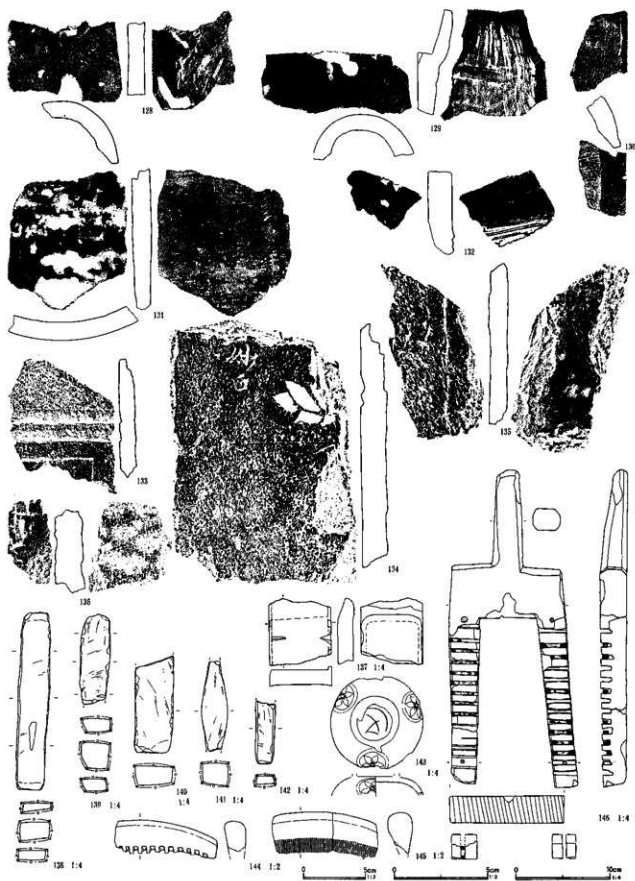
第212图 第7号清跡出土遺物(4)



第213図 第7号溝跡出土遺物(5)

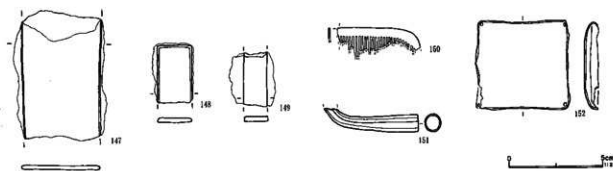
器高3.5cm、底径2.1cm。文様は笹文。21は推定口径7.3cm、器高3.5cm、底径2.1cm。文様は雨降文。22は推定口径7.6cm。文様は雨降文。23は瀬戸・美濃系か。推定口径6.6cm、器高3cm、推定底径2.9cm。24は腰張形である。瀬戸・美濃系。底径3.9cm。見込み「寿」印刻。25・26は端反形である。25は推定口径5.8cm、26は推定口径6.9cm。27～33は皿である。27・28は丸形の皿である。内面草花文、外面草花繋ぎ。見込みは蒔繪印判の五弁花。銘は不明。27は口径13.2cm、器高4.1cm、底径7.6cm。28は推定口径13.2cm、器高3.9cm、推定底径7.4cm。29は中皿と思われる。推定底径7.3cm。30は端反形

である。内面植物文?外面草花繋ぎ。肥前系。31は底径3.8cm。内面輪刺ぎで砂が付着する。高台は小さい。肥前系。32は推定底径5cm。内面輪刺ぎ。高台に砂が付着する。33は壺の蓋である。肥前系。34～36は瓶。36は色絵で扁平形の髪油壺と思われる。38は灰吹きか?39は青磁香炉である。高台内鉄軸、砂が付着する。40～84は施釉陶器。40・41は掛け分け碗である。40は口径10.2cm、器高6.4cm、底径5.4cm。41は推定口径9.8cm。42・43は御室碗である。42は腰張形の中碗。省略した山水文。口径9.8cm、器高6.5cm、底径5cm。43は浅半球形中碗。見込み山水樓閣門。刻印あり。口径12cm、器高4.5cm。



第214図 第7号溝跡出土遺物(6)





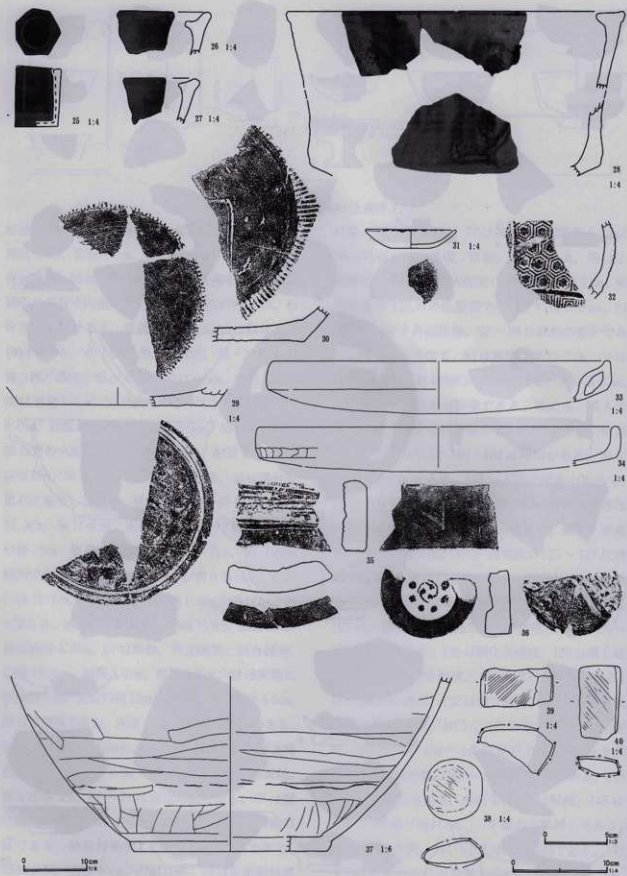
第215図 第7号溝跡出土遺物(7)

底径4.7cm, 44は半筒形で高台露胎。推定器高7.2cm, 器高5.5cm, 底径4.2cm, 45・46は丸形で外面瑠璃釉。高台露胎。45は底径4.6cm, 46は底径4.5cm, 47は透明な灰釉で内面具須と鉄釉。推定底径4.8cm, 48は唐津系碗である。底径4cm, 49～53は鉄釉の天目碗である。49・50は胎土灰黄色。51・52は胎土黄白色。底径は49が4.2cm, 50は4.5cm, 51は4.8cm, 52は推定5.4cm, 54は鉄釉の小杯である。推定口径8.2cm, 器高3.1cm, 推定底径3.5cm, 55～63は皿。55は志野丸皿である。口径11.5cm, 器高2.3cm, 底径6.9cm, 56・57は灰志野菊皿である。56は高台を砥石に転用している。推定底径7cm, 57は推定口径12.3cm, 58は全面に灰釉。円錐ピン?痕跡。推定口径13cm, 器高2.5cm, 推定底径7.2cm, 59は内面輪剥で全面灰釉。高台破損するか割り高台か。推定口径12.7cm, 器高2.8cm, 底径7.2cm, 60は釉が剥け落ちる。体部下半露胎。推定口径13.4cm, 器高3.7cm, 推定底径4.6cm, 61は鉄釉。内面輪剥, 高台露胎。口径13.3cm, 器高3.7cm, 底径4.6cm, 62は灰釉に鉄釉溜り絵。推定口径13cm, 器高3.7cm, 底径4.6cm, 63は京焼風である。底径4cm, 64～66は小皿である。64は京焼風。外面無釉。底径3.3cm, 65は内面黄褐色釉。推定底径4.2cm, 66は内面灰釉, 外面無釉。推定底径6cm, 67～71は唐津系皿である。67は推定底径11.2cm, 68は推定底径10.2cm, 72は灰釉の鉢である。鉄絵緑釉流し。73・74は片口である。73は鉄釉。底径10cm, 内面目跡。74は灰釉緑釉流し。75は土瓶の口縁部である。黄褐色釉。76・77

は瓶。76は黄褐色釉。77は灰釉。推定底径6.2cm, 78は花瓶或いは乗燭。鉄釉。底径4.7cm, 79は小型壺である。鉄釉に灰釉流し。推定口径6.2cm, 80は台底挟り込みの仏飯器である。口径8.3cm, 81は火入れか?外面緑釉。82～84は鉄釉の香炉である。83・84は半菊文。83は推定口径12.2cm, 84は同10.3cm, 85は鉄釉灯明受皿である。底径5.9cm, 86は8世紀代の須恵器壺である。鳩山産。混入である。87～106は常滑産の甕である。90は口縁部で緑帯を欠失する。101・102は押印がある。107～124は擂鉢である。107～113は信楽の製品で、17世紀後半と思われる。114・115は常滑の甕底部だが擂鉢に転用している。116は鉄釉。瀬戸・美濃系。117～120・122は江戸近郊産。125～127は焙烙である。125は口径36.7cm, 器高5.5cm, 底径33.5cm, 126は口径38.1cm, 器高5.9cm, 底径36cm, 127は口径38cm, 器高5.1cm, 底径35cm, 128～130は丸瓦である。128は酸化炎焼成, 129は燻し焼成, 130は還元炎焼成。131・132は平瓦である。131は酸化炎焼成, 132は燻し焼成。133～136は板碑である。134は「妙口」。137は甕である。両面使用。凝灰岩か。138～142は砥石である。140は泥岩で他は凝灰岩製。143～146は木製品である。143は漆塗り蓋。外面黒, 内面朱。144は解櫛, 145は梳櫛。146は「鬼おろし」, 木製の大根卸しである。歯は竹製で欠失。147～152は金属製品である。147～149は延べ板状の鉄製品。147は現存長6.7cm, 幅4.2cm, 厚さ0.2cm, 両端を欠く。148は現存長3.0cm,



第216图 第8号溝跡出土遺物(1)

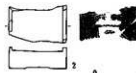


第217图 第8号洞窟出土遗物(2)

30 9



30 15



第218図 第9・15号溝跡出土遺物

幅1.8cm、厚さ0.2cm、一方の端を欠く。149は現存長2.9cm、幅1.3cm、厚さ0.25cm、両端を欠く。いずれも用途は不明。150は銅製の横櫛である。現存長4.5cm、厚さ0.1cm程である。151は煙管の雁首である。火皿を欠く。現存長5.0cm、端部径0.9cm、厚さ0.1cmの銅板を丸め、図示した側で接いでいる。152は銅製の方形金具である。一辺4.7cmで、四隅に径0.1cmの孔があけられる。厚さ0.1cm弱の銅板を、内側に0.6cmほどの隙間を持つように打ち出し造られる。鉋頭などを隠すための化粧金具の可能性もある。第216・217図は第8号溝跡出土遺物である。1～10は磁器。1は丸形の中碗である。見込み五弁花。肥前系。推定口径10.4cm、器高5.9cm、推定底径4.9cm。2は端反形である。推定口径9.6cm、器高4.9cm、推定底径3.8cm。3は底径3.4cm。4は半筒形である。見込みは茺藟印判の五弁花。底径3.5cm。5は色絵。底径2.9cm。6は端反形の小板である。推定口径7.9cm。7は端反形の小板である。推定口径6.8。8は銀杏文?外面草花繋ぎ。推定底径8.8。9は蓋である。摘み径3.5cm、器高2.5cm、口径9.5cm。10は仏飯具である。笹文。推定口径6.4cm、器高5.1cm、底径3.9cm。11～24は陶器である。11は端反形小碗である。口径8.5cm、器高4.5cm、底径2.8cm。12は灰釉鉢?内面目跡。口径15.2cm、器高7.5cm、底径6.5cm。瀬戸・美濃系。13は蓋である。白泥イッチン。摘み径1.2cm、口径

径7.2cm、器高2.4cm。14は土瓶である。径15cm。15～20は片口鉢である。15は黄褐色釉。推定口径18.3cm。16は透明釉。推定口径22.2cm。17は灰釉。目跡7箇所。口径19.2cm、器高11.3cm、底径9cm。18は鉄釉。口縁部下注口。底面に墨書がある。推定口径20.1cm、器高10.4cm、推定底径9.2cm。19は灰釉。底径11.6cm。20は鉄釉。内面目跡。推定底径11.3cm。21は甕。鉄釉。推定底径13.3cm。22は播鉢である。鉄釉。推定口径16.4cm、器高6cm、底径7.2cm。23は鉢か?底面を含む全面錆跡。24は灯明受皿である。推定口径11.2cm、器高2.8cm、底径4.3cm。25は灯心入れである。緑釉。底部穿孔され植木鉢転用か。口径4.7cm、器高6.4cm、底径4.5cm。26～28は水鉢である。鉄釉緑釉流し。28は推定口径35.9cm。29・30は播鉢である。江戸近郊産。31は土器灯明皿である。内外面赤色。剥離して塗彩か釉掛か不明。推定口径9.6cm、器高1.9cm、推定底径4.2cm。32は火鉢である。33・34は焙烙である。33は推定口径36.2cm。34は同38.5cm。35・36は椀瓦である。37は瓦質甕。推定底径15.4cm。38～40は砥石である。第218図1は第9号溝跡から出土した焙烙である。推定口径36.8cm、器高4.4cm、推定底径35.5cm。2は第15号溝跡から出土した硯である。裏面に文字が刻まれる。「吉」か。石材は凝灰岩?

土壌は59基検出されたが整理作業の結果58基となった。形態上から3種類に分類できる。

1. は、第9号土壌に見られるような、長方形を呈するものである。戸宮前館跡やC区で多数検出さ

れたものと同一であり、長さは1m未満のものから3mまで検出されている。土壌の約半数が該当する。分布は第7号溝跡より北側のやや高い場所にあり、南側の低地部には殆ど見られない。特に東側のより

高い部分に多く、掘立柱建物跡の付近に集中しているように見受けられる。

2. は、第1号土壌に見られるように、円形を呈するものである。大きさに差があり、直径2mを越える大型のものと、直径1.2m前後の小型がある。大型は第8・15・20号土壌の3基で、他は全て小型である。分布は調査区内に散在する傾向にあるが、中央部の低い場所には見られない。特徴的なのは2基が一組になっているように見えてならない。例えば大型では第8号・15号、小型のものでは第1・2号、第5・6号、第12・13(14)号、第50・51号、第42・43号などである。土壌の性格は俄かに判断できないが、このような分布上の特徴は指摘できる。

3. は、上記のいずれにも属さないもので、第39号土壌のように不整形を呈するものと、調査区外に掛り判断できないものである。数は少ない。

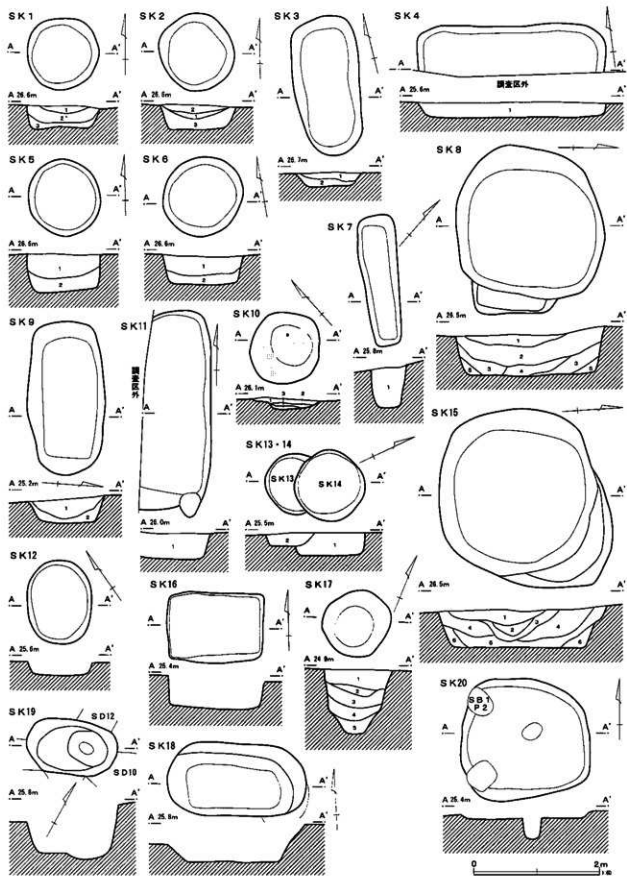
土壌の中で性格が推定できる例は1例だけである。

第22表 土壌計測表

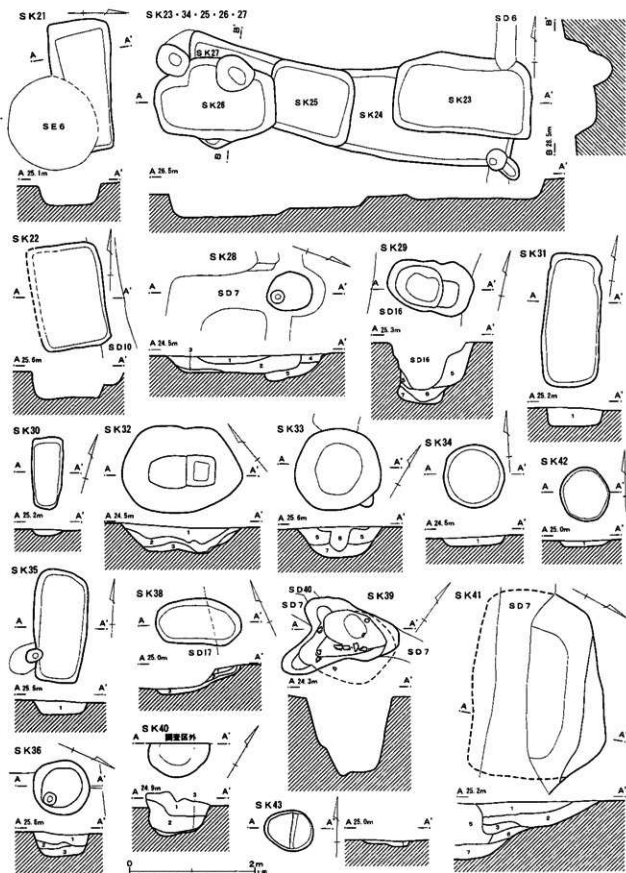
番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位	番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位
1	b-29	1.15	-	0.36	-	31	h-34	2.10	0.90	0.30	N-5°-W
2	b-29	1.20	-	0.40	-	32	i-35	1.90	1.30	0.45	N-53°-W
3	d-30	2.20	1.00	0.20	N-6°-E	33	i-33	1.30	-	0.45	-
4	b-31	2.70	(0.80)	0.20	N-83°-W	34	h-35	1.00	-	0.15	-
5	b-31	1.20	1.12	0.60	N-12°-W	35	i-34	1.75	0.80	0.22	N-0°-E
6	b-31	1.30	1.20	0.46	N-77°-E	36	i-33	0.88	-	0.40	-
7	b-33	2.06	0.60	0.65	N-51°-W	37	欠番				
8	c-31	2.60	2.40	0.70	N-52°-E	38	i-34	1.35	0.70	0.45	N-69°-W
9	b-34	2.40	1.20	0.40	N-83°-E	39	h-35	1.90	0.70	1.24	N-55°-E
10	h-32	1.20	1.10	0.16	N-90°-E	40	n-36	0.96	(0.50)	0.44	-
11	h-32	(3.00)	(1.00)	(0.40)	(N-0°-E)	41	o・p-37・38	(2.80)	(1.20)	(0.40)	-
12	g-33	1.30	1.00	0.20	N-34°-E	42	p-40・41	0.85	0.75	0.10	N-90°-E
13	f・g-33	0.90	-	0.20	-	43	p-41	0.86	0.60	0.10	N-75°-W
14	f・g-33	1.10	-	0.36	-	44	n-41	2.20	(0.70)	0.10	N-78°-E
15	c-31・32	2.60	2.50	0.65	N-90°-E	45	n-41	(2.25)	(0.50)	(0.15)	-
16	g-34	1.50	1.10	0.50	N-90°-E	46	i-33	(0.45)	(0.55)	(0.25)	-
17	g-35	1.10	1.00	1.00	N-0°-E	47	i-33	(0.60)	(0.40)	(0.22)	-
18	g-32	2.20	1.10	0.56	N-89°-W	48	i-33	(0.90)	0.70	0.24	(N-8°-W)
19	g・h-32	1.40	0.80	0.85	N-72°-E	49	n-37	1.40	0.40	0.20	N-72°-E
20	d-33	2.00	1.80	0.10	N-86°-W	50	o-37	0.80	-	0.10	-
21	f-34	1.40	(1.40)	0.34	-	51	o-37	0.80	0.55	0.25	N-35°-E
22	f-33	1.65	(1.15)	0.42	N-13°-W	52	g-35	(0.90)	1.30	0.16	(N-78°-E)
23	d・e-31	2.15	1.20	0.31	N-85°-W	53	t-43	(1.30)	(1.00)	(0.35)	(N-14°-W)
24	d・e-31	(2.50)	(1.30)	(0.26)	(N-85°-W)	54	t-42	1.25	1.15	0.16	N-11°-W
25	d・e-31	(1.30)	1.10	(0.44)	N-77°-W	55	t-42	(1.20)	0.90	0.60	(N-6°-W)
26	d・e-31	1.90	1.25	0.55	N-90°-E	56	s・t-42	1.06	0.90	0.20	N-85°-E
27	d・e-31	(1.40)	(0.30)	(0.35)	(N-74°-W)	57	t-42・43	(0.90)	(0.20)	(0.35)	-
28	i-35・36	(0.90)	(0.80)	(0.35)	(N-22°-W)	58	q-41	1.30	1.05	0.20	N-74°-E
29	h-34	1.35	0.80	0.90	N-90°-E	59	p-41	2.20	1.80	0.32	N-2°-W
30	h-34	1.10	0.45	0.08	N-17°-W						

第10号土壌で、直径1.2mのほぼ円形で、深さは16cmという浅いものであったが、焼土が見られ銭貨が密着した状態で6枚出土した。墓塚と判断して間違いなからう。

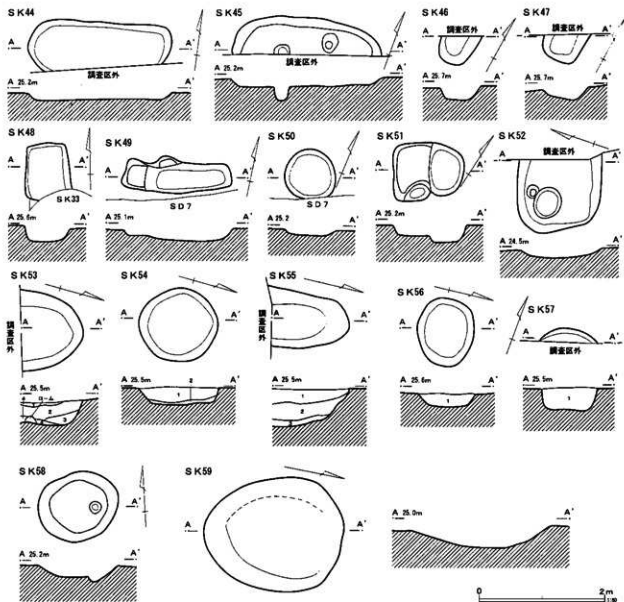
各遺構の記述は省略し、参考値は計測表を参照されたい。遺物を出土した遺構は少なく図示できたのは僅かである。第222図1～6は第10号土壌出土銭貨である。1は祥符元寶である。文字は拓本以上に潰れて見える。北宋の1009年初鑄である。2は皇宋通寶である。薄く裏面に反っている。北宋の1038年初鑄である。3は嘉祐通寶である。文字の潰れ方が激しい。北宋の1056年初鑄。4は治平通寶である。北宋の1064年初鑄。5は治平元寶である。北宋の1064年初鑄。6は宣和通寶である。薄く表側に反っている。北宋の1119年初鑄。7・8は第11号土壌出土である。7は古瀬戸灰釉瓶である。胎土は灰白色を呈する。8は器種不明。鉢の体下部



第219図 土坑 (1)



第220图 土坑 (2)



第221図 土壘 (3)

か。白色の胎土で砂粒を多く含む。9は第13号土壘出土の常滑産片口鉢である。10～13は第39号土壘出土の常滑製品である。10は鉢と思われる。内面体部下まで釉が着くが重ね焼きと思われる、円周状に釉が切れる。胎土は砂粒と礫を多量に含み、橙褐色を呈する。推定底径15.5cm。11は壘で矢車文の

押印が押される。12は薄手で線状の格子目が押印される。13は槽鉢である。14・15は第41号土壘出土である。14は鉄絵大鉢である。内面目跡。外面篋削りで削り出し高台である。推定底径15.8cm。15は砥石である。

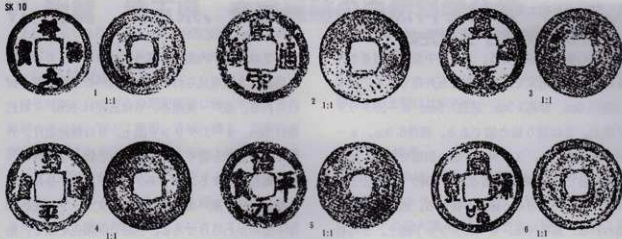


土壌土層註記

- 第1号土層  
1 赤色土 横土ブロック多量混入  
2 暗褐色土 ローム粒子・横土粒子わずかに含む  
3 暗褐色土 ローム粒子・フットローム含む。
- 第2号土層  
1 赤色土 横土ブロック多量混入。  
2 暗褐色土 ローム粒子少量含む。  
3 暗褐色土 ローム粒子・横土粒子わずかに含む。
- 第3号土層  
1 暗褐色土 ローム粒子やや多く含む。  
2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 第4号土層  
1 暗褐色土 ローム粒子微量含む。
- 第5号土層  
1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。  
2 黒褐色土 ロームブロック少量含む。
- 第6号土層  
1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。  
2 黒褐色土 ローム粒子やや多く、ロームブロック少量含む。
- 第7号土層  
1 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
- 第8号土層  
1 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロックやや多く含む。  
2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックやや多く含む。  
3 暗褐色土 ローム粒子微量、ロームブロック少量含む。  
4 黒褐色土 ロームブロック多量含む。  
5 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 第9号土層  
1 暗褐色土 ローム粒子やや多く、ロームブロック微量含む。  
2 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。
- 第10号土層  
1 暗褐色土 ローム粒子少量、ロームブロック多量含む。  
2 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。  
3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 第11号土層  
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 第13・14号土層  
1 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロックやや多く含む。  
2 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。
- 第15号土層  
1 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロックやや多く含む。  
2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。  
3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。  
4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量、炭化物微量含む。  
5 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。  
6 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 第17号土層  
1 黒褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック・炭化物、白色粒子少量含む。  
2 黒褐色土 ローム粒子少量含む。  
3 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量、白色粒子・黒色土ブロック少量含む。  
4 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック・暗褐色土ブロック少量含む。  
5 黒色土 ローム粒子・ロームブロック微量含む。
- 第28号土層  
4 黒褐色土 ローム粒子含む。  
5 黒褐色土 ローム粒子多量含む。
- 第29号土層  
5 黒褐色土 大粒ローム粒子少量含む。  
6 暗褐色土 大粒ローム粒子少量含む。  
7 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 第30号土層  
1 黒褐色土 大粒ロームブロック多量含む。

- 第31号土層  
1 黒褐色土 ロームブロック多量含む。
- 第32号土層  
1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。  
2 黒褐色土 ローム粒子多量含む。  
3 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
- 1 黒褐色土 ロームブロック含む。  
2 暗褐色土 大粒ロームブロック・黒褐色土少量含む。  
3 黒褐色土 大粒ロームブロック・黒褐色土含む。
- 第34号土層  
1 暗褐色土
- 第35号土層  
1 黒褐色土 ロームブロック多量含む。
- 第36号土層  
1 黒褐色土 ローム粒子少量含む。  
2 黒褐色土 ローム粒子・大粒ロームブロック多量含む。  
3 黒褐色土 大粒ロームブロック少量含む。
- 第37号土層  
1 暗褐色土 ロームブロック・黒褐色土多量含む。  
2 暗褐色土 大粒ロームブロック多量含む。  
3 暗褐色土 ローム粒子少量含む。  
4 暗褐色土 ロームブロック含む。  
5 黒褐色土 ロームブロック含む。  
6 黒褐色土 ローム粒子ほとんど含まない。
- 第38号土層  
1 暗褐色土 ローム粒子ほとんど含まない。  
2 暗褐色土 ローム粒子炭化物含む。  
3 暗褐色土 白色粒子多量含む。
- 第39号土層  
1 黒褐色土 ローム粒子少量含む。  
2 黒褐色土 ローム粒子・白色土粒子少量含む。  
3 黒褐色土 赤色粒子少量含む。  
4 黒褐色土 赤色粒子少量含む。
- 第40号土層  
1 黒褐色土 ローム粒子微量含む。  
2 黒褐色土 ローム粒子ほとんど含まない。  
3 黒褐色土 ローム粒子多量含む。
- 第41号土層  
1 暗褐色土 ローム粒子含む。炭化粒子少量含む。  
2 暗褐色土 ローム粒子多量含む。  
3 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 第42号土層  
1 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 第43号土層  
1 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 第53号土層  
1 黒褐色土 ローム粒子微量含む。  
2 暗褐色土 ローム粒子微量含む。  
3 暗褐色土 ローム粒子微量含む。 第2層より明るい。  
4 黄灰色土 ローム土
- 第54号土層  
1 黒褐色土 黄灰色ローム粒子少量含む。  
2 黒褐色土 ローム粒子少量含む。 第1層より明るい。
- 第55号土層  
1 黒褐色土 ローム粒子微量含む。  
2 暗茶褐色土 第1層に比べやや暗い。  
3 暗茶褐色土 ローム粒子微量含む。
- 第56号土層  
1 黒褐色土 黄灰色ローム粒子少量含む。
- 第57号土層  
1 黒褐色土 ローム粒子微量含む。 黒色土含む。

SK 10



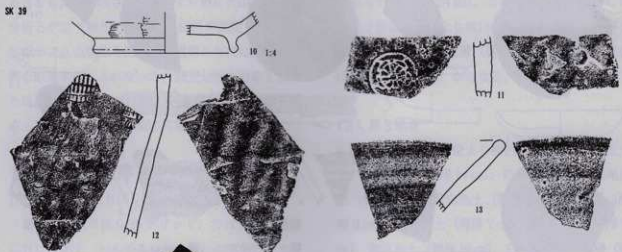
SE 11



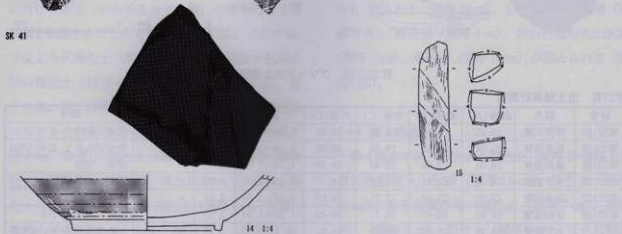
SK 13



SK 39



SK 41



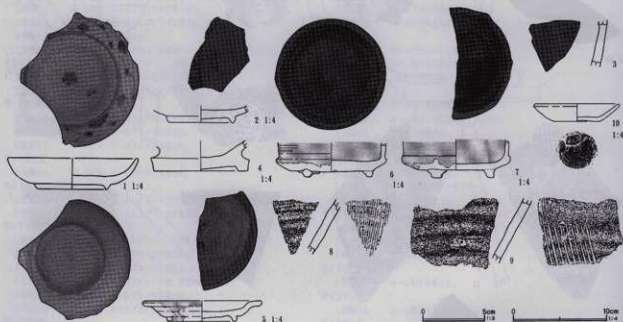
0 5cm 0 2cm 0 10cm  
1/10 1/1 1/10

第 222 图 土壤出土遺物

## f グリッド出土遺物

第223図はグリッド出土遺物である。1は波佐見・平戸系の染付磁器である。丸型の中皿で輪刺ぎされる。内面は草花文で、見込みは五弁花である。推定口径13.9cm、器高3.3cm、底径7.5cm。a-33グリッド出土。2は摺り絵の皿である。底径6.9cm。a-33グリッド出土。3は灰釉で瓶の胴部である。胎土は黄白色で比較的緻密である。d-34グリッド出土。4は外面に光沢のある緑釉が掛かる。近世の花瓶と思われる。底径10cm。a-33グリッド出土。5は折縁皿である。口縁部は灰釉である。内面底部は蘭竹文と思われる。重ね焼きの高台跡が残る。外面は無釉で高台は削り出し高台である。推定口径12.7cm、

器高2.2cm、推定底径7.4cm。a-33グリッド出土。6・7は胎軸が内面と体部外面に掛かる。6は内面に目跡が3箇所見られる脚は3箇所に粘土が貼り付けられる。瀬戸・美濃系。6は底径11.8cm。7は底径11.5cm。a-33グリッド出土。8は擂鉢破片。外面に降灰し軸が着く。胎土は砂粒と礫を多く含み、淡灰褐色を呈する。m-36グリッド出土。9は鉄釉の擂鉢破片。瀬戸美濃系。a-33グリッド出土。10は小型のかわらけである。色調は淡褐色を呈し、胎土は砂粒と赤色粒を含む。焼成は普通である。口径9cm、器高1.8cm、底径4.8cm。



第223図 グリッド出土遺物

第23表 出土銭貨計測表

番号	銭名	銭径(A)	銭径(B)	内径(C)	内径(D)	銭厚	量目	出土遺構	備考
第221図	祥符元寶	23.35	23.25	18.96	18.95	1.39~1.42	3.49	SK10	北宋 1009
第221図	皇宋通寶	25.04	24.86	19.58	20.06	0.95~1.00	2.95	〃	やや重みあり 北宋 1038
第221図	嘉祐通寶	24.04	23.88	19.44	19.16	1.18~1.39	3.07	〃	北宋 1056
第221図	治平通寶	24.15	23.91	18.95	18.77	1.13~1.31	3.53	〃	北宋 1064
第221図	治平元寶	23.80	23.68	17.31	18.63	1.15~1.35	3.53	〃	北宋 1064
第221図	宣和通寶	24.81	24.97	20.71	20.49	1.26~1.39	3.52	〃	篆書 北宋 1119
	太平通寶	25.32	25.26	19.89	19.62	1.18	1.93	SK1	欠損 無背 北宋 976 未掲載
	寛永通寶	22.53	22.44	19.65	18.68	1.04~1.12	1.45	SD8	欠損 未掲載
	寛永通寶	-	-	-	-	1.10	-	SD8	欠損 未掲載
	寛永通寶	22.84	-	18.67	-	0.75~0.92	-	表採	欠損 未掲載

# VI 附篇 埼玉県、在家遺跡の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

## 1. はじめに

埼玉県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、富士、箱根、赤城、榛名、浅間など関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっていく。

そこで、年代の不明な礫群が検出された在家遺跡においても、地質調査を行って土層の層位を記載するとともに、採取された試料を対象に火山ガラス比分析とテフラ検出分析さらに屈折率測定を行って、示標テフラの層位を把握し、遺構の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、第1地点（B区G-26グリッド）、第2地点、第3地点、第4地点の4地点である。

## 2. 土層の層位

### (1) 第1地点（B区G-26グリッド）

第1地点（B区G-26グリッド）では、在家遺跡における赤土（いわゆるローム層）の標準的な土層断面を観察することができた（第224図）。ここでは、下位より灰褐色土（層厚10cm）、若干硬質で色調の暗い褐色土（層厚43cm）、褐色土（層厚13cm）、若干色調の暗い褐色土（層厚30cm, IX層）、赤褐色スコリアを含む褐色土（層厚28cm, スコリアの最大径4mm, VIII層）、褐色土（層厚13cm, VII層）、暗褐色土（層厚30cm, VI層）、黄色粗粒火山灰混じり褐色土（層厚12cm, V層）、褐色土（層厚8cm, IV層）、褐色土（層厚24cm, III層）、暗褐色土（層厚11cm, II層）、黒褐色土（層厚12cm, I層）、暗灰褐色表土（層厚14cm）が認められる。これらのうち、III

層以上の土層は比較的軟らかい。

### (2) 第2地点

第2地点では、下位より褐色土（層厚5cm以上）、褐色粗粒スコリア混じり黄灰色砂層（層厚10cm, スコリアの最大径4mm）、褐色土（層厚12cm）、黄白色粗粒火山灰混じり褐色土（層厚13cm）、成層したテフラ層（層厚8.8cm）、赤褐色スコリア混じり褐色土（層厚13cm）、若干灰色がかった褐色土（層厚8cm）、黒褐色土（層厚4cm）、黒色土（層厚6cm）、黒褐色土（層厚15cm）、暗褐色土（層厚11cm）が認められる（第224図）。これらのうち、成層したテフラ層は、下位より黄白色粗粒火山灰層（層厚5cm）、桃色細粒火山灰層（層厚0.8cm）、黄色細粒火山灰層（層厚3cm）からなる。

### (3) 第3地点

第3地点では、下位より褐色土（層厚8cm以上）、礫群、褐色土（層厚14cm）、鉄分を多く含む橙褐色土（層厚3cm）、黄白色土（層厚2cm）、褐色土（層厚8cm）、灰褐色土（層厚7cm）、黄白色土（層厚3cm）、黄灰色土（層厚10cm）、白色粗粒火山灰層（層厚2cm）、褐色土（層厚4cm）、黄白色粗粒火山灰層（層厚3cm）、褐色土（層厚10cm）が認められる（第224図）。

### (4) 第4地点

第4地点では、下位より褐色土（層厚10cm以上）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚15cm）、灰色土（層厚13cm）、若干色調の暗い褐色土（層厚7cm）、黒褐色土（層厚6cm）、黒色土（層厚9cm）、灰色粗粒火山灰に富む黒褐色土（層厚12cm）、黒褐色土（層厚18cm）、暗褐色土（層厚17cm）、褐色土ブロック混

じり暗褐色土(層厚18cm)、暗褐色土(層厚9cm)、色調がより暗い暗褐色土(層厚12cm)、黒褐色土(層厚16cm)、暗褐色表土(層厚25cm)が認められる(第224図)。これらのうち、褐色土ブロック混じり暗褐色土以上の土層は、若干軟らかい特徴をもつ。

### 3. 火山ガラス比分析

#### (1) 分析試料と分析方法

第1地点および第3地点において、基本的に厚さ5cmごとに採取された試料のうち、5cmおきの試料を中心とした34点を対象に火山ガラス比分析を行い、火山ガラス質示標テフラの降灰層準の把握を行った。分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析篩により、1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの形態別比率を求める(火山ガラス比分析)。

#### (2) 分析結果

第1地点および第3地点における火山ガラス比ダイアグラムを、第225図に示す。また、火山ガラス比分析の結果の内訳を第24表に示す。第1地点では、試料37に軽石型ガラス、試料35に分厚い中間型ガラス、試料33に平板状のいわゆるバブル型ガラスが少量ずつ含まれている。試料27から上位では連続的に火山ガラスが検出されるようになり、試料27から17にかけてのほとんどの試料で中間型ガラスが認められる。

バブル型ガラスは試料19以上の試料で認められ、とくに試料13付近に多くのガラス(1.6%)が含まれている。

試料5以上、ほかに中間型ガラスや軽石型ガラスも認められるようになる。

第3地点では、試料13を除くいずれの試料からも火山ガラスが検出された。試料15には、バブル型、

中間型、軽石型ガラスが少量ずつ含まれている。試料11から上位では、火山ガラスが連続的に検出されるようになり、試料6に中間型ガラス(2.0%)や軽石型ガラス(1.6%)の小規模な出現ピークが認められる。試料3では軽石型ガラス(2.4%)や中間型ガラス(1.6%)、試料1では軽石型ガラス(5.2%)や中間型ガラス(2.0%)が比較的多く含まれている。

### 4. テフラ検出分析

#### (1) 分析試料と分析方法

第4地点において、基本的に厚さ5cmごとに採取された試料のうち5cmおきを中心とした17点を対象に、テフラ検出分析を行い、示標テフラの降灰層準の把握を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

#### (2) 分析結果

第4地点におけるテフラ検出分析の結果を、第25表に示す。試料29から23にかけては、白色や無色透明の火山ガラスが認められる。とくに、試料27や25に比較的多く含まれている。試料21には、軽石型ガラスのほかにバブル型ガラスが認められる。試料25から9にかけては、無色透明の火山ガラスが比較的多く含まれている。これらのうち、試料19には灰白色軽石型ガラスも含まれている。また試料11では、纖維束状に発泡した火山ガラスが顕著である。試料5には、スポンジ状に発泡した灰白色軽石が少量含まれている。さらに、試料3以上の層位には、淡褐色の軽石や暗褐色あるいは暗灰色のスコリアが含まれている。とくに試料1には、淡褐色軽石(最大径1.2mm)が比較的多く含まれている。

## 5. 屈折率測定

### (1) 測定試料と測定方法

示標テフラとの同定精度を向上させるために、テフラ層および火山ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準があると考えられた12試料について、温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993)により屈折率の測定を行った。

### (2) 測定結果

屈折率測定の結果を第26表に示す。第1地点の試料19に含まれる重鉱物としては、斜方輝石、カンラン石、単斜輝石のほか、少量の角閃石が含まれている。これらのうち、斜方輝石( $\gamma$ )の屈折率は、1.700-1.710 (modal range: 1.700-1.705)である。試料13に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.499-1.501である。重鉱物としては、斜方輝石のほか、単斜輝石やカンラン石が含まれている。試料11に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.499-1.501である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほか、ごく少量のカンラン石や角閃石が認められる。これらのうち、斜方輝石( $\gamma$ )の屈折率は、1.702-1.708 (modal range: 1.702-1.708)である。

第3地点の試料15に含まれる重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほか、少量の角閃石やカンラン石が認められる。これらのうち、斜方輝石( $\gamma$ )の屈折率は、1.703-1.710 (modal range: 1.705-1.710)である。試料6に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.500前後である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石( $\gamma$ )の屈折率は、1.704-1.709である。試料3に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.500-1.505である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石( $\gamma$ )の屈折率は、1.707-1.711である。試料1に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.501-1.505である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石( $\gamma$ )の屈折率は、1.707-1.710である。

第4地点の試料20に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.501-1.505である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石( $\gamma$ )の屈折率は、1.707-1.711である。試料19に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.501-1.505である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石( $\gamma$ )の屈折率は、1.706-1.711である。試料15に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.504-1.512である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石( $\gamma$ )の屈折率は、1.706-1.708である。試料11に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.498-1.503である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石( $\gamma$ )の屈折率は、1.706-1.710である。試料1に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.523-1.533である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石( $\gamma$ )の屈折率は、1.706-1.710である。

## 6. 考察—示標テフラとの同定

第1地点の試料19に含まれるテフラについては、富士火山に由来すると思われるカンラン石のほかに、斜方輝石や単斜輝石さらにごく少量ながら角閃石が含まれている。斜方輝石の屈折率を考慮すると、この試料には八ヶ岳から噴出した八ヶ岳第4テフラ(Yt-Pm4, 中谷, 1970, Kawachi et al., 1967)が含まれている可能性が高い。試料13付近に降灰層準がある透明なバブル型ガラスで特徴づけられるテフラは、火山ガラスの特徴や屈折率などから、約2.4~2.5万年前<sup>1)</sup>に始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 1992, 松本ほか, 1987, 池田ほか, 1995)と考えられる。

試料11に含まれる火山ガラスは、その特徴からATに由来すると考えられる。しかし、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が多く含まれていること、また斜方輝石の屈折率さらには $\beta$ 石英が少量ながら含まれていることなどから、この試料には約1.9~2.4

万年前<sup>\*1</sup>に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群 (As-BP Group, 新井, 1962, 早田, 1996, 未公表資料) のうち最下部の室田軽石 (MP, 早田, 1990) に由来するテフラが含まれていると考えられる。

第3地点の試料15に含まれる斜方輝石の屈折率から、この試料にはAs-BP Groupの中・上部に由来するテフラ粒子が混在している可能性がある。また、試料6付近に降灰層準があると考えられるテフラについては、火山ガラスの形態や斜方輝石の屈折率などから、約1.6万年前<sup>\*1</sup>に浅間火山から噴出したと考えられている浅間大窪沢第2軽石 (As-Ok2, 中沢ほか, 1984, 早田, 1996) と考えられる。試料3および試料1のテフラについては、火山ガラスの形態や屈折率、重鉱物組成さらに斜方輝石の屈折率などから、約1.3~1.4万年前<sup>\*1</sup>に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石 (As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992) とそれに連続して噴出したと考えられているテフラに同定される。以上のことから、第3地点で検出された礫群の層位については、As-BP Groupの少なくともAs-BP中部以上にあり、As-Ok2より下位にあると推定される。

なお、層相を合わせると、第2地点の成層したテフラ層は、より保存状態の良いAs-YPと考えられる。この地点では下部が粗粒火山灰、上部が成層した細粒火山灰からなり、As-YPとそれに引き続いて噴出したテフラと考えられる。したがって、第3地点の2層のテフラのうち、下位のもの、何らかの攪乱により上位から、移動したAs-YPのブロックの可能性も考えられる。この点については、より多くの試料について分析を行い、検討する必要がある。

第4地点の試料29のテフラは、火山ガラスの形態や屈折率、さらに斜方輝石や単斜輝石に富むことや斜方輝石の屈折率などから、As-YPとそれに連続して噴出したと考えられているテフラに同定される。試料19に含まれるテフラは、約1.1万年前<sup>\*1</sup>に浅間火山から噴出した浅間総社軽石 (As-Sj, 早田, 1990) に由来する可能性が考えられる。また、試料15に含まれるテフラについては、約8,200年前<sup>\*1</sup>に浅間

火山から噴出した浅間藤岡軽石 (As-Fo, 早田, 1991, 1995) に由来する可能性が高い。

試料11に含まれるテフラは、火山ガラスの形態や屈折率、斜方輝石の屈折率や角閃石が少量ながら含まれることから、約2,800~2,900年前<sup>\*1</sup>に天城カワゴ平テフラ (Kg, 町田ほか, 1984) に由来する可能性が考えられる。このテフラが検出された土層からは、発掘調査により縄文時代前期の土器が検出されている。したがって、層位的には矛盾しているように思える。ここでのテフラの同定精度はさほど高くはないが、遺物の層位に関するより詳細な検討も必要かも知れない。

試料5に含まれる灰白色軽石については、その特徴から4世紀中葉<sup>\*2</sup>に浅間火山から噴出した浅間C軽石 (As-C, 新井, 1979) に由来する可能性がある。試料1に含まれる淡褐色軽石は、その岩相や火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率などから、1108 (天仁元) 年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ (As-B, 新井, 1979) に由来すると考えられる。

## 7. まとめ

在家遺跡において、地質調査、火山ガラス比分析、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より八ヶ岳第4テフラ (Yt-Pm4)、始良Tn火山灰 (AT, 約2.4~2.5万年前<sup>\*1</sup>)、浅間板鼻褐色軽石群 (As-BP Group, 約1.9~2.4万年前<sup>\*1</sup>) の下部や中・上部、浅間大窪沢第2軽石 (As-Ok2, 約1.6万年前<sup>\*1</sup>)、浅間板鼻黄色軽石 (As-YP, 約1.3~1.4万年前<sup>\*1</sup>) とその一連のテフラ、浅間総社軽石 (As-Sj, 約1.1万年前<sup>\*1</sup>)、浅間藤岡軽石 (As-Fo, 約8,200年前<sup>\*1</sup>)、天城カワゴ平テフラ (Kg, 約2,800~2,900年前<sup>\*1</sup>)、浅間C軽石 (As-C, 4世紀中葉<sup>\*2</sup>)、浅間Bテフラ (As-B, 1108年)、さらに富士火山に由来する可能性が高いスコリアなど、多くの示標テフラを検出することができた。第3地点で検出された礫群の層位については、As-BP Groupの少なくとも中部以上にあり、As-Ok2より下位にあると考えられる。

\*1 放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代.

\*2 西暦 300 年前後とする見方もある (友廣, 1988 など).

参考文献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p. 1-79.
- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11, p. 254-269.
- 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no. 53, p. 41-52.
- 新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法. 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p. 138-148.
- 荒牧重雄 (1968) 浅間火山の地質. 地研専報, no. 45, 65p.
- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫 (1995) 南九州, 始良カルデラ起源の大隅降下軽石と 入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による  $^{14}\text{C}$  年代. 第四紀研究, 34, p. 377-379.
- Kawachi, S., Nakaya, S. and Muraki, K. (1967) YPa-IV pumice bed in northern Yatsugatake volcanic chain, central Japan—studies on Yatsugatake tephra, Part 1-. Bull. Geol. Surv. Japan, 29, p. 21-33.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義. 科学, 46, p. 339-347.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984) テフラと日本考古学—考古学研究に関係する テフラのカタログ—. 古文化財編集委員編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p. 865-928.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 (1987) 始良Tn火山灰 (AT) の  $^{14}\text{C}$  年代. 第四紀研究, 26, p. 79- 83.
- 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦 (1984) 浅間火山. 黒斑〜前掛期のテフラ層序. 日本第四紀学会講演要旨集, no. 14, p. 69-70.
- 中谷 進 (1970) ハヶ岳東麓のテフラ—特に八那池軽石流を覆うテフラ層中の軽石—. 軽石学雑誌, 3, p. 30-35.
- 早田 勉 (1990) 群馬県の自然と風土. 群馬県史通史編, 1, p. 37-129.
- 早田 勉 (1991) 浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, no. 53, p. 2-7.
- 早田 勉 (1995) テフラからさぐる浅間山の活動史. 御代田町町誌自然編, p. 22-43.
- 早田 勉 (1996) 関東地方〜東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第 I テフラより上位のテフラ について—. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p. 256-267.
- 友廣哲也 (1988) 古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」, p. 325-336.



第24表 在家遺跡における火山ガラス分析結果

地点	試料	bw	md	pm	その他	合計
第1地点	1	1	7	2	240	250
	3	1	8	5	236	250
	5	1	8	2	239	250
	7	5	4	5	236	250
	9	1	2	0	247	250
	11	1	0	0	249	250
	13	4	0	1	245	250
	15	1	0	0	249	250
	17	1	2	1	246	250
	19	1	1	0	248	250
	21	0	1	0	249	250
	23	0	1	0	249	250
	25	0	0	1	249	250
	27	0	1	0	249	250
	29	0	0	0	250	250
	31	0	0	0	250	250
	33	1	0	0	249	250
	35	0	1	0	249	250
	37	0	0	1	249	250
	39	0	0	0	250	250
41	0	0	0	250	250	
43	0	0	0	250	250	
45	0	0	0	250	250	
47	0	0	0	250	250	

第3地点	試料	bw	md	pm	その他	合計
1	1	5	14	230	250	
3	1	4	6	239	250	
5	0	2	2	246	250	
6	0	5	4	241	250	
7	0	1	0	249	250	
9	1	1	1	247	250	
10	0	1	1	248	250	
11	1	0	1	248	250	
13	0	0	0	250	250	
15	1	1	1	247	250	

数字は粒子数。bw:バブル型、md:中間型、pm:軽石型。

第25表 第4地点におけるテフラ分析結果

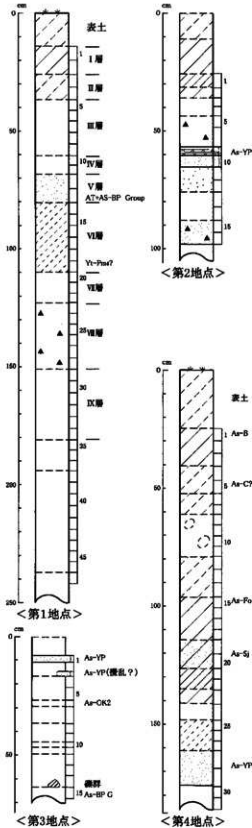
試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
	量	色調	最大径	量	色調	形態
1	++	淡褐>暗灰	1.2, 0.6	+	透明	pm
3	+	淡褐>暗褐>暗灰	1.2, 0.9	+	透明	pm
5	-	-	-	+	灰白	pm
7	-	-	-	+	透明	pm
9	-	-	-	++	透明	pm
11	-	-	-	++	透明	pm
13	-	-	-	++	透明	pm
15	-	-	-	++	透明	pm
17	-	-	-	+	透明	pm
19	-	-	-	++	透明>灰白	pm
21	-	-	-	++	透明	pm-bw
23	-	-	-	+	白>透明	pm
24	-	-	-	+	白>透明	pm
25	-	-	-	++	白>透明	pm
27	-	-	-	++	白>透明	pm
29	-	-	-	+	白>透明	pm
31	-	-	-	-	-	-

++++:とくに多い、+++ : 多い、++ : 中程度、+ : 少ない、- : 認められない。最大径の単位は、mm。

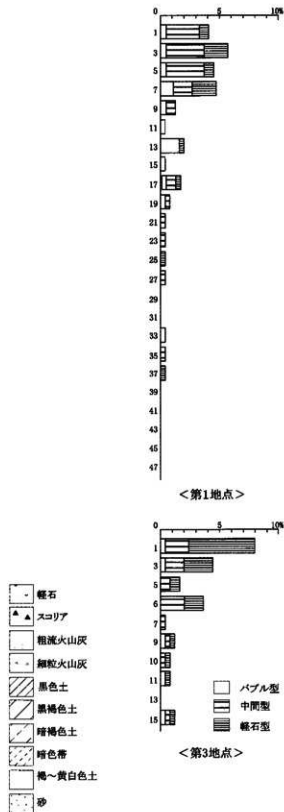
第26表 在家遺跡における屈折率測定結果

地点	試料	gl(n)	重鉱物	opx( $\gamma$ )
1	11	1.499-1.501	opx>cpx(ol, ho)	1.702-1.708 (1.702-1.708)
1	13	1.499-1.501	opx>cpx, ol	-
1	19	-	opx, ol>cpx(ho)	1.700-1.710 (1.700-1.705)
3	1	1.501-1.505	opx>cpx	1.707-1.710
3	3	1.500-1.505	opx>cpx	1.707-1.711
3	6	1.500±	opx>cpx	1.704-1.709
3	15	-	opx>cpx(ho, ol)	1.703-1.710 (1.705-1.710)
4	1	1.523-1.533	opx>cpx(ol)	1.706-1.710
4	11	1.498-1.503	opx>cpx(ho)	1.706-1.710
4	15	1.504-1.512	opx>cpx	1.706-1.708
4	19	1.501-1.505	opx>cpx	1.706-1.711
4	29	1.501-1.505	opx>cpx	1.707-1.711

屈折率の測定は、温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993)による。( )は、modal rangeを示す。gl:火山ガラス、ol:カンラン石、opx:斜方輝石、cpx:単斜輝石、ho:角閃石。



第224図 在家遺跡における土層柱状図



第225図 在家遺跡における火山ガラス比ダイヤグラム

## Ⅶ 結語

### 1 旧石器時代

今回の調査では、在家遺跡B区、宮廻館跡から旧石器時代の所産と考えられる遺構、遺物が検出された。遺跡は入間台地の支台である板戸台地に立地するが、これまで周辺で、旧石器時代の遺跡はあまり見出されていない。今回、在家遺跡において、鍵層となる火山灰層の堆積する埋没谷の底部から、礫群と考えられる遺構を伴い、小規模ながらも石器群の検出を見たことは、今後の周辺地域の調査に期待を抱かせるものである。とはいえ、少し地理的に視野を広げれば、南方に流れる、遺跡の立地する扇状地を形作った小畔川や入間川の周辺には学史的に名高い砂川遺跡をはじめ、鶴ヶ丘遺跡（E区）や屋敷遺跡など多くの「砂川期」の遺跡が存在している。今回、検出された石器群は、石器の形態と、火山灰層の年代などから、「砂川期」あるいはそれに後続する時期に位置付けることが妥当と考えられる。「砂川期」に特徴的な形態のナイフ形石器の出土が見ら

### 2 縄文時代

在家遺跡B区と宮廻館跡の各調査区からは、住居跡は検出されなかったものの、縄文時代前期中葉の土器が比較的まとまって出土している。これらの土器の様相について考えてみたい。

在家遺跡B区からは、遺構は検出されなかったが、調査区内からは関山式土器が出土している（第120図）。瘤状の貼付文を施文する口縁部や、胴部にはループ文や組紐文を施文しており、関山式でも古い様相を示している。

宮廻館跡A区からは、土壌やその周辺を中心に、関山式土器が検出された（第130図・第131図）。交互刺突を行なう平行沈線文によって文様が施されている口縁部や、胴部にはコンパス文やループ文が施文されている。地文は粗く撚られた原体などが施文され、関山式でも新しい様相の土器と考えられる。

宮廻館跡C区からは、少量だが関山式土器が出土している（第147図）。格子状に文様が施文される口縁部などが出土するが、関山式の末葉に位置する

れず、剥片剥離作業の痕跡もあまり見られないため、細かな時期の決定には頭を悩ませるところはあるものの、打面調整を施した石刃状の剥片や、稜付き剥片の存在などが、時期決定の目安と考えている。入間川周辺にまとまって分布する「砂川期」の遺跡との関係性の中で当遺跡のあり方を問う必要があるだろう。今の段階では、これらの遺跡との差異を指摘するにとどまるが、在家遺跡の遺物が礫、石器共に主に非常に狭い埋没谷の底部から出土していること、礫群と考えられる遺構を伴うことが前述のナイフ形石器の欠如や、剥片剥離の希薄さに加えられるだろう。比較的等質な遺跡が連鎖すると考えられている「砂川期」でも細かな立地条件の差が遺跡の性格差を生む可能性がある。あるいは、編年的にやや後続する時期に位置付けるべきか、今後、周辺の調査による資料の増加に期待すると共に、既出遺跡間の比較研究を行なう必要を感じている。

と考えられる。

宮廻館跡E区からは、黒浜式土器が出土している（第185図）。口縁部に平行沈線文を施文し、胴部には地文のみが施文されている。

以上、各地点ごとの土器について述べたが、それぞれ地点ごとに、時期的なまとまりを有していた。在家遺跡B区から宮廻館跡E区にかけては、北から南へと時期が新しくなっており、各地点ごとに時期差があることが明らかになった。

住居跡は検出されなかったが、刑平や館の構築などによって、破壊された可能性は高いと思われる。集落が存在したと仮定するならば、ある一定期間の定住後、台地上を数百メートル単位で移動していたとも考えられる。周辺の遺跡でも、前期中葉の住居跡が数軒単位でしか検出されていないことからすれば、在家遺跡、宮廻館跡と同様であった可能性も考えられる。

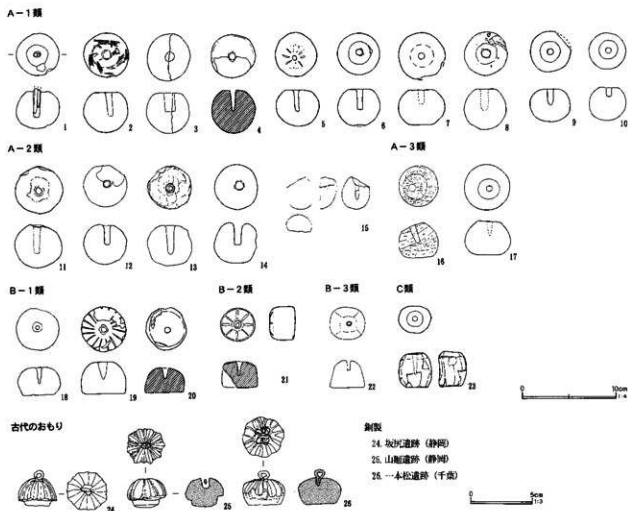
### 3 宮廻館跡出土の有穴球状土製品について

宮廻館跡C区第52号土壌から、用途不明の土製品が出土した。土壌は1.2×1.0m、深さ30cmの楕円形をし、他に古銭を3枚出土している。土製品は上面に孔が開き、球体をしている。数箇所の欠損部はあるものの、ほぼ完形で、胎土には白色粒・石英・角閃石・砂粒・礫を含み、焼成は良好である。球体面は磨かれているようで、色調は黒～褐色を呈する。

土製品の上部は平坦な面で、直径2.2cmを測るが、その面は直接被熱しておらず、焼成後に削りだしたと思われる。平坦な面と球体部の境の稜はきつく、面は若干窪み真平らではない。平坦面の

中央に穿たれた孔は径0.7cmの円形であるが、貫通せず、深さ2.8cmで止まる。断面は底部が平らな円筒状である。中には幅2～3mmの棒状の鉄製品が2本遺存しており、X線写真を見ると残存長は1.9cmと2.6cmで、断面形は方形をしている。孔から突出した部分は欠損しており、そこから先の正確な形状は判断できない。この棒状の鉄製品が孔内に遺存していたことは、有穴球状製品に付属する部品が存在したこと、また、その部品の材質が鉄製であること、が明確になり、この資料が出土したことは大きな成果である。

有穴球状製品については、岩瀬氏が県内出土



第226図 県内出土の有穴球状製品

第27表 県内出土有穴球状製品一覽表

序号	遺跡	市町村	遺物の名称	長×短×高(cm)	重量(g)	材質	遺構	共存遺物	備考
1	宮廻館跡	川越市	有穴球状土製品	4.5×4.5×3.9	88.86	土	土壇	無文銭・判銭不明銭	14~15c代の館跡
2	藤波田氏館跡	富士見市	球状の土製品	4.7×4.7×4.2	80.1	土	溝跡	かわらけ・増柄・磁石	溝跡は屋敷を隔てる区劃りの溝の可能性あり
3	ウツジ内	深谷市	球状の土製品	4.8×4.8×4.2	(38.65)	土	溝跡	常滑甕(13c後半~15c代)・かわらけ	遺跡内に中世井戸跡・土壇・溝跡多数。遺跡の50m東には伝説沼尻の館跡
4	薬師堂塚	伊奈町	玉状の土製品	4.6×4.6×4.4	79.47	土	井戸跡	なし	平塚の塚と館跡。胎土は14c代の片1跡に類似。塚に囲まれた地区に中世の堀立・土壇多数
5	上大久保新田	浦和市	土製玉	4.6×4.5×4.8	不明	土	包含層	-	調査区内から13c後半~16c前半の遺物出土
6	稲荷前A区	坂戸市	球状の石製品	4.5×4.5×3.9	100	凝灰岩?	住居跡内 Pit	-	中世集落。住居跡は15~16c代の掘立柱建物跡3棟と重複する
7	堂山下	毛呂山町	用途不明の石製品	4.9×4.9×3.6	101.78	凝灰岩	グリッド	-	同グリッド内に15c後半~16c初頭の掘立柱建物跡3棟
8	中道・中道下	朝霞市	有穴球状石製品	4.6×4.6×4.3	84.54	凝灰岩?	住居跡	-	秤の重りの可能性を指摘。2ヶ所に10~14c前半と推定される溝跡
9	帆立	蓮田市	玉形石製品	4.3×4.3×3.5	78	凝灰岩	溝跡	かわらけ・陶磁器・板碑池(16c後半)	溝跡は16c後半と推定。遺跡周辺には中・近世の城館が多い
10	居立	深谷市	不明石製品	3.9×3.9×3.4	65.24	砂岩	グリッド	-	同グリッド内の井戸から羅美銭(12c後半~13c前半)
11	稲荷前A区	坂戸市	有穴球状土製品	5.0×5.0×4.5	100	土	井戸跡	常滑甕・内耳鍋・在地系鉢他	遺跡は中世集落。重複する溝跡に伴う遺物と推測。遺跡内に中世溝跡・掘立・井戸跡等
12	大崎橋井前	浦和市	土玉	4.7×4.7×4.5	80.78	土	ムロ跡	常滑甕・かわらけ	江戸時代のムロ跡(18c代)他
13	井沼方	浦和市	土製品	4.8×4.6×4.2	不明	土	土壇	中世以降土壇片50数点	秤の重りの可能性を指摘。遺跡内に中世溝跡・土壇
14	葛藤館跡	葛藤町	不明土製品	4.7×4.5×4.2	89.16	土	東区	同調査区内から陶磁器多数出土	同調査区内に堀状遺構・土壇状遺構を抽出
15	東裏	浦和市	穿孔のある土製	3.0×(3.0×(3.0))	不明	土	溝跡	-	調査区内に中世の地下式竈・中・近世の溝跡あり。磁器(17~18c)・板碑出土
16	中里	大宮市	用途不明の土製品	4.2×4.2×3.6	不明	土	包含層	-	1.7km北に中世(室町)の遺跡
17	地神	本庄市	有穴球状石製品	4.9×4.9×3.6	77.55	安山岩	グリッド	-	山土グリッド近く(13~14c前半)の堀穴状遺構
18	本村	大井町	土製の玉状製品	4.5×4.5×2.9	不明	土	遺構外	-	中世集落跡。近隣には大井氏館跡・大井沼遺跡
19	薬師堂塚	伊奈町	石製品おもり	4.4×4.3×2.6	64.7	凝灰岩	土壇	なし	平塚の塚と館跡。塚に囲まれた地区に中世の堀立・土壇多数
20	光原敷	蕨谷市		4.7×4.7×3.4	90.28	安山岩	溝跡	15~17c瀬戸美濃のかわらけ・板碑池	溝跡は薬師研の断面形態を呈する
21	宮町	坂戸市	用途不明の石製品	3.7×3.5×2.7	45.16	凝灰岩	溝跡	青磁蓮弁陶(13~14c)	遺跡内に中世溝跡。宮廻館跡と
22	新原敷C区	鴻巣市	権状石製品	3.7×3.7×3.0	47.98	凝灰岩	掘立	なし	掘立の年代は柱穴の規模及び覆土の状況等から中世と推定
23	小在家	橘川市	滑石製の石製品	3.5×3.0×3.6	53.47	滑石	掘立	なし	本遺構は7ヶ所状に曲がる溝跡(かわらけ・磁器跡出土)内側に位置

の資料を13遺跡14例紹介し集成している(岩瀬1998)。本稿では、今回出土した宮廻館跡の資料を中心に追加した資料も含め、分類・考察をしたい。

現在、県内において、20遺跡22点の類例があった。内訳は、土製品11点、石製品11点である。遺構別の出土点数は溝跡からの出土が6点・土壇が3点・掘立柱建物跡が2点・井戸跡が2点・ム

ロ跡が1点・住居跡2点で、その他はグリッド(遺構外)6点・包含層2点となっている。これらを出土する遺構の時期は、ほとんどが中世の遺構で、共存遺物などを見ると、13~18c代が考えられる。

坂戸市稲荷前遺跡A区では古代の住居跡に伴うと思われるピットから出土しているが、15~16c代の掘立柱建物跡3棟と重複しているため、遺物は流れ込みの可能性もある。同じように朝霞市中

道・中道下遺跡についても住居跡周辺に中世の遺構が存在するため、流れ込みの可能性が指摘されている(堀 2002)。遺構外のグリッドや包含層出土に関しても調査区内や出土グリッド周辺には中世の遺構が存在していることから、その時期に属する可能性は考えられる。以上のような出土状況から、有穴球状製品は中世の産物と考えたい。

次に、類例資料の形状をもとに分類を行った。その結果、A・B・Cの三類に大別でき、更にA・B類を三つに細分した。

A類 体部がほぼ球体であるもの

A-1: 上面に平坦面を持つ

A-2: 平坦面を持たない

A-3: 上面下面に平坦面を持つ

B類 体部がドーム型であるもの

B-1: 側面に膨らみを持つ

B-2: 側面に膨らみを持たず底部から体部へと垂直に上がる

B-3: 側面が面取りされるもの

C類 体部が円筒状であるもの

宮廻館跡(1)はA1類に入る。他、同類なもの、図版2～10である。平坦な面は、その径を2.0～2.6cmと測る。平坦な面と球体部の境の稜は緩やかになるものもある。このうち土製品(2～5)で本遺跡資料のように焼成後に削り出された面を持つ例はなかった。孔は径0.6～1.0cm、深さは1.1～2.5cmである。孔底部は平らか、やや丸みを帯びるものなどがあるが、断面形はどれも円筒状をしている。

A2類では、上面下面ともに平坦な面を持たず、球体や楕円形を呈している。11～15がこれに分類される。このうち、葛瀬城跡(14)は上面にやや平坦な面を持つが歪な球体であり、東裏遺跡(15)も大部分を欠損しているがほぼ球体で、この分類に入るであろう。

中里遺跡(16)・地神遺跡(17)は上面下面ともに平らに加工され、A3類に入る。球体の下位

に最大径がくる。

18～22は底面が平坦で全体はドーム型をなし、B類にあたる。18～20は側面に膨らみを持ち饅頭の形に似ているB1類、このうち薬師堂根(19)は側面下位の対面する二箇所に直径2cm程の平坦面を持つ。B2類は底部から体部へと垂直に上がり上面にやや丸みを持つ宮町遺跡(21)、B3類は四面面取りされ縦断面形が台形をする新屋敷C区(22)が該当する。19～22は石製品で加工時の擦痕も明瞭で、底面と側面の境を面取りしている。小在家遺跡(23)は上面下面ともに平坦な面を持つ円筒状を呈するC類に分類したい。側面片側がくびれているが、加工時の意図的な成形によるものかは明らかでない。

穿孔の仕方については孔の形状から推察したい。土製品の孔の断面形は、底部が平らか丸い窪みを持つものが大半であるのに対し、石製品には底部に小さな窪みが見られる。後者は19～21・23が該当する。金属製の錐のような工具で穿孔し、その先端が底部の小さな窪みを作ったのであろうか、その窪みはきれいな小円形で直径が1mm大である。宮町遺跡(21)は孔の平面形がやや楕円形で、底部はひょうたん型になり、工具の先端が一箇所に当たっていないようにも観察できる。断面は上位から9mmの深さまでは円筒状だが、それより下位は先細りになっている。

これに対し土製品の孔断面形は円筒状で底部には小さな窪みも見られず、孔内も被熱している。このことから、焼成以前に穿孔されそのまま焼いたか、あるいは穿孔して焼成時に孔の変形が起こるのを防ぐために棒状の有機物(燃えて炭になってしまうような木など)を差し込んだまま、焼き上げた。などを推測する。もし、焼成後に穿孔したのなら、石製品と同じく金属製の錐か、あるいは先の尖った錐のような工具で穿孔したであろうが、土製のため球体が割れることが予測される。これを考えると焼成前に穿孔したほうが妥当であ

ろう。

成形以外の調整と、孔内や孔縁辺で観察できた凹みや傷?等にも触れてみたい。薬師堂根遺跡(4)・菖蒲城跡(14)では孔内壁面に縦に入った筋が見られた。菖蒲城跡ではその筋側は断面が孔底部に向かうにつれ、斜めに広がっている。また、中道・中道下遺跡(8)は孔内の中位から上位に幅・深さ1mm以下の沈線状の傷が対面する。薬師堂根遺跡(19)も孔の上面縁に長さ3mm・幅1mmの沈線がある。他には、稻荷前遺跡A区(11)では孔の縁辺に長さ2mm・幅1mmの沈線が見られた。平面形は二等辺三角形を呈し先端部を孔に向け、孔を囲むように5列並んでいる。球体部同様、孔周辺も剥離が多いが、5列並ぶ沈線はこの後、放射状に続く可能性はある。光屋敷遺跡(20)は孔の平面形で見られる円形に四本の突出部が十字に出ているのは、穿孔時にできたミゾというよりは、そこに部品を取り付ける際に必要なミゾと思われる。

これらの凹みや傷?は、取り付けられるであろう部品によるものかは特定できず、唯一、鉄製品が残る宮廻館跡出土の資料を見る限りでは、凹みや傷?は確認できなかった。

また、例に挙げた資料の中で、刻みや沈線が認められたものは、土製品で1点(5)、石製品で2点(20・21)である。上大久保新田遺跡(5)は孔の周囲にヘラ状の工具による9本の刻み目が放射状に施されている。長さ6~8mm・幅1mm程度である。光屋敷遺跡(20)は側面の上位から下位にかけて17条の放射状の沈線が刻まれている。沈線幅は1~1.5mmで断面はV字をなす。沈線と沈線の間に細かい線が刻まれている箇所が一部見られるが、加工時の痕跡の可能性もある。宮町遺跡(21)は上面に8本の放射状の沈線を持つ。長さ8~9mm・幅約1mmである。整形を見ても、石製品は底部稜を面取りするなど、歪な球体が見られる土製品に対して丁寧に磨き上げられ、装飾

性が高く見受けられる。

ここで少し、成形方法についても触れたい。土・石製品ともに丁寧な作りである。土製品は、胎土が密で、赤色粒・角閃石・白色粒・砂粒・礫などを含み、焼成は良好なものも少なくない。洗練された粘土を丸めて形づくり、ヘラケズリした後磨いたように思われる。難波田氏館跡(2)では所々に刷毛目のような整形痕が認められる。石製品は凝灰岩・砂岩・安山岩などの加工しやすく、各地で採取できる石材が使われている。角張った箇所がなく緩やかな稜を持つように成形されている。小在家遺跡(23)は側面を加工した後、上下面を平坦に磨いているようである。石材が滑石製のため傷は多いものの、製作時の擦痕は明瞭である。

これまでに、県内において類例も少なく、用途不明である有穴球状製品は、「おもり」と指摘されてきた。薬師堂根遺跡(4・19)では「竿秤の錘・權」と指摘し(水口1998)、中道・中道下遺跡(8)・井沼方遺跡(13)では「秤の重りの可能性」を指摘し(榎2002、柳田1997)、新屋敷遺跡C区(22)では權状石製品を「棒秤等の權の可能性がある」と指摘している(大谷1996)。類例資料の中でも、古代の權衡資料に形状が類似する面もあるため、「古代のおもり」を例に挙げ比較検討してみたい。

千葉県山武郡大網白里町一本松遺跡出土の銅製(26)の分銅であるが、大きさは有穴球状製品よりも二回りほど小さい。形状としてはB1類に似る。長径3.25×短径3.25×高さ2.74cm、重量107.35gを測る。これには木葉状の文様が見られ、やや丸みを帯びた8本の稜がある。図中有穴球状製品の中で、古代の權衡資料(24~26)に形態が類似するのは、18~21であろうか。この中でも光屋敷遺跡(20)は、形態と装飾性で判断すると、一本松遺跡の資料に類似して見え、放射状の沈線が分銅の装飾性を模した様にも受け取れる。

また、宮廻館跡の出土品に差し込まれている棒状の鉄製品が、吊り下げのための部品だとするな

らば、欠損している先の形状は一本松遺跡 (26) の分銅の鈕が参考となるかもしれない。

本資料等を「おもり」の可能性として考えるならば、古代～中世の秤のおもりの単位についても見ておく必要があるだろう。重量単位は中国唐代から日本に導入されたとされ、律令期では斤・両・分・銖の単位が使われ、「十六両を一斤とし、一両を四分、一分が六銖」としていた (註1)。古代当初は、42 g 前後の数値が両相当の基準単位で、その後中世後期頃までに、一両 37.5 g (唐の開元通宝一文の重さ約 3.75 g を一とした、一両 = 十匁、両換算値 37.5 g) と定められたようである (註2)。図版の完形資料のうち、重量をこの数値に当てはめると、2・17 が、ほぼ 2 両に相当する。

しかし、有穴球状製品は土・石製品であり、規定値に値する金属製のおもりと同じ扱いになるかは難しい。土製・石製の古代の権衡資料についても、吉村靖徳氏は「金属製と違って比較的製作しやすい。規制の強弱に左右されて、基本となる単位重量の乱れが反映されやすく、ある程度のばらつきが予想される。」と指摘し (吉村 1995)、大谷徹氏も「石製品の中には、『秤』以外の道具の『おもり』として使用されていたものもかなり含まれていると考えられる。」「石製や土製のものは、私的な秤に使われたおもりと言えるかもしれない。」と指摘する (大谷 1991)。

古代絵巻等の図録資料で、竿秤は業師 (医者)・菓子屋・香売りの職人絵などに見ることができるが、どれも「おもり」の形状は宮庭館跡をはじめ

とする有穴球状製品の類とは異なるものであった。これらのことや重量数値にばらつきが見られ一貫性がないことなどから、有穴球状製品が「竿秤のおもり」とすることは可能性までに留めておきたいが、何らかの「おもり」として使用されていたことについては推測される用途の中に入れておきたい。

最後に、有穴球状製品を出土した遺跡について触れたい。宮庭館跡 (1)・難波田氏館跡 (2)・高蒲城跡 (14) の城館跡や、隣接する増田四郎重富館跡の堀の可能性を持つ溝跡を検出した居立遺跡 (10)、室町期の中条氏に関連する可能性が高い館跡とされる光屋敷遺跡 (20) など、その地域に存在する武蔵武士関連の遺跡がある。また、鴻巣御殿に関連した 17 c 後半を中心とする屋敷跡の蓋然性が高い遺跡と予測される新屋敷遺跡 (22) もある。この他、城館跡であると認定されるには現在の調査報告段階では難しい遺跡もあり、有穴球状製品の出土点数が希少なこともあるが、有穴球状製品は普及頻度が低く、一般的な集落で使用されるというよりは、集落・市場とはかけ離れた施設で、そこに存在する人格等が使用していた可能性があるものと窺えよう。だが、稲荷前遺跡 (6・11)・堂山下遺跡 (7) や大井氏館跡に隣接する中心的な集落と推測される本村遺跡 (18) などの集落遺跡からの出土もあり、一概には言えないが、ある段階になると一般集落市場でも見られる製品として増加していくのかもしれない。このことは今後の課題にしたいと共に資料の増加に期待したい。

## 註

註1 網野善彦・石井 進他 1989『よみがえる中世3』から引用

註2 吉村靖徳 1995『権衡に関する一考察—福岡県内出土権衡製品の検討と課題—』『九州歴史資料館研究論集20』から引用



#### 4 宮廻館跡E区溝跡出土の木製品

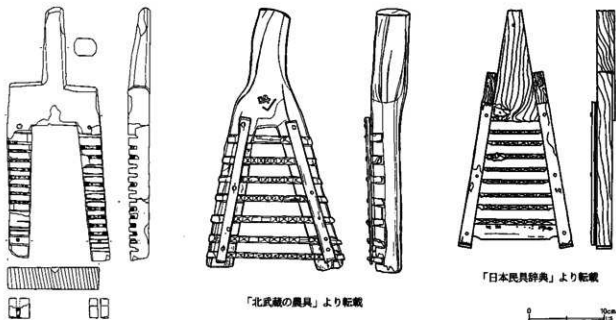
宮廻館跡E区第7号溝跡から、県内では遺構からの出土は類例を見ない、木製品が出土した。溝に伴う遺物から17～18c代のもつと推測される。民俗では現在も残る資料であり、初午の日に食べる料理を作るときの道具として使われている。これは、ダイコンをおろす道具であり、現在も竹細工屋等で見ることができる(写真が現在の資料である)。名称は、日本民具辞典に「鬼おろし」と掲載されており、本文でも「鬼おろし」と呼称したい。

立春後初めての午の日を初午といい、この日にスミツカリ(他、呼び名は多々あるが、ここではスミツカリとする)と呼ばれる食べ物を作る。作り方は地域により全く異なっているが、節分のときに残しておいた豆を煎って升の底で潰したものと、粗くおろしたダイコンを鍋の中に入れて煮て、醤油で味付けをする。そして、これと一緒に赤飯を薬で出しているツト(ワラツト・ワラツト・ツトッコと呼ばれる)に入れ、近くの稲荷様にお供えし、火難除を祈願するという。県内には稲荷を屋敷神として祭っている家が多く、宮廻館跡内にもあった可能性はある。また、スミツカリは、初午の日のみに作られ、他の

日には作ってはいけないとされている。その地域性は栃木、茨城、群馬、千葉、埼玉の一部で、本県では熊谷を北限として行田、羽生と南へ広がっている(井上1993)。

鎌倉時代初期の「宇治拾遺物語」・「古事談」、室町時代の「魚鳥平家」にスミツカリの語源である「酢むつかり」という語が出てくるという(註1)。この「酢むつかり」は「酢漬り」であり、「酢大豆」のルーツともいふべきものであるという。煎ったばかりの大豆に酢をかけると、皮にシワが寄り、それが、子どもがむずかかって顔をくしゃくしゃにした時とそっくりなので「漬」が使われた。その後「酢むつかり」から「酢みつかれ」、「しみつかれ」、「しもつかれ」などと呼び方が変化した(永山1998)。他、スミツカレ・シミズカリ(シミツカリ)・スミズカリ(スミツカリ)・シモツカリ・シモツカリなどの呼び名がある。そして、初午の日に、スミツカリを作るためだけに使用された道具を、地域によってはスミツカリツキと呼び、他にはダイコンツキとも呼ばれた。

余談であるが写真の資料でダイコンをおろしてみ



第227図 鬼おろしの類型

た。すりあがったものは粗く口の中にダイコンの塊が残るほどだが、甘みがあった。また、スミツカリも食べる機会がありフワツとした素朴な味の食べ物であった。

本資料は長さ33.7cm、幅13.7cm、厚さ2.9cmを測る。構造は一枚の板材で柄と、柄から伸びる二股を作り、双方の腕に対になるミゾを刻む。ミゾは幅0.3～0.5cmで、深さ1～1.2cmである。ミゾの本数は本例では14本であり、他の例では7本が多い。ミゾにはおろす部分となる鋸歯状の歯を取り付けるが、歯は竹で作られる。ミゾ内には長さ0.4～0.7cm、幅1.2～2.9cm、厚さ0.3～0.5cmで鋸歯部の歯の根元のみが残っていた。歯の並びは現存資料から観察するが、正面横から見ると前列と後列の歯の山が互い違いに並んでいて、緩い山型に作られている。また、差し込まれた歯が抜けないよう覆いをするために、溝が並ぶ腕部と同じ幅の板材を取り付けていたようで、その打ち付けに竹製の丸釘を4本使っている。残存長3.6cm、径0.4cmの釘である(実測図の小円がそれである。写真右側の資料にも竹材で覆いが付いており、図と同じ四箇所と中央二箇所に金属性の釘で打ち付けられている)。実測図右下の竹釘はミゾ内に打ち込まれているが、左右の上下の釘間は同距離のため、覆う板材の長さは左右同じであったろう。本例では、右側のミゾが撥形に刻まれている。これは、右と左のミゾを別々に刻んだために竹歯が入らなくなり、右側のミゾを刻み直したためと思われる。柄の長さは10.4cm、幅3.3cm、太さは2.2cmで断面形は八角形をする。柄の部分から本体肩の部分は角を面取りしており、現存するものと、大きさ・形はさほど変わらない。『北武蔵の農具写真編』に同型のダイコンオロシ(名称)が載って

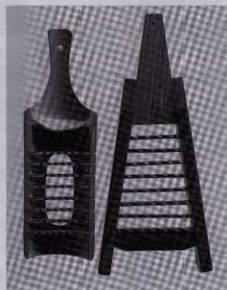
いるが、これはやや大型で(長さ49cm)、竹歯が17本並んでいる。

道具の形態は、三つに分類できた。一つは、本資料のように、一枚の板材で柄と二股に分かれる腕を作るもの。二つ目は、自然木で、二股に分かれる枝をそのまま使うもの。最後は、柄と二本の腕を別材で作られ、本体は三枚の板材から成っているものである。更に大きさによって細分することも可能であるが、歯が抜けないための覆いや鋸歯が緩い山型に作られ、前列と後列が互い違いに並んでいることなど、細かな構造には違いはないと思われる。

今回の出土資料で、「鬼おろし」が17～18cには既に使用されていたことを明らかにできたが、第7号溝跡からは中世の遺物も出土しており、「鬼おろし」を中世まで遡らせることも可能であろう。

#### 註

註1 永山久夫『日本古代食事典』(1998)より



現在の鬼おろし

#### 引用参考文献

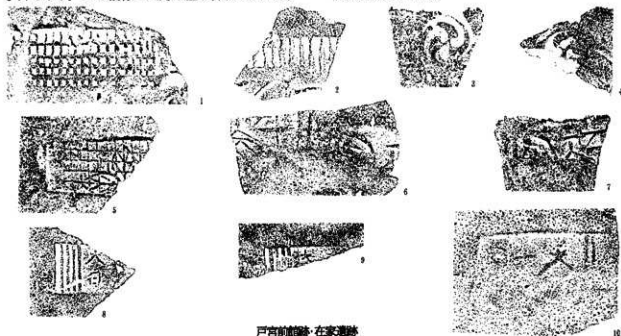
上尾市教育委員会 1992『上尾の民俗Ⅱ』上尾市文化財調査報告 第37集  
朝岡謙二・工藤貞功他 1994『日本民具辞典』ぎょうせい  
井上善治郎・板垣時夫他 1993『中川水系 人文・中川水系総合調査報告書 2  
内田賢作 1986『図説日本民俗誌 埼玉』岩崎美術社  
倉林正次 1972『日本の民俗 埼玉』第一法規  
倉林正次・倉林美千子 1998『埼玉の民俗叢書』さきたま双書

埼玉県教育委員会 1966『埼玉の民俗』  
埼玉県立さきたま資料館 1985『北武蔵の農具 実測図編』  
埼玉県立さきたま資料館 1985『北武蔵の農具 写真編』  
埼玉県立さきたま資料館 1985『北武蔵の農具 目録編』  
板戸市教育委員会 1991『板戸市の民俗一 ～横沼の民俗～』  
板戸市教育委員会 1993『板戸市の民俗二 ～赤尾の民俗～』  
永山久夫 1998『日本古代食事典』東洋書林

## 5 押印文について

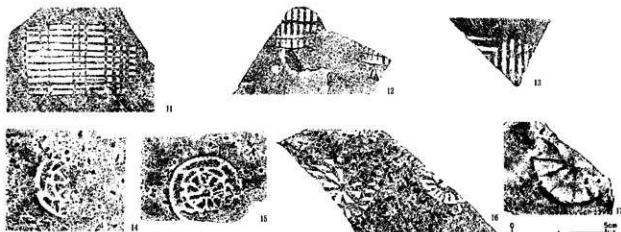
第228図は各遺跡出土品の押印である。大別すると格子文と装飾的な文様に分けられる。上段は戸宮前館跡・在家遺跡のものである。1は格子文で12世紀後半の瀝美産の甕に押されていた。3・4は巴文で3は左巻き、4は右巻きである。5は格子の中に植物を彫っている。6・7は同一の文様である。6の左端は山形に「大」のようにも見える。8・9は縦線に「大日」の文字が刻まれている。10は「大」とその脇に二本の縦線が見えるが下がわからない。下段は宮廻館跡出土のもので、11・12は線状の格子目である。13は縦線に四角を組み合わせている。

14・15は矢車文である。16は簡略化した矢車文であろうか。17は菊花文か更に簡略化された矢車文と思われる。下図から、戸宮前館跡と宮廻館跡では同じ押印はない。各々の押印の時期的な違いも考慮しなければならないが、戸宮前館跡では「大日」或いは「大」の押印を持つ製品を使用し、宮廻館跡では矢車文の押印のある製品を使用する傾向があるのではないだろうか。数片の資料で判断するのは危険であるが、このような傾向から入手先、つまり流通経路に違いがあるか或いは特定の注文生産などの可能性が想定できる。



戸宮前館跡・在家遺跡

宮廻館跡



第228図 押印文拓影

## 6 戸宮前館跡の変遷について

戸宮前館跡では、溝で囲まれた4つの区画を想定した。各区画内には掘立柱建物跡や土壌など性格の違う遺構が存在する。これらの遺構の時期については、遺物が少ないことから断定することが困難である。また、これらの遺構は重複することが少なく、その同時性や変遷を辿ることも難しい。ここでは戸宮前館跡の遺構の変遷についても、主に溝跡の新旧関係を手掛かりに考えてみたい。ただし、調査で得られた遺構の新旧関係と出土物には、必ずしも時間的な相関関係は認められない。これは個々の遺物の持つ、生産→使用→廃棄という一連の履歴の時間的な違い、そして個々の遺構の埋没過程の違いが複雑に関連してくることによって考えられる。

遺構の変遷をⅠ～Ⅴ期と推定し、更にⅠ期とⅢ期をa・bに2分割した。

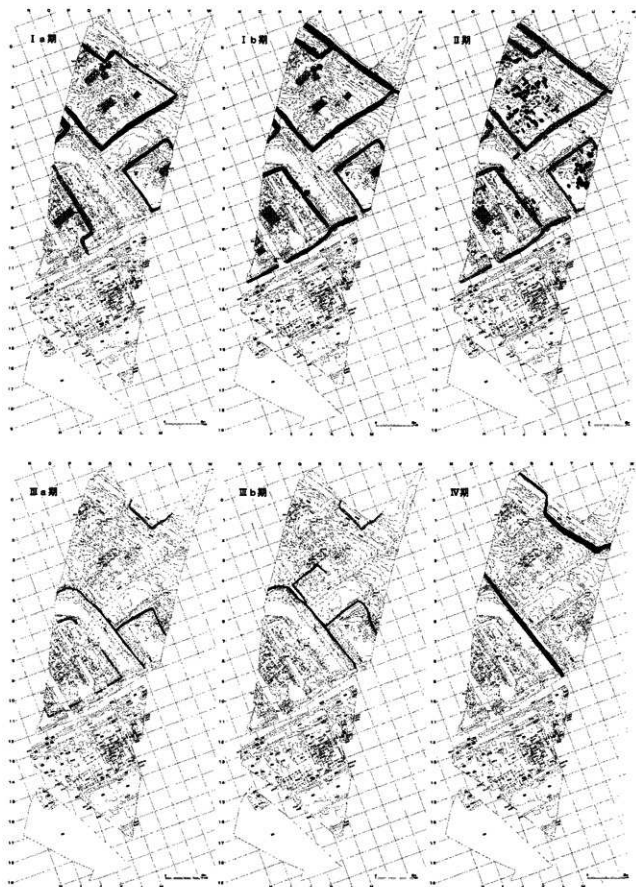
Ⅰa期は、第1区画、第2区画、第4区画を充てる。第3区画に掛かる第9号溝跡もこの時期の可能性がある。第1区画は溝跡の重複から、内側にある第34号溝跡が第33号溝跡より先行する。この時点で当然、第17号溝跡も掘削されたであろう。内部には掘立柱建物跡や井戸跡が複数存在するが、掘立柱建物跡は第7号と第8号、第10号と第12号が重複しており、この内のいずれかがこの時期に建てられたと考えておきたい。第2区画は、第19・22・35号溝跡によって囲まれる空間で、一辺が約30mの方形と推定される。第19号溝跡の外側を廻る第18号溝跡も、時期をずらしてこの区画に関係するものであろう。区画内に伴う施設は第11号掘立柱建物跡と第11号井戸跡が考えられる。第3区画に掛かる第9号溝跡については第3・12号溝跡との新旧関係を確認しておらず、遺物も出土しなかったため不明な部分が多いが、第34号溝跡と同じく折れ(攪乱部分)を持っており、極めて曖昧ではあるが可能性としてこの時期のものと考えておきたい。この可能性を排除すると第9号溝跡は新しい時期まで降ろさざるを得ない。内部の施設は積極的な根拠に乏し

いが、第5号掘立柱建物跡を充てておきたい。

Ⅰb期は最も拡充整備された時期と考えられ、第32・33号溝跡が掘られて第1区画の北側が拡張される。掘立柱建物や井戸、堅穴状遺構或いは平場などもこの時期には整っていたと考えてよいだろう。第3区画は第12号溝跡が掘られる。第12号溝跡は第3号溝跡の手前で止まることから第3号溝跡を意識していると考えられ、第3号溝跡もこの時期には存在したと考えられる。内部には井戸跡や掘立柱建物跡が数棟あるが、第4号掘立柱建物跡はこの時期か次の時期に建てられたものと考えたい。

Ⅱ期は廃絶期と考えたい。第1・2区画内には多数の土壌が掘られる。土壌は重複が激しいことから一度に掘られたものではなく、ある程度の時間幅をもって土壌群が形成されたのであろう。前時期から少しずつ掘られたという可能性は否定できないが、明らかに第1区画と第2区画内に集中して見られることから、この二つの区画を意識的に使っていたことは間違いない。第3区画にそれが見られないのは、そこにこの種の土壌を掘ることを規制する意識や、例えば第4号掘立柱建物跡のような構築物などの物理的な規制があったからと考えられる。

Ⅲ期は土壌群の形成が終わって細い溝による小区画が形成される。この時期には第17号溝などの主要な溝は埋まっていたと考えられる。区画は一本の溝から派生した溝が「コ」字型に廻るものであるが、この区画がどのような性格のものかは判然としない。遺構の新旧関係から、Ⅲa期は第41号溝跡から派生する第23号溝跡による区画が造られた時期、Ⅲb期は第16号溝跡から派生する第21号溝跡とその北側第25号溝跡によって区画が造られる時期である。調査区北側の第27号溝跡も細く小さく廻り同様の遺構と思われる。第3区画内の第4・14・42号溝跡は、第12号溝跡の区画を踏襲するような形で廻る一連の溝と思われ、溝の規模が他の溝跡と同様であることからこの時期に入るかもしれない。



第 229 图 戸宮前館跡変遷推定図

IV期は本文中で述べたように第30号溝跡によって地形が改変される時期である。第15号溝跡もこの時期以降のものであろう。先に述べた第9号溝跡はこの時期まで降る可能性もある。

以上のように戸宮前館跡の遺構の変遷を推定した。この中で問題となるのは第2区画であろう。I期に含めたが、遺物には12世紀のものがあり古い様相が窺える。また、他の区画より小さいこと、方形という単純な形態と思われること、溝が他の区画の溝より小規模であることから、他の区画に先行する可能性も考えられる。ただし、他の主要な溝跡との重複関係がないため断定はできず、他にも館全体を見たときにこの区画が占める位置的関係や、他の遺跡でのこの種の遺構との比較など検討されなければならないことが多く残されている。

年代については、遺物が12世紀後半から13世紀前半のものが僅かに見られ、14世紀代のもものが少量あるが、大部分は15世紀代であることから、I a期は15世紀中頃、I b期は15世紀後半代と考え

## 7 宮廻館跡の変遷について

宮廻館跡C区の変遷を調査で得られた遺構の新旧関係をもとにI期～III期の三時期に推定した。

I期は第5号溝が長方形の区画を造っていたと考える。第5号溝跡は後の拡張によって全体像が殆どわからなくなっているが、土塁の下から検出されており館を構成する溝では一番古いことは確実である。第2号溝跡の底部にわずかに痕跡が見られ、方形に廻っていたことが窺える。この時点で内側に土塁が築かれていたかどうかはわからないが、溝を掘り上げた土で土塁を築いた可能性は考えられる。土塁があったとしても溝の規模に比例して、あまり大きなものではなかったであろう。土塁下の残存部分や、第2号溝跡底面に残っていた第5号溝跡の底部は、第2号溝跡底面の端によっていることから、第2号溝跡より規模が小さかったと思われるからである。第6号溝跡も土塁下から検出された溝で古いことが

ておきたい。II期は遺物の状況からI b期とあまり時間差を置かない頃と考えておく。III期は推定できる材料がないが、IV期が最大に古く見ても17世紀以降と考えられることから16世紀代としておく。

次に在家遺跡A区について若干触れておきたい。在家遺跡A区では同じような区画が検出されたが、戸宮前館跡から直接続く溝は確認されていない。溝の特徴として戸宮前館跡のような規模をもつ溝はなく、強いて言えば第4号溝跡が該当するくらいである。他の溝跡は細い溝で、何度も掘り直された形跡が見える。区画内に掘立柱建物跡が多く、重複が激しいのも、溝と対応して建て直しが盛んに行われたことを示すものであろう。溝跡は戸宮前館跡の溝と方向に若干の違いがあり、遺跡を分ける道路を挟んで区画の性格に違いがあるように感じられる。ただし、出土遺物は戸宮前館跡と同時期のものが多くあり、戸宮前館跡第35号溝跡と、在家遺跡第1号井戸跡出土の遺物が接合していることから、遺構の時期に大きな違いはないと考えられる。

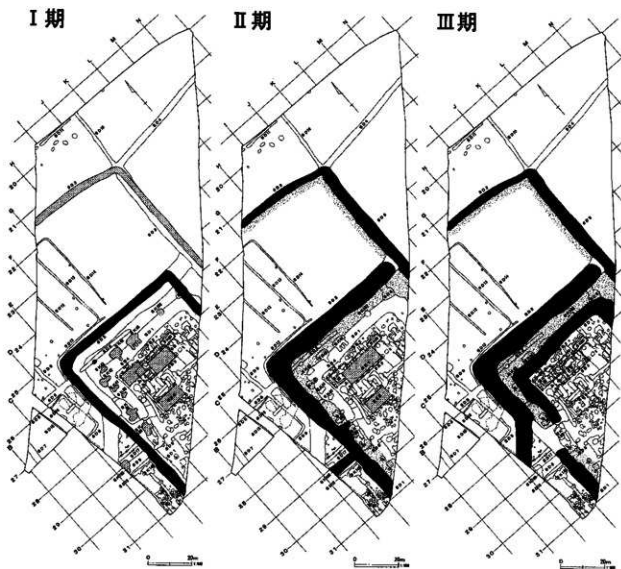
窺われるが、本期に推定する井戸跡と重複し、第5号溝跡とも重複していると思われることから、本期より更に古い可能性も考えられる。調査時に想定した第6号溝跡と第8号溝跡を結ぶ区画（遺跡見学会資料平成12年2月26日）については、第8号溝跡が地下式墳（SK 169）より新しく、第1号溝跡に沿って並ぶ地下式墳は、本文中で述べたように、可能性としてこの時期に構築されたと考えられることも可能なことから、SK 169も一連の地下式墳と同じような時期と考えれば、第6号溝跡と第8号溝跡の時期は違ってくる。ただし、第8号溝跡は西側の第1号溝跡と呼んでいる部分の内側にも前身的な浅い溝が続くことから解釈がいつそう困難なものとなっている。第3号溝跡がこの時点で外郭を形成していたかどうかはわからないが、第3号溝跡の北辺と東辺は規模に若干の違いが見られる。幅の広い東辺は後

から拡張されたとも考えることもでき、本期に存在していた可能性もある。唯一検出されている井戸跡も土塁の下であることから本期のものと考えておく。掘立柱建物は新旧関係が掴めていないが、第4号掘立柱建物は第1号溝跡に最も近く位置的に無理があるとすれば本期に含めて考えてよいと思われる。

Ⅱ期は第5号溝跡を掘り直し、溝幅を広げて第2号溝となった時期である。東側は第3号溝跡を意識し手前で止めている事から、この時には第3号溝が掘られていたことは確実である。第5号溝の掘り直しに伴う大量の排土で内側には土塁が築かれ、地下

式墳も埋められたと考える。第8号溝跡の時期については不明な部分が多いが、内郭を画する溝の外側については、この時期かこの直後あたりに考えるしかないであろう。

Ⅲ期は内堀である第1号溝が掘られ館の構えが完成した時期と考えられる。第1号溝跡は西側が途中で止まっており、この部分に小口状の施設を推定できる。既にある外側の溝と組み合わせて喰い違い状の小口を形成したのではないかと考えられる。それに伴って、この段階で外側になる第2号溝を斜めに付け替えていると考えておく。



第230図 宮庭館跡変遷推定図

Ⅲ期以降は館廃絶に伴い内側に土壌や一部の地下式墳が造られていくと考えられる。

以上のように館の形成についてⅢ期の変遷を推定した。細かく見れば更に細分できる可能性があるが、変遷の中で時間的な問題も絡んでくるため大きく捉えた。個々の遺構の年代を推定できる遺物はあまりにも少ないが、第2号掘立柱建物跡から出土した割高台の白磁皿や第1号溝跡から出土した緑釉小皿は15世紀後半に位置付けられる。また、土塁から出土した常滑の壺や在地産の鉢類も同様の時期と考えられることから、15世紀中頃から後半に築造、改修されたもので、特に後半に中心があるものと考えておきたい。Ⅲ期以降は、第53号土壌が墓塚と考えられ、洪武通寶が出土しているが、かわらけは胎土に白色針状物質を含むものが多く、1点には角閃石が見られる。形態からも田中編年のA類とE類に該当しⅥ期にあたることから15世紀末以降とさ

## 8 戸宮前館跡の中世遺物について

宮庭館跡から出土した遺物は量的に少ないうえに、破片資料が多いため年代を推定できる資料は更に限られる。ここでは在家遺跡出土遺物とあわせて、常滑製品と瀬戸製品を中心に出土遺物の年代を考える。

12世紀の遺物が最も古く、第35号溝跡出土の渥美産の壺は口唇部を欠くが12世紀後半かそれよりやや古いと考えられる。共存した壺の破片は口縁部を欠くが同様の年代であろう。

13世紀の遺物は、在家遺跡第1号井戸跡の常滑産の壺があげられる。5型式に該当し13世紀第2四半期と考えられる。戸宮前館跡第12号井戸跡の壺は続く6a型式で13世紀第3四半期と考えられる。

14世紀の遺物は、第32号溝跡の灰釉壺があげられる。平行する2本の沈線で曲線が描かれる例は14世紀中葉に見られる。また、図版26の青白磁梅瓶片は元代のものであると思われる。第150号土壌の常滑産壺は14世紀後半と考えておきたい。第40号溝跡の常滑産鉢は同じく8型式で14世紀後半であろう。

第54号土壌から出土したかわらけも、第53号土壌のものと同様である。よってⅢ期以降は16世紀に入ると考えておく。第4号溝跡については第3号溝跡と同時に掘削されたのか、或いは時間差があるのかは明らかでない。今後、館の縄張りの問題を含めて、全体像が明らかにされていく中で解明されることを期待したい。

E区については、溝の多くが江戸期以降の新しい時期であるが、第6号溝跡のように一部に古いものが見られC区にはなかった13世紀代の遺物が出土している。特に井戸跡や堅穴状遺構から古い遺物が出ており、第10号井戸跡出土の石鍋は13世紀代のものであると思われる。この種の遺物が出土する遺跡は今の所限られている。C区の館と隣接することから、同じく13世紀の遺物を出土した在家遺跡と同じように、その性格や位置付けが問題となろう。

第11号掘立柱建物跡の鉢はそれよりやや古いと思われる。

15世紀の遺物は出土した中で中心となるものである。第17号溝跡や第12号井戸跡の常滑産壺は前半から中頃に位置付けておきたい。第15号溝跡出土品は中頃に、第19号溝跡出土遺物は後半から16世紀にかかるものであろう。鉢は第6号井戸跡と第15号溝跡から出土しているが後半に位置付けられる。瀬戸の製品は、第3号溝跡の深皿は中頃に、第10号井戸跡出土品は後半である。灰釉平碗は第34号溝跡、第157号土壌から出土しており後半に位置付けられる。緑釉小皿は在家遺跡第1号井戸跡から纏まって出土したが後半に位置付けられ、第34号溝跡出土品はそれよりやや古い様相が窺える。平場から出土した灰釉製品は前半であろう。播鉢は第33号溝跡から出土したものが竈突末期のものである。第15号溝跡の祖母懷壺と思われる遺物は後半から16世紀と思われる。在家遺跡第1号井戸跡の備前



産産も同じ頃であろう。

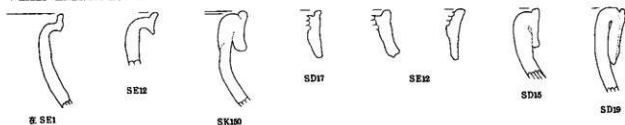
在地産の土器類は、良好な遺存状態のものは極めて少ない。かわらけは全体の器形を知り得るものは僅かで底部の破片資料が多い。特徴的なのは、かなりの割合で胎土に白色針状物質が含まれることであり、内面底部に轆轤目が強く残る個体が多いことである。第33号溝跡出土遺物にその特徴が顕著である。川越周辺のかかわらけについては田中氏の編年があり、それによればこれらのかかわらけはA2類及びA3類に該当する。第33号溝跡からは善室末期の摺鉢が出土しており、年代も凡そその時期と考えておきたい。第4号掘立柱建物跡のかかわらけは別々の柱穴か

ら、同氏分類のA・B・D類にあたるものが出土している。確実に相伴する遺物はないが、他の柱穴から銭貨が2枚出土している。最新銭は洪武通寶であるが銭貨の流通から埋納まで一定の時間を考慮するならば、かわらけの年代はある程度下げて考える必要があろう。第22号溝跡からは1点出土しているが、B2類に該当する。第22号溝跡は第2区画を構成する第35号溝跡と一連のものであり遺物も古くなる可能性がある。地下式墳と第6号土壇からは底部が厚いかかわらけが出土している。第6号土壇に相伴する常滑産の壺は15世紀後半以降のものと思われる。

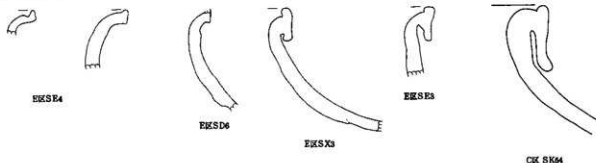
戸宮前遺跡 30号溝跡出土品



戸宮前遺跡・在室遺跡出土常滑製口縁部



宮前遺跡出土常滑製口縁部



第231図 口縁形態

## 9 宮廻館跡の中世遺物について

宮廻館跡の中世遺物は戸宮前館跡より更に少ない。C区の主郭部分に限定してしまうと、年代の推定できる遺物はほんの一握りになってしまう。

実年代のわかる資料は第1号溝跡から出土した板碑がある。年号の一部が欠けているが「口徳口年七月二十八日」と読める。遺跡の時代から年号は「享徳」でほぼ間違いないと考えられる。次の数字がよくわからないが「二年」か「三年」と思われる。仮に享徳三年なら西暦1454年にあたる。溝跡からは他に緑釉小皿が出土しており、年代的に矛盾しない。また、土壘からは常滑の甕が出土している。縁帯を欠くが15世紀後半以降のものと思われる。同じく土壘から出土したかわらけは、底部片であるが田中氏編年のA類が多い。第2号掘立柱建物跡からは15世紀後半代の割高台の白磁皿が出ている。第54号土壘の常滑甕は15世紀前半から中頃であろうが、

### まとめ

今回の調査で明らかになったことと課題について、箇条書き的になるが気づいた点をあげてまとめたい。

旧石器時代では「砂川期」あるいはそれに後続する時期に位置付けられそうな遺構、遺物が検出されたが、該期の他の遺跡との若干の差異が指摘され、立地条件の差が遺跡の性格差を生むものか、編年のやや後続する時期に位置付けるべきか、今後の課題である。

縄文時代では関山式から黒浜式期の土器が纏まって検出された。遺物の時期は北側の在家遺跡から南の宮廻館跡へと土器の様相が新しくなっている。

中世では、戸宮前館跡の主要な区画は15世紀中頃に築造され、最低1回の拡張が行なわれていることが明らかになった。存続期間は長くは無かったと思われ、15世紀いっぱいくらいで廃絶しているのではないと思われる。遺物には12世紀後半の瀬美産の甕や13世紀前半の常滑産甕などが含まれ、より古い時期の遺構の存在が予想できる。今のところ第2区画がそれに該当する可能性が高いと思われ

共伴したかわらけはA3類で15世紀末以降と思われる。第53号土壘からはE類のかわらけが出土しており15世紀末以降に現れるとされる(註2)。僅かに古いと考えられるのは、地下式墳としたSK139で、出土している深皿は15世紀中頃と考えておきたい。

C区が15世紀中頃以降の遺物に限られるのに対し、E区からはより古い遺物が出土している。13世紀前半に遡るのは、第6号溝跡と第4号井戸跡の常滑産甕で中野編年の5型式に該当する。第6号井戸跡と第13・39号土壘の鉢も同じ時期である。第3号堅穴状遺構の甕は13世紀後半、第3号井戸跡の甕は13世紀後半から14世紀前半と考えておく。第6号堅穴状遺構の灰釉瓶は中Ⅲ期に同様の例があり、14世紀第2四半期頃と考えられる。

るが、館の変遷に関わる部分であり、調査が行われたのは館跡の一部にすぎないことを考えると、在家遺跡と合わせて、館全体の構成などの広い視野から検討する必要がある。

遺物は少なかったが、灰釉瓶や青磁水滴、在家遺跡では酒会壺と思われる青磁片など、通常の集落では出土しない遺物が見られた事は居住者の階層を物語るものであろう。

戸宮前館跡の第4号掘立柱建物跡については、柱穴配置から寺院などの特殊な建築物を想定しているが、それについては触れる余裕が無かった。地元には廃仏毀釈で途絶えたという龍正寺という寺の言い伝えがあり、場所はこの付近であったと言うが、正確な位置や寺の建立時期、そしてどのような経緯で建立されたかなど詳しい事は不明である。

宮廻館跡C区については、出土した遺物から15世紀中頃に築造されたと考えられ、三期の変遷を想定した。存続期間は、主郭内に掘りこまれた土壘の遺物から15世紀末から16世紀の初め頃には機能を失っていたと考えられる。

E区からは常滑産瓦や石鎧といった13世紀の遺物が出土した。戸宮前館跡と同じく古い時期の遺構が存在するが、C区の館の外に位置しており、C区の館とどのような関連を持つのか今後の課題である。

これらの館跡が造られた時代の背景や当時の地理的な状況については全く触れる事が出来なかった。

戸宮前館跡、宮庭館跡ともに15世紀後半という限

られた期間に限定されるが、従来言われている各種の陣所説をとるなら年代的に少し絞り込まれたといえよう。ただし、この地域に5箇所の館跡があるという現象については、他の館跡の具体的な年代がいまひとつはっきりしないこともあり、今のところ説明できない。今後この地域に密集する館跡の分析と理解がなお一層の課題である。

主な参考文献（参考文献は紙数の都合で一部割愛した。）

- 青木 義徳・山田 尚友他 1995『大崎藩前遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会 第193集  
網野 善彦・石井 進他 1989『よみがえる中世3』1990『よみがえる中世6』  
井口 信久 2002『宮庭館跡（第2次調査）報告書』川越市遺跡調査報告第25集 川越市遺跡調査会  
岩瀬 謙 1995『前・居立』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第151集  
岩瀬 謙 1998『地神/塔頭』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第193集  
梅沢太夫夫 2003『中世北武蔵の城』岩田書院  
大谷 徹 1991『宮町遺跡I』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第96集  
加藤 恭朗 1997『景台遺跡』坂戸市遺跡発掘調査団  
加藤 恭朗 1985『附島遺跡』坂戸市教育委員会  
金子 直行 2001『川越城/小在Ⅱ』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第73集  
金子 直行・大谷 徹他 1996『新屋敷遺跡C区』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第175集  
川口 潤 1989『光屋敷遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第82集  
館持 和夫 1992『ウツギ内・砂田・柳町』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第126集  
小泉装俊勝 1982『評』ものと人間の文化史48 法政大学出版局  
国史大辞典 第5・7・10・11巻 吉川弘文館  
埼玉県教育委員会 1988『埼玉の中世城館跡』  
斎藤 欣延 2001『中道・中道下遺跡第3地点発掘調査報告書』朝霞市埋蔵文化財発掘調査報告書 第17集  
山武郡南部地区文化財センター 1986『大網山田台No.6遺跡（一本松遺跡）』  
山武郡南部地区文化財センター年報No.2 昭和60年度  
下村 克彦・宮崎由利江 1998『中里遺跡・篠山遺跡』大宮市遺跡調査会報告別冊4  
鈴木 敏昭・大塚 孝司他 1983『ささら・帆立・馬込大原』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第24集  
関口 和也 1990『埼玉県川越市下広谷の城址群』『中世城郭研究』第4号 中世城郭研究会  
高崎 直成 2002『町内遺跡群X』大井町文化財調査報告第33集  
高田 大輔 2001『関東地方出土の滑石製石鎧』『埼玉考古第36号』埼玉考古学会  
田中 信 2002『戸宮前館跡（第1次調査）』川越市遺跡調査報告第26集 川越市遺跡調査会  
田中 信 他 2001『図説 川越の歴史』郷土出版社  
田中 信 1996『川越市埋蔵文化財発掘調査報告書（X1）』川越市教育委員会  
田中 英司 1995『横田遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第163集  
富田 和夫 1992『稻荷前遺跡（A区）』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第120集  
田中 正光 1983『埼玉の古城址』岩田書院  
中野 晴久 他 1994『中世常滑焼をもって』資料集 日本福祉大学知多半島総合研究所  
伴瀬 宗一 1999『葛瀬城跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第232集  
藤枝市教育委員会 1981『日本住宅公園藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ（奈良時代～近世編一）』  
藤澤 良祐 他 1996『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』資料集 瀬戸市埋蔵文化財センター  
堀 善之 2002『富士見市内遺跡X』富士見市文化財報告 第54集  
梶田 博之 1997『井沼方遺跡発掘調査報告書（第16次）』浦和市遺跡調査会報告書 第231集  
梶田 博之・山田 尚友他 1987『上大久保新田遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書 第86集  
宮瀬 文二 1991『釜山下遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第99集  
山田 尚友・久保 儀乃 2001『下野田稻荷原遺跡（第5次）・東裏遺跡（第5次）・大門西裏南遺跡（第3次）』  
発掘調査報告書 浦和市遺跡調査会報告書 第295集  
吉岡 伸夫・五島 康司他 1982『昭和56年度一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報  
一坂尻遺跡第2次調査一』  
吉村 靖徳 1995『梅衝に関する一考察—福岡県内出土権杖製品の検討と課題—』『九州歴史資料館 研究論集20』  
渡辺 文夫・山口 康行他 1995『大和田陣屋跡・今羽丸山遺跡』大宮市遺跡調査会報告 第52集